

平成 20 年度言語研修
トゥヴァ語研修テキスト 1

基礎トゥヴァ語文法

高島尚生 著

東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所
2008

まえがき

本書は、2008年度 東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所主催のトゥヴァ語研修に際し、トゥヴァ語研修用の文法書として編まれたものである。

トゥヴァ語はチュルク諸語の1つで、トゥヴァ民族が話す言語である。トゥヴァ民族はロシア連邦内におよそ25万人が住み、その9割以上が自分たちのふるさとである南シベリアのトゥヴァ共和国に住んでいる。民族語であるトゥヴァ語を母語とみなす比率が極めて高いのが特徴である。また、ロシア連邦以外にもモンゴルや中国新疆ウイグル自治区に住んでいる。

これまで日本においてトゥヴァ語について書かれた文法書はほとんど皆無であった。挙げるとすれば、等々力政彦氏が編纂した「トゥバ語で歌おう！－喉歌歌手のためのちょっと不親切なトゥバ語文法ノート」(2000)だけである。

今回、本書の作成において、このような状況を打開すべく、トゥヴァ語研修の機会を与えられたのを幸いに、一定の分量のあるトゥヴァ語の文法書を書こうと思い立った。F.G.イスハコフ、A. A.パリンバッフの共著「トゥヴァ語文法－発音と形態論」(1961)や Sh.Ch.サット「トゥヴァ語概観」(1955)、E.B.サルズンマー「ロシア人学生のためのトゥヴァ語教科書」(1980)などトゥヴァ語研究の必読書となっている本がベースにはなっているが、筆者がこれまでにトゥヴァで見たり聞いたりしたなかで得てきた知見も成果として取り入れられている。受講生にしてみれば一見すると細かいと思えるような文法項目や内容も網羅されているのもそのためである。しかし、最初は煩雑に見えるかもしれないが、研修を終えた後も自分でトゥヴァ語の学習が続けられるようにとの願いも込められているからである。本書が将来もトゥヴァ語の文法便覧書的な役割を果たしてくれることを願っている。

本書ではできるだけ多くの例文を入れるように心がけた。本書の例文はすべて、トゥヴァ語研修の O.V.ダンバー先生に見ていただいている。しかも、多くの例文が先生によって書き加えられている。本書の厚みがぐっとふくらんだのは先生のおかげである。著者がトゥヴァに滞在して以来、ダンバー先生にはいつも文法で分からないところを教えてもらっている。この場をお借りして感謝の気持ちを伝えるものである。

また、1998～99年に長期滞在した際には、当時トゥヴァ共和国立言語・文学・歴史学術研究所長であった Ch.M.ドルジュ氏をはじめ、研究所の研究員の方々、トゥヴァ共和国立大学のトゥヴァ語講座の先生方などたくさんの人と友達になり、お世話になった。ほんとうに感謝の気持ちでいっぱいである。とくに、トゥヴァでの生活全般に渡ってオパールおばあさんとその娘チェチェックさんをはじめとするシュルー一家には並々ならぬお世話になった。今ではオパ

ールおばあさんを「お母さん」と呼んでいる。シュルー一家のおかげでトゥヴァでの生活がほんとうに充実したものとなったのは間違いない。ここであらためて感謝の意を伝えたい。

2008年7月12日

高島 尚生

目次

1. トゥヴァ民族とトゥヴァ語.....	9
2. アルファベット	12
2.1. アルファベット	12
2.2. 発音および正書法, 単語の綴りに関する注意点	14
3. 発音	16
3.1. 母音	16
3.1.1. 長短による母音の分類.....	16
3.1.2. 舌の位置による母音の分類.....	16
3.1.3. 唇の使用による母音の分類.....	17
3.1.4. 舌の高さによる母音の分類.....	17
3.2. 子音	17
3.2.1. 子音の分類	18
3.2.2. 子音の特殊な発音.....	19
4. 発音上の規則.....	20
4.1. 母音調和	20
4.1.1. 母音調和.....	20
4.1.2. 子音の同化	21
4.1.3. 子音交替.....	22
4.1.3.1. 子音の有声化	22
4.1.3.2. 子音交替	23
4.1.4. 母音の一体化.....	25
4.1.5. 母音の脱落	26
4.1.6. 子音の脱落	27
5. アクセント	29
5.1. 単語のアクセント	29
5.2. シンタグマ (連辞) アクセント	29
6. 語彙.....	30
7. 単語の形成 (単語の語幹構造)	32
7.1. 非派生語	32
7.2. 派生語の形成	32
7.2.1. 語形成接辞を語根 (もしくは語幹) に加える方法	32
7.2.2. 語幹の複合による方法.....	32
7.2.3. 語根, 語幹の一体化.....	33
7.2.4. 略語.....	33
7.2.5. さまざまな文法形態における単語の凝固	33

8. 品詞	33
9. 接辞	33
9.1. 語形成接辞	33
9.2. 語形変化をあらわす接辞	34
10. 名詞	35
10.1. 名詞の語形成	35
10.1.1. 名詞から別の名詞を形成する接辞	35
10.1.2. 動詞から名詞を形成する接辞	37
10.1.3. 指小接辞	42
10.1.4. 愛称接辞	43
10.1.5. 接辞を用いない語形成	44
10.2. 数のカテゴリー	44
10.3. 所有のカテゴリー	46
10.4. 格のカテゴリー	49
10.4.1. 主格	49
10.4.2. 属格	50
10.4.3. 与格	53
10.4.4. 対格	55
10.4.5. 位格	58
10.4.6. 奪格	61
10.4.7. 方向格①	63
10.4.8. 方向格②	64
10.4.9. 3人称の所有接辞をともなう名詞格変化の特性	65
10.5. 外来語に接辞をつける際の注意点	65
10.5.1. -ст, -тт, -дт, -сть で終わる外来語に接辞をつける際の注意点	65
10.5.2. -мм, -лл, -сс, -pp, -рт で終わる外来語に接辞をつける際の注 点	66
10.5.3. -ск, -нк, -нт, -кт, -нд, -ч で終わる外来語に接辞をつける際 の注意点	66
10.5.4. -лк, -рк で終わる外来語に接辞をつける際の注意点	67
10.5.5. -ь で終わる外来語に接辞をつける際の注意点	67
10.5.5. 語末の子音が無声化するロシア語借用語に接辞をつける際の注 点	67
10.6. 名詞の物主形	67
11. 形容詞	69
11.1. 形容詞の形成	70

1 1.1.1.1.名詞や形容詞, 副詞から形容詞を形成する接辞	70
1 1.1.1.2.動詞から形容詞を形成する接辞	74
1 1.1.1.3.接辞をともなわない形容詞の形成	77
1 1.2.性質形容詞の比較級, 最上級あるいは強さの度合い	77
1 1.2.1.比較級	77
1 1.2.2.弱化	78
1 1.2.3.最上級	81
1 1.2.4.形容詞を用いた強調	85
1 1.3.形容詞の名詞化	86
1 1.3.1.形容詞に所有接辞をつける方法	86
1 1.3.2.形容詞に名詞の複数形接辞をつける方法	86
1 1.4.形容詞の副詞化	86
1 2.数詞	87
1 2.1.個数詞	87
1 2.1.1.個数詞	87
1 2.1.2.бир, бирээ, чаңгыс の特殊な用法	89
1 2.2.序数詞	91
1 2.2.1.接辞をつけて形成する方法	92
1 2.2.2.個数詞の後に дугаар (~番目の) をつけて形成する方法	92
1 2.3.集合数詞	92
1 2.3.1.副詞的集合数詞	92
1 2.3.2.集合数詞	93
1 2.3.3.集合数詞の格変化	93
1 2.4.分配	94
1 2.5.概数	94
1 2.5.1.副詞を用いる方法	94
1 2.5.2.異なる個数詞を並べる方法	94
1 2.6.分数	95
1 2.6.1.常分数	95
1 2.6.2.帯分数	95
1 2.6.3.小数	95
1 2.7.算数の演算	96
1 2.7.1.加法	96
1 2.7.2.減法	96
1 2.7.3.乗法	96
1 2.7.4.除法	96

1 2.8.速度の言い方.....	97
1 3.副詞	98
1 3.1.派生副詞.....	98
1 3.1.1.副詞を形成する接辞.....	98
1 3.1.2.後置詞 -биле と組み合わせる方法.....	100
1 3.1.3. кылдыр と形容詞を組み合わせる方法.....	100
1 3.1.4.形容詞と кончуг を組み合わせる方法.....	101
1 3.1.5.「毎～」という意味をあらわす副詞的表現の形成法.....	101
1 3.2.意味による分類.....	101
1 3.2.1.行動の様式（～のように）.....	101
1 3.2.2.時をあらわす副詞.....	101
1 3.2.3.場所をあらわす副詞.....	101
1 3.2.4.程度をあらわす副詞.....	102
1 3.2.5.目的をあらわす副詞.....	102
1 3.3.副詞の比較級.....	102
1 4.動詞	103
1 4.1.動詞の語形成.....	103
1 4.1.1.接辞を用いた動詞形成.....	103
1 4.1.2.動詞語幹の組み合わせ.....	113
1 4.2.動詞の肯定・否定形.....	113
1 4.3.態.....	114
1 4.3.1.基本（直接）態.....	115
1 4.3.2.使役（使役・被動）態.....	115
1 4.3.3.共同・相互態.....	118
1 4.3.4.被動態.....	120
1 4.3.5.再帰態.....	121
1 4.4.相（アスペクト）.....	126
1 4.4.1.不定相.....	127
1 4.4.3.不完了相.....	128
1 4.4.4.多回・同時相.....	129
1 4.4.5.瞬間（をあらわす）相.....	129
1 4.4.6.律動相（リズム相）.....	130
1 4.4.7.中止相.....	131
1 4.5.形動詞.....	132
1 4.5.1.形動詞完了.....	133
1 4.5.2.形動詞現在未来.....	134

1 4.5.3.形動詞予期（必然未来）	138
1 4.5.4.形動詞現在	140
1 4.5.5.「-кы дег」構文（形動詞可能性）	141
1 4.6.副動詞	142
1 4.6.1.副動詞 -а 形	142
1 4.6.2.副動詞 -п 形	145
1 4.6.3.副動詞 -каш 形	149
1 4.6.4.副動詞 -пышаан 形	152
1 4.6.5.副動詞 -кала 形	154
1 4.7.6.副動詞 -пайн 形	156
1 4.7.時制のカテゴリー	157
1 4.8.人称と数のカテゴリー	158
1 4.9.法	159
1 4.9.1.直説法	159
1 4.9.1.1.過去時制	159
1 4.9.1.2.現在時制	165
1 4.9.1.3.未来時制	169
1 4.9.2.希求＝命令法	171
1 4.9.3.同意・許可法	175
1 4.9.4.限定法	177
1 4.9.5.必然法	180
1 4.9.6.条件法	181
1 4.9.7.希求法	183
1 4.9.8.讓歩法	184
1 4.9.9.条件＝假定法	185
1 4.10.助動詞	186
1 4.11.合成動詞	190
1 4.12.動詞の名詞化	199
1 5.代名詞	201
1 5.1.人称代名詞	201
1 5.2.指示代名詞	203
1 5.3.疑問代名詞	205
1 5.5.不定代名詞	211
1 5.6.否定代名詞	212
1 5.7.代名詞 бот	212
1 5.8.物主代名詞	214

1 5.9.数詞的代名詞.....	214
1 5.10.副詞的代名詞.....	215
1 5.11.動詞的代名詞.....	217
1 5.12.関係代名詞.....	217
1 5.13.疑間接辞 -[ы]л.....	219
1 6.補助詞.....	220
1 6.1.接続詞.....	220
1 6.1.1.結合接続詞.....	220
1 6.1.2.選択接続詞.....	220
1 6.1.3.反意接続詞.....	221
1 6.2.接続語.....	222
1 6.3.後置詞および補助詞.....	222
1 6.4.助詞および叙法詞.....	225
1 6.4.1.疑問助詞.....	225
1 6.4.2.強勢助詞.....	226
1 6.4.3.限定助詞.....	227
1 6.4.4.肯定の助詞.....	227
1 6.4.5.否定の助詞.....	228
1 6.4.6.弱化の助詞.....	228
1 6.4.7.意味を和らげる助詞.....	229
1 6.4.8.動詞の命令形につける助詞.....	230
1 6.5.間投詞.....	231
1 6.5.1.さまざまな感情や感じをあらわす間投詞.....	231
1 6.5.2.人を呼び寄せる,人を急き立てる,動物を元気づける間投詞 ..	232
1 6.5.3.擬音・擬態語.....	232
1 6.6.呼びかけ.....	234
後置詞・補助詞一覧表.....	237
参考文献.....	254

1. トゥヴァ民族とトゥヴァ語

トゥヴァ民族は、ロシア連邦内の南シベリアに位置するトゥヴァ共和国を構成する主要民族である。人口は、2002年の人口調査によると、ロシア連邦内に24万8000人、そのうちトゥヴァ共和国には23万5800人（95%）が住んでいる。（1989年の人口調査ではロシア連邦内に20万6600人、そのうちトゥヴァ共和国には19万8400人が住んでいた；トゥヴァ民族総人口の98.4%がロシア連邦内、そのうちトゥヴァ共和国内に99.0%が住んでいた）。トゥヴァ共和国内に住んでいる比率が非常に高いことが特徴である。トゥヴァ共和国は、ロシア連邦内の構成共和国名に冠称民族名がつく国のなかでロシア人よりも人口が多い数少ない共和国のうちの1つでもある。また、ロシア連邦以外に、モンゴルに約2万5000人、中国新疆ウイグル自治区に約3000人が住んでいる。

トゥヴァ語はチュルク諸語の1つで、トゥヴァ民族が話す言語である。トゥヴァ語のアルファベットは、1930年ラテン文字を基礎としてはじめて創出され、1941年以降現在のキリル文字にかわっていった。トゥヴァ民族は自分たちの民族語、すなわちトゥヴァ語を母語とする比率が、ロシア連邦内の他の諸民族に比べて高い（98.5%、チェチェン人につぎ2位、下表参照）。したがって、トゥヴァ民族のほとんどすべての人がトゥヴァ語を母語とみなし、トゥヴァ語を話す、あるいは知っているといつてよい。とはいえ、世代間や都市部と田舎とに暮らす人々の話すトゥヴァ語のレベルはさまざまである。例えば、1998～99年に本書著者がトゥヴァに住んでいたときに聞いた話であるが、都市に住むある若い女性は自分の話すトゥヴァ語にはアクセントがあるといつて、ふだんはロシア語を話し、トゥヴァ語ではあまり話したがらなかった。とくに都市部に住む人たちはロシア語を母語のように話す人が多い。しかも若い世代はなおさらである。都市部（首都クズルへは車で10分も要しない郊外のカー・ヘム村）に暮らす知人の女性に彼女の息子（当時10歳前後）はトゥヴァ語とロシア語のどちらの言語でふだん思考しているだろうかと訊ねたところ、その母親は即座に、ロシア語だろうと答えたのを覚えている。その息子は現在トゥヴァ共和国を離れ、ロシアの別の都市の大学で学んでいる。反対に田舎出身のある若い男性ホーメイ（のど歌）歌手は軍隊に入って初めてロシア語を覚えたという。しかし、統計上はロシア語の保有率はそれほど高いとは言えないかもしれない（60.5%；「ロシアの諸民族」；1989年）。

1990年代にはいつてから、学者やジャーナリストたちを中心にしてきれいな、純粋なトゥヴァ語を話そうとさかんに言われている。それというのは、

トゥヴァ語本来の単語があるのにロシア語の単語で置き換えたり、ロシア語から派生させてつくった単語を使う人が増えたからである。後者の例を挙げると、「解決する、決める」という意味のトゥヴァ語は **шиитпирлээр** であるが、**решайтаар** を使う人が増えた。**решайтаар** はロシア語で「解決する、決める」をあらわす動詞 **решать** の命令形 **решай** にトゥヴァ語の動詞形成接辞 **-та** をつけてつくった単語である。学者やジャーナリストたちはそのような単語を「ボク・セス **бок сөс**」と呼んでいる。文字通り訳せば「ゴミの単語、言葉」である。要するに、会話のなかで近年氾濫してきたボク・セスを使わずに、きれいなトゥヴァ語を話そうとする運動である。日本でも国際化のなかで常日頃必然的に入ってくる外来語の増加と、メディアにおけるその使用氾濫の事情を踏まえ、国語審議会が「日本語によるコミュニケーションを阻害する」として外来語の使用に関して、たとえば「コンセンサス」は「合意」、「ユーザー」は「利用者」といったように、一定の節度を要求する提案を行ったこと（毎日新聞2000年6月9日付）とトゥヴァの事情はよく似ているといえよう。

一方、トゥヴァ共和国はロシア連邦の一構成員である。もし将来良い仕事に就きたいと望めば、より良い高等教育、専門教育を受けなければならない。それにはトゥヴァ共和国以外のロシア各地の大都市、たとえばモスクワやサンクト・ペテルブルク、イルクーツク、クラスノヤールスク、トムスクなどの大学で学ぶほうがよいのは当然である。ロシア語で読み書き、話せることが前提条件になる。したがって、自分の子供の将来を考えて子供を学校のトゥヴァ語クラス（授業はトゥヴァ語で行われる）ではなく、ロシア語クラス（授業はロシア語で行われる）へ入れようとする親がのも事実である。トゥヴァ国立大学トゥヴァ語・トゥヴァ文学講座の上級講師（1998年当時）の女性は、自分はトゥヴァ語の教師であるが、自分の子供たちを学校のロシア語クラスに入れている。もちろん家ではトゥヴァ語で会話している。とにかくロシア語は話せるほうがよいのである。ただ、上記の運動はトゥヴァの人々がロシア語をよく使うようになったあまり、トゥヴァ語が乱れてきたことに対して警告する意味をもっているといえよう。こうした傾向は、ロシア連邦内の他の諸民族にも当てはまるだろう。

シベリア諸民族の母語保有率

(出典：M.I.Чермисина « Языки коренных народов Сибири » Новосибирск
1992 裏表紙の表)

民族	自分の民族語を母語とする比率 (%)	ロシア語を母語とする比率 (%)
アレウト	26.6	69.4
アルタイ	84.3	15.5
ブリヤート	86.3	13.6
ドルガン	81.7	15.9
イテリメン	19.6	79.2
ケト	48.3	49.6
コリヤーク	52.4	46.4
マンシ	37.1	62.0
ナナイ	44.1	55.3
ヌガナサン	83.2	15.5
ネギタール	28.3	67.7
ネネツ	77.1	18.1
ニブフ	23.3	76.0
オロク	44.7	54.2
オロチ	18.8	79.5
セリクープ	47.6	50.6
トファラル	43.0	55.3
トゥヴァ	98.5	1.4
ウデゲ	26.3	65.7
ウリチ	30.8	66.2
ハカス	76.1	23.6
ハントイ	60.5	38.8
チュヴァン	21.4	68.8
チュクチ	70.3	28.3
シヨル	56.7	41.6
エヴェンキ	30.4	28.3
エヴェン	43.9	27.5
エネツ	45.5	38.3
エスキモー	51.6	45.8
ユカギール	32.8	45.6
ヤクート (サハ)	93.8	6.1

2. アルファベット

2.1. アルファベット

トゥヴァ民族は、20世紀にいたるまで民族固有の文字を持っておらず、モンゴル文語を使用していた。トゥヴァ人民共和国として独立した後（1921年）、1930年に初めてラテン文字を基にして民族語用の文字が創出された。現在使用しているアルファベットは、それが1941年にキリル（ロシア）文字化されたのである。アルファベットの数は36文字で、そのうち母音が8つ、子音が22、「j」音を伴って発音される母音が4つ、ほか記号が2つである。以下にアルファベットを挙げる。

文字	名称	発音	文字	名称	発音
А а	а	[a]	П п	пэ	[p]
Б б	бэ	[b]	Р р	эр	[r]
В в	вэ	[v]	С с	эс	[s]
Г г	гэ	[g]	Т т	тэ	[t]
Д д	дэ	[d]	У у	у	[u]
Е е	е	[je]	Ү ү	ү	[ü]
Ё ё	ё	[jo]	Ф ф	эф	[f]
Ж ж	жэ	[ʒ]	Х х	ха	[x]
З з	зэ	[z]	Ц ц	цэ	[ʦ]
И и	и	[i]	Ч ч	чэ	[tʃ]
Й й	й демдек	[j]	Ш ш	ша	[ʃ]
К к	ка	[k]	Щ щ	ща	[ʃʃ]
Л л	эл	[l]	- ъ	кадыг демдек	喉頭音を示す
М м	эм	[m]	Ы ы	ы	[i]
Н н	эн	[n]	- ь	чымчак демдек	-
- ң	ың	[ŋ]	Э э	э	[e]
О о	о	[o]	Ю ю	ю	[ju]
Ө ө	ө	[ö]	Я я	я	[ja]

硬母音字： а, и, о, ө, у, ү, ы, э

軟母音字： е, ё, ю, я

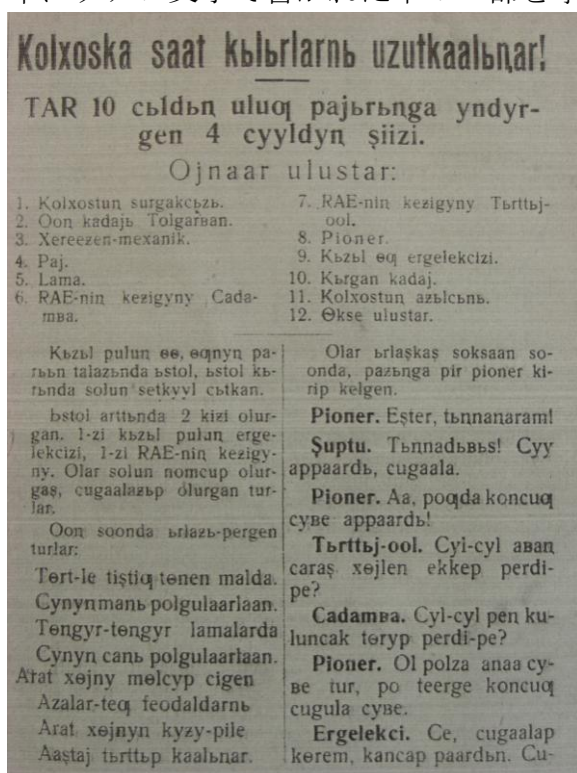
子音字： б, в, г, д, ж, з, й, к, л, м, н, ң, п, р, с, т, ф, х, ц,
ч, ш, щ

記号： ъ, ь

参考として、以下に1930年から1941年まで使用されたラテン文字を基にして作られたトゥヴァ文字を挙げておく。

文 字	名 称	文 字	名 称
A a	a	O o	o
B b	бэ	Ө ө	ө
C c	чэ	P p	пэ
D d	дэ	R r	эр
E e	e	S s	эс
F f	эф	Ş ş	ша
G g	гэ	T t	тэ
Ƣ ƣ	гы	U u	у
I i	и	V v	вэ
J j	й демдек	X x	ха
K k	ка	У у	ү
L l	эл	Z z	зэ
M m	эм	Z z	жэ
N n	эн	Ь ь	ы
- ң	ың		

1931年にラテン文字で書かれた本の一部を挙げておく。



Kolxoska saat kыыrlarnы uzutkaalyрar! (「コルホーズを邪魔する者を殲滅しよう！」)

2.2.発音および正書法, 単語の綴りに関する注意点

・ **а, и, о, ө, у, ү, ы, э** が2つ重ねて書かれていると, 長母音になることを示す.

例) аал[а:л], хоорай[хо:рай], шынаа[шына:], күдээ[күдэ:],
тиилээр[ти:лэ:р]

・ **ь** は, 喉頭音化されることを示すために用いられる. 書く場合には母音の後に **ь** をつける.

喉頭音は単語の第一音節中にあらわれる.

以前は **ь** も同様に喉頭音化を示すために用いられたが, 現在では使用されなくなった. その際には **а, о, у, ы** の後には **ь** が **э, ө, ү** の後には **ь** が区別して用いられた.

例) аьт, оьт, эьт, чүьк

ラテン文字が創出された当初は喉頭音をあらわす記号はなかった.

・ トゥヴァ語正書法においては, **ь** と **ь** は書いても書かなくてもどちらでもよい場合がある.

例) аьрга / арга, чьдер / чедер

ただし, ロシア語からの借用語のなかに, **ь** もしくは **ь** がある場合は, ロシア語の正書法に従い, **ь** と **ь** は表記される. すなわち, **ь** は子音と軟母音字との間におかれ, 両者を別々に読むことをさす. 一方, **ь** は前におかれた子音を軟子音化する.

・ **н** で単語は始まらない.

・ トゥヴァ語本来の単語中には, **ч** は語末にこない. 主として単語のはじめにくる.

・ **х** は, 単語のはじめにしかあらわれない. 単語中や語末にあらわれるのはロシア語からの借用語である. ただし, **х** で終わる間投詞 **ах, уех** は例外である.

・ **ж, з, в** は, 単語のはじめと終わりにはこない. **ж, з, в** で始まる単語は, ロシア語からの借用語である.

・ **г, ё, й, л, н, р, я** でトゥヴァ語本来の単語は始まらない. これらの文字で始まる単語は, モンゴル語やチベット語, ロシア語などの外来語, もしくはそれから派生させてつくった単語である. とくに, **р** で始まる単語は, ロシア語からの借用語である (例: район, районнаар, реклама). また, **й, л, н** で始まる単語はモンゴル語起源と考えてよい (例: йөрээл, лама, нам).

・ **ф, ц, щ** は, ロシア語もしくはロシア語を通して借用された単語のみに使われる.

例) фабрика, центнер, щётка

- **в** は、語中で2つの母音のあいだでしか用いられない。
例) **авай, тыва, тева, иви**
- **б** は、語中で用いられるときは、**м, н, р, л, й, ц, г** のあとに用いられる。
例) **самбың, эңбек, хүлбүс, хырба, богба**
- **е** は、語頭では用いられない。**е** が語頭で始まる単語は外来語であり、その外来語からトゥヴァ語の語形成接辞をつけて作った派生語である。
- 句読点の打ち方はロシア語のそれに従う。
- 改行するときの規則は以下の通りである。
 - ① 音節で区切る
 - ② **ажыл** や **эки, агаар** のような1つの母音で始まる単語は、単語中で区切って改行しない。
 - ③ 単語中に2つ以上の子音が続くとき、2つに改行して分かれた部分の両方に必ず母音が入らないといけない。
例) **Свердловск** → **Сверд-ловск** あるいは **Свер-дловск**
Свердло-вск とはならない
 - ④ 単語中で2つの子音が並ぶとき、2つの子音間で分ける。
例) **алдар** → **ал-дар**
эртем → **эр-тем**
 - ⑤ 単語中に同じ子音が2つ続くときも同じ2つの子音間で分ける。
例) **аъттар** → **аът-тар**
саннар → **сан-нар**
өссүн → **өс-сүн**
касса → **кас-са**

3.発音

3.1.母音

3.1.1.長短による母音の分類

トゥヴァ語には、母音の組み合わせが24種ある。

1) 短母音 … a, и, o, ɵ, y, γ, ы, э(е)

1つの文字で表される。

母音 э は、語頭あるいは語中では、長母音（2つ重ねて書く）でしか用いられない。

母音 е は子音の後で用いられる。母音 е で始まる単語は外来語であり、その外来語からトゥヴァ語の語形成接辞をつけて作った派生語である。

2) 長母音 … aa, ээ, ии, oo, ɵɵ, уу, үү, ыы

同じ母音を2つ重ねて書く。ただし, ee の組み合わせはなく, ээ となる。

長母音は咽頭音と違って単語中どの音節でもあらわれる。ただし, oo と ɵɵ はふつう第一音節にのみあらわれる。

3) 咽頭音化された母音 … аь, эь(эь), иь(иь), оь, ɵь(ɵь), уь, үь(үь), ыь

単語の意味の混同を避けるため、必要な場合は ъ と ь を用いる。これらの音は単語の第一音節にあらわれ、単音節の単語では明瞭に発音される。チュルク諸言語中、トゥヴァ語とトファ語のみに見られる。

現在は ь は用いられなくなった。

[a], [a:], [ы], [ы:], [y], [y:], [γ], [γ:], [э]~[е], [е:], [и], [и:]は単語の始めや途中、語末に、つまり単語のどの場所にもあらわれる。

[o], [o:], [ɵ], [ɵ:]と[аь], [ыь], [оь], [уь], [эь], [иь], [үь]は単音節からなる単語の始めか単語の第一音節にあらわれる。

3.1.2.舌の位置による母音の分類

1) 前舌（軟音）… э, ээ, эь, и, ии, иь(иь), ɵ, ɵɵ, ɵь(ɵь), γ, үү, үь(үь)

2) 後舌（硬音）… а, aa, аь, ы, ыы, ыь, o, oo, оь, у, уу, уь

3.1.3.唇の使用による母音の分類

- 1) 唇音 … o, oo, oь, y, yy, yь, e, ee, eь(eь), ʏ, ʝ, ʝь(ʝь)
 2) 非唇音 … a, aa, aь, э, ээ, эь(эь), ы, ыы, ыь, и, ии, иь(иь)

3.1.4.舌の高さによる母音の分類

- 1) 舌を持ち上げて発音(上に位置) … ы, ыы, ыь, и, ии, иь(иь),
 y, yy, yь, ʏ, ʝ, ʝь(ʝь)
 2) 舌を持ち上げないで発音(位置は下か中) … a, aa, aь, э, ээ, эь(эь),
 o, oo, oь, e, ee, eь(eь)

	前 舌 音			後 舌 音			
	短母音	長母音	咽頭音化 母音	短母音	長母音	咽頭音化 母音	
舌を持ち上げて発音	и	ии	иь(иь)	ы	ыы	ыь	非唇音
舌を持ち上げないで発音	э	ээ	эь(эь)	а	аа	аь	
舌を持ち上げて発音	ʏ	ʝʝ	ʝь(ʝь)	y	yy	yь	唇音
舌を持ち上げないで発音	e	ee	eь(eь)	o	oo	oь	

3.2.子音

トゥヴァ語には22の子音(音素)がある。

б, в, г, г*, д, ж, з, й, к, л, м, н, ң, п, р, с, т, ф, х, ц, ч, ш

г* は後舌の軟口蓋で調音される音素

単語のはじめに2つ以上子音が並ぶことはない。

3.2.1.子音の分類

1) 音を形成する場所による分類

- ① 唇音 … п, б, м, в
- ② 唇歯音 … ф
- ③ 前舌口蓋歯音 … т, д, с, з, ц, л, н
- ④ 前舌口蓋音 … ш, ч, ж, р
- ⑤ 中舌口蓋音 … й
- ⑥ 後舌軟口蓋音 … х, г*, ң
- ⑦ 後舌硬口蓋音 … к, г

(гは後舌母音 а, ы, о, уとの組み合わせの場合は奥後舌音)

2) 噪音

- ① 閉鎖音 … к, т, д, п, б
- ② 摩擦音 … х, г, г*, с, з, ш, ж, ф, в, й
- ③ 破擦音 … ч, ц

3) 自鳴音

- ① 流音 … л
- ② 流音 … р
- ③ 鼻音 … м, н, ң

4) 有声および無声子音

- ① 無声子音 … к, п, с, т, ф, х, ц, ч, ш
- ② 有声子音 … б, в, г, г*, д, ж, з, й, л, м, н, ң, р

			後舌硬 口蓋音	後舌軟 口蓋音	中舌口 蓋音	前舌口 蓋音	前舌口 蓋歯音	唇音	唇歯音
音	閉鎖音	無声		к			т	п	
		有声					д	б	
	摩擦音	無声	х			ш	с		ф
		有声	г*	г	й	ж	з	в	
	破擦音	無声				ч	ц		
		有声							
自 鳴 音	流音					л			
	震音				р				
	鼻音	ң				н	м		

3.2.2.子音の特殊な発音

- 1) 単語が б, д で始まる場合, その音はほとんど無声音として発音される.
- 2) 音節あるいは単語が г で終わる場合, 有声摩擦音 [ɣ] として発音される.
ロシア語の г のように有声閉鎖破裂音としては発音されない.
- 3) ж, ш はいつも軟音, [ж'], [ш'] として発音される.
- 4) п, т で始まる単語のいくつかは, 強い閉鎖破裂帯気音として発音される.

4.発音上の規則

4.1.母音調和

母音調和の法則の本質は、単語中における母音の調和と同化にある。

4.1.1.母音調和

単語中における母音の音（語幹および接辞において）は、語中の並び（硬音および軟音）によって、かなりの程度、唇音化によってお互い調和する。単語の第一音節に硬音母音があるならば、それに続く音節には同じく硬音母音がなければならない。同様に、もし単語の第一音節に軟音母音があるならば、それに続く音節には軟音母音がくる。

このように、単語中の先行する音節に続く母音の種類は、その前音節の母音の種類によって決まる。唇音化母音 **о, оо, оь, ө, өө, өь** は単語の第一音節のみで用いられる。

母音調和表

第一音節の母音	それに続く音節の母音	例
а, аа, аь	а, аа, ыы, ы	хадыңныг
ы, ыы, ыь	а, аа, ыы, ы	шылгадыр
э(е), ээ, эь(еь)	е, ээ, и, ии	эртемниг
и, ии, иь	е, ээ, и, ии	чидирер
о, оо, оь	а, аа, у, уу	доңгайтыр
ө, өө, өь	е, ээ, ү, үү	чөленир
у, уу, уь	а, аа, у, уу	туманныг
ү, үү, үь	е, ээ, ү, үү	бүзүредир

ただし、他の言語からの借用語や人名、いくつかの複合語および母音調和をしない母音をともなう接辞は例外をなす。

例) **Белекмаа** (人名), **аажок** (複合語), **эпчок** (複合語),
машина (ロシア語からの借用語), **одарже** (名詞の奪格接辞)

4.1.2.子音の同化

トゥヴァ語の子音は、単語中で無声と有声に応じて同化する。

1) 母音のあいだに挟まれるのは、有声子音あるいは自鳴子音である。

例) **бедек** (プレゼント), **хадың** (白樺)

2) 単語中で隣り合う子音は同化する。

例) **өкпе** (肺), **а[ъ]рга** (森)

子音同化の2タイプ

1) 順行同化

例) **хол + лар > холдар** (手)

2) 逆行同化

例) **бер= + ивит + кен > берипкен** (与えた)

ижин + и > ишти (内部)

接辞がつく場合には、子音の同化は徹底して守られる。

例) **ном + лар > номнар** (本)

чалбыыш + лыг > чалбыыштыг (炎の, 熱烈な)

балык + ла > балыкта= (魚を釣る)

чугаа + ла > чугаала= (話す)

хем + ниң > хемниң (川の)

ат= + кыла + выт + кан > аткылапкан (何度も射る)

この規則の例外をなすのは、鳴子音 **p** と無声子音 **t**, **ç** の組み合わせである。

例) **күртү** (クロライチョウ), **чуртум** (私のくに),

кадарчы (牧夫, 羊飼)

また、(書き言葉においては) 自鳴子音 **n**, **ң**, **л** と **ç** の古い組み合わせ (**nç**, **ңç**, **лç**) も残っている。この組み合わせにおいて、**ç** は有声音として発音されることもある。

例) **саанчы[саанчы]~[саанжы]** (搾乳婦), **аңчы[аңчы]~[анжы]** (獵師),

кулча[кулча]~[кулжы] (野生ねぎ), **аалчы[аалчы]~[аалжы]** (客),

малчын[малчын]~[малжын] (牧畜民)

4.1.3.子音交替

4.1.3.1.子音の有声化

名詞に所有接辞をつけるとき、次のような発音上の変化が起こる。

名詞の語幹が無声子音で終わり母音から始まる所有接辞をつけるとき、語幹最後の無声子音が、接辞をつけることによって母音に挟まれることになった場合、以下の無声子音は有声化する。外来語や借用語でも同様の変化が起きる。

п → в	例) хеп (服) + им → хепим → хевим (私の服)
с → з	例) ис (跡) + им → исим → изим (私の足跡)
к → г	例) шак (時計) + ым → шакым → шагым (私の時計)
т → д	例) ат (名前) + ым → атым → адым (私の名前)
ш → ж	例) күш (力) + үвүс → күшүвүс → күжүвүс (私たちの力)

動詞語幹に形動詞や副動詞の接辞、命令形の接辞がついたときも、同様に子音の有声化が起きる。

с → з	例) көргүс= (見せる) + -ер → көргүсер → көргүзер (形動詞現在未来) көргүс= (見せる) + -үп → көргүсүп → көргүзүп (副動詞 -п 形)
т → д	例) тут= (建てる) + -ар → тутар → тудар (形動詞現在未来) тут= (建てる) + -уп → тутуп → тудуп (副動詞 -п 形)
ш → ж	例) кириш= (参加する) + -ир → киришир → киршир → киржир (形動詞現在未来) кириш= (参加する) + -ип → киришип → киршип → киржип (副動詞 -п 形来)

4.1.3.2.子音交替

1) 共同・相互態接辞をともなう動詞語幹に, 形動詞現在未来形や, 副動詞 **-а** 形, 副動詞 **-п** 形の接辞をつけた場合, 語幹中の挟母音が脱落し, その結果 **-ш** は隣り合うことになった子音の無声あるいは有声音に応じて, またその単語中の位置に応じて, 以下の子音交替が起きる.

語幹最後の音+接辞	В-ЫШ (В-ИШ...)	Г-ЫШ (Г-ИШ...)	Д-ЫШ (Д-ИШ...)	З-ЫШ (З-ИШ...)
母音脱落形	- ВШ	- ГШ	- ДШ	- ЗШ
母音脱落后の子音交替	- ПЧ	- КЧ	- ТЧ	- СЧ
例	ТЫВЫШ= (いっしょに見つける) › тыпчыр тыпчып	СОГУШ= (いっしょに叩く) › сокчур сокчуп	ТУДУШ= (掴み合う, 1つになる) › тутчур тутчуп	КАЗЫШ= (いっしょに掘る) › касчыр касчып
語幹最後の音+接辞	Л-ЫШ (Л-ИШ...)	М-ЫШ (М-ИШ...)	Н-ЫШ (Н-ИШ...)	
母音脱落形	- ЛШ	- МШ	- НШ	
母音脱落后の子音交替	- ЛЧ	- МЧ	- НЧ	
例	БОЛУШ= (弁護する) › болчур болчуп	ХӨМҮШ= (いっしょに水滴を垂らす) › хөмчүр хөмчүп	БОДАНЫШ= (いっしょに考える) › боданчыр боданчып	

2) 被動態接辞がついた動词语幹に、形動詞現在未来形や副動詞 **-а** 形、副動詞 **-п** 形、副動詞 **-пышаан** 形の接辞をつけた場合、接辞の母音が脱落し、以下の子音交替が起きることがある。

語幹最後の音+接辞	В-ЫЛ (В-ИЛ ...)	Г-ЫЛ (Г-ИЛ ...)	Д-ЫЛ (Д-ИЛ ...)	З-ЫЛ (З-ИЛ ...)
母音脱落形	- ВЛ	- ГЛ	- ДЛ	- ЗЛ
母音脱落後の子音交替	- ПТ	- КТ	- ТТ	- СТ
例	ТЫВЫЛ= (見つかる) › ТЫПТЫР ТЫПТЫП	ТӨВҮЛ= (流れる) › ТӨКТҮР ТӨКТҮП	ЧАДЫЛ= (敷かれる) › ЧАТТЫР	КӨЗҮЛ= (見える) › КӨСТҮР КӨСТҮП
語幹最後の音+接辞	Ж-ЫЛ (Ж-ИЛ ...)			
母音脱落形	- ЖЛ			
母音脱落後の子音交替	- ШТ			
例	ДЕЖИЛ= (穴があく) › ДЕШТИР ДЕШТИП			

3) 動詞語幹の最後が以下の形である動詞語幹（主として再帰態接辞）に、形動詞現在未来形や、副動詞 **-а** 形、副動詞 **-п** 形、副動詞 **-пышаан** 形の接辞をつけた場合、接辞の母音が脱落する。ある場合にはさらに子音交替が起きる。

語幹最後の音	-йын (-йин ...)	-рын (-рин ...)	-лын (-лин ...)	-гын (-гин ...)
母音脱落形	-йн	-рн	-лн	-гн
母音脱落后の子音交替			-нн	-кт
例	хайын= (沸騰する) › хайныр хайнып	көрүн= (自分の姿を見る) › көрнүр көрнүп	кылын= (一瞬～する) › кынныр кыннып	сагын= (思い起こす) › сактыр сактып
語幹最後の音	-жын (-жин ...)	-зын (-зин ...)	-дын (-дин ...)	
母音脱落形	-жн	-зн	-дн	
母音脱落后の子音交替	-шт	-ст	-тт	
例	чажын= (隠れる) › чаштыр чаштып	казын= (掘る) › кастыр кастып	одун= (目覚める) › оттур оттуп	

4.1.4.母音の一体化

トゥヴァ語では、別の母音が2つ並んで用いられることはない。ただし、借用語は例外である。したがって、次の場合隣りどうし並んだ2つの母音は、1つの長母音になる。

- 1) 2つの狭窄母音（短母音もしくは長母音）は、1つの狭窄長母音になる。
例) **бжи= + -ир** → **бжиир**（書く）
- 2) 2つの開口母音（短母音もしくは長母音）は、1つの開口長母音になる。
例) **төле= + -эр** → **төлеэр** → **төлээр**（支払う）
- 3) 舌の持ち上げ方の異なる2種の母音（開口母音と狭窄母音、狭窄母音と開口母音、その長さに関係なく）は、1つの開口長母音になる。

例) хөглe= + -ишкин → хөглeэшкин → хөглээшкин (楽しみ)
比較的まれな場合ではあるが、主としてよく使用される単語において、一体化した長母音は、短母音に短縮されることがある。

例) ал= + -ып → алып → ап (持つて)

4.1.5.母音の脱落

語幹の最終閉音節の狭窄短母音は、それに続く母音からなる接辞の1つにアクセントが移ったうえ、脱落しうる。

とくに短母音 **ы**, **и**, **у** が最終音節にあり、そのあとに子音 **р** や **н** (ときには別の子音のこともある) がついて終わる単語は、母音 **ы**, **и**, **у** で始まる接辞をつけると、語幹最後の母音 **ы**, **и**, **у** は脱落する。多くは **арын** (顔), **эрин** (唇), **орун** (ベッド) といったタイプの単語に所有接辞をつけるときや、動詞語幹に形動詞現在未来形の接辞がついたときなどである。

例) арын (顔) + ым → арыным → арным
(私の顔 ; 1人称所有接辞)

эрин (唇) + иң → эриниң → эрниң
(君の唇 ; 2人称所有接辞)

чарын (肩甲骨) + ы → чарыны → чарны
(その肩甲骨 ; 3人称所有接辞)

айыт= (指し示す ; 語幹) + ыр → айытыр → айтыр
(指し示す ; 形動詞現在未来)

хайын= (沸騰する ; 語幹) + ыр → хайыныр → хайныр
(沸騰する ; 形動詞現在未来)

оюн (遊び ; 語幹) + а → оюна- → ойна-
(「遊ぶ」という動詞を形成する動詞語幹)

кириш= (参加する ; 語幹) + ир → кирижир → киржир
(参加する ; 形動詞現在未来)

4.1.6.子音の脱落

子音 **г, к, л, м, н, п, р** の脱落は、それが母音に挟まれるときに非常によく起きる。その際に、母音は1つの長母音になる(硬音では **-aa-** , 軟音では **-ээ-** となる)。それは主として以下のような場合である。

- 1) 子音 **г, к** で終わる語幹に所有接辞をつけるとき (**г, к** の脱落)
例) **даг** (山) + **ы** → **дагы** → **даы** → **даа** (その山)
шанак (そり) + **ы** → **шанакы** → **шанагы** // **шанаа**
(その櫓)
шаг (時間 ; 力) + **ы** → **шагы** → **шаы** → **шаа**
(その時間 ; その力)
- 2) 母音で終わる名詞語幹に与格接辞 **-га** か **-ге** をつけるとき (**г** の脱落)
例) **кижи** (人) + **ге** → **кижиге** → **кижие** → **кижээ** (人に)
- 3) 母音で終わる動詞語幹 (否定形も含めて) に形動詞完了 **-ган** 形か **-ген** 形ををつけるとき (**г** の脱落)
例) **номчу=** (読む) + **ган** → **номчуган** → **номчуан**
→ **номчаан** (読んだ)
- 4) 母音で終わる動詞語幹 (否定形も含めて) に副動詞 **-гаш** 形か **-геш** 形ををつけるとき (**г** の脱落)
例) **бизи=** (書く) + **геш** → **бизигеш** → **бизиеш**
→ **бижээш** (書いた後に)
- 5) 子音で終わる動詞語幹に副動詞 **-ып** 形ををつけるとき (**г, к, л, м, н, п, р** の脱落)
例) **бол=** (なる) + **уп** → **болуп** // **бооп** (～になって)
- 6) 子音 **г, л, р** で終わる動詞語幹に形動詞現在未来 **-ар** 形ををつけるとき (**г** はいつも脱落し, **л, р** はよく脱落する)
例) **бер=** (与える) + **эр** → **берэр** → **бээр** (与える)
кел= (来る) + **ир** → **келир** // **кээр** (来る)
- 7) 母音で終わる動詞語幹 (否定形も含めて) に同意・許可法の接辞 **-гай** か **-гей** をつけるとき (**г** の脱落)
例) **бизи=** (書く) + **гей** → **бизигей** → **бизией**
→ **бижээй** (書いてもよい)
- 8) 母音で終わる動詞語幹 (否定形も含めて) に、限定法の接辞 **-гыже** (と **г** ではじまる発音上のバリエーション) をつけるとき (**г** の脱落)
例) **номчу=** (読む) + **гуже** → **номчугуже** → **номчууже**
→ **номчааже** (読むまで)

9) 母音で終わる動詞語幹(否定形も含めて)に, 副動詞 **-гала** 形 か **-геле** 形をつけるとき (**г** の脱落)

例) **уду=** (眠る) + **-гала** → **удугала** → **удуала** → **удаала**
(眠るやいなや)

10) 母音で終わる動詞語幹(否定形も含めて)に, 形動詞予期 **-галак** 形か **-гелек** 形をつけるとき (**г** の脱落)

例) **бижи=** (書く) + **-гелек** → **бижигелек** → **бижиелек**
→ **бижээлек** (まだ書いていないが, いまにも書き出しそうな)

11) 子音 **г** で終わる動詞語幹に, 希求をあらわす動詞形成接辞 **-ыкса** (とその発音上のバリエーション) をつけるとき (**г** の脱落)

例) **чуг=** + **-ыкса-** → **чугукса** → **чуукса-**
(洗いたい; 長母音 **уу** になっている)

12) 1人称と2人称, 3人称の人称代名詞の属格や与格, また指示代名詞 **бо** の格変化

例) **мен** + **иң** → **мениң** → **меиң** → **мээң** (私の)
сеңээ // **сээ** (君に)
аңаа // **аа** (彼に)
маңаа // **маа** (ここに)

1つの語幹からなる1音節の単語(長母音であろうが短母音であろうが)が **к** で終わる場合, 所有接辞をつけると **к** が **г** に替わるだけで, **г** は脱落しない.

例) **сөөк** (骨) + **үм** → **сөөкүм** → **сөөгүм** (私の骨)
сээк (ハエ) + **и** → **сээки** → **сээги** (そのハエ)
соок (寒い) + **у** → **сооку** → **соогу** (寒さ)
шак (時間) + **ы** → **шакы** → **шагы** (時刻; 時間)
ак (白い) + **ы** → **акы** → **агы** (白さ)

ロシア語から借用された **г** で終わる単語は, 1音節であろうが2音節以上からなっていようが, 所有接辞をつけたとき, **г** は脱落しない. また, ロシア語から借用された **к** で終わる単語も **к** が **г** に替わるだけで, **г** は脱落しない.

例) **флаг** (旗) + **ы** → **флагы** (その旗)
галстук (ネクタイ) + **ум** → **галстукүм** → **галстугүм**
(私のネクタイ)
начальник (上司) + **и** → **начальники** → **начальниги**
(彼の上司)

5. アクセント

トゥヴァ語においてアクセントは、単語アクセントとシンタグマ（連辞）アクセントがある。

5.1. 単語のアクセント

単語のアクセントは、ふつう単語の最終音節に置かれる。さまざまな接辞がついても同様である。

- 1) 最終音節が短母音のとき、相対的に大きな緊張をともなう。
- 2) 最終音節が長母音のときは、相対的に大きな緊張をともない、かつ上昇調である。

しかし、語中に長母音がある場合、そこにも強勢が置かれる。

以下、例の単語の二重線__が第1アクセント、一重線_は第2アクセント、点線...は第3アクセントである。

例) шооча (錠前), араатан (猛獣)

1つの単語に長母音が2つ以上あるときは、アクセントは主として後ろの音節にある長母音に置かれる。

例) чугаалаар (話す), боостаа (のど), боостаага (のどで)

ロシア語からの借用語はロシア語本来のアクセントがそのまま残る。さまざまな接辞がついても同様である。そのうえ、単語の最終音節にもアクセントをつける。

例) школа (学校), школалар (学校 ; 複数形), школаларывыста (私たちの学校で), фамилия (苗字), фамилиязында (彼の苗字に)

5.2. シンタグマ（連辞）アクセント

連辞中で重要語のシンタグマ・アクセントは、ほかの単語のアクセントがある母音の緊張を弱くして、相対的に大きな緊張をともなってそのアクセントの母音を発音する。

6. 語彙

トゥヴァ語の単語は、チュルク系諸言語の共通語（語根）とトゥヴァ語起源の単語（多くはすべてチュルク系諸言語共通語からなる）、モンゴル語起源の単語、そしてロシア語起源の単語の4つの層から成っていると見える。

また、モンゴル語を通じて東方諸言語の単語も入ってきている。

例) 中国語起源：башкы (先生), бурган (神), тажы (貴族)

ギリシア語起源：ном (本)

イラン (ペルシア語) 起源：дептер (帳面)

サンスクリット語起源：шериг (軍), эртинe (真珠, 宝物),
судур (ラマ経典, スートラ)

満州語起源：албаты (国民, 臣下), албан (勤務)

本来は古代チュルク語であるが、その単語がモンゴル語に借用され、再度トゥヴァ語に入ってきた単語もある。

例) дуза (援助); 古代チュルク語 tusu

トゥヴァ人の名前にはチベット語で曜日をあらわす語もある。

例) Даваа (第1日)

Лагба (第3日)

Бүрүбү (第4日)

Баазаң (第5日)

ロシア語起源の単語でキリル文字に替わる以前にトゥヴァ語の語彙に入った単語のなかで、ロシア語本来の単語の綴りと発音に変化がみられるものがある。

例) шылыяа < шлея (ウマの尻帯)

сапык < сапог (長靴)

сараат < зарод (干草やわらの山)

хөпээн < копна (干草の山)

トゥヴァ語では各地方の方言がきわだっている。

トゥヴァ民族の習慣や迷信を反映する婉曲語法や動物に対して冗談めいた命名をした名称が多い。

例) адыг (クマ) - хайыракан (主, 神),
кырган ава (おばあさん),
кара чүве (黒い物体, 黒いもの),
Мажаалай (ミハイル),
майтак (内反足で歩く),
чер ээзи (大地の主人),

чоорганныг (毛布をまとった),
чер кулактуг (大地の耳を持った),
түрүг чүве (恐ろしい物体, 恐ろしいもの)
бөрү (オオカミ) - кокай (恐い),
кокай-ашак (恐いおじさん),
кызыл-карак (赤い目をした),
көк-карак (青い目をした),
ыт (犬)

トゥヴァ語には同義語や近い意味をあらわす語が多い。また同義語や似た意味の単語を2つ並べて形成した名詞も多い。

例) чылан (蛇) - чылбыраар, узун-курт, курт
өлүр (死ぬ) - бүрлүр, чок апаар, чорта бээр, кызыл-дустаар,
бурган болур, калыр, мөчүүр, баксырай бээр,
аъдының бажы чалданыр(хояр), шыдашпайн баар

7. 単語の形成（単語の語幹構造）

トゥヴァ語で特徴的なことは、屈折語と異なって、比較的語幹が変化しないこと、いわゆる膠着語で、単語の変化および形成は、語根（もしくは語根＝語幹）に接尾辞を加えることによってつくられる。

すべての単語は、派生語と非派生語とに分けられる。

7.1. 非派生語

非派生語は語根＝語幹だけである。それに接続関係にあるのは、歴史的には派生語であるとはいえ、現在ではこれ以上分解できない単語である。

例) чер (土地, 大地), суг (水), от (火), шынаа (谷), дээр (空),
кижи (人間), силер (あなた), кызыл (赤い)

7.2. 派生語の形成

7.2.1. 語形成接辞を語根（もしくは語幹）に加える方法

例) тоол (昔話) → тоолчу (語り部), тоолда- (昔話を語る)
чурук (絵) → чурукчу (画家), чурумал (描出, 絵, 壁画)
элбек (豊かな) → элбекши- (~に富む),
элбекшил (富, 豊富さ)
мал (家畜) → малчын (牧畜民)

7.2.2. 語幹の複合による方法

例) эрге-чагырга (権力), улуг-биче (いろいろな大きさの),
аай-дедир (いろいろな風に), тынар-тынмас (息を殺して),
кара-көк (藍色の), оон-моон (四方から),
кандыг-бир (ある, 任意の), кызыл-кат (フサスグリ),
кара-кат (ブルーベリー), кара-куш (キバシオオライチョウ),
ужар-хеме (飛行機), күш-ажыл (労働, 勤労),
Улуг-Хем (ウルグ・ヘム川), ажыл-агый (経済),
орус-тыва (ロシア・トゥヴァ間の)

7.2.3.語根, 語幹の一体化

例) бежен (50) < беш (5) + он (10)
саржаг (バター) < сарыг (黄色の) + чаг (脂)
даарта (バター) < даң (夜明け) + эрте (早く)

7.2.4.略語

例) райкүүском (地区執行委員会),
М.Т.С. (機会=トラクター=ステーション),
соцчарыш (社会主義競争)

7.2.5.さまざまな文法形態における単語の凝固

例) маңаа < бо の与格
шаанда (以前) < шаг (時) + ын (所有接辞) + да (位格)

8. 品詞

すべての単語は品詞をなし、3つの大きなグループに分かれる。

- 1) 名詞類 … 名詞, 形容詞, 数詞, 代名詞, 後置詞
- 2) 動詞類 … 動詞
- 3) 不変化詞類 … 副詞, 接続詞, (補)助詞, 小詞と叙法詞

9. 接辞

接辞は、主として2つに分かれる。すなわち、語形成接辞と語形変化をあらわす接辞である。

いくつかの接辞は語形変化する(屈折的)性質をもつ。

9.1.語形成接辞

語根もしくは語幹に付け加えて新しい語彙的意味をつくりだす。

9.2. 語形変化をあらわす接辞

単語に補足的ニュアンスもしくは文法的意味を付加する。単語の基本的意味は変化させない。

接辞は厳格な順序に従って語根もしくは語幹に加える。優先順位は、①もつとも広い意味をあらわす接辞、②より狭い意味をあらわす接辞、の順である。大雑把に言えば、語形成をあらわす接辞が、語形変化をあらわす接辞より前にくる。

語根もしくは語幹 + 語形成接辞 + 語形変化接辞

例) **ажылчыннарывыстың** < **ажыл** + **чын** + **нар** + **ывыс** + **тың**

(私たち労働者たちの)

ажыл ... 語根 (「仕事」)

чын ... 語形成接辞 (職業をあらわす名詞を形成する接辞)

нар ... 複数形をあらわす接辞

ывыс ... 所有をあらわす接辞

тың ... 属格をあらわす接辞

もしも語形成接辞がない場合は、語の最後にそのまま語形変化接辞をつける。

例) **дагларда** (山々に) < **даг** + **лар** + **да**

даг ... 語根 (「山」)

лар ... 複数形をあらわす接辞

да ... 位格をあらわす接辞

сугга (水に) < **суг** + **га**

суг ... 語根 (「水」)

га ... 与格をあらわす接辞

барган (行った) < **бар** + **ган**

бар= ... 語根 (「行く」)

ган ... 完了をあらわす接辞

いくつかの語形成接辞は2つあるいは3つの品詞に共通である。例えば、**-чы** (とそのバリエーション)、**-мал (-мел)** は名詞と形容詞を形成する共通の接辞である。

-чы は名詞類から名詞類を形成する (動詞類には付かない)。**-мал (-мел)** は動詞類から名詞類を形成する (名詞類には付かない)。ただし、両者は「名詞類を形成する」接尾辞としては共通といえる。

10. 名詞

名詞は事物の対象をあらわし、**кым?** **кымнар?** (誰? 人の名前を尋ねる) と **чүү? (чү?) чүлөр?** (何? 動物や鳥, 不活動体などを尋ねる) に対する答えとなる。

トゥヴァ語では名詞に性はない。名詞には単数, 複数形があり, 複数形はそれを示す接辞が単数形につく (10.2. 数のカテゴリー参照)。

名詞は固有名詞と普通名詞とに分かれ, その起源に応じて非派生名詞と派生名詞に分かれる。

非派生名詞は語形成接辞をもたず, これ以上分解できない。

例) **даш** (石), **бажың** (家, 建物), **инек** (ウシ), **хат** (風), **кижи** (人)

いくつかの名詞は, 歴史的に派生名詞であったが, 現在ではもうこれ以上分けられないものがある。

例) **көстүк** (眼鏡) < ***көс** (← **köz** 目) + **түк**

колдук (脇) < ***кол** (← **gol** 手, 腕) + **дук**

10.1. 名詞の語形成

派生名詞は接辞を加えて, すなわち名詞的品詞や動詞の語幹に語形成接辞を累加する方法と, 接辞を使わないで, すなわち語幹の組み合わせや一体化, 複合略語の方法でつくられる。

以下に, 主要な名詞形成接辞を挙げていく。接辞表でいう硬音とは, **а, у, ы, о**, 軟音とは, **и, е, э, ө, ү** をさす。以後同様である。

10.1.1. 名詞から別の名詞を形成する接辞

1) 職業や従事 (～する人) — 生産的接辞

名詞語幹の 最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
無声子音 -л, -м, -н, -ң	-чы	-чи	-чу	-чү
母 音 -р, -й, -г	-жы	-жи	-жу	-жү

例) **аңчы** (猟師), **чурукчу** (画家), **тараажы** (農民), **патийжи** (党员),
дииңчи (リス狩りの猟師)

2) 職業や従事（～する人）－ 非生産的接辞

名詞語幹の 最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
子 音 母 音	-чын	-чин	-чун	-чүн

例) ажылчын (労働者), малчын (牧畜民), үлетпүрчин (プロレタリア),
тараачын (農民)

この接辞はモンゴル語起源である。

3) 親族関係による人の集合名称 － 生産的接辞

名詞語幹の 最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
子 音 母 音	-ышкылар	-ишкилер	-ушкылар	-үшкилер
母 音	-[лы]шкылар	-[ли]шкилер	-[лу]шкылар	-[лү]шкилер

例) эжишкилер (友人たち), адашкылар (子供と一緒にの父),
авашкылар (子供と一緒にの母), акы[лы]шкылар (兄弟たち),
угбашкылар (姉妹たち)

この接辞は以下の2つの接辞からなっている。

く шкы + лар (複数形)

4) 名詞があらわす行為をする人や職業をあらわす

名 詞 語 幹 の 最 後 の 音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音	
	硬 音	軟 音
母 音 無 声 子 音	-тан	-тен
母 音 有 声 子 音	-дан	-ден

例) амытан (動物), хөреңгитен (お金持ち), эргетен (有産者),
эртемден (学者)

この接辞をもつ名詞は、すべてモンゴル語起源である。

10.1.2.動詞から名詞を形成する接辞

1) 職業や従事 (～する人), 動詞があらわす行為をする人 — 生産的接辞

動詞語幹の 最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
子 音	-ЫКЧЫ	-ИКЧИ	-УКЧУ	-ҮКЧҮ
母 音	-КЧЫ	-КЧИ	-КЧУ	-КЧҮ

例) ужудукчу (飛行士), өөреникчи (生徒), көрүкчү (聴衆),
сонгукчу (選挙人), мурнакчы (先駆者)

この接辞は、名詞形成接辞 -к に、職業をあらわす名詞形成接辞 чы (とそのバリエーション) の2つからできた接辞である。

2) 概念, 行為や状況をあらわす — 生産的接辞

動詞語幹の 最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
子 音	-ЫЫШКЫН	-ИИШКИН	-УУШКЫН	-ҮҮШКҮН
母	а	-АШКЫН		
	ы	-ЫШКЫН		
音	и	-ИШКИН		
	е	-ЭШКИН		
	у	-УШКЫН		
	ү	-ҮШКИН		

例) халдаашкын (攻撃), шимчээшкин (運動),
согуушкун (指先ではじくこと), чырыдыышкын (啓蒙)

動詞語幹が母音 -е で終わる場合, 名詞形成接辞の最初の母音 -э- と2つ並ぶことになり (-еэ-), 1つの長母音 -ээ- になる。

例) эмне= + -эшкин → эмнеээшкин → эмнээшкин (治療)

3) 動詞の行為をあらわす, その結果として生産されたもの

— 生産的接辞

動詞語幹の 最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
子 音	-ЫГ	-ИГ	-УГ	-ҮГ
母 音	-Г			

例) айтырыг (質問), билиг (知識), манак (警備), дилег (お願い),
хемчег (度量衡), сүрүг (家畜の群れ)

4) その主要な特徴による事物の名称 — あまり生産的ではない

動詞語幹の最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
子 音	-ык	-ик	-ук	-үк
母 音	-к			

例) адырык (川の分岐点), будук (インク), бижик (読み書きの能力), бөлүк (グループ)

5) 動詞があらわす行為の具体的な結果 (生産物, 製品) をあらわす
— あまり生産的ではない

動詞語幹の最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
子 音	-ымал	-имел	-умал	-үмел
母 音	-мал	-мел	-мал	-мел

例) казымал (化石), чорумал (旅人), чырымал (天体), бүдүмел (物質)
この接辞はモンゴル語起源である。

6) その主要な特徴による現象や状況, あるいはをある数量をもった物の名称をあらわす — 限られているが生産的

動詞語幹の最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
子 音	-ым	-им	-ум	-үм
母 音	-м			

例) өлүм (死), базым (一步), өзүм (芽生え), тудум (束)

7) 動詞があらわす行為や抽象概念をあらわす

動詞語幹の最後の音	
母 音	-л

例) чарлал (宣言, 公告), бодал (思考), күзел (願望), найырал (友好)
この接辞はモンゴル語からの借用であり, この接辞でから形成される名詞はモンゴル語の借用語起源の名詞といえる。

8) 動詞があらわす用途に使う道具やそのための方法

— 限られているが生産的

動詞語幹の 最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
無声子音	-кыыш	-кииш	-кууш	-күүш
有声子音 母 音	-гыыш	-гииш	-гууш	-гүүш

例) тепкииш (梯子のステップ), даянгыыш (杖), тырткыыш (掛け金),
ааткыыш (揺籃を掛ける鉤), ээргииш (紡錘)

母音に終わる動詞語幹にこの接辞をつけると、接辞最初の -г- は2つの母音に挟まれることになり、脱落する。その際、同じ母音が3つ並ぶことになった場合は、そのうちの母音1つが落ちて、母音は長母音となる。同じ母音でない場合 (-аы-, -еи-, -еү-) は、1つの開口長母音 (-аа-, -ээ-) となる。

例) чүлү= + -гүүш → чүлүгүүш → чүлүүүш → чүлүүш (かみそり)

шалы= + -гыыш → шалыгыыш → шалыгыыш → шалыыш (砥石)

9) 行為の抽象概念をあらわす — 生産的接辞

動詞語幹の 最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
子 音	-ылга	-илге	-улга	-үлге
母 音	-лга	-лге	-лга	-лге

例) суггарылга (灌漑), электрижидилге (電化), бүзүредилге (信頼),
чурулга (絵を描くこと), шынзылга (証明書), бижидилге (申し込み)
この接辞はモンゴル語起源である。

10) 動詞があらわす行為のプロセスや抽象概念をあらわす

— 生産的接辞

動詞語幹の 最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
子 音	-ылда	-илде	-улда	-үлде
母 音	-лда	-лде	-лда	-лде

例) чыылда (収集), соңгулда (選挙), эргилде (交替), өзүлде (成長)
この接辞はモンゴル語起源である。

1 1) 動詞があらわす行為や状況, 抽象概念をあらわす — 非生産的接辞

動詞語幹の 最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
子 音 (母 音)	-ыш	-иш	-уш	-үш
母 音	-ш			

例) таныш (知り合い), согуш (けんか), көрүш (視線)

この接辞で形成した名詞は, чок (~なしで) とともに用いて, 形容詞 (~の
ない) あるいは副詞 (~なしに) として用いられることが多い。

例) билиш чок (分からない), чайлаш чок (不可避の; 避けられなく)

また, 突然起こる行為や一瞬にしてそうなる行為をあらわす擬態語, 擬音語
はこの接辞から形成されることが多い。

例) сырбаш дээр (ぶるっと震える), кылаш дээр (きらっと光る),
кошкаш кынныр (一瞬にして弱まる)

1 2) 動詞があらわす行為やその用途に使う物や道具や装置, 機械

— 生産的接辞

動詞語幹の 最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
無声子音	-кы	-ки	-ку	-кү
有声子音 母 音	-гы	-ги	-гу	-гү

例) эшки (櫛), четки (網), хыргы (引っ掻き具)

1 3) 動詞があらわす行為の具体的な結果をあらわす

動詞語幹の 最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
子 音	-ынды	-инди	-унду	-үндү
母 音	-нды	-нди	-нду	-ндү

例) чыынды (作品集), үзүндү (断片)

1 4) 動詞があらわす抽象概念をあらわす — 非生産的接辞

動詞語幹の 最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
子 音	-ымча	-имче	-умча	-үмче
母 音	-мча	-мче	-мча	-мче

例) **чедимче** (成功), **оваарымча** (注意深さ), **деткимче** (支援)
この接辞はモンゴル語起源である。

1 5)

動詞語幹の 最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
子 音	-ын	-ин	-ун	-үн
母 音	-н			

例) **чыдын** (横たわる場所), **угаан** (知恵)
現代トゥヴァ語ではこの接辞から単語は形成されなくなっている。
この接辞はモンゴル語起源と考えられている。

1 6) 動詞があらわす行為の具体的な結果をあらわす

動詞語幹の 最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
子 音	-ындак	-индек	-ундак	-үндөк
母 音	-ндак	-ндөк	-ндак	-ндөк

例) **кезиндек** (切れ, 断片), **оюндак** (小片)
現代トゥヴァ語ではこの接辞から単語は形成されなくなっている。

10.1.3. 指小接辞

もっともよく使われる指小接辞

1)

名詞語幹 の最後の音	語幹の最終音節の母音	
	硬音	軟音
無声子音 -л, -м, -н, -ң	-чак, -чык, -чук	-чек, -чик, -чүк
母音 -р, -й, -г	-жак, -жык, -жук	-жек, -жик, -жүк

例) кулунчак (子ウマ), хемчик (小川), хууңчук (小さいバケツ),
хөлчүк (小さい湖), дагжак (小山), бугажык (子ウシ),
дилгижек (小さいキツネ, 子ギツネ)

2)

名詞語幹の 最後の音	語幹の最終音節の母音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
無声子音 -л, -м, -н, -ң	-чыгаш	-чигеш	-чугаш	-чүгеш
母音 -р, -й, -г	-жыгаш	-жигеш	-жугаш	-жүгеш

例) аътчыгаш (子ウマ), хемчигеш (小川), отчугаш (灯火),
шөлчүгеш (野原), дагжыгаш (小山), тейжигеш (小丘)

3)

名詞語幹の 最後の音	語幹の最終音節の母音	
	硬音	軟音
	-ак	-ек

例) хеймерек (一番下の弟, 妹), койгунак (小さいウサギ)

10.1.4.愛称接辞

もっともよく使われる愛称接辞

1)

名詞語幹の 最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音	
	硬 音	軟 音
	- (ы) кай, - (ы) тай, - (ы) дай, - (ы) пай, - (ы) вай	- (и) кей, - (и) тей, - (и) дей, - (и) пей, - (и) вей

例) эжикей (友人), Чинчивей (チンチちゃん)

この接辞では, кушкаш (小鳥) のように 接辞 -кай が, -каш に変化した
ものもある.

この接辞は, 主に呼びかけのときに用いられる.

2)

名詞語幹の 最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
	-кы (м)	-ки (м)	-ку (м)	-кү (м)

例) авақым (私のおかあさん), дуңмақым (私の弟よ)

この接辞は, いつも1人称所有接辞 -м がついた形で呼びかけで用いられる。
したがって, 上記表には(м)を加えてある.

3)

名詞語幹の 最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音	
	硬 音	軟 音
	- (м) ай	- (м) ей

例) черимей (私の住む大地よ), авамай (私のおかあさん)

この接辞は, 主として呼びかけのときに用いられ, その際に接辞は, 1人称
所有接辞 -м の後につく. したがって上記表には(м)を加えてある.

親族名称に -й をつけて呼びかけをあらわすが, 歴史的にはこの接辞から作ら
れたと考えられている.

例) ачай (お父さん!), авай (お母さん!), акый (お兄さん!),
угбай (お姉さん!), дуңмай (弟よ, 妹よ!)

4)

名詞語幹の 最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
	-кыжыым	-кижиим	-кужуум	-күжүүм

例) авақыжыым (私のおかあさん)

この接辞は 愛称接辞 -кы + 指小接辞 -чык + 1人称所有接辞 -м の合成接辞である。

5)

名詞語幹の最後の音	語幹の最終音節の母音
	-маа

例) Белекмаа (ベレクちゃん), Дарыймаа (ダルイちゃん)

10.1.5.接辞を用いない語形成

接辞を用いない語形成は、2つの名詞から成るもの、その合成から成るものと複合させてつくるもの、合成略語がある。

2つの名詞からつくる名詞は、2つの語根もしくは語幹を組み合わせてつくる。その際ハイフンを挟んで書くのがふつうである。

例) ада-ие (両親), ажыл-агый (経営), кызыл-кат (フサスグリ), даг-дүгү (アスベスト), чынар-бажың (サウナ), демир-орук (鉄道)

10.2.数のカテゴリー

名詞には単数形と複数形がある。

単数主格は, кым? (誰?), чүү? (何?) に対する答えとして, また名詞の基本形であり, 特別な接辞をもたない。

名詞は複数形あるいは単数形だけで用いる名詞はなく, どの名詞も単数形, 複数形で使うことができる。

複数形を形成する接辞は以下の表の通りであり, 複数もしくはグループをあらわす。

複数形接辞表

語幹もしくは 語幹＝語根の 最後の音	語幹もしくは語幹＝語根 の最終音節の母音	
	硬音	軟音
母音 -й, -г, -р	-лар	-лер
-л	-дар	-дер
無声子音	-тар	-тер
-м, -н, -ң	-нар	-нер

例) ховулар (ステップ), кижилер (人々), тоолдар (昔話),
херекселдер (道具), оттар (火), үнүштер (植物), амытаннар (獣),
хемнер (川)

複数形に対する問いは, кымнар? (誰ら?) と чүлөр? (何?) となる.

数詞や хөй (たくさんの), эвээш (少しの) といった数量をあらわす語が名詞につく場合, その名詞に複数接辞をつけても, つけなくてもどちらでもよい.

例) чээрби беш кижиге (25人の人々), хөй кижиге (多くの人々)

トゥヴァ語本来の単語は, 2つの子音から始まることも終わることもない. したがって, 2つの子音で終わる単語 (外来語) に複数接辞をつける場合, 接辞の前に母音調和の法則に従い母音 (ы, у, и, ү) を入れる (10.1.8.参照). したがってこの場合, 複数接辞は -лар か -лер のどちらかがつくことになる.

例) акт (法令, 布告) + лар → актылар

факт (事実) + лар → фактылар

студент (学生) + лер → студентилер

例外) аэропорт (空港) + тар → аэропорттар

この法則は複数接辞の場合だけでなく, 後述する格接辞にも当てはまる.

例) фонд (基金) + нуң → фондунуң (属格)

парламент (国会) + ге → парламентиге (与格)

例外) аэропорт (空港) + ты → аэропортту (対格)

10.3. 所有のカテゴリー

所有のカテゴリーは、名詞の定語的組み合わせによってあらわされる。名詞が定語となる場合、その定語となる名詞は属格(10.4.2.参照)であらわす(属格の接辞がつかないことも多い、また名詞がそのまま形容詞「~の」として用いられることもある)。そして修飾される名詞にはかならず所有接辞がつく。所有接辞は以下の表の通りである。定語となる名詞の属格部分、また名詞につく代名詞の属格(私の、あなたの...)は、省略することができる。したがって、

代名詞の属格) +	名詞 + 所有接辞	
名詞の属格	+	名詞 + 所有接辞	
名詞の主格	+	名詞 + 所有接辞	という形になる。

例) школа бажыңы (学校の建物), [мээң] авам (私の母),
[сээң] эжиң (君の友人),
хоорай сады, хоорайның сады (町の庭園)

また、所有接辞は人称代名詞にもつくことがある。

例) Оол, кыс дуңмаларлыг чораан мен. Оларым база багай салымга
таварышкаш, читкилей берген.

(私には弟、妹たちがいました。私の弟、妹たちである彼らもひどい
運命に遭遇し、次々と死んでいったのでした。)

M. Кенин-Лопсан « Читкен уруг » Кызыл, 2000, арын 411

所有接辞の主な役割

1) ある物・人への所属

例) мээң номум (私の本)

2) 部分の全体への所属

例) өөреникчилерниң чамдыызы (生徒たちの何人か),
аът бажы (ウマの頭)

3) 親戚関係 (その場合、定語は必ずしも必要としない)

例) [мээң] уруум (私の娘), [сээң] ачаң (君の父),
[сээң] дуңмаң (君の弟もしくは妹)

4) 事物の内容もしくはある物の他のとの関係

例) хемниң балыы (川魚), тайганың ыяжы (タイガの木)

5) 物の抽象的特徴 (形容詞の名詞化; 11.3.1.形容詞語幹に所有接辞をつける方法参照)

例) даштың кадыы (石の強度),
күш-ажылдың бүдүрүкчүлүү (勤勞生産性)

6) 従属節をつくる際に、行為もしくは状況をあらわす動詞の意味上の主語となる。

例) **мээң кээримге** (私が来る際には)

所有接辞表

数	人称	語幹の最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
			а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
単 数	1 人 称	子 音	-ым	-им	-ум	-үм
			ажылым	хемим	холум	шөлүм
		母 音	-м			
			чагаам			
	2 人 称	子 音	-ың	-иң	-уң	-үң
			ажылың	хемиң	холуң	шөлүң
		母 音	-ң			
			чагааң			
	3 人 称	子 音	-ы	-и	-у	-ү
			ажылы	хеми	холу	шөлү
		母 音	-зы	-зи	-зу	-зү
			чагаазы	эгеzi	ховузу	бүрүзү
複 数	1 人 称	子 音	-ывыс	-ивис	-увус	-үвүс
			ажылывыс	хемивис	холувус	шөлүвүс
		母 音	-выс	-вис	-вус	-вүс
			чагаавыс	эмчивис	ховувус	өшкүвүс
	2 人 称	子 音	-ыңар	-иңер	-уңар	-үңер
			ажылыңар	хемиңер	холуңар	шөлүңер
		母 音	-ңар	-ңер	-ңар	-ңер
			чагааңар	эмчиңер	ховуңар	өшкүңер
	3 人 称	子 音	-ы	-и	-у	-ү
			ажылы	хеми	холу	шөлү
		母 音	-зы	-зи	-зу	-зү
			чагаазы	эгеzi	ховузу	бүрүзү

接辞表中の例の単語：**ажыл** (仕事), **хем** (川), **хол** (手), **шөл** (野原),
чагаа (手紙), **эге** (始め), **хову** (ステップ), **бүрү** (葉),
эмчи (医者), **өшкү** (ヤギ)

この表は名詞単数形に所有接辞がついた表であるが、名詞複数形にも同様に所有接辞はつくが、接辞の順序は、

名詞 (単数形) + **複数接辞** + **所有接辞** である。

例) **ажылдарым** (私の数ある仕事),
чагааларыңар (あなたのいくつかの手紙)

所有接辞をつけることによって子音交替や母音や子音の脱落が起きることがよくあるが、詳しくは4.1.3.子音交替と4.1.5.母音の脱落, 4.1.5.子音の脱落の項を参照. 前記の子音交替, 母音と子音の脱落以外の法則と外来語に注意する点は以下の通りである

1) **й** で終わる単語は **й** が **ю** にかわる.

例) **хой** (ヒツジ) → **хоюм** (私のヒツジ), **хоювус** (私たちのヒツジ),
хоюңар (あなたのヒツジ)...

2) **ь** で終わる単語は **ь** が **ы, и, у** にかわる. その際, 母音調和の法則に従う.

例) **секретарь** (書記) → **секретары** (その書記)

3) **ф, ц, щ** で終わる外来語 (借用語) に所有接辞をつけると, 最後の無声子音は子音交替して有声化する. この音はトゥヴァ語にもととなかった音であり, 子音の交替は次のようになる.

ф → **в, ц** → **з, щ** → **ж**

例) **шкаф** (食器棚) → **шкафы** → **шкавы** (その食器棚)
огурец (キュウリ) → **огуречи** → **огурези** (そのキュウリ)
плащ (レインコート) → **плащы** → **плажы** (彼のレインコート)

4) **к** で終わる名詞に所有接辞がついたときは以下のようなになる.

① 1音節からなるトゥヴァ語本来の単語では **к** は有声化し **г** になるが, 脱落はしない.

例) **шак** (時計) → **шагым** (私の時計)

② 2音節以上のトゥヴァ語本来の単語では **к** は有声化し **г** になって脱落し, 1つの長母音になる.

例) **чурук** (絵) → **чуругум** → **чуруум** (私の絵)

③ ロシア語から借用された単語は語末の **к** は有声化し **г** になるだけで脱落しない.

例) **зонтик** (傘) → **зонтигим** (私の傘)

10.4. 格のカテゴリー

トゥヴァ語には7つの格がある。主格と属格，与格，対格，位格，奪格，方向格がそれである。格のカテゴリーは形態論的範疇をもっておらず，ただ，接辞の発音上バリエーションがあるだけである。

格を形成する接辞は単数形，複数形とも同じである。

3人称の人称接辞をともなう名詞の格変化にはいくつかの不規則変化がある。形態が主格と似ている，いわゆる接辞をともなわない（接辞をつけない）形をとる格があるが，文中それぞれの意味において属格や与格，対格，位格，方向格の意味で使われる。

例) хоорай (ның) сады	— 属格 (市の庭園)
хоорай (га) баар	— 与格 (都市に行く)
хоорай (ны) тургузар	— 対格 (都市を建設する)
хоорай (же) баар	— 方向格 (都市へ行く)

接辞をともなわない形をもつ格は，この格によって具体的でない概念（一般的なこと）をあらわし，何も強調していない点だが，他の斜格（主格以外の格），つまり格接辞がついたときと異なる。この接辞をともなわない形をもつ格は具体性を必要としないときに用いられる。したがって，指示代名詞がついたときや人の名前や地名など具体的，特定のなことをあらわすときには接辞をつける。

10.4.1. 主格

主格は名詞の基本形であり，特別な接辞をもたない。

主格は，кым? (誰?)，кымнар? (誰? ; 複数形)，чүү? (何?)，чүлөр? (何? ; 複数形) に対する答えとなる。

例) кым? — оол (男の子)，ада (父)，херээжен (女性)，
коммунист (共産主義者)，киржикчи (参加者)，
саанчы (搾乳婦)

чүү? — чаан (象)，ала-буга (カワズズキ)，чер (大地)，
суг (水)，хүн (太陽)，чодураа (ウワミズザクラ)

文章中において名詞主格は，主語や定語，補語（目的語），状況語，述語となりうる。また，人や動物の名前であったなら，呼びかけの語ともなりうる。

格接辞がつく位置は，名詞の後，複数形であればその後，さらに所有接辞があればその後である。図で示すと，

名詞 (単数形)	+	格接辞		
名詞 (単数形)	+	複数接辞	+	格接辞

名詞 (単数形) + 所有接辞 + 格接辞
名詞 (単数形) + 複数接辞 + 所有接辞 + 格接辞 となる。

10.4.2. 属格

属格は定語の結合においてあらわされる。

属格は, **кымның?** (誰の?), **кымнарның?** (誰の? ; 複数形), **чүнүң?** (何の?), **чүлөрнің?** (何の? ; 複数形) に対する答えとなる。

属格は, 接辞 **-тың** (とその発音上のバリエーション) を名詞の語幹につけることであらわす。

名詞の属格は, 文中において定語となる。

名詞属格が修飾した名詞, 形容詞, 動詞には, 必ず所有接辞がつく。

属格接辞表

名詞語幹の 最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
無声子音	-тың	-тиң	-туң	-түң
母 音 -р, -й, -г 鼻音子音 (-м, -н, -ң)	-ның	-ниң	-нуң	-нүң
-л	-дың	-диң	-дуң	-дүң

例) **даштың** (石の), **эштиң** (友人の), **чурттуң** (国の), **күстүң** (秋の),
чугааның (話の), **хемниң** (川の), **сугнуң** (水の), **дүрүмнүң** (法律の),
дазылдың (根の), **күзелдиң** (望みの), **оолдуң** (少年の),
хөлдүң (湖の)

属格の意味

- 1) 「父の家」, 「姉の本」 などのように物の所有者, あるいは「バレエのソロ」,
「工場の労働者」などのように, 他の事物や人との関係をあらわす. また, 「家
の屋根」, 「椅子の脚」などのように全体の一部・所属をさす. 「戦士の勇敢さ」,
「川の深さ」などのように事物や人物の特徴・特質・性格をあらわす. 「民族
アンサンブルの到着」, 「首相の演説」などのように行為や状況の主体をあら
わす. ふつう他の名詞的品詞や所有接辞と組み合わせて用いられる. つまり,
それらと物主的語結合を形成する.

例) **чурттуң байлаа** (国の資源), **оолдуң ады** (少年の名前),
хемниң эрии (川岸), **чоннуң аас-кежи** (人民の幸福)

所有表現「～には・・・がある,・・・を持っている」の構文においても用いられる。その際、話者は誰がもっているか、所有者に関心があって言っているとき、あるいはその所有している対象のものが本当にその当人のものであるときである。

例) Инектиң бызаазы бар. (ウシには子ウシがいる.)

Чечектиң солун дискилери бар.

(チェチェックがおもしろい CD を持っている.)

所有表現の所有者は位格でも用いられるが、その際は話者のテーマが誰が所有者にあるのではなくて、持っているものに関心がある場合である(10.4.5.位格参照)。

- 2) кырында (～の上に), адаанда (～の下に), иштинде (～の中に), чанында (～のそばに, ～の近くに), үстүндө (～の上方に), артында (～の後ろに) などの後置詞や助詞とともに用いて、物の位置する場所もしくは行為の行われる場所をあらわす。巻末の後置詞および補助詞一覧表を参照。
ふつうこの場合には、名詞の属格形は属格の接辞をつけずにあらわされる。

例) стол кырында (机の上に), хап иштинде (袋の中に),
соңга чанында (窓辺に), ыяш адаанда (木の下に)

- 3) 名詞を修飾する修飾句中の行為の主体をあらわす。

例) Мен авамның кылган чемин чипкен мен.

(私は母親が作ったご飯を食べました.)

Тывалардан оларның алыр кол-ла үндүдү болза тыва араттарның чылда орулгазының үштүң бир кезиинден хөйү болур « албан » - киш, диин, дырбаклыг, ирбиш, үс кештерин чиик өртек-биле садып ап турган.

(トゥヴァの人々から彼らが〔注：中国清王朝〕受け取った主要な税収はと言えば、トゥヴァ牧民の年間収入の3分の1以上を占めた「年貢」ークロテンやリス、オオヤマネコ、ユキヒョウ、ヤマネコの毛皮を安価で買い取ったことだった.)

Ю.Промтов « Азия диптиң төвүндө » Кызыл, 2006, арын 15
また、主行為に先立つ行為をあらわす (～した後の)。

例) Өгленгенивистиң бир чыл хире болганында кыс уруглуг болдуvus.

(私たちが結婚してから1年ほど経った後、娘が生まれた.)

4) 副動詞 **-каш** 形に属格をつけて、主文の原因や理由をあらわす (10.4.6. 奪格, 14.7.3. 副動詞 **-каш** 形参照).

例) **Өөрээштиң, ыглаптар частым.** (嬉しくて泣き出しそうになった.)

Чогум каш шакта кел дээнин сүрээдээштиң айтырып албаанымга хомудап тур мен.

(何時に来たらよいか、動揺していたために訊ねなかったことにたいして自分自身腹を立てている.)

☆ 名詞が属格となって他の名詞を修飾する場合、具体的でない一般的なことを示すとき属格の接辞は伴わないが、修飾する名詞に「この」などの指示代名詞がついたときや属格となる名詞が所有者、地名、人名などで修飾されると名詞は特定の、具体性がでるので、接辞をつけることになる。

例) **Бо дилгиниң кежи ийи моюндурук чеде бээр.**

(このキツネの毛皮からマフラーが2枚とれる. ; 特定のもの)

Бо бөрттү дилги кежинден кылган.

(この帽子はキツネの毛皮でできている. ; 具体性もなく、強調する必要もない)

Улуг-Хемниң суу дажый берген.

(ウルグ=へム川の水が増した. ; 特定の地名)

Хем суу дажый берген.

(川の水が増した. ; 具体的でない、強調していない)

しかし、区切り方によって属格接辞の不要、必要が異なる。

例) **Бо дилгиниң // кежи**

(このキツネ // の毛皮 ; 具体的な物 → 接辞必要)

Бо // дилги кежи

(この // キツネの毛皮 ; 一般的な物としての「キツネの毛皮」 → 接辞不要)

☆ 名詞が属格となってほかの名詞を修飾する場合、具体的でない一般的なことを示すとき接辞はともなわないが、修飾する名詞とのあいだにほかの品詞がはいるとき、つまり名詞の属格直後に、修飾される名詞がこないときは、必ず接辞をつけないといけない。

例) **Дилги кежи хоюг-дур.**

(キツネの毛皮は柔らかい. ; 一般的なこと)

Дилгиниң хоюг дүктүг кежи-биле кылган моюндрук чылыг болур.

(キツネの柔らかい毛皮で作ったマフラーは暖かい. ; 属格直後に修飾される名詞がきていない)

10.4.3.与格

与格は, **кымга?** (誰に?), **кымнарга?** (誰らに? ; 複数形), **чүге?** (何に?), **чүлгерге?** (何に? ; 複数形), **каяа?** (どこで?, どこへ?), **кайнаар?** (どこへ?) に対する答えとなる.

与格は, 接辞 **-ка** (とその発音上のバリエーション) を名詞の語幹につけることであらわす.

与格は文中で補語や状況語となる.

与格接辞表

名詞語幹の 最後の音	語幹の最終音節の母音	
	硬音	軟音
無声子音	-ка	-ке
有声子音 母音	-га	-ге

例) **ыяшка** (木に), **эшке** (友人に), **хоорайга** (都市に), **эмчиге** (医者に)

与格接辞 **-га** は母音で終わる名詞につくと, 接辞中の **г** は2つの母音に挟まれることになり脱落し, 1つの長母音, すなわち硬音なら **аа**, 軟音なら **ээ** になることがよく起きる.

例) **хову + га → ховуга → ховуа → ховаа // ховуга**
(ステップに)

кижи + ге → кижиге → кижие → кижээ // кижиге (人に)

与格の意味

1) 行為が向けられる対象 (人もしくは物) をあらわす.

例) **өөреникчилерге онаалга бээр** (生徒たちに課題を与える)
лекцияга баар (講義に行く)

2) 過去あるいは未来における行為の行われる場所をあらわす. 過去形, 未来形 (予期未来, 不定未来) では与格が用いられる (疑問代名詞は **каяа?** である). 現在形では場所の状況語は位格が用いられる (疑問代名詞は **кайда?** である).

例) **Таня Москвага өөренир.** (ターニャはモスクワで学ぶ予定だ.)

3) 行為の行われる方向をあらわす (～へ, ～の方へ).

例) Пионерлар Артекке чораан.

(ピオネールたちはアルテクへ行った.)

4) 行為を誰か, 何かに及ぼす主体をあらわす. 「～によって・・・される」, 「～(物・行為)に・・・さらされる」という構文のように動詞の使役・被動態とともに用いられることが多い.

例) бөрүге чиртир (オオカミに食べられる)

соокка алзыр (風邪をひく)

чурукка тырттырар (写真に撮ってもらう)

5) 命令や懇願, 依頼によって行われた行為の主体をあらわす (「～(人)に・・・してもらう」).

例) ачамга ном

(父が私に買ってくれた本, 私は父に買ってくれるようお願いし, そのとおりに買ってくれた本)

Мен ачамга ном сааттырып алган мен.

(私は父にお願いし本を買ってもらった.)

6) 後置詞 **чедир** (～まで), **удур** (～に対して), **уткуштур** (～を出迎えて),
あるいは副詞 **чоокшуладыр** (～より近くに) を用いて行為の場所や時間,
比較 (程度), 対象をあらわす. 巻末の後置詞および補助詞一覧表を参照.

例) кааңнаашкынгa удур демисел (早魃に対する闘い)

Өөрүмгe уткуштур үнүптүм. (友人に会いに出かけた.)

темага чоокшуладыр (テーマに近い)

даартага чедир (明日までに)

чүске чедир (100まで)

7) 行為の終了までの時 (～まで) をあらわす.

例) Беш шакка он минут четпейн-дир.

(5時10分前です. [5時に10分足りない].)

8) 形動詞完了 (-ган 形) や形動詞現在未来 (-ар 形) とともに用いて, 行為をする時 (～する時) や条件 (～する際は) をあらわす. 10.4.5.位格も参照.

例) Паромувус Енисейниң ортузунга кээрге, Кызыл биске улам тода

кылдыр көстүп келди.

(私たちが乗った渡し舟がエニセイ川の中ほどに来ると、クズルの町並みがますますはっきりと見えてきた.)

10.4.4. 対格

対格は, кымны? (誰を?), кымнарны? (誰らを? ; 複数形), чүнү? (何を?), чүлөрни? (何を? ; 複数形) に対する答えとなる.

対格は, 接辞 -ты (とその発音上のバリエーション) を名詞の語幹につけることであらわす.

対格接辞表

名詞語幹の 最後の音	語幹の最終音節の母音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
無声子音	-ты	-ти	-ту	-тү
母音 有声子音	-ны	-ни	-ну	-нү
-л	-ды	-ди	-ду	-дү

例) кышты (冬を), хепти (服を), дошту (氷を), үжүктү (文字を), дагны (山を), черни (大地を), боону (銃を), мөөгүнү (きのこを), ажылды (仕事を), үжүглелди (いろは教本を), холду (手を), хөлдү (湖を)

対格の意味

1) 行為の直接目的語となる. 他動詞が直接目的語をとるときはかならず対格を必要とする.

例) Хуусаа бетинде планны күүседир бис.

(私たちは期日までに計画を実行します.)

Радиога сөөлгү медээлерни дамчыдып тур.

(ラジオで最新ニュースを伝えている.)

2) 後置詞 ёзугаар (~に沿って) や кежир (~を横切って), дургаар (~に沿って), куду (~の下へ) өрү (~の上へ) は対格を要求する. 巻末の後置詞および補助詞一覧表を参照.

例) дугуржулганы ёзугаар (合意に従って)

хемни кежир (川を横切って)

эрикти дургаар (岸に沿って)

3) 修飾句の意味上の主語となる.

例) Бис силерни дирлип кээр деп бодавайн турдувус.
(私たちはあなたが蘇生するとは思わなかった.)

4) 喜びや感嘆, 驚き, 残念, 恐怖などの強い感情をあらわす感嘆文をつくる.
そのさい, 文の構造は以下のようなになる (「なんて～なんだ!」).

属格 (意味上の主語) + 名詞 + 対格 (代名詞の対格)
属格 (意味上の主語) + 動詞 + 所有接辞 + 対格
属格 (意味上の主語) + 形容詞 + 所有接辞 + 対格
属格 (意味上の主語) + 副詞 + 所有接辞 + 対格

例) Күжүр эрни! (よくやった!)

Мээң суксаарымны! (ああ, のどが渴いた!)

Бажымның аарырын! (頭がなんて痛いんだ!)

Кулаам алгыраарын! (ああ, ひどい耳鳴りだ!)

Харның дүжүп турарының чаражын!

(雪が降っている様子はなんて美しいんだろう!)

Кончуун! (すごいなあ! ひどいなあ!)

このような感嘆文の文末には相手の同意や支持を得るために助詞 **аа**, **але** (「ああ!」) や, 感嘆を強める助詞 **аар** がつくことがよくある.

例) Ол оолдың ырлап чоруурунун магалыын аа!

(この男の子はなんてすばらしく歌うんだ, そうだろ!)

Эртежиңерни але! (ああ, あなたはなんて早起きなんですね!)

Сени аар! (ああ, 君はなんて奴なんだ!)

このような感嘆文の前に知覚動詞 (「見る」や「聞く」など) をともなって話者が対話者の注意を惹きつけることがある.

例) Көрбес сен бе, ооң сеткилиниң алыс ажык чаагайын!

(君には分からないの, 彼の心がほんとうに率直で気高いことを!)

時制に関して言えば, 現在でも過去でも言えるが, 過去の意味では形動詞 **-ган** 形を用いる. また, 動詞が否定形になる場合は, 時制に関係なく形動詞現在未来形 **-ар** 形を用いる. すなわち, 否定接辞 **-пас** (とその発音上のバリエーション) + 3人称所有接辞 **-ы**, **-и** + 対格接辞 **-н** → **-пазын**, **-базын**, **-вазын**, **-мазын**, **-пезин**, **-безин**, **-везин**, **-мезин** となる.

例) Дүн база орайтаан. Оода бо лампа чырыының чер албазын!

(夜は更けた. でも, このランプの明かりは地面を照らさないほどひどいなあ!)

☆ 3人称所有接辞のついた名詞に対格の接辞をつけるとき、接辞 **-ны, -ни, -ну, -нү** の末尾 **ы, и, у, ү** は脱落する。

例) Мен ооң номуң номчуп тур мен. (私は彼の本を読んでいる.)

☆ 文中で対格の接辞をつけない(省略できる)ときがある。具体的には名詞に **-ны** (その発音上のバリエーション) がつかない形と名詞に所有接辞がついただけで **-н** がつかない形がある。それは、その名詞が特定されない一般的なものや行為を指し、それを支配する他動詞のすぐ隣りにある場合である。したがって、直接目的語である名詞とそれを支配する他動詞が離れているとき(名詞が一般的な行為やものを指していても)や「この」などの指示代名詞や個別化、特定されるような修飾句がつくとき(名詞がそれを支配する他動詞の隣にあっても)は対格接辞が必要となる。

例) Бедик дүжүтке чемиш кылыр чүве херек : хүл чыыр, дагаа өдээ чыыр.

(高い収穫のためには肥料を作ることが必要である、すなわち、灰を集め、鳥の糞を集めることである.)

下線部 хүл (名詞のみ) と дагаа өдээ (名詞+所有接辞) は一般的で、誰のものとも特定されない「灰」や「鳥の糞」のことであり、しかもそれを支配する他動詞 **чыыр** にそれぞれ隣どうし並んでいるので、対格接辞をつけなくてもよい。

Мен бо номну номчудум. (私はこの本を読んだ.)

Бо номну мен бөгүн номчудум. (私は今日この本を読んだ.)

上記2文はいずれも指示代名詞 **бо** 「この」がついており特定の本なので、名詞「本」を支配する他動詞 **номчудум** がすぐ隣りに並んでいようが、離れていようが関係なく対格接辞が必要となる。

Тывалар өшкү эьди чиир, хепти алгы-кештен даарап алып, тараа тарывайн турар.

(トゥヴァの人々はヤギの肉を食べ、衣服を毛皮や皮革を縫ってつくり、穀物は栽培していない.)

この文章ではトゥヴァの人々の生活について一般的なことを言っており、一重下線部の名詞はすぐ隣りにそれを支配する他動詞があるので対格接辞がついていないが、二重下線部の名詞は名詞とそれを支配する他動詞とのあいだに他の語句が入っているのでかならず対格が必要となる。

10.4.5.位格

位格は、**кымда?** (誰のところに? 誰に?), **кымнарда?** (誰らのところに? ; 複数形), **чүде?** (何に?), **чүлерде?** (何に? ; 複数形), **кайда?** (どこで? どこに?), **кажан?** (いつ?) に対する答えとなる。

位格は文中で補語もしくは状況語となる。

位格は、接辞 **-та** (とその発音上のバリエーション) を名詞の語幹につけることであらわす。

位格接辞表

名詞語幹の 最後の音	語幹の最終音節の母音	
	硬音	軟音
無声子音	-та	-те
有声子音 母音	-да	-де

例) **класста** (クラスで), **сөстө** (語中に), **саазында** (紙に),
шөлде (野原で)

位格の意味

- 1) 所有している, もしくは所有していない対象や維持 (保持) している, あるいは維持していない対象 (所有者) をあらわす. その際, 話者の関心は, 所有者ではなくて, そのものや現象である. あるいは, 本当の所有者は別の人の場合である.

例) **Менде санал бар.** (私には意見がある.)

Сугда чыт чок. (水ににおいはない.)

Колхозта мал хөй. (колхозには家畜が多い.)

上記の例では下線部が話者の言いたい中心である。

Чечекте солун дискилер бар.

(**Чечечек**はおもしろい CDを持っている.)

Чечектиң солун дискилери бар.

(**Чечечек**が【**Чечечек**は】おもしろい CDを持っている.)

最後の2文では, 位格であらわされた文は話者の関心が「おもしろい CD を (持っている)」にあるか, この CD はたまたま今借りているなどで **Чечечек** の手元にあることをあらわしている. 属格であらわされた文では, 話者が所有者「**Чечечек**が」に関心があるか, CD の真の所有者が「**Чечечек**」であることをあらわしている。

2) 現在時制における行為の行われている場所をあらわす (1 4.1 0.1.2.現在時制参照).

例) **Кудумчуда ойнап турлар.** (通りで誰かが遊んでいる.)

Мен Кызылда ажылдап турар мен. (私はクズルで働いています.)

例外をなすのは動詞 **келир** (来る, 到着する) である. この動詞は確実過去形 (接辞 **-ды** を用いる過去形; 1 4.1 0.1.1.過去時制参照) のときも位格を用いる. 「たった今」というニュアンスが入るためと考えられる.

例) **Мен Кызылда келдим.** (私はクズルに到着した.)

3) 動詞 **ажылдаар** などとともに用いて職業「～として」をあらわす.

例) **Оолдарның авазы эмчиде ажылдап тур.**

(少年たちの母親は医者として働いている.)

4) 行為が行われる時をあらわす. 名詞のほかにも形動詞完了 (**-ган** 形) や形動詞現在未来 (**-ар** 形), 形動詞予期 (**-галак** 形), 現在形 (**тур, чор, ор**) とともに用いられる (～している時に, ～していた時に).

例) **Улуг-хүнде ужуражыр бис.** (日曜日に私たちは会う.)

Кэжээ 8 шакта хурал болур. (夜8時に会議がある.)

Колхозка он хонукта ажылдааннар.

(彼らはコルホーズで10日間働いた.)

Бо эмни хөй күш чидиргенде, могап шылаанда ажыглаар силер.

(力が衰えたとき, とても疲れたときにこの薬を使用してください.)

L.A.シャミナが作成した表を参照して、行為が行われる時をあらわす与格と位格の表を以下に示す.

格	名詞や動詞との組み合わせ	意 味
与格	形動詞 -ap 形/ га (ге)	～する時に, ～する際に
	副動詞 -п 形+助動詞の形動詞 -ap 形/ га (ге)	～する時に, ～する際に
位格	名詞 / да	～の時に
	形容詞 / да	～の時に
	形動詞 -р / да (де)	～する時に
	副動詞 -п 形+тур (чор, олур, ор) / да	～している時に
	副動詞 -п 形+助動詞の形動詞 -ap 形/ да (те)	～している時に
	形動詞 -ган 形/ да (де)	～した時に
	副動詞 -п 形+助動詞の形動詞 -ган 形/ да (де)	～したいた時に
	形動詞 -галак 形/ та (-гелек / те)	まだ～していないが
	形動詞 -галак 形 чор / да	まだ～していないが
	副動詞 -п 形+助動詞の形動詞 -ган 形 тур / да	～したその時に
	名詞 -га тур (чор, олур, ор) / да	～にいる時
	... бар / да	～がある時
... чок / та	～がない時	

形動詞や助動詞の現在形 (тур, чор, ор) には所有接辞がつくこともある.

例) Мен бодаарымга (私が考えるには)

Шагаан-Арыгга келгеш, бистиң бажыңывыска албан кирер силер – деп, бис чоруп турувуста, Аяс сагындырды.

(「シャルグ=アルグ [シャゴナール] に来たら, 私たちの家に必ず立ち寄ってください」と, 私たちが出発しようとしているときアヤスは言ってくれた.)

Хүн элээн бедип келгенде, изиг дүшкелекте, Кызыл уундан доозун кестү берди.

(太陽がかなり高く昇り, まさに暑くなろうとしていたときに, クズルの街外れから砂ぼこりが見えてきた.)

Концерт соонда чанып олурувуста, Оюн-оол чугаалап берди.

(コンサート後私たちは帰る途中, オユン=オールは話してくれた.)

10.4.6. 奪格

奪格は、**кымдан?** (誰から?), **кымнардан?** (誰らから? ; 複数形), **чүден?** (何から? 何のために?), **чүлерден?** (何から? 何のために? ; 複数形), **кайыын?** (どこから?) に対する答えとなる。

奪格は文中で補語や状況語となる。

奪格は、接辞 **-тан** (とその発音上のバリエーション) を名詞の語幹につけることであらわす。

奪格の接辞には通常アクセントはない。

奪格接辞表

名詞語幹の 最後の音	語幹の最終音節の母音	
	硬音	軟音
無声子音	-тан	-тен
有声子音 母音	-дан	-ден

例) **класстан** (クラスから), **пөштен** (エゾマツから),
ховудан (ステップから), **хемден** (川から)

奪格の意味

1) 行為の出発点 (起点) や出身をあらわす。

例) **Аалчылар найысылалдан аъттаныпканнар.**

(来賓者は首都から出発した.)

Мен Япониядан келдим. (私は日本から来た.)

2) **эгеле-** (始める) の副動詞形あるいは動詞と組み合わせて、行為が開始された時をあらわす。

例) **Чеди айның ондан эгелеп дыштаныр бис.**

(私たちは7月10日から休養する.)

3) 物を作る材料をあらわす。

例) **ыяштан кылган бажың** (木造家屋)

торгудан даараан хеп (絹を縫って作った服)

4) 何かが人や物から離れること, 何かの出所をあらわす。

例) **Ыяштан будук сый тыртып бердим.** (私は木から枝を折ってあげた.)

Өөрүмден чагаа алдым. (私は友人から手紙を受け取った.)

- 5) 行為の原因（～のために）をあらわす。
 例) Шимээндэн оттуп келдиң бе? (うるさくて君は目が覚めたのかい?)
 Хаттан ыяштар шимчеп турган.
 (風のために木々がざわめいていた.)
 Изигден чер кургай берген. (暑さのせいで土地が乾燥した.)
- 6) 解放や離脱, 除去（～から）をあらわす。
 例) Олар дарлалдан хосталган. (彼らは圧制から解放された.)
- 7) 行為の主体（～によって）をあらわす. この用法は稀であるが, フォーク
 ロアにおいてはセリフ前のト書きで, 口語においては他人の言葉を引用する
 前で「～が言った, 訊ねた」などの主語（誰々が）としてよく用いられる。
 例) Ашактан чугаалаан. (老人は言った.)
 Хуралдан доктаал үндүрген. (会議によって決議が採択された.)
- 8) いくつかの動詞は奪格を要求する。
 例) Боо даажындан бөрү коргар. (オオカミは銃声を恐れる.)
- 9) 後置詞 өске（～のほかに）や башка（～のほかに）, аңгыда（～以外に）,
 бээр（～から, ～以来）は奪格を要求する. 巻末の後置詞および補助詞一覧
 表を参照。
 例) Сенден өске кым илеткел кылырыл?
 (君のほかに誰が報告をするのですか?)
 Февральден бээр белеткенип келдивис.
 (私たちは2月から準備してきた.)
- 1 0) 形容詞の比較級において比較の対象（～より）をあらわす。
 例) хардан ак (雪より白い)
 Бо чечек дөө чечектен чараш.
 (この花はあそこの花より美しい.)
- 1 1) 動詞の命令形において対象（目的語）が具体的ではないとき, あるいは
 行為が物の一部（部分, ある量）にしか及ばないときは奪格になる. 具体
 的なときは対格になる。
 例) Шайдан кут. (お茶をいれて.)

Хлебтен бер. (パンを〔何切れか〕 くれ.)

Хлебтен садып кээр сен. (君はパンを買ってきてくれ.)

Сүттен ижип алыыйн. (牛乳を飲もう.)

動詞が命令形でなくても, なにか命令や指図, 指示のニュアンスがはいる場合, 奪格になりうる.

例) Адаанда глаголдарның эрткен деепричастиениң хевиринче шилчитпишаан, оларның-биле домактардан тургускаш, ук деепричастиелерниң кожамыктарын шыйып демдеглеңер.

(下記の動詞を副動詞 **-каш** 形に変え, その副動詞形で文章を作り, 上記副動詞 **-каш** 形の接辞に下線を引きなさい.)

10.4.7.方向格①

方向格①は, **кымче?** (誰に?), **кымнарже?** (誰らに? ; 複数形), **чүже?** (何に?), **чүлерже?** (何に? ; 複数形), **кайнаар?** (どこへ?), **кайыже?** (どの方向へ?) に対する答えとなる.

方向格①は, 接辞 **-че** (とその発音上のバリエーション) を語幹につけることによつてあらわす.

方向格は文中で補語や場所の状況語となる.

この接辞はもともと接辞的な後置詞 **че** であると考えられており, 母音調和の法則には従わない.

方向格①の接辞は通常アクセントをもたない.

方向格①接辞表

名詞語幹の最後の音	接辞
無声子音 -л, -м, -н, -ң	-че
母音 有声子音 -г, -й, -р	-же

例) **алаакче** (森の野原へ), **кичээлче** (授業へ), **чадаже** (階段へ), **дугуйже** (車輪へ)

方向格①の意味

1) 行為の行われる方向 (行き先) をあらわす (～へ, ～の方へ).

例) Студентилер институтче чоруп турлар.

(学生たちは大学に向かっている.)

Ажылчыннар ногаа шөлүнче үне берген.

(労働者たちは畑へ向かって出かけた.)

2) 行為が向けられる人もしくは物をあらわす (~へ, ~の方へ).

例) **Ол дуңмазынче көргөн.**

(彼は自分の弟のほうを見た.)

Номну башкыже дамчыт.

(本を先生に渡して.)

10.4.8.方向格②

方向格②は, **кымдыва ?** (誰に?), **кымнардыва ?** (誰らに? ; 複数形), **чүүдүве ?** (何に向かっている?), **чүлөрдиве ?** (何に向かっている? ; 複数形), **кайнаар ?** (どこへ?), **кайыже ?** (どの方向へ?) に対する答えとなる.

方向格②の意味は方向格①の意味と違いはない.

方向格は文中で補語や場所の状況語となる.

方向格②は, 接辞 **-тыва** (とその発音上のバリエーション) を語幹につけることによってあらわす.

方向格②の接辞も通常アクセントをもたない.

方向格②接辞表

名詞語幹の 最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
無声子音	-тыва	-тивө	-тува	-түвө
母 音 自鳴子音 -г	-дыва	-дивө	-дува	-дүвө

例) **дыттыва** (カラマツのところへ), **дөштүвө** (山の高地へ),
дагдыва (山へ), **кижидивө** (人のところへ)

方向格①, ②と同様の意味で与格が用いられるが, 与格には空間的意味 (~へ, ~の方へ) をあらわすほかに様々な意味, 用法があるのに対し, 方向格は上記の空間的な意味 (~へ, ~の方へ) しかあらわさない(10.4.3.与格参照).

☆ 名詞を並列した場合, 格接辞は並べた最後の名詞のみにつければよい.
同様に, 並列した名詞の最後の名詞のみに所有接辞をつければよい.

例) Балды биле хирээни мен тудуп алган мен.

(斧とのこぎりを私が持っていた.)

Шугум, балааш, кыдыраажың сумкага четчелеп ал.

(君の定規と消しゴム, ノートをかばんに入れなさい.)

10.4.9.3 人称の所有接辞をともなう名詞格変化の特性

3人称単数と複数の所有接辞をともなう名詞は、本質的に特殊な変化はしない。格変化の特殊性は、ただ与格と位格、奪格、方向格の接辞の前に挿入語 -н- を入れることにある。

対格接辞がつく場合は接辞の母音 **ы** (とその発音上のバリエーション) が落ちて -н 1つからなる。

格	例	
主 格	школазы (その学校)	шөлүзү (その野原)
属 格	школазының	шөлүзүнүң
与 格	школазы <u>нга</u>	шөлүзү <u>нге</u>
对 格	школазы <u>н</u>	шөлүзү <u>н</u>
位 格	школазы <u>нда</u>	шөлүзү <u>нде</u>
奪 格	школазы <u>ндан</u>	шөлүзү <u>нден</u>
方 向 格 ①	школазы <u>нче</u>	шөлүзү <u>нче</u>
方 向 格 ②	школазы <u>ндыва</u>	шөлүзү <u>ндүве</u>

10.5. 外来語に接辞をつける際の注意点

10.5.1. -ст, -тт, -дт, -сть で終わる外来語に接辞をつける際の注意点

-ст, -тт, -дт, -сть で終わる外来語 (借用語, -ст は職業をあらわすロシア語), はトゥヴァ語になると, それぞれ最後の音 **т**, **ть** は発音せず, しかも表記されない。複数形接辞や格変化接辞がついても同様に最後の文字 **т**, **ть** を取って接辞をつける。下線部は接辞を示している。

例) анархист → анархис (アナーキスト)

тракторист → тракторис (トラクター運転手)

трактористтер (トラクター運転手; 複数形)

тракториске (トラクター運転手に; 与格)

артист → артис (アーティスト)

улустуң артизи (人民芸能家; 3人称所有接辞)

область → облас (地方)

киловатт → киловаттың (キロワットの ; 属格)

Кронштадт → Кронштадтан (クロンシタット (地名) から ; 奪格)

10.5.2. -мм, -лл, -сс, -pp, -рт で終わる外来語に接辞をつける際の注意点

-мм, -лл, -сс, -pp, -рт で終わる外来語に格変化接辞や複数形接辞をつけても, 10.5.1.のときのように最後の文字は落ちない. そのまま格変化接辞や複数形接辞をつける.

例) класс → класста (クラスに ; 位格)

килограмм → килограммның (キログラムの ; 属格)

металл → металлдар (金属 ; 複数形)

спорт → спорттуң (スポーツの ; 属格)

концерт → концерттен (コンサートから ; 奪格)

10.5.3. -ск, -нк, -нт, -кт, -нд, -ч で終わる外来語に接辞をつける際の注意点

-ск, -нк, -нт, -кт, -нд のように2つの子音で終わるか, あるいは -ч で終わる外来語に格変化接辞や複数形接辞, 所有接辞をつける場合, その接辞の前に母音 (ы, у, и, ү) を入れる. その際, 挿入する母音は母音調和の法則 (4.1.1.参照) に従う.

例) 外来語

トゥヴァ語

банк (銀行) → банкылар (複数形), банкының (属格),
банкыга (与格), банкыны (对格),
банкыда (位格), банкыдан (奪格),
банкыже (方向格)

фонд (基金) → фондулар (複数形)

калач (錠前形のパン) → калачылар (複数形),
калачының (属格)

диктант (書き取り) → диктантылар (複数形),
диктантының (属格)

студент (学生) → студентизи (3人称所有接辞)

Иванович (イヴァーナヴィッチ) → Ивановичини (对格)

10.5.4. -лк, -рк で終わる外来語に接辞をつける際の注意点

-лк, -рк で終わる外来語に格変化接辞や複数形接辞, 所有接辞をつける場合, 複数形接辞はトゥヴァ語の単語と同様にそのまま複数形接辞をつけるが, 格変化接辞や所有接辞をつけるときには, 母音調和の法則(4.1.1.参照)に従ってその接辞の前に母音(ы, у, и, ү)を入れるほかに, л と к, р と к のあいだにも母音調和の法則(4.1.1.参照)に従って母音(ы, у, и, ү)がはいる。しかも子音 к は有声化し г となる。

例)	外来語		トゥヴァ語
	полк (連隊)	→	полктар (複数形), полугунуң (属格)
	парк (公園)	→	парктар (複数形), парыгы (3人称所有接辞), парыгының (属格)

10.5.5. -ь で終わる外来語に接辞をつける際の注意点

-ь で終わる外来語(-сть 以外)に格変化接辞や複数形接辞をつける場合, ь は脱落せず, そのまま書く。

例)	外来語		トゥヴァ語
	лагерь (キャンプ)	→	лагерьлер (複数形), лагерьни (対格)
	фонарь (灯火)	→	фонарьлар (複数形), фонарьның (属格)

10.5.5. 語末の子音が無声化するロシア語借用語に接辞をつける際の注意点

ロシア語から借用された単語のなかで語末に有声子音がくる単語は, ロシア語の発音規則に従い, トゥヴァ語でもその有声子音は無声化する。そのような単語に複数接辞や格接辞をつける場合, 無声子音で始まる接辞をつける。

例)	завод (工場)	→	заводтар (複数形), заводтуң (属格), заводта (位格)
----	------------	---	---

10.6. 名詞の物主形

接辞 -ныы (とその発音上のバリエーション) を名詞や疑問代名詞 кым につけることで, その名詞は「~ (誰々) のもの, ~ (誰々, 何々) に属している

もの」という物主的意味をもつようになる。この接辞は名詞の単数形にも複数形にもつけることができる。この接辞は物主代名詞を形成する接辞としても用いられている（15.8.物主代名詞参照）。

名詞の物主形の接辞

名詞の最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
無声子音	-ТЫЫ	-ТИИ	-ТУУ	-ТҮҮ
-л	-ДЫЫ	-ДИИ	-ДУУ	-ДҮҮ
母音 -м, -н, -ң, -й, -р, -г	-НЫЫ	-НИИ	-НУУ	-НҮҮ

例) башкыныы (先生のもの), кымныы (誰のもの), кудуктуу (井戸の), садтыы (庭に属しているもの, 庭で採れた), башкыларныы (先生たちのもの)
 Бо бажың кымныы? (この家は誰の家ですか?)
 Дөө даг кожамныы. (あの山は私の隣の人のものです.)
 Бо кат тайганыы эвес, а садтыы.
 (このベリーはタイガで採れたのではなくて, 庭で採れたものです.)

名詞の物主形は物主代名詞と同様に格変化する。その際の注意点は主格と属格以外で格接辞の前に - н - が入ること, 対格接辞では接辞中の母音 ы (とその発音上のバリエーション) が落ちることである。

主 格	кымныы?	кудуктуу
属格	кымныының?	кудуктууның
与 格	кымныыңга?	кудуктууңга
対 格	кымныың?	кудуктууң
位 格	кымныыңда?	кудуктууңда
奪 格	кымныыңдан?	кудуктууңдан
方向格	кымныыңче?	кудуктууңче

1 1.形容詞

形容詞は物の特徴や性質，特性，人や動物の肉体的特徴や性格，性質，誰かもしくは何かの所有をあらわす。

形容詞は名詞を修飾する定語，あるいは述語となる。

形容詞は，**кандыг?**（どんな？），**кайы?**（どちらの？どの？），**чүлүг?**（どんな性質を有している？），**кайдагы?**（どこにあるところの？），**кажангы?**（いつに属する？）に対する答えとなる。

形容詞は性質形容詞と関係形容詞，派生形容詞と非派生形容詞とに分かれる。非派生形容詞とは他の品詞から形成されない形容詞であり，それ自身物の特徴や性質，特性を意味する。

例) **көк**（青い），**кызыл**（赤い），**улуг**（大きい）

形容詞は，その形容詞が修飾する名詞が数や格などで変化するのに対し，形容詞自身は変化しない。

例) **эки аяк**（良い食器），**эки аяктар**（良い食器；複数），

эки аяктың（良い食器の），**эки аягында**（その良い食器のなかに）

しかし，形容詞に複数接辞や所有接辞がつくことがあるが，その場合は形容詞が名詞化，副詞化するときである（1 1.3.と1 1.4.参照）。

多くの名詞，とくに素材や物質を意味する名詞は形容詞として用いられる。また，多くの形容詞は副詞としても用いられる。

単語が形容詞か，名詞か，あるいは副詞として用いられているかは文脈次第である。

例) **ыяш**（木；木の，木製の）：**ыяш аяк**（木製の食器：形容詞）

демир（鉄；鉄の，鉄製の）：**демир орук**（鉄道：形容詞）

чылыг（熱；暖かい；暖かく）：**хүн чылыы**（太陽熱：形容詞の名詞化），

чылыг хүн（暖かい日：形容詞）

Ол чылыг кеттинген.

（彼は暖かく着込んだ.：副詞）

1 1.1.形容詞の形成

形容詞は、名詞や動詞および副詞の語幹に接辞をつけることによって形成される。以下、主な接辞とその例を挙げる。

1 1.1.1.名詞や形容詞，副詞から形容詞を形成する接辞

1) 物の性質や特性もしくは何かの所有（～を持っている）をあらわす

— 生産的接辞

名詞や形容詞，副詞語幹の最後の音	語幹の最終音節の母音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
無声子音	-тыг	-тиг	-туг	-түг
-л	-дыг	-диг	-дуг	-дүг
母音 -й, -р, -г	-лыг	-лиг	-луг	-лүг
-м, -н, -ң	-ныг	-ниг	-нуг	-нүг

例) **даштыг** (石の), **доштуг** (氷の), **хылдыг** (弦の),
челдиг (たて髪の高い), **даглыг** (山の),
суглуг (水の, 水の入っている), **эртемниг** (科学の, 学識のある),
чурумнуг (規律正しい)

関係形容詞を形成するもっともよく用いられる接辞の1つである。ロシア語から借用された名詞から形容詞を形成する場合、この接辞が用いられる。また、**-(н)ный, -ионный, -ский, -ический** で終わるロシア語の形容詞から形成する場合もこの接辞が用いられる。

例) **маркалыг** < **марка** (切手の貼ってある),
культурлуг < **культурный** (文化的な),
рактивтиг < **реактивный** (ジェット推進の),
коммунистиг < **коммунистический** (共産主義の)

名詞にこの接辞をつけて形成する場合、実際の状況に応じて、名詞は単数形だけでなく複数形になってもよい。

例) **Уруглар садының шортыларлыг, бөртчүгештерлиг орус, тыва бичии уруглары**
(半ズボンを履き、帽子を被ったロシア人、トゥヴァ人の小さな保育園児たち)

2) 時間的關係における事物の特徴をあらわす — 生産的接辞

名詞や形容詞、副詞語幹の最後の音	語幹の最終音節の母音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
無声子音	-кы	-ки	-ку	-кү
母音 有声子音	-гы	-ги	-гу	-гү

例) кышкы (冬の), күскү (秋の), дүүнгү (昨日の)

3) 類似や相似 (～に似た, ～のような, ～の性質を有す) をあらわす

— 生産的接辞

名詞や形容詞、副詞語幹の最後の音	語幹の最終音節の母音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
無声子音	-сыг	-сиг	-суг	-сүг
母音 有声子音	-зыг	-зиг	-зуг	-зүг

例) дашсыг (石のような), чуксуг (樹脂のにおいあるいは味のする),
кижизиг (人間に似た), күгүрзүг (硫黄のにおいのする, 硫黄に似た)

この接辞は性質形容詞を形成する。

この接辞は動詞にもつく場合がある。出会った限りでは、形動詞 **-ган** 形 + **-зыг** の形をとっている。

例) Бодаарымга, чаштып ойнап чораанзыг бис.

(考えてみると、私たちはお互い隠れたり現れたりして遊んでいたようだ.)

Владимир Донгак «Хаяалыг хүн үнгелекте» Кызыл, 1991, арын 43
... күштүг энергия бистерже улам ханылап кирип, хей-аъдывысты сергедип, сеткил-сагыжывысты көдүрүп, арыглап турганзыг.

(この高僧に会った時、...私たちのなかでますます力強いエネルギーが深く浸透していき、私たちのなかに新しい活力を目覚めさせ、気持ちを高揚させて、清めてくれているようだった.)

Галина Монгуш «Онзагай оран Индия» Кызыл, 1999, арын 23

4) 事物のもっとも際立った特徴をあらわす — 生産的接辞

名詞や形容詞、副詞語幹の最後の音	語幹の最終音節の母音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
無声子音	-кыр	-кир	-кур	-күр
母音 有声子音	-гыр	-гир	-гур	-гүр

例) даашкыр (騒がしい), сүткүр (たくさん乳を出す)

үнүшкүр (植物の繁茂に適した, 大きな収穫をもたらす),

事物のもっとも際立った特徴をあらわすが, 具体的には「～に満ちた, ～が豊かな, ～に似た, ～するのに適した」をあらわす.

5) 行為や仕事の種類に関する事物や人の特徴をあらわす — 生産的接辞

名詞や形容詞、副詞語幹の最後の音	語幹の最終音節の母音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
無声子音 -л, -м, -н, -ң	-чы	-чи	-чу	-чү
母音 -й, -р, -г	-жы	-жи	-жу	-жү

例) ажылчы (仕事用の), ыраажы (鳥がよく歌う)

6) 時間的關係や場所に関する現象や人の特徴をあらわす — 生産的接辞

名詞や形容詞、副詞語幹の最後の音	語幹の最終音節の母音	
	硬音	軟音
無声子音	-тагы, -такты	-теги, -теки
母音 有声子音	-дагы, -дакы	-деги, -деки

例) шагдагы // шагдакы (以前の, 昔の),

шаандагы // шаандакы (過去の, 昔の), шынаадагы (谷間にある),

хөлдеки (湖にある), хоорайдагы (町にある)

この接辞は, 位格 да (とそのバリエーション) + гы (とそのバリエーション) から形成されている.

7) 人や動物の何かに対する愛好（～が好きな）をあらわす

— あまり生産的ではない

名詞や形容詞, 副詞語幹 の最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音	
	硬 音	軟 音
	-зак	-зек

例) оюнзак (遊ぶことが好きな), аңзак (狩りが好きな)

8) 類似をあらわす — 非生産的接辞

名詞や形容詞, 副詞語幹の最後の音	
有 声 子 音	-чургу
無 声 子 音	-шургу

① 外観が～に似ている

例) Бо кижн моолчургу. (この人はモンゴル人に似ている.)

② 言葉が～語に似ている

例) Калмык дыл моолчургу. (カルムイク語はモンゴル語に似ている.)

9) 好みや嗜好をあらわす（～したがる, ～することが好きな）

名詞の最後 の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
無声子音	-сырак	-сирек	-сурак	-сүрек
母 音 有声子音	-зырак	-зирек	-зурак	-зүрек

例) аътсырак (ウマが好きな, ウマに乗るのが好きな),
эътсирек (肉が好きな), шайзырак (お茶が好きな),
сүтсүрек (乳が好きな), хемезирек (船に乗りたがる),
тоолзурак (昔話の好きな), төрелзирек (親戚のような感情をもつ)

10) 「自慢する」という意味をあらわす

名詞, 形容詞 の最後の音	名 詞, 形 容 詞 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
子 音	-ыыргак	-ииргек	-уургак	-үүргек
母 音	-ыргак	-иргек	-ургак	-үргек

例) билииргек (知識を自慢する), байыыргак (裕福さを自慢する),
улуургак (高慢な)

「～を自慢する」という意味を形成する動詞形成接辞（14.1.1.接辞を用い

た動詞形成⑧)も参照.

1 1.1.2.動詞から形容詞を形成する接辞

1) 物の特徴をあらわす — 生産的接辞

動詞語幹の 最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
子 音	-ымал	-имел	-умал	-үмел
母 音	-мал	-мел	-мал	-мел

例) кылымал (人工の), бжимел (書面による), тарымал (播種された)

2) 物や事物の性質をあらわす

動詞語幹の 最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
子 音	-ыг	-иг	-уг	-үг
母 音	-г			

例) арыг (清潔な), чылыг (暖かい), кургаг (乾燥した), өлүг (死んだ)

この接辞はチュルク諸言語のなかでもかなり古い形で、現在ではトゥヴァ語とシオル語、ハカス語のみに残っている。

3) 物や事物の性質をあらわす — 生産的接辞

動 詞 語 幹 の 最 後 の 音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音	
	硬 音	軟 音
	-чак	-чек

例) хаалчак (閉じられた), ээлчек (曲がった), ажынчак (怒りっぽい)

өттүнчек (真似することの好きな), билдинчек (明白な),

астынчак (吊り下がった)

派生動詞, とくに被動態あるいは再帰態の動詞語幹から形成される。

物や事物の性質をあらわすが, 再帰態の動詞語幹から形成された形容詞は, 物
がその行為を行う能力がある, あるいは傾向があること (~しやすい) をあら
わす.

- 4) 物や現象の性質, 人の性格 (何かに対する愛好や何かに対する傾向 ;
 ~しやすい, ~っぽい) をあらわす — 生産的接辞

動詞語幹の 最後の音	語幹の最終音節の母音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
子音	-аачал -ыычал	-иичел -ээчел	-уучал	-үүчел
母音	-ачал -ычал	-ичел -эчел	-учал	-үчел

例) эстиичел (溶けやすい), чаныычал (弾力性のある),
 кээргээчел (憐れみ深い), доңуучал (寒がりの),
 уттуучал (忘れっぽい), өзүүчел (育ちが早い, よく育つ)

- 5) 物の性質や特徴をあらわす — 非生産的接辞

動詞語幹の 最後の音	語幹の最終音節の母音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
子音	-ык	-ик	-ук	-үк
母音	-к			

例) чырык (明るい), үзүк (破れた), адаарак (うらやましがる),
 соок (寒い)

- 6) 物や人の特徴や性質をあらわす — あまり生産的ではない

動詞語幹の 最後の音	語幹の最終音節の母音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
子音	-ымак	-имек	-умак	-үмек
有声子音	-мак	-мик	-мак	-мик
母音	-мык	-мек		-мек

例) кызымак (熱心な), эгмек (曲がった), кыжырымак (嘲笑好きな),
 шыдамык (耐久力のある), холумак (混合の)

- 7) 物や人の外見的特徴をあらわす — 生産的接辞

動詞語幹の 最後の音	語幹の最終音節の母音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
	-нчыг	-нчиг	-нчуг	-нчүг

例) муңгаранчыг (悲しい), коргунчуг (恐ろしい, 怖い),
 кээргенчиг (憐れな)

8) 物の位置関係における特徴をあらわす — 生産的接辞

動詞語幹の 最後の音	語幹の最終音節の母音	
	硬音	軟音
無声子音	-как	-кек
自鳴子音 母音	-гак	-гек

例) **дужаашкак** (反対側の), **чергелешкек** (平行の)

9) 事物の行為への志向をあらわす — あまり生産的ではない

動詞語幹の 最後の音	語幹の最終音節の母音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
	-ыган	-иген	-уган	-иген

例) **чаныган** (家へ帰って行く), **үнүген** (急速に成長する),
өзүген (成長のはやい)

10) 物の特徴やその強度に応じた現象をあらわす — 非生産的接辞

動詞語幹の 最後の音	語幹の最終音節の母音	
	硬音	軟音
	-ма	-ме

例) **чыккылама** (割れるような音をたてる), **каалама** (道が平坦な)

11) 物の性質をあらわす (～しやすい, ～するのに適した)

— 生産的接辞

動詞語幹の 最後の音	語幹の最終音節の母音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
	-гыр	-гир	-гур	-гүр

例) **номчуттунгур** (読みやすい), **билдингир** (分かる, 明らかな),
аштангыр (容易にきれいになる)

主に再帰態あるいは被動態の動詞語幹から形成される。

12)

動詞語幹の 最後の音	語幹の最終音節の母音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
子音	-кын	-кин	-кун	-күн

例) **шапкын** (激しい), **көшкүн** (遊牧生活の)

1 3)

動詞語幹の 最後の音	語幹の最終音節の母音	
	硬音	軟音
	-ңгай	-ңгей

例) шылгараңгай (傑出した), делгеренгей (普及された)

1 4) 形動詞完了から形成し物事の様態をあらわす (～のような)

	形動詞の形	
	-ган, -кан	-ген, -кен
	-зыг	-зиг

例) чаштып ойнап чораанзыг (かくれんぼをして遊んでいたようだ)

1 1 . 1 . 3 . 接辞をとみなわない形容詞の形成

1) 形容詞の組み合わせ

例) ак-көк (水色の), ак-кызыл (ピンク色の), кара-көк (濃い青色の),
кара-хүрең (濃い茶色の), узун-кыска (いろいろな長さの),
ногаан-ала (全体が緑色で黒色など何らかの色の縞模様あるいは斑点の
ある)

2) 形容詞語幹の一体化

例) дорала (栗毛で斑点のある) < доруг (栗毛の) + ала (まだらの)
карала (暗色で斑点のある) < кара (黒い) + ала (まだらの)
сарала (黄色で斑点のある) < сарыг (黄色い) + ала (まだらの)

1 1 . 2 . 性質形容詞の比較級, 最上級あるいは強さの度合い

1 1 . 2 . 1 . 比較級

1) 原級を用いる方法

相対的比較における形容詞, つまり二つの物の具体的な特質もしくは特徴の比較において形容詞は特別な変化をしない. 比較する対象「～よりも」は奪格にしてあらわす.

例) Бии-Хем Каа-Хемден улуг. (ビー=へム川はカー=へム川より大きい.)
Хүн айдан чырык. (太陽は月よりも明るい.)
Бо даг дөө дагдан бедик. (この山はあの山より高い.)
Чамдык газтар, чижээлээрге, водород, агаардан чиик.
(いくつかの気体, 例えば水素は空気よりも軽い.)

比喩的対象を用いてあらかわす場合にも奪格にしてあらかわす。

例) бажыңдан бедик (家より高い)
кускундан кара (カラスより黒い)

2) 副詞, 形容詞を用いる方法

比較級で用いられる副詞, 形容詞は次のものである。比較する対象がはいる場合は奪格にする。

улам (もっと, ますます)
артык (~以上に, より~)
дээре (~より良い)

例) Тарааны улам дүжүттүг болдураалы.
(穀物をもっと収穫を増やすようにしよう.)

Тожу кожууну – казымал байлак болгаш аң-мең талазы-биле өске кожууннардан артык байлак.

(トージュ地区は地下資源と毛皮獣においてほかの地区以上に豊かな地区である.)

Ол менден дээре чуруур. (彼は私より上手に絵を描く.)

また, хөй (多い, 多く) を使った次のような例もある。

例) Эрес онаалганы бергенинден хөйнү номчуп алыр.
(エレスは与えられた量よりも多くの課題を読みます.)

1 1 . 2 . 2 . 弱化

1) 弱化をあらかわす接辞

①

形容詞語幹 の最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
無声子音	-сымаар	-симээр	-сумаар	-сүмээр
有声子音 母 音	-зымаар	-зимээр	-зумаар	-зүмээр

例) аксымаар (白っぽい), кызылзымаар (赤っぽい),
улузумаар (やや大きめの), ириксимээр (ちょっと腐った),
эргизимээр (ちょっと古くなった)

この接辞は名詞にもつけることができる。

例) инексимээр (ウシっぽい; 遠くから見てウシかどうかわからない)

② 主に色や様態、容貌をあらわす形容詞につく — あまり生産的ではない

形容詞語幹 の最後の音	語幹の最終音節の母音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
子音	-ылдыр -ыл	-илдир -ил	-улдур -ул	-үлдүр -үл
母音	-лдыр	-лдир	-лдур	-лдүр

例) көгүлдүр (青っぽい), саргылдыр (黄色っぽい)

③

形容詞語幹の 最後の音	語幹の最終音節の母音	
	硬音	軟音
	-жак	-жек

例) бичежек (少し小さい), кыскажак (ちょっと短い),
чингежек (ちょっと細い)

④

形容詞語幹の 最後の音	語幹の最終音節の母音	
	硬音	軟音
	-шыргы, -шыргыы	-ширги, -ширгии

例) черликширгии (少し野蛮っぽい)

カー・ヘム地区の人々のあいだでは、この接辞は「～に似ている」の意味で使われている。

⑤

— 非生産的接辞

形容詞語幹の最後の音	
	-мзык

例) сарымзык (黄色っぽい) < сарыг, кургамзык (ちょっと乾いた) < кургаг,
чылымзык (少し暖かい) < чылыг

⑥

形容詞語幹の最後の音 (母音)	
	-мдык

例) карамдык (黒っぽい)

母音で終わる形容詞のみから形成されると考えられる。

⑦ ー 非生産的接辞

形容詞語幹の 最後の音	語幹の最終音節の母音	
	硬音	軟音
	-выргай -маргай	-иргей -миргей

例) **достамаргай** (ちょっとふくらんだ, ちょっと突き出た) < **достак**,
дежемиргей (ちょっと坂になった, ちょっと斜面になった) < **дежем**

⑧

形容詞語幹の最後の音	
	-ий, ийак

例) **багий** (ちょっと悪い) < **багай, чымчийк** (ちょっと柔らかい) < **чымчак**
この接辞はトージュ地方の方言である。

2) 助詞や副詞を用いる方法

① **аарак** (～っぽい)

形容詞の後ろにつける。

- 例) **кызыл аарак** (赤っぽい)
көк аарак (青っぽい)
улуг аарак (やや大きめの)

あまり使われないようである。

また、副動詞 - **а** 形とともに使われる場合がある。

- 例) **бактай аарак чугаалаар** (少し怒ったように言う)
ырлай аарак чугаалаар (歌を歌うように話す)
шүлүктей аарак чугаалаар (詩を吟じるように話す)

② **арай** (少し, ちょっと)

形容詞の前におく。

- 例) **арай семис** (ちょっと太っている)

③ **шала** (少し)

形容詞の前におく。

- 例) **шала биче** (少し小さい)

④ **шору** (少し)

形容詞の前におく。

- 例) **шору биче** (少し小さい)

⑤ **чыгыы** (ちょっと)

形容詞の後ろにつける。

例) шаңгыр чыгыы көк (まだちょっとしか熟しておらず青い)

⑥ шуут (かなり)

例) шуут биче (かなり小さい)

程度は, ⊕ шала, шору > шуут ⊕

このなかで⑤の用法はトゥヴァ語のみである。上記その他の単語はチュルク諸言語にもある。

参考として көңгүс (まったく、完全に、ほとんど) という単語をあげておく。

単語 көңгүс は көңгүс чок(ほとんどない), көңгүс эвээш(まったく少ない), көңгүс хөй эвес (まったく多くない) のように否定形で用いる。

例) Хууңумда суг көңгүс чок.

(私のバケツのなかには水がほとんど入っていない。)

3) 音節を伸ばす方法

単語の最後の音節を長く伸ばして(長母音化して)弱化をあらわす。ただし、軽蔑や皮肉のニュアンスを含む。

例) кызыл → кызыыл (赤っぽい)

сарыг → сарыыг (黄色っぽい)

чылыг → чылыыг (少し暖かい)

1 1 . 2 . 3 . 最上級

1) 最上級をあらわす接辞

①

形容詞語幹 の最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
無声子音	-кыр	-кир	-кур	-күр
有声子音 母 音	-гыр	-гир	-гур	-гүр

例) аккыр (より白い, とても白い), кызылгыр (より赤い, とても赤い)

②

形容詞語幹 の最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
	-ыңгыр	-иңгир	-уңгур	-үңгүр

例) кызыңгыр (真っ赤な), чидиңгир (ほんとうに十分な)

例) Бедик черниң хары аккыр.

(高い山の上にある雪はほんとうにとても白い.)

Дээрниң өңү көккүр.

(空の色は[ほかの何よりも]ほんとうに青い.)

2) 副詞を用いる方法

程度の強化をあらわすときに用いられる副詞 (「*」はよく使われる副詞)

副詞	例
аажок / аайжок (きわめて) *	Шөлде улус аажок хөй. (野原にはとてもたくさんの方がいる.)
аргажок (きわめて) *	Шөлде улус аргажок хөй. (野原にはとてもたくさんの方がいる.)
болза-даа (とはいえ)	болза-даа чараш (とても美しい)
дендии (きわめて, あまりにも) *	дендии улуг (きわめて大きい)
дыка (とても) *	дыка эки (とてもよい)
дээрге (~という~)	акша дээрге акша (お金というお金)
単語を重ねて数量の多さをあらわす	
кара (とても, まったく)	кара шаар (とても遠い)
кедергей (きわめて, はなはだ) *	кедергей чараш черлер (とても美しい場所)
кончуг (とても) *	кончуг эки (とてもよい)
кылаң (輝かしく)	кылаң тас харыы (とてもばらしい答え)
медээжок (とても, きわめて) *	медээжок солун ном (とても面白い本)
тергиин (排他的に) *	тергиин бедик (他のどれよりも高く)
тоң (とても, きわめて)	тоң багай (きわめて悪い)
улам (さらに, もっと) *	улам дүрген (さらに速く)
халап (とても)	халап дүрген (とても速く)
オビュル地区サグルで使われる方言	
хөлчок (とても, はなはだ)	хөлчок улуг (すごく大きい)
чидиг (より鮮やかな) *	чидиг кызыл (鮮紅色の)
色をあらわす形容詞につく	
чииртим (とてもよく)	чииртим хөй (とても多い)
чиңгир (より鮮やかな) *	чиңгир көк (鮮やかな青色の)

色をあらわす形容詞につく

чүдек (とてもよく) *	чүдек чараш (とても美しい)
「すごくひどい」を意味する単語が転じた形である	
чык [чыгк] (常軌を逸したほど)	Автобуста кижы чык долу. (バスの中は考えられないほどの人でいっぱい.)
шуут (まったく, 絶対に)	шуут шын (まったく正しい) шуут чок (まったくない)
шыгырт (まったく)	шыгырт долу (とても十分な)
элээн (かなり)	элээн хөй (かなりたくさん)
эң (-не) (もっとも, 一番) *	эң кызыл (もっとも赤い)

この上記の副詞のうち、「～よりももっとも～だ」あるいは「～のなかで一番～だ」という最上級をあらわす、もっともよく使われる副詞は **эң (-не)**, **кедергей**, **тергиин**, **дыка**, **аажок** である。

奪格 (より)	+	эң (-не) (кедергей ほか)	+	形容詞		
名詞の属格	+	иштинден (～のなかで)	+	эң (-не) (кедергей ほか)	+	形容詞
名詞の属格	+	аразындан (～のなかで)	+	эң (-не) (кедергей ほか)	+	形容詞

例) Чысымаа уругларымның иштинден эң-не бичии.

(チュスマーは子供たちのなかで一番小さい.)

Чысымаа уругларымның аразындан эң-не чассыг.

(チュスマーは子供たちのなかで一番かわいらしい.)

Чойгана эштеринден тергиин угаанныг.

(チョイガーナは友だちよりも一番賢い.)

3) 形容詞の一部の重複による合成形

形容詞の第一音節の後を **-п** に変えて、ハイフンでもとの形容詞につなげて用いる。

形 容 詞 の 第 一 音 節	形 成 法
母 音	-пをつける
子 音	子音を-пに変える

例) кап-кара (一番黒い), ап-ак (一番白い), көп-көк (一番青い), сап-сарыг (一番黄色い), боп-борбак (まん丸い)

Школавыста кып-кызыл пөстөрдө кыйгырыглар кайы ырактан көстүп турган.

(私たちの学校に吊り下げられている, まっ赤な布地に描かれている)

アピールがかなり遠いところからも見えていた.)

Суг кудар демир доскаар бар, иштиндиве бакылаарга, куп-куруг.
(水を注ぐ鉄製の樽があり, そのなかを覗いてみると, なかはまったく空っぽである.)

М. Кенин-Лопсан « Читкен уруг » Кызыл. 2000, арын 316

4) 同じ名詞や形容詞を二つ重ねる (並べる) 方法.

同じ名詞や形容詞を二つ重ねてあらわすが, その際に前者の名詞や形容詞は属格にする.

例) маадырның маадыры (英雄のなかの英雄)

угаанныгның угаанны (知恵のある者のなかで一番知恵のある)

экиниң экизи (良いもののなかで一番良いもの)

5) 同じ名詞や形容詞を奪格 (～より) にして「～の中で一番～の」の構文にする方法

例) угаанныгдан угаанныг (知恵のある者のなかで一番知恵のある)

кызылдан кызыл (赤色のなかで一番赤い)

6) 名詞 **хамык** (すべてのもの, すべての人) を用いる方法

名詞 **хамык** (すべてのもの, すべての人) を対格 **хамыкты** にして形容詞を続ける。「すべてのものより～」, 「すべての人より～」の意味となる.

例) Бистиң самолёдувус хамыкты дүрген, хамыкты бедик, хамыкты ырак у жар.

(我々の飛行機はすべての飛行機よりも速く, 高く, 遠くへ飛ぶ.)

形容詞 **кызыл** (赤い) を例にしてさまざまな比較級, 最上級の形を示してみる.

形	度合の程度	意味	形成方法
кызыл аарак	弱化	赤っぽい	弱化助詞 аарак
кызылзымаар	弱化	赤っぽい	接辞 -зымаар
арай кызыл	弱化	少し赤い	副詞 арай
кызыыл	弱化	赤っぽい	音節を伸ばす
кызыл	原級	赤い	
дыка кызыл	強化	とても赤い	副詞 дыка (とても)
аажок кызыл	強化	とても赤い	副詞 аажок (とても)
эң кызыл	最上級	もっとも赤い	副詞 эң
эң тергиин кызыл	最上級	もっとも赤い	副詞 эң
кызылгыр	最上級	もっとも赤い	接辞 -гыр
кызыңгыр	最上級	真っ赤な	接辞 -ыңгыр
эң кызыңгыр	最上級	一番赤い	接辞 -ыңгыр と助詞との組み合わせ
кызылдың кызылы	最上級	赤色の中でも赤い	属格を用いる (～のなかで～)
кызылдан кызыл	最上級	他の赤色よりも赤い	奪格を用いる (～よりも)
кып-кызыл	最上級	一番赤い	同じ形容詞を重ねる
дилгиниң кызылы	最上級	狐の中で一番赤い	名詞を属格にし, その名詞 (のあらわす特徴) のなかで一番であることを示す

1 1 . 2 . 4 . 形容詞を用いた強調

同じ形容詞を二つ並べて修飾して修飾される名詞 (の数量) を強調することがある. その際, 修飾される名詞は必ず複数形になる.

例) көк-көк чечектер (とても青い花)

кара-кара оолдар (真っ黒な少年)

1 1.3.形容詞の名詞化

1 1.3.1.形容詞に所有接辞をつける方法

形容詞に所有接辞をつけると形容詞は名詞化する。「～なもの」、「～なこと」という意味になる。ふつう名詞の属格や人称代名詞の属格とともに用いられる。

例) хемниң узуну (川の長さ)

дагның беди (山の高さ)

күш-ажылдың бүдүрүкчүлүү (勤労生産性)

металлдың кады (金属の強度)

また、所有接辞をつけずに形容詞にそのまま格接辞をつけることもある。

例) экиде (都合の良いときに), экини (良いことを; よいものを),

экиден (よいもののなかから)

эргиде (以前に)

1 1.3.2.形容詞に名詞の複数形接辞をつける方法

形容詞に名詞の複数形接辞をつけると、「～な人々」をあらわす。

例) кырганнар (お年寄りたち)

аныяктар (若者たち)

кызылдар (赤軍の人々)

Кырганнарга орукту чайла. (お年寄りに道を譲りなさい。)

1 1.4.形容詞の副詞化

形容詞に3人称所有接辞をつけた形(形容詞の名詞化した形)に **- биле** をつけると副詞を形成する。

例) айыылы-биле (危険で, 危なく)

кысказы-биле (短く)

культурлуу-биле (文化的に)

1 2. 数詞

数詞は物の数量や順序をあらわし、**каш ? , чеже ?** は「いくつ?」、**кашкы? , чежеги? , каш дугаар[гы] ?** は「何番目の?」の問いに対する答えとなる。

数詞は、意味上、1) 個数詞, 2) 序数詞, 3) 集合数詞, 4) 分配数詞 (~ ずつ), 5) 分数詞と帯分数詞, 6) 概数とに分かれる。

1 2. 1. 個数詞

1 2. 1. 1. 個数詞

一の位		十の位		百の位	
1	бир	1 0	он	1 0 0	чүс
2	ийи	2 0	чээрби	2 0 0	ийи чүс
3	үш	3 0	үжен	3 0 0	үш чүс
4	дөрт	4 0	дөртөн	4 0 0	дөрт чүс
5	беш	5 0	бежен	5 0 0	беш чүс
6	алды	6 0	алдан	6 0 0	алды чүс
7	чеди	7 0	чеден	7 0 0	чеди чүс
8	сес	8 0	сезен	8 0 0	сес чүс
9	тос	9 0	тозан	9 0 0	тос чүс
千の位 (муң)		1 0 0 万の位 (миллион, сая)			
1, 0 0 0	бир муң	1, 0 0 0, 0 0 0		бир миллион	
2, 0 0 0	ийи муң			бир сая	
3, 0 0 0	үш муң	1 0, 0 0 0, 0 0 0		он миллион	
4, 0 0 0	дөрт муң			он сая	
5, 0 0 0	беш муң	1 0 0, 0 0 0, 0 0 0		чүс миллион	
6, 0 0 0	алды муң			чүс сая	
7, 0 0 0	чеди муң	1 0 億の位 (миллиард)			
8, 0 0 0	сес муң	1 0 億		бир миллиард	
9, 0 0 0	тос муң	1 0 0 億		он миллиард	
1 0, 0 0 0	он муң	1 0 0 0 億		чүс миллиард	
1 0 0, 0 0 0	чүс муң				

個数詞は構造上、素数と合成数詞、複合数詞とに分かれる。

- 例) 素数 — бир (1), он (10), чүс (100)
 合成数詞 — он чеди (17), чүс чээрби беш (125)
 複合数詞 — үжен (30) < үш (3) + он (10)

個数詞「1」には **бир** のほかに **бирээ** と **чаңгыс** がある。その違いは1 2. 2. **бир, бирээ, чаңгыс** の特殊な用法を参照すること。

10以上の数詞は **он** (10) にそれぞれ適當する一の位の数詞をつける。20以上の数詞も同様にしてつくられる。

例) **он чеди** (17) < **он** (10) + **чеди** (7)
он тос (19) < **он** (10) + **тос** (9)
чеден алды (76) < **чеден** (70) + **алды** (6)
тозан үш (93) < **тозан** (90) + **үш** (3)

1万台の数詞は十の位の個数詞に **муң** (1000) をつけてつくる。同様に、10万台の数詞では、百の位の個数詞に **муң** (1000) をつけてつくる。

例) **чээрби муң** (20, 000), **үжен ийи муң** (32, 000),
дөртөн алды муң (46, 000),
беш чүс муң (50万), **алды чүс үжен беш муң** (63万5000),
сес чүс тозан ийи муң (89万2000)

миллион (100万) と **миллиард** (10億) はロシア語からの借用である(本来はフランス語起源)。また、100万にはモンゴル語からの借用として **сая** がある。

個数詞が定語となる場合は、いつも名詞の前にくる。

例) **бежен өөреникчи** (50人の生徒)

数詞と結びついた名詞は、複数形にしておいてもどちらでもよい。

例) **он кижилер** (10人の人々), **алдан маадырлар** (60人の勇士),
үш кырганнар (3人の老人)

個数詞も他の名詞と同じように格変化するが、後ろに修飾する名詞がある場合は格変化しない。修飾される名詞が格変化する。

例) **бирден бирээ чокка** (なにもかも詳しく), **бирде** (まず第一に)
Беш үштен хөй. (5は3より多い.)

Севилбаа он инекти саар нормалыг.

(セヴィルバーは10頭のウシの搾乳をするノルマを課せられている.)

合成数詞が格変化するときは、末尾の数詞だけに格変化接辞をつける。

例) **Он сеске он сести кат**. (18に18を足しなさい.)

個数詞には所有接辞がつけることができ、ついた形で格変化もする。

例) **Дуңмаларым бирээзи** – **бирги класста, ийизи үшкү класста өөренип турарлар.**

(私の弟妹たちの1人は1年生で、2人は3年生で勉強している.)

1 2 . 1 . 2 . бир, бирээ, чаңгыс の特殊な用法

数詞 **бир**, **бирээ**, **чаңгыс** の用法に関していくつかの研究があるが, ここでは N.I. レチャギナの論文「トゥヴァ語における単語『1』について **Слово Бир в тувинском языке**」に依拠して説明する.

1) 数詞 **бир** は不定代名詞 (ある～) の役割を果たす. そのさい **бир-ле** の形でよく用いられる.

例) **бир чүве** (何か), **бир-ле черже** (どこかへ),
бир-ле черде (どこかで), **бир-ле шагда** (いつか, かつて)
Бир кижикелди. (誰かが来た.)

Бир чүве караш диди. (何かがちらりと見えた.)

とくに, 名詞に接辞 **-лыг** (とその発音上のバリエーション) を形成した形容詞とともに用いられる場合, **бир** は「ある～」の意味になる.

例) **Сеңээ келиримге, бир кижилиг апарган болдуң.**
(君のもとへ来てみると, どうやら [ある] 別の人を見つけたようだね.)

2) 計量や測量をあらわす単語 (キログラム, 平方メートルなど) を用いるときは, **бир** は省略できない.

例) **бир шаң чиңге-тарааны тараажыларга бээр**
(1 シャン【測量単位, 約四分の一²】分のキビを農民に渡す)
Бир баргаш бир-бир килограмм чигирлер садып алгаш, чип-ле базып турган бис.
(あるとき私たちはそれぞれ 1 キロずつ砂糖を買って, 歩きながら食べた.)

3) 疑問代名詞のあとにハイフンをつけて **бир** をつけると (**- бир**), 不定代名詞, 不定副詞を形成する. また, 名詞とも結びついて不定代名詞を形成する.

例) **кым-бир** (だれか), **кандыг-бир** (ある, なんらかの),
кайы-бир (なんらかの)

4) 助詞 **-даа** とともに否定文で用いて、否定を強調する (いかなる～もない, なんら～ない).

例) **Мээң дугайымда сагыш салган бир-даа херээң чок.**
(私のことはほんとうに何も心配することはありませんよ.)

5) **бир** は知覚・感覚・感情をあらわす動詞とともに用いて、行為の突発性や1回きりの行為をあらわす.

例) **Чаңнык боданып чыткаш, бир миннип кээрге, ол чарыкта бир теректиң хөлегези союп чедип келген бооп-тур.**

(チャンヌクは考えごとをしていて、とつぜん我に返ると、反対側に立っているトーポリの木陰が彼のほうに伸びてくるように感じた.)

Тоглаа бир көөрге, ашак шилги аът мунупкан.

(トルガーは1度振り返って見ると、男は栗毛のウマに乗り去っていった [のを見た].)

6) **бир-бир** は動詞とともに用いられたとき、行為が長時間続くことや行為が1回きりではなく何回も行われることをあらわすことがある.

例) **Бир-бир бодаарымга, экизи-даа кончуг. Бир-бир бодап кээримге, мен ышкаш кижичеңгиир-даа аажок берге!**

(何度も考えてみても、すばらしいと思えてならない. 何度考えても、私のような人間にとっては、きわめて [手に入れるのが] 困難なことだから.)

7) 数詞 **бирээ** (1) は順番を数えるときに用いられる.

例) **бирээ, ийи, үш...** (1, 2, 3...)

8) 数詞 **бирээ** (1) は三人称所有接辞とともに用いて「～のうちの1人, ～のなかの1つ」という意味で使われる.

例) **маадырларның бирээзи** (英雄の1人)

Дүне тараачын бажыңнарның бирээзинче бүдүү кире берген мен.

(夜中に農家の1つにこっそりと私は忍びこんだ.)

бирээ (1) のほかに、「～のうちの2つ, 3つ...」というときは個数詞 **ийи** や **үш...** に三人称所有接辞をつけて形成する.

例) **өөреникчилерниң ийизи** (生徒たちの2人)

9) 数詞 **чаңгыс** は「1」の意味のほか「ただ一つの、唯一の」の意味を有する。

例) **ооң чаңгыс кызы** (彼のたった一人の娘)

1 2 . 2 . 序数詞

序数詞は物の順番をあらわし, **кашкы?** , **чежеги?** **каш дугаар[гы]** , **чеже дугаар[гы]?** (何番目の?) の問いに対する答えとなる。

序数詞は個数詞からつくられる。

序数詞は名詞の単数形にも複数形にもつくことができる。

例) **бешки класс** (学校の5年), **бешки класстар** (学校の5年)

修飾される名詞は格変化をするが, 序数詞は格変化しない。

例) **Ам болза чээрби бирги вектиң бирги чартыынче кирипкен бис.**

(現在私たちは21世紀の前半期に入った.)

ローマ数字の後は序数詞をあらわす **дугаар** は用いない。アラビア数字の後は **-кы** (とそのバリエーション) も **дугаар** も両方用いられる。

例) **ВЛКСМ-ниң XI улуг хуралы 1949-ку чылдың март – апрельде болган.**

(コムソモール第11回大会は1949年の3月–4月に行われた.)

6 дугаар улуг хурал (第6回大会), **6-гу улуг хурал** (第6回大会)

序数詞の形成はトゥヴァ語においては比較的新しい時期の発生である。A.A. パリンバッフの調査(1930~60年代)によると, 彼が聞き取りをおこなったアナウンサーは **бирги** という序数詞をまったく用いることはなかったという。 **бир дугаар** もまれにしか聞かなかった。以前は序数詞の役割を個数詞が果たしていた。この点でトゥヴァ語は他のチュルク諸民族の言語と異なっている

(Н.И.Летягина Слово *Бир* в тувинском языке *Учёные записки XVI* 1973 Кызыл стр.158)。

例) **Бир(= Бирги, Бир дугаар) класста өөренип турар.**

(1年生で勉強している.)

1 2.2.1.接辞をつけて形成する方法

個数詞の 最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
無声子音	-кы	-ки	-ку	-кү
有声子音 母 音	-гы	-ги	-гу	-гү

例) бешки (5番目の), тоску (9番目の), үшкү (3番目の),
бирги (1番目の), алдыгы (6番目の)

合成名詞からなる序数詞は最後の個数詞に接辞 -кы (とその発音上のバリエーション) をつければよい。

例) он бешки (5番目の), бир муң тос чүс тозан сески (1998番目の)

1 2.2.2.個数詞の後に дугаар (~番目の) をつけて形成する方法

個数詞の後に дугаар (~番目の) をつけてつくる。дугаар はモンゴル語から借用された単語である。

例) бир дугаар (1番目の), он дугаар (10番目の)

1 2.3.集合数詞

集合数詞は物の総体や集まりをあらわす。

1 2.3.1.副詞的集合数詞

この副詞的集合数詞は格変化をしない。

чааскаан	(1つ, 1人で)
иелээ[н]	(2つ, 2人で)
үжелээ[н]	(3つ, 3人で)
дөртөлээ[н]	(4つ, 4人で)
бежелээ[н]	(5つ, 5人で)
алдалаа[н]	(6つ, 6人で)
чеделээ[н]	(7つ, 7人で)
сезелээ[н]	(8つ, 8人で)
тозалаа[н]	(9つ, 9人で)
оналаа[н]	(10つ, 10人で)

1 2.3.2.集合数詞

3人称所有接辞を用いる。名詞と同様に格変化する（1 2.3.3.参照）。

чааскаандырзы	(1つ, 1人)
иелдирзи	(2つ, 2人)
үжелдирзи	(3つ, 3人)
дөртелдирзи	(4つ, 4人)
бежелдирзи	(5つ, 5人)
алдалдырзы	(6つ, 6人)
чеделдирзи	(7つ, 7人)
сезелдирзи	(8つ, 8人)
тозалдырзы	(9つ, 9人)
оналдырзы	(10つ, 10人)

会話体において集合数詞は第二音節に長母音をもつバリエーションがみられる。

例) иеэлээ, үжээлээ, дөртээлээ...

үжээлдирзи, дөртээлдирзи...

副詞的集合数詞の語末に[н]をつけるバリエーションは、文章体においても会話体においてもつけないそれと同様に使われる。

1 2.3.3.集合数詞の格変化

集合数詞の格変化は以下のようなになる。

格	例	
	硬 音	軟 音
主 格	тозалдырзы (9つ)	бежелдирзи (5つ)
属 格	тозалдырзының	бежелдирзиниң
与 格	тозалдырзынга	бежелдирзинге
对 格	тозалдырзын	бежелдирзин
位 格	тозалдырзында	бежелдирзинде
奪 格	тозалдырзындан	бежелдирзинден
方 向 格 ①	тозалдырзынче	бежелдирзинче
方 向 格 ②	тозалдырзындыва	бежелдирзиндиве

1 2.4.分配

同じ個数詞をハイフンでつなぎ二つ並べることで、分配（～ずつ）をあらわす。

例) бир-бир (1つずつ), он-он (10個ずつ), чүс-чүс (100個ずつ)

また、上記の形（同じ個数詞をハイフンでつなぎ二つ並べる）に動詞形成接辞 **-ла** (とその発音上のバリエーション) をつけてさらに副動詞 **-п** 形にすることによって、「～個ずつ (取って)」をあらわす。

例) беш-бештеп (5個ずつ)

同じ個数詞をハイフンでつなぎ二つ並べた後に **кылдыр** (～のように) を用いることによっても分配をあらわす。

例) ийи-ийи кылдыр (2個ずつ)

1 2.5.概数

1 2.5.1.副詞を用いる方法

副詞 **шаа** (およそ～, 約～, ～ぐらい), **хире** (およそ～, 約～, ～ぐらい), **чыгам** (およそ～, 約～, だいたい～) を個数詞の後につける。副詞 **шаа** は、10や20, 30といった数に結びつき、**хире** はあらゆる数字と結びつく。

例) беш хире (5個ぐらい), үжен шаа (約30個),

бежен чыгам харлыг кижиге (だいたい50歳ぐらいの人)

1 2.5.2.異なる個数詞を並べる方法

異なる個数詞を並べることによって概数をあらわす。その際、小さい数字を前に置き、個数詞のあいだにハイフンを入れる。副詞 **хире**, **шаа** をいっしょに用いてもよい。

例) беш-алды (5, 6個), чеди-сес (7, 8個),

беш-алды хире (5, 6個ぐらい)

ただし、ийи-бир, ийи-чаңгыс は「とても少ない」、「稀な」という意味になる。

1 2.6.分数

1 2.6.1.常分数

分母をあらわす個数詞を属格にして（～分の）、分子をあらわす個数詞につなげて形成する。その際、分母をあらわす個数詞が属格になっているので分子をあらわす個数詞には3人称所有接辞がつく。

分数が格変化するときには分子をあらわす数字（3人称所有接辞がついたまま）が変化する。

例) ийиниң бири (二分の一, 1/2),

чээрби бештиң он үжү (二十五分の十三, 1 3/2 5)

会話体では хуу (部分, ~分の1), кезик (部分) を使ってあらわすこともある。その際、分母をあらわす個数詞の属格（～分の）が支配する名詞は хуу, кезик であり, 分子をあらわす数詞には所有接辞がつかず, хуу, кезик に3人称所有接辞がついて хуузу, кезии となる。格変化するときには хуузу, кезии に格変化接辞をつける。

例) оннуң бир хуузу (十分の一, 1/1 0)

Үндүдү болза тыва араттарның чылда орулгазының үштүң бир кезиинден хөйү болур.

(税込はといえば, トゥヴァ牧民の年間所得の三分の一より多くなる.)

また, 数詞 ончук (十分の~), чүсчүк (百分の~), муңчук (千分の~) も使われる。例は1 2.6.3.小数参照。格変化するときには ончук, чүсчүк, муңчук に格変化接辞をつける。

1 2.6.2.帯分数

整数と分数とのあいだに бүдүн (整数の) を入れることであらわす。

例) он бүдүн, дөрттүң үжү (十と四分の三, 1 0 3/4),

он бүдүн, чүстүң чедизи (чеди чүсчүк)

(十と百分の七, 1 0 7/1 0 0)

1 2.6.3.小数

個数詞と小数をあらわす数詞 ончук (十分の~, 0. □), чүсчүк (百分の~, 0. 0□), муңчук (千分の~, 0. 0 0□) を組み合わせてあらわす。

例) беш ончук (0. 5 ; 5/1 0), беш чүсчүк (0. 0 5 ; 5/1 0 0),
беш муңчук (0. 0 0 5 ; 5/1 0 0 0)

1 2.7.算数の演算

1 2.7.1.加法

кадар 足す

Онга бешти кадарга, он беш болур (боор).

10に(与格)5を(对格)足すと,15になる.

$$10 + 5 = 15$$

1 2.7.2.減法

кызыыр 引く

Ондан чедини кызыырга, үш артар.

10から(与格)7を(对格)引くと,3が残る.

$$10 - 7 = 3$$

1 2.7.3.乗法

көвүдедир かける

Бешти ийиге көвүдедирге, он болур (боор).

5を(对格)2に(与格)掛け合わせると,10になる.

$$5 \times 2 = 10$$

次のような言い方もある.

катап かける, 倍にして

Тос катап тос сезен бир болур(боор).

9の9倍は81である.

1 2.7.4.除法

үлээр 割る

Онну бешке үлээрге, ийи болур (боор).

10を(对格)5で(与格)割ると,2になる.

$$10 \div 5 = 2$$

1 2 . 8 . 速度の言い方

時速や分速などの言い方は「～（1分，1時間，1日）に」の部分有位格にしてあらわす。

бир шакта 250 километр чоруур самолёт（時速 2 5 0 k m で飛ぶ飛行機）

бир минутта 20 метр（分速 6 0 m）

бир хонукта 60 километр чоруур чадаг кижиги

（1日に 6 0 k m 歩くことができる人間）

1 3 .副詞

副詞は行為もしくは状況の特徴と兆候の特徴をあらわす。

トゥヴァ語において副詞は独自の接辞を有している。

副詞は派生副詞と非派生副詞とに分けられる。

現在ある多くの非派生副詞は歴史的には派生的であったが、現在では構成要素に分けられない語である。

例) мында (ここに), дүүн (きのう), хүндүс (昼間に),
оожум (静かに), хенертен (突然に), кедээртен (高いところから),
дашкаар (外で, 外に),
күзүн (秋に) < күс (秋) + үн,
кыжын (冬に) < кыш (冬) + ын,
бөгүн (きょう) < бо (この) + хүн (日)
даарта (あした) < даң (朝焼け) + эртен (朝に / あした)

副詞は動詞や形容詞, すなわち修飾する語の前に置く。

例) Моортай күскени үңгүрнүң чанынга дуюкаа кедеп чыткан.
(ネコはネズミを巣穴の近くでこっそりと座って見張っていた.)

Клубка дүүн көргүскен кино кончуг солун болду.
(クラブで昨日上映した映画はとてもおもしろかった.)

形容詞の多くはそのまま副詞としても使われる。

例) Мен ону эки билир. (私は彼のことをよく知っている.)

1 3 .1 .派生副詞

1 3 .1 .1 .副詞を形成する接辞

1) 形容詞と動詞から形成する接辞

形容詞, 動詞の 語幹最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
無声子音	-тыр	-тир	-тур	-түр
有声子音 母 音	-дыр	-дир	-дур	-дүр

例) чараштыр (美しく), карартыр (黒く, 黒色に),
агартыр (白く, 白色に), экидир (すばらしく),
көзүлдүр (見えるように), долдур (一杯に, 満杯に),
дыңналдыр (聞こえるように)

根元動詞からも派生動詞（態などの接辞がついた動詞）からもこの接辞から副詞は形成される。

2) 名詞, 代名詞から形成する接辞（～のように, まるで～のように）

名詞, 代名詞 の最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
無声子音	-кылаштыр	-килештир	-кулаштыр	-күлештир
有声子音 母 音	-гылаштыр	-гилештир	-гулаштыр	-гүлештир

例) кушулаштыр (鳥のように), хаткылаштыр (風のように),
суггулаштыр (水のように), менгилештир (私のように)

この接辞から形成された副詞は「～のように, まるで～のように」という比喩的様態の意味をもつ。

以下の接辞は, 現在では副詞として固定化されている副詞の形成接辞であるが, 単語の成り立ちや意味の分類を知る上で役に立つのでここで取り上げる。したがって単語そのものは非派生副詞として理解し, 覚えるのがよい。以下に紹介する副詞のいくつかは非派生副詞の例にすでに挙げてある。

3)

名詞, 代名詞 の最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
無声子音	-каар	-кээр	-каар	-кээр
有声子音 母 音	-гаар	-гээр	-гаар	-гээр

例) дашкаар (外へ), ишкээр (内部へ), бурунгаар (前へ),
аткаар (後ろへ), часкаар (春頃までに), өскээр (別なふうに),
биригээр (別なやり方で)

この接辞から形成された副詞は, 主として「空間的方向 (～へ)」や「時間的方向 (～の頃へ)」, 「行為の状況」をあらわしている。

この接辞から形成した副詞に名詞奪格接辞 **-тан** (とその発音上のバリエーション) をつけて起点「～から」をあらわす副詞も形成される。

例) дашкаартан (外から), ишкээртен (内部から)

この名詞奪格接辞 **-тан** (とその発音上のバリエーション) は副詞形成接辞としても用いられているが, 上記の接辞 **-каар** (とその発音上のバリエーション) と同様に, 生産的な接辞ではなく, この接辞で形成した副詞は非派生副詞とな

っている。意味は起点「～」（「どこから？」の答えとなる）をあらわす。

例) **мынаартан** (ここから), **ынаартан** (あそこから),
кайыыртан (どこから)

4)

名詞, 代名詞 の最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
子 音	-ын	-ин	-ун	-үн

例) **чазын** (春に), **чайын** (夏に), **күзүн** (秋に), **кыжын** (冬に),
бо чылын (今年に), **келир чылын** (来年に), **энир чылын** (去年に)
現在ではここに挙げた例の単語が主である。

1 3 . 1 . 2 . 後置詞 -биле と組み合わせる方法

1) 名詞との組み合わせ

性質や行為の状態をあらわすさまざまな名詞と後置詞 **-биле** を組み合わせ
て副詞を形成することができる。

例) **маң-биле** (走って), **күш-биле** (ちからで),
өш-биле (悪意をもって, 故意に)

2) 形容詞との組み合わせ

いろいろな形容詞と組み合わせる形成することができるが, そのさい形容詞
に3人称所有接辞をつけて名詞化してから後置詞 **-биле** をつける。

例) **дүргени-биле** (速く), **далаштыы-биле** (急いで),
шиитпирлии-биле (断固として)

1 3 . 1 . 3 . кылдыр と形容詞を組み合わせる方法

形容詞の後に **кылдыр** をそのままおき, 「～のように, ～になるように, ～
にして」の意味となる。

例) **чараш кылдыр** (美しく, きれいに), **шыңгы кылдыр** (厳しく),
эки кылдыр (上手に)

1 3 . 1 . 4 . 形容詞と кончуг を組み合わせる方法

形容詞に3人称所有接辞をつけてから、その後に кончуг をつけると、直訳すれば「～なことものすごく」という意味になり、「とても～に」という副詞表現となる。

例) эптии кончуг (すごく快適に, すごく便利に),
дүргени кончуг (とても速く),
Мен эртези кончуг оттуп келген мен. (私はとても早く目が覚めた.)

1 3 . 1 . 5 . 「毎～」という意味をあらわす副詞的表現の形成法

時間をあらわす名詞(朝, 昼, 晩...)の属格 + -на (-не) で形成し, 「毎～」の意味を形成する。

例) эртенниң-не (毎朝), хүннүң-не (毎日), кежээниң-не (毎晩),
дүнениң-не (毎夜), чылдың-на (毎年)

例外として「毎月」の意味では айдың-на とは言わず, ай санында を用い, 同様に「毎週」の意味でも неделя санында を用いる。

1 3 . 2 . 意味による分類

1 3 . 2 . 1 . 行動の様式 (～のように)

例) эптии-биле (丁寧に), дуюкаа (こっそりと), экидир (もっとよく),
чараш кылдыр (きれいに), хартыгагылаштыр (ハヤブサのように)

1 3 . 2 . 2 . 時をあらわす副詞

例) бөгүн (きょう), даарта (あした), дүүн (きのう), соонда (あとで),
кыжын (冬に), чайын (夏に)

1 3 . 2 . 3 . 場所をあらわす副詞

例) бээр (こっちへ), дашкаар (外で, 外へ), даштын (外で),
үстүүртен (上から), кожа (となりに)

1 3 . 2 . 4 . 程度をあらわす副詞

例) дыка (とても), кончуг (とても), хөлчок (きわめて),
арай (ちょっと, 少し)

1 3 . 2 . 5 . 目的をあらわす副詞

例) өжөгээр (故意に)

1 3 . 3 . 副詞の比較級

多くの形容詞は副詞としても用いられる。したがって、比較級の作り方は形容詞のそれと同じである。語を強める場合には程度をあらわす副詞を用いる。

ここでは副詞の一部の重複による合成形の例を挙げておく。

例) доп-дораан (ほんとにすぐに, 今すぐ)

1 4.動詞

動詞はその語の意味において、また内的カテゴリーの豊かさと多様性の意味において、もっとも広範で豊かな品詞の一つである。

以下、簡潔に動詞カテゴリーの性質を挙げる。

- 1) 動詞は事物の行為や状況をあらわす。
- 2) 動詞語幹は命令・願望法の2人称単数と同じ形である。
- 3) 動詞は他の実詞（自立語）と同様に、派生動詞と非派生動詞とがある。
- 4) 非派生動詞は語根・語幹だけから成っている。

例) **кыл**= (する), **кел**= (来る), **бижи**= (書く)

1 4.1.動詞の語形成

1 4.1.1.接辞を用いた動詞形成

動詞形成の接辞は、あらゆる自立語、ときには非自立語の語幹につけて、別の意味をもった新しい動詞を形成する。

- 1) 名詞や形容詞、数詞、代名詞から動詞を形成する接辞

①

名詞、形容詞、数詞、 代名詞の最後の音	名詞、形容詞、数詞の最終音節の母音	
	硬 音	軟 音
子 音	-та	-те
-л	-да	-де
-м, -н, -ң	-на	-не
母 音 -й, -р, -г	-ла	-ле

この接辞から形成される動詞は主に名詞から形成し、動詞を形成する接辞のうちでもっとも広く用いられる接辞である。また、形容詞や数詞、代名詞からも形成することができる。

この接辞から形成される動詞はふつう他動詞となり、その名詞や形容詞、数詞、代名詞が関連するさまざまな行為「～する」をあらわす。きわめてよく用いられる接辞、すなわち数の多い動詞なので、意味を具体的に分類すると以下のようなになる。

☆ 名詞から形成される動詞の意味

1. 「(動詞を形成する名詞があらわす物) を探しに行く, を求めに行く, を取りに行く, を採集しに行く ; (動詞を形成する名詞があらわす人) を探しに行く, を呼びに行く」
例) **сугла**= (水を汲みに行く), **тоорукта**= (松果を採りに行く),
малда= (家畜を見守る, 放牧する, 家畜を探しに行く),
эмчиле= (医者を呼びに行く)
2. 「(動詞を形成する名詞があらわす道具) で作業する, を用いて何かをする」
例) **хирээле**= (鋸で切る), **боола**= (銃を撃つ),
дузакта= (罾を使って獣を捕る)
3. 「(動詞を形成する名詞があらわす場所) に行く, に沿って行く, を通って行く」
例) **чайлагла**= (夏営地に行く),
тайгала- (タイガに行く, タイガを通って行く),
кудумчула- (通りに沿って行く)
4. 「(動詞を形成する名詞があらわす物) で装備する, を取り付ける」
例) **мөңгүнне**- (銀めっきをする), **шилде**- (ガラスをはめる),
халыпта= (ふたをする)
5. 「(動詞を形成する名詞があらわす物) を作る, 生産する, 形成する」
例) **оваала**= (石を積む), **үүжеле**= (冬用の冷凍肉を作る, 貯える)
6. 「(動詞を形成する名詞があらわす物) を食べる, 飲む, 消費する」
例) **шайла**= (お茶を飲む), **арагала**= (酒を飲む),
таакпыла= (タバコを吸う)
7. 「(動詞を形成する名詞があらわす人や動物) を生む, 産む」
例) **оолда**= (子供を生む), **анайла**= (子ヤギを産む)
8. 「(動詞を形成する名詞があらわす行為や状態, 物) に処する, にさらされる, で影響を及ぼす, を経験する」
例) **хилинчикте**= (苦しめる), **гриппте**= (インフルエンザにかかる),
ышта= (煙で燻す)
9. 「(動詞を形成する名詞があらわす道具や単位, 数量) で計測する, 分ける」
例) **кулажыла**= (両腕を横に伸ばした長さで計る),
бөлүкте= (グループに分ける), **чартыкта**= (半分に分ける)
10. 「(動詞を形成する名詞があらわす言葉で) 話す, 読む, 書く」
例) **тывала**= (トゥヴァ語で話す, 読む, 書く),
японна= (日本語で話す, 読む, 書く)

- 1 1. 「(動詞を形成する名詞があらわす道具や物) を利用する, で実現する」
例) **хырбала**= (糊で貼る), **дузала**= (助ける), **тоолда**= (昔話を語る)
- 1 2. 「(動詞を形成する名詞があらわす道具) で遊ぶ, 演奏する」
例) **шыдыраала**= (チェスをする), **игилде**= (イギルを演奏する),
хөөмейле= (ホーメイを歌う)
- 1 3. 「(動詞を形成する名詞があらわす職業や職務) として働く, を遂行する」
例) **башкыла**= (先生として働く, 教える), **даргала**= (議長である),
чолаачыла= (運転手として働く)
- 1 4. 「(動詞を形成する名詞があらわす物) を取り除く, きれいにする」
例) **картта**= (果物や野菜などの皮をむく),
кузумна= (煙管のなかの燃えかすをとりのぞいてきれいにする)
- 1 5. 動詞を形成する名詞があらわす物や行為に関連するその他さまざまな意味をなす
例) **хапта**= (袋に入れる), **кулакта**= (耳をつかむ), **каракта**= (見守る)

☆ 形容詞, 数詞, 代名詞から形成される動詞の意味

1. 「(動詞を形成する形容詞があらわす状態) にする」(他動詞となる)
例) **чылыгла**= (暖かくする), **чидигле**= (鋭くする, 先鋭化する),
арыгла= (きれいにする, 掃除する), **тускайла**= (特別化する)
 2. 「(動詞を形成する形容詞があらわす性質) を獲得する」(自動詞となる)
例) **ховарта**= (珍しくなる)
 3. 「(動詞を形成する数詞の数だけ) 取る; 数詞の人数で行動する」
例) **үште**= (3人で行く; 3つずつ取る, もらう)
 4. 「(動詞を形成する数詞があらわす) 年齢になる」
例) **үште**= (3歳になる), **беженне**= (50歳になる)
 5. 代名詞が意味する行為を行う. 疑問代名詞や指示代名詞から動詞が形成されるものがほとんどである.
例) **кайыла**= ? (どの道に沿って行くのか?), **бола**= (この道に行く)
- また, 間投詞や擬音語, 擬態語からも動詞が形成される.
例) **уёла**= (「痛い」と呻く), **диртле**= (コンコンと叩く),
сертиле= (ぶるぶると震える)

この接辞から形成した動詞は上記の意味を1つだけでなく, 2つ以上意味をあわせもつことも多々ある.

- 例) **сүтте**= (乳を求めに行く【名1】, 乳を足す, 乳を入れて味付けする【名12】)
ийиле= (2つずつ取る, 2人で行く【形3】, 2歳になる【形4】)

この接辞を用いて中止相を形成する（14.5.7. 中止相参照）.

②

名詞, 形容詞の 最後の音	名詞, 形容詞の最終音節の母音	
	硬音	軟音
子音	-а, -ы, -у	-е, -и, -ү

例) ада= (名づける), ойна= (遊ぶ, 演奏する), амыра= (喜ぶ),
дөзе= (相続する), байы= (裕福になる)

ふつう名詞にこの接辞をつけて形成した動詞は他動詞となるが, 形容詞やいくつかの名詞からこの接辞をつけて形成した動詞は自動詞となる.

名詞, 形容詞の最後の音が無声子音のときこの接辞をつけると, 最後の音は有声音となる (ада= ; < ат).

③

名詞, 形容詞 の最後の音	名詞, 形容詞の最終音節の母音	
	硬音	軟音
子音	-ар, -ыр, -ур	-ер, -ир, -үр
母音	-р	

例) алгыр= (叫ぶ), көгер= (青くなる), карар= (黒色になる),
дадар= (錆びる), экири= (健康になる, 快復する)

この接辞から形成される動詞は, 色をあらわす形容詞や物の特徴をあらわす名詞や形容詞から形成される.

この接辞から形成される動詞は自動詞となり, 意味はその名詞や形容詞の特徴を帯びること, その特徴をあらわすようになることである.

この接辞のバリエーションとして以下の接辞もある.

名詞, 形容詞 の最後の音	名詞, 形容詞の最終音節の母音	
	硬音	軟音
母音	-ра	-ре

例) сулара= (弱くなる), мөөре= (ウシがモーと啼く),
шылыра= (さらさら音がする), коңгура= (鐘がリンリン鳴る)

この接辞から擬音語をあらわす動詞を形成することが多い (⑬擬音語・擬態語から動詞を形成する接辞参照).

④

名詞, 形容詞 の最後の音	名詞, 形容詞の最終音節の母音	
	硬音	軟音
無声子音	-сыра, -сура (-сыры, -суру) -шыра, -шура	-сире, -сүре (-сири, -сүрү) -шире, -шүре
有声子音 母音	-зыра, -зура (-зыры, -зуру) -жыра, -жура	-зире, -зүре (-зири, -зүрү) -жире, -жүре

例) ажылзыра= (働きたいと思う), уйгузура= (眠たくなる),
хүрүмзүрү= (微笑む), эътсире= (肉が食べたくなる),
хөөнзүре= (しょげる[直訳: 気持ちが弱くなる]), баксыра= (悪くなる),
эргижире= (年をとる)

名詞から形成した動詞の意味は、その行為が弱くなること、あるいはそのあ
らわす名詞の心的状況になること、すなわち願望 (～したくなる) や気分 (～
な気分になる) をあらわす。

接辞 **-шыра** と **-жыра** (とその発音上のバリエーション) は形容詞からのみ形
成される接辞である。形容詞から形成した動詞の意味は、その形容詞であらわ
した性質を獲得することをあらわす。

⑤

名詞, 形容詞 の最後の音	名詞, 形容詞の最終音節の母音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
無声子音	-сын	-син	-сун	-сүн
有声子音 母音	-зын	-зин	-зун	-зүн

例) чөпсүн= (承認する, 同意する, 正しいとみなす),
аарзын= (痛みを感じる), чиктигзин= (驚く, 疑う),
эжимзин= (自分の友人とみなす)

この接辞から形成される動詞は、「その主意味となる名詞や形容詞のように物
事に接する, そのように感じる, みなす」という意味をあらわす。

⑥

名詞の 最後の音	名詞の最終音節の母音	
	硬音	軟音
無声子音	-ca	-ce
有声子音	-za	-ze

例) **сукса= // суска=** (のどが渴く), **хүнзе=** (日を過ごす)

この接辞から形成される動詞は名詞から形成する。

この接辞から形成される動詞は、「～を望む, ～がしたい」という意味をふつうあらわす。

この接辞は動詞から形成する接辞 **-ыкса** (とその発音上のバリエーション) と同じ形成法 (同じ接辞) と考えてよい。

⑦

名詞の 最後の音	名詞の最終音節の母音	
	硬音	軟音
無声子音	-кар	-кер
	-т	-тер
有声子音 母音	-гар	-гер

例) **башкар=** (制御する, 管理する), **чемгер=** (食事を与える),

аьткар= // аьттар= (出発する, 出立する), **суггар=** (水をやる),

хепкер= (着飾らせる), **оьткар= // оьттар=** (草をやる, 草を食べさせる)

この接辞から形成される動詞は名詞から形成する。

この接辞から形成される動詞は他動詞となり、「～に参加させること, ～に親しませること; ～を分け与えること」という意味をあらわす。

接辞 **-тар** (とその発音上のバリエーション) は名詞語幹が **-т** で終わるときである。接辞 **-кар** をつけると語幹と接辞の間の結合部は **-тк-** となるが, 音が同化して **-тт-** となる。この形は口語体, 方言である。

⑧ 「～を自慢する」という意味をなす接辞

名詞, 形容詞 の最後の音	名詞, 形容詞の最終音節の母音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
子音	-ыырга	-иирге	-уурга	-үүрге
母音	-ырга	-ирге	-урга	-үрге

例) билиирге= (知識を自慢する), байыырга= (裕福さを自慢する)

この接辞から形成される動詞は、「自分を～とみなす, 自分の～な性質を見せる, ～を自慢する」という意味をあらわす。

動詞語幹が -г, -н がで終わる場合, 母音に挟まれることになった -г と -н は脱落して三つ並んだ母音は融合して一つの長母音となる (2つの同じ母音からなる長母音になる)。

例) улуг + -уурга → улугуурга= → улууурга= → улуурга=
(自慢する)

чечен + -иирге → чечениирге= → чечеиирге= → чечээрге=
(自分の雄弁さを自慢する)

⑨

名詞, 形容詞, 動詞の最後の音	名詞, 形容詞, 動詞の語幹の最終音節の母音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
(子音)	-ык	-ик	-ук	-үк

例) ижик= (慣れる), бирик= (統一する), сиң[н]ик= (具体的な形をとる)

この接辞から形成される動詞はふつう自動詞になる。

動詞からもこの接辞をつけて形成することもある。

この接辞はチュルク諸言語のなかではあまり生産的でなくなった接辞であり, トゥヴァ語でもこの接辞から形成される動詞は多くない。

⑩ 「～になる, ～の性質を獲得する」という意味をなす接辞

名詞, 形容詞 の最後の音	名詞, 形容詞の最終音節の母音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
無声子音	-шы	-ши	-шу	-шү
	-сы	-си	-су	-сү
	-чы	-чи	-чу	-чү
有声子音 母音	-жы	-жи	-жу	-жү
	-зы	-зи	-зу	-зү
	-чы	-чи	-чу	-чү

例) элбекши= (豊富にある, 豊かになる), экижи= (よくなる, 向上する),

аныяксы= (若くなる, 若く見える), кижизи= (人間的になる),

чемишчи= (肥沃になる), чурумчу= (規律正しくなる)

-чы (とそのバリエーション) は名詞, 形容詞の最後の音が **с, ш, к** のとき接辞中の **ч** の発音は **ч** のまま, **л, м, н, ң** のとき接辞は **ч** と書くが発音は **дж** のようになる.

また, この接辞から形成された動詞はよく使役態にして用いられることが多い (~化する).

例) шеригзит_ = (戦事体制化する, 軍需化する), электрижит_ = (電化する)

⑪ 「~させる」という意味を形成する接辞

名詞, 形容詞の 最後の音	名詞, 形容詞の最終音節の母音	
	硬音	軟音
無声子音	-кыс, -кус	-кис, -күс
有声子音 母音	-гыс, -гус	-гис, -гүс

例) диргис= (活気づける, 生き返らせる)

「~させる」という意味の他動詞を形成する.

⑫

名詞, 形容詞の 最後の音	名詞, 形容詞の最終音節の母音	
	硬音	軟音
	-шаа -шаара	-шээ -шээре

例) чөлшээре= (同意する)

この接辞はモンゴル語からの借用である.

⑬ 擬音語・擬態語から動詞を形成する接辞

擬音語の 最後の音	擬音語の最終音節の母音	
	硬音	軟音
母音	-ңайын	-ңейин
-рҫで終わる	-кайын	-кейин
-рで終わる	-гайын	-гейин
擬態語の 最後の音	擬音語の最終音節の母音	
	硬音	軟音
母音	-ңайын -ңна	-ңейин -ңне

例) шааңайын= (ゴォゴォと音がする), өөңейин= (エーンエーンと泣く),
 дазырткайын= (みしみしと裂ける音がする),
 дазыргайын= (みしみしと音がする),
 кызаңайын= (リズムカルに頻繁にきらめく),
 кызаңна= (リズムカルにきらめく),
 чивеңейин= (頻繁に明滅する),
 чивеңне= (明滅する)

擬態語を形成する接辞 **-ңайын**, **-ңна** (とその発音上のバリエーション) はともに規則正しい, リズムカルな運動をあらわすが, 接辞 **-ңайын** (とその発音上のバリエーション) のほうが接辞 **-ңна** (とその発音上のバリエーション) よりもより頻繁で運動が活発なことを示す.

擬態語を形成する接辞 **-ңайын** (とその発音上のバリエーション) は, **-ла** (とその発音上のバリエーション) と **-ра** (とその発音上のバリエーション) で終わる動詞の律動相と同じである (14.5.6.律動相 (リズム相) 参照).

ほかに上記⑬の接辞からも擬音語を形成する.

⑭ 代名詞から動詞を形成する接辞

代名詞の 最後の音	代名詞の最終音節の母音	
	硬音	軟音
	-ча	-че

例) канча= (どのようにする), мынча= (このようにする)
 代名詞 (これ, それ) から形成する.

2) 動詞から派生させて形成する接辞

① 「～したい」という意味をなす接辞

動詞の最後の音	名詞, 形容詞の最終音節の母音	
	硬音	軟音
子音	-ыкса, -укса	-иксе, -үксе
母音	-кса	-ксе

例) ижиксе= (飲みたい), балыктакса= (釣りをしたい),

бижиксе= (書きたい), кириксе= (入会したい, 入学したい)

動詞語幹が -г で終わる動詞にこの接辞がつくと, г は2つの母音に挟まれることになり脱落し, 1つの長母音になる.

例) чуг= + -укса → чугукса= → чуукса= (洗いたい)

この接辞は歴史的には, 名詞を形成する接辞 -к (-ык, -ук, -ик, -үк) に名詞から動詞を形成する接辞 -са, -се が合成してできた形である.

② 「～するふりをする, ～のふりをする」という意味をなす接辞

動詞の最後の音	名詞, 形容詞の最終音節の母音	
	硬音	軟音
	-ычаңна, -учаңна	-ичеңне, -үчеңне

例) удуучаңна= (寝たふりをする), билбээчеңне= (知らないふりをする),

көрбээчеңне= (見ないふりをする)

「～するふりをする, ～のふりをする」という意味をなす.

③ ロシア語動詞から形成する接辞

ロシア語動詞の最後の音	動詞の最終音節の母音	
	硬音, я	軟音
-й, -ь	-та	-те
-и	-ле	

例) решайта= (解決する, 決める), попробуйта= (試す, やってみる)

最近ではロシア語の動詞からトゥヴァ語の動詞が形成されることがある. その際にはロシア語動詞2人称命令形にトゥヴァ語動詞形成接辞 -ла (とその発音上のバリエーション) をつけて形成するようである.

1 4 . 1 . 2 . 動詞語幹の組み合わせ

派生動詞は、さまざまな動詞語幹の組み合わせや同じ動詞の肯定と否定の語幹の組み合わせ、また助動詞と擬声・擬態語の組み合わせによって形成される。

例) үнер-кирер (出入りする)

чедер-четпес (どうにかこうにか足りている)

билир-билбес (どうにかこうにか知っている, 知っているかいないかあいまいである)

ток кылыр (コンコンとノックする, トントンとたたく)

ток はノック音や何かを打つ音をあらわす擬声語

кызаш дээр (きらきら輝く)

кызаш は何かが光り輝くことをあらわす擬態語

1 4 . 2 . 動詞の肯定・否定形

すべての動詞は肯定および否定形で用いることができる。

例) кыл= (する), кылба= (しない)

肯定形は否定形と対置され、否定形はその形における特徴、すなわち否定接辞 -па とそのバリエーションからなる。

否定接辞は動詞の肯定形語幹 (さまざまな態接辞がついた語幹の後にも) につける。

この否定接辞はふつうアクセントをもつ。

否定接辞表

動 詞 語 幹 の 最 後 の 音	語 幹 の 母 音	
	硬 音	軟 音
無 声 子 音	-па (-пайн)	-пе (-пейн)
母 音	-ва (-вайн)	-ве (-вейн)
-й, -г, -л, -р	-ба (-байн)	-бе (-бейн)
鼻 音 子 音 (-м, -н, -ң)	-ма (-майн)	-ме (-мейн)

カッコ内の接辞は現在時制を形成するときの接辞である (1 4 . 1 0 . 2 . 現在時制参照)

例) тутпа= (つかまない), кеспе= (切らない), чугаалава= (話さない), мегелеве= (嘘をつかない), барба= (行かない), билбе= (知らない), хонма= (泊まらない), үнме= (外出しない)

さまざまな否定文の例

Мен ам өөрөнмейн тур мен.

(私は今勉強していません。) — 現在形

Мен бөгүн библиотекаже барбадым.

(私は今日図書館へ行かなかった。) — 近過去形

Кижилер аңнаашкынны соксатпаан.

(人々は狩りをやめなかった。) — 大過去形

Мен даарта озалдавас мен.

(私は明日遅刻しません。) — 未来形

Будуктар сыкпа.

(枝を折ってはいけません。) — 命令形

1 4 . 3 . 態

態（ヴォイス）の категорияは、動作の主体と客体とのあいだの関係をあらわす。

態の категорияは、まったく動詞語形変化に属するものである。ただ、いくつかの態をあらわす接辞があり動詞の語幹につけて形成するが、その際に態の意味のほか、新しい語彙的意味を加える。場合によっては態の形で固定しているが、まったく別の概念を意味する語がみられる。

例)

чугаала=（話す） + **ш**（共同・相互態） < **чугаалаш=**
（一緒に話す，誰かと話す）

көр=（見る） + **гүс**（使役態） < **көргүс=**（見せる）

дыңна=（聞く） + **т**（使役態） < **дыңнат=**（聞かせる，知らせる）

同じ動詞は同時に二つ以上の異なった態形態（の組み合わせ）をとりうる。

例) **бижиштир=**（一緒に書かせる），**кылыштир=**（一緒にやらせる）

イタリック体：共同・相互態 ゴシック体：使役態

例) **бодандыр=**（熟考させる），**уттундур=**（忘れさせる）

イタリック体：再帰態 ゴシック体：使役態

例) **бөлдүнүштүр=**（みんなで集まる機会を与える）

下線：再帰態 イタリック体：共同・相互態 ゴシック体：使役態

1 4.3.1. 基本（直接）態

基本（直接）態とは、態を形成する特別な接辞を持たない動詞形である。ここでは態の概念は、動詞のまさにその意味におかれる。

直接（基本）態の動詞は、二つのグループに分かれる。

- 1) 他動詞—何か客体に向けられた行為をあらわす動詞。

他動詞は直接目的語をとるとき、対格を必要とする。

例) **бизи=** (書く), **тут=** (つかむ), **көр=** (見る)

- 2) 自動詞—なんらかの客体に向けられていない行為もしくは状態をあらわす動詞

例) **чор[y]=** (行く), **олур=** (座る), **кел=** (来る), **чыт=** (横たわる)

疑問形 **Канчап тур ? Канчанган ? Канчаар ?** に答える形である。

1 4.3.2. 使役（使役・被動）態

使役態は以下のことをあらわす。

- 1) 動作が何か「使役」（命令や許可、要請もしくは願望—使役的意味）に従って直接主体によって行われること（～させる、～してもらう）。
- 2) 文法上の主体が被動的な意味で動作の理論上の客体となること（～される、ある行為に～にさらされる）。

例) **кестир=** ①切らせる、切ることを許してもらう、切ってもらう

②切られてある、手術を受ける

бижит= ①書かせる、書いてもらえるようお願いする

②書かれてある

自動詞に使役態の接辞がついた動詞は他動詞になり、他動詞に使役態の接辞がついた動詞は他動詞にも自動詞にもなるが、被動（受け身）の意味になるのは他動詞に使役態接辞がついた場合のみである（自動詞になる）。他動詞に使役態の接辞がついたとき、間接目的語は与格であらわされる（～を一にしてもらう）。

例) **Херел-оол иезинге тон даараткан.**

(ヘレル=オールは母親に服を縫ってもらった.)

使役態は疑問形 **Канчалдырар ?** に答える形である。

使役態には単一接辞と合成接辞とがある。

1) 単一接辞

①

動詞語幹の 最後の音	動詞の最終音節の母音	
	硬音	軟音
子音	-ыт, -ут	-ит, -үт
母音 -р (語幹が多音節の動詞)	-т	

例) **ужут=** (飛ばせる), **ажылдат=** (働かせる), **агарт=** (白くする)
Авазынга уруу эжиин ажиткан. (娘が母のためにドアを開けた.)
Ногаа шөлүнге өөреникчилерни ажилдаткан.
 (野菜畑で生徒たちを働かせた.)

②

動詞の最後の 音	動詞の最終音節の母音	
	硬音	軟音
無声子音 (-ш と -т で終わる語幹が 単音節動詞のいくつか以外)	-тыр, -тур	-тир, -түр
自鳴子音 (-р で終わる語幹が多音節 動詞のいくつか以外)	-дыр, -дур	-дир, -дүр
例外	-зыр, -зур	-зир, -зүр

例) **кастыр=** (掘らせる), **кылдыр=** (させる), **долдур=** (満たす),
иштир= (飲ませる)
Авазы уруунга сүттү иштирген. (母が娘に牛乳を飲ませた.)

③

動詞の最後の 音	動詞の最終音節の母音	
	硬音	軟音
-ш , -т (語幹が単音節動詞の いくつかの後)	-ыр, -ур	-ир, -үр

例) **быжыр=** (焼く), **ужур=** (倒す), **дүжүр=** (降ろす)

④

動詞の最後の音	動詞の最終音節の母音	
	硬音	軟音
無声子音	-кыр, -кур	-кир, -күр
有声子音	-гыр, -гур	-гир, -гүр

例) киир= < кигир= < киргир= (許す, 中へ運ぶ)

③の接辞の原形で, 古い形である.

⑤

動詞の最後の音	動詞の最終音節の母音	
	硬音	軟音
-к, -л (語幹が単音節動詞のいくつか)	-кыс, -күс -ыс, -үс	-кис, -күс -ис, -үс
-р (語幹が単音節動詞のいくつか)	-гыс, -гүс	-гис, -гүс

例) көргүс= (見せる), тургүс= (立てる, 設置させる), агыс= (流す: < ак=)
この接辞は④の接辞の発音上の変形で, トゥヴァ語では稀である.

2) 合成接辞 (第三者をとおして使役させる行為をあらわす)

①

動詞の最後の音	動詞の最終音節の母音	
	硬音	軟音
	-т[т]ыр, -т[т]ур	-т[т]ир, -т[т]үр

例) ажилдат[т]ыр= (誰かをとおして働かせる)

Авазы уруунга эжикти ажыттырган. (母が娘にドアを開けさせた.)

Оолдуң адын кырган-ачазыңга адаттырган.

(息子の名前を祖父に名づけてもらった.)

②

動詞の最後の音	動詞の最終音節の母音	
	硬音	軟音
無声子音	-тырт, -турт	-тирт, -түрт
有声子音	-дырт, -дурт	-дирт, -дүрт

例), кактырт= (誰かをとおして打たせる),

кылдырт= (誰かをとおしてさせる)

Башкы өөреникчиниң ада-иезин келдирткен.

(先生は生徒の両親を[学校に]来るよう呼び出した.)

母音で終わる動詞語幹に使役態接辞 -т がついた動詞語幹へ形動詞現在未来や副動詞 -а 形, 副動詞 -п 形の接辞がつく場合, 接辞 -т は有声化し д になる.

例) өөрөт= + -ир → өөрөретир → өөрөредир

кижизит= + -ип → кижизитип → кижизидип

-р, -й で終わる動詞語幹に使役態接辞がついた動詞語幹に形動詞現在未来や副動詞 -а 形, 副動詞 -п 形の接辞がつく場合, 接辞中の狭窄母音は脱落する.

例) өөрүт= + -үр → өөрүтүр → өөрүтүр

өөрүт= + -үп → өөрүтүп → өөрүтүп

上記以外に, 2つ, 3つの使役態接辞がつくこともある.

-ыр-т, ур-т, -ир-т, -үрт

-гыс-тыр, -гус-тур, -гис-тир, -гүс-түр

-ыс-тыр, -ус-тур, -ис-тир, -үс-түр

-тыр-т-тыр, -тур-т-тур, -тир-т-тир, -түр-т-түр

-дыр-т-тыр, -дур-т-тур, -дир-т-тир, -дүр-т-түр

-гыс-тыр-т, -гус-тур-т, -гис-тир-т, -гүс-түр-т

1 4 . 3 . 3 . 共同・相互態

共同・相互態は以下のことをあらわす.

1) 二つの主体間あるいは主体のグループ間で行われる行為.

2) 二つもしくはいくつかの主体間で行われる行為.

簡単に言えば, 「一緒に~する」, 「~することを手伝う, 協力する」, 「互いに~し合う」という意味を形成する.

共同・相互態を形成する接辞

動詞語幹 の最後の音	動 詞 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
子 音	-ыш	-иш	-уш	-үш
母 音	-ш			

例) тудуш= (お互いつかむ), ырлаш= (一緒に歌う)

共同・相互態接辞がついた動词语幹に、形動詞現在未来形や副動詞 -а 形、副動詞 -п 形のような母音で始まる他の接辞がつくと -ш は有声化する。

例) ырлажыр (形動詞現在未来形), ырлажып (副動詞 -п 形),
ырлажы (副動詞 -а 形)

そのさい、共同・相互態接辞中の挟母音は脱落して -ш が有声化する。

例) кириш= + -ип → киришип → киршип → киржип
көрүш= + -үп → көрүшүп → көршүп → көржүп

ш の有声化以外にも同様の場合で、共同・相互態接辞中の狭窄母音が脱落した結果、-ш は隣り合うことになった子音の無声あるいは有声音に応じて、またその単語中の位置に応じて以下の子音交替が起きる。

語幹最後の音 +接辞	В-ЫШ (В-ИШ...)	Г-ЫШ (Г-ИШ...)	Д-ЫШ (Д-ИШ...)	З-ЫШ (З-ИШ...)
母音脱落	- ВШ	- ГШ	- ДШ	- ЗШ
母音脱落後 の子音交替	- ПЧ	- КЧ	- ТЧ	- СЧ
例	ТЫВЫШ= (いっしょに 見つける) › тыпчыр тыпчып	СОГУШ= (いっしょに 叩く) › сокчур сокчуп	ТУДУШ= (掴み合う, 1 つになる) › тутчур тутчуп	КАЗЫШ= (いっしょに 掘る) › касчыр касчып
語幹最後の音+接辞	Л-ЫШ (Л-ИШ...)	М-ЫШ (М-ИШ...)	Н-ЫШ (Н-ИШ...)	
母音脱落 母音脱落後 の子音交替	- ЛШ - ЛЧ	- МШ - МЧ	- НШ - НЧ	
例	БОЛУШ= (弁護する) › болчур болчуп	ХӨМҮШ= (いっしょに 水滴を垂らす) › хөмчүр хөмчүп	БОДАНЫШ= (いっしょに 考える) › боданчыр боданчып	

例) Арыгда куштар ырлажы берген.

(森で鳥たちが歌い始めた.)

Танывазым кижибиле чугаалажып тур мен.

(私は知らない人と話している.)

Мен авамга ажылды кылчып тур мен.

(私はお母さんの仕事をいっしょにしている.)

Тарааны тарыжып тур мен. (穀物の種をいっしょに蒔いている.)

1 4 . 3 . 4 . 被動態

被動態は、主体がある一方の側から行為にさらされていることをあらわす。(受身「～れる」、「～られる」)。また、ある主体の行為が自分に向けられていること、あるいは、自分のために行われることもあらわす(この意味では再帰態に似ている)。

被動態を形成する接辞

①

動詞語幹 の最後の音	動 詞 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
子 音	-ыл	-ил	-ул	-үл
母 音	-л			

例) чарыл= (別れる), тывыл= (発見される, 現れる),
 хостал= (解放される), кадал= (突き刺される, 突き刺さる)
 Бо хемден хөй алдын тывылган.
 (この川でたくさんの金が見つけれられた)

②

動詞語幹 の最後の音	動 詞 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
子 音	-тыл	-тил	-тул	-түл

例) куттул= (注がれる)
 この接辞②はきわめて稀にしか用いられない。

-р, -й で終わる動詞語幹に被動態接辞① -ыл (とその発音上のバリエーション) がついた動詞語幹に, 形動詞現在未来や副動詞 -а 形, 副動詞 -п 形の接辞がつく場合, 接辞中の狭窄母音は脱落する。

例) чарыл= + -ыр → чарылыр → чарлыр
 чарыл= + -ып → чарылып → чарлып
 шөйүл= + -үр → шөйүлүр → шөйлүр
 шөйүл= + -үп → шөйүлүп → шөйлүп

本動詞語幹中に脱落母音 **г** を有している動詞語幹へ被動態接辞① **-ыл** (とその発音上のバリエーション) がついて形成された動詞語幹は、形動詞現在未来や副動詞 **-а** 形, 副動詞 **-п** 形の接辞がつく場合, 本動詞語幹中の脱落母音 **г** は, ふたたび現れた上で接辞中の狭窄母音は脱落する.

例) **чыыл (< чыгыл) = + -ыр → чылыр → чыгылыр → чыглыр**
ээл (< эгил) = + -ип → ээлип → эгилип → эглип

動詞語幹に被動態の接辞①がつき, 形動詞現在未来や副動詞 **-а** 形, 副動詞 **-п** 形, 副動詞 **-пышаан** 形にする場合, 接辞の母音が脱落し以下の子音交替が起きることがある.

語幹最後の音+接辞	в-ыл (в-ил ...)	г-ыл (г-ил ...)	д-ыл (д-ил ...)	ж-ыл (ж-ил ...)
母音脱落	-вл	-гл	-дл	-жл
母音脱落後の子音交替	-пт	-кт	-тт	-шт
例	тывыл= (現れる) › тыптыр тыптып	төгүл= (流れる) › төктүр төктүп	чадыл= (敷かれる) › чаттыр	дежил= (穴があく) › дештир дештип
語幹最後の音+接辞	з-ыл (з-ил ...)			
母音脱落	-зл			
母音脱落後の子音交替	-ст			
例	бузул= (割れる) › бустур буступ			

14.3.5.再帰態

再帰態は以下のことを意味する. ここでは K.B.クーラルの論文「トゥヴァ語における再帰態 **Возвратный залог в тувинском языке**」に依拠して叙述していく.

- 1) 主体の動作が自分自身に向けられること (自分自身を～な行為に向ける)
 主体にとって好都合な行為の場合, よく補語をとるが, その際 **-биле** 「～(道具)で」をとることも多い.

例) камгалан= (自分自身を守る),
артыжан= (アルトウシュで自分の体を清める)
чагдын= (香水などで自分を振りかける, つける)
Ол даш-биле чепсегленипкен. (彼は石を持って武装した.)

主体にとって好ましくない, 望んでいない行為にさらされる場合, とくに自分の意志とは関係なくさらされる場合, 突然の現象や行為あるいは危険の元凶となる物は, 与格または奪格であらわされる (「～に」さらされる). また, この意味をあらわす再帰態動詞は, 助動詞 ал= (「自分のためにする」行為をあらわす) や бер= (「行為の開始」をあらわす) を伴うことが多い.

例) боолан= (自分自身撃たれる), баглан= (縛られる)

Ол саратка чөленипкеш, айыырга шаштына берген.

(彼は干草の山にもたれると, 不意にも農業フォークに刺される危険に陥った.)

Мен консервадан (консервага) хораннаны берген мен.

(私は缶詰を食べてあたって.)

Мен бажымны кактынып алдым.

(私はうっかりして自分の頭を何かにぶつけてしまった.)

ある場合では, その行為が恒常的に行われること, 長時間に渡って行なわれること, 集中して行うこと (その行為に耽っていること), 何回もあるいは頻繁に行うこと, 仕事としてその行為に従事していること, という意味を加える.

例) дааран= (裁縫師をしている),
номчуттун= (いつも読書している),
сукуртун= (何度か鳴らす) < сукур= (鳴らす ; 1回),
оолан= (盗みの常習犯である)

この意味では, 再帰態と基本態 (態接辞がついていない形) とでは意味の違いがほとんど生じないことがあるが, 概して, 再帰態は動作主の身体全体にわたって動詞の意味する行為が及ぶときに用いられ, 行為が (手や足などの) 身体の一部のみに及ぶときは, 基本態あるいは使役態 (～を動かす) が用いられる傾向にある. しかし, そのなかでも再帰態がよく用いられる.

例) Удуп чыткан кижы шимчей берди.

(寝ていた人が [寝返りなど] 動き始めた. : 基本態)

Удуп чыткан кижы шимчени берди.

(寝ていた人が身体全体動かし始めた. : 再帰態)

Удуп чыткан кижы холун шимчетти.

(寝ていた人が片手を動かした. : 使役態)

2) 行為が自分自身のために、自分の利益のために、自分の興味のためになされること、自分のためにある状態に保っておくこと（自分自身のために～な行為をする）をあらわす。行為の対象物は与格または奪格であらわされる。

例) **саттын**=（自分のために買う）,

манан=（長い間〔自分の欲しい物〕を待つ）

чагактан=（雨や風などか自分を守るために隠れる、避ける）,

аспактан=（自分のために擱んでいる）

Эзир шеттен так аспактаныпкан.

（ワシはしっかりと若木に擱まっていた。）

Оглу авазынга чүктенипкен.

（子供は母の背にしっかりと負ぶさった。）

3) 動作主である主語の人物が、自分のためにある行為をして、その行為によって得られた結果の状態、その行為の結果ある特徴を帯びるようになったことをあらわす。

例) **малдан**=（〔家畜を購入する、もらうなどして〕その結果家畜を所有している状態にある、家畜を所有することになる）,

ашкалан=（〔何かをするなどして〕お金を得る、お金がある状態になる）

Байларның малын ядыыларга үлээн соонда, дыка хөй улус малданган.

（封建領主の家畜が貧しい人々に分配されて後、多くの人々が家畜を所有することになった。）

4) 再帰態は、よく被動（受け身）の意味で使われる。その際、この被動（受け身）の意味で用いられる動詞は、主として何か結果を伴う肉体的労働や行為を意味する動詞であり、主語は不活動体の物であることが多いが、活動体のときはふつう人よりも動物（家畜）のことが多い。

被動の意味で再帰態が形成されるとき、主として合成接辞 **-ттын** から作られる（以下の接辞表参照）。

例) **ажааттын**=（収穫される、刈り入れられる）,

септеттин=（修理される）,

суггартын=（水を飲ませられる、水を与えられる）

5) 「～してられない」や「～できない」、「～したい気持ちになる」などのように自然と沸きあがってくる感情をあらわす無人称文として用いられる。

主として否定形や肯定形の場合は反語表現で用いられる。

例) **ажылдаттынмас** (働く気にならない),
олуртунмас (じっと座ってられない),
удуттунмас (眠れない)

Хөй ижип алгаш, удуур дээрге, удуттунар деп бе?

(たくさんコーヒーを飲んで、寝ようとしても寝られますか? [寝られないでしょう])

再帰態は疑問形 **Канчатынар?** に答える形である。

再帰態を形成する接辞

1) 単一接辞

①

動詞語幹 の最後の音	動 詞 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
子 音	-ЫН	-ИН	-УН	-ҮН
母 音	-Н			

例) **бодан**= (自分自身よく考えてみる), **көрүн**= (自分を見る, ふり返る),
чун= (自分の身体を洗う, 洗面する)

この接辞から形成した再帰動詞の意味を補完するため, **бодун**「自分自身を ; 3人称所有接辞 ; 対格」がよくいっしょに用いられる。

例) **бодун чунар** (自分自身を洗う, 洗面する, 入浴する)

人 (活動体) が主語になる動詞 (自分自身に及ぶ行為や自分のためにする行為) はこの接辞から再帰態がよく形成される。

②

動詞語幹 の最後の音	動 詞 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
無声子音	-ТЫН	-ТИН	-ТУН	-ТҮН
有声子音 (鳴子音 р, л)	-ДЫН	-ДИН	-ДУН	-ДҮН

例) **кастын**= (掘り返す), **болдун**= (実現される)

2) 合成接辞

①

動詞語幹 の最後の音	動詞の最終音節の母音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
母音	-т[т]ын	-т[т]ин	-т[т]ун	-т[т]үн

例) **хынат[т]ын**= (チェックされる, 点検される), **адат[т]ын**= (呼ばれる),
чурут[т]ун= (自分を描く, 描かれる, 絵を描くことを職業とする)

この接辞は使役・被動態接辞と再帰態接辞が結合した形である。

被動の意味をとることが多く, 主語は物 (不活動体) であることが多い。

②

名詞の 最後の音	動詞の最終音節の母音	
	硬音	軟音
無声子音	-тан	-тен
-л	-дан	-ден
母音	-лан	-лен
母音 鳴子音 (-р, м, -н, -ң) -й, -г	-нан	-нен

例) **кулдан**= (奴隷化する), **тенектен**= (わがままな態度になる)

この接辞は名詞につけて再帰動詞を形成する。

ふつう, 再帰を表す場合, 上記の接辞のどれかを用いて形成するが, 同じ動詞語幹から単一接辞と合成接辞①の両方から形成するときもある。その場合, それぞれの動詞では意味が異なることが多く, 単一接辞から形成した動詞は, 自分自身に向けられる行為, あるいは自分自身のためになされる行為をあらわし, 合成接辞①から形成した動詞は, 主体が外部からある行為にさらされること, もっと簡単に言えば, 被動的な意味をあらわす。

例) **чугаалан**= (独り言を言う), **чугаалаттын**= (言われる)

-р, -ң で終わる動詞語幹に, 単一接辞 **-ын** (とその発音上のバリエーション) がついた動詞語幹へ形動詞現在未来や副動詞 **-а** 形, 副動詞 **-п** 形の接辞がつく場合, 接辞中の狭窄母音は脱落する。

例) көрүн = + -үр → көрүнүр → көрүнүр
 сыңын = + -ыр → сыңыныр → сыңыныр

以下の子音で終わる動詞語幹に再帰態接辞がつき、形動詞現在未来や副動詞 -a 形、副動詞 -п 形、副動詞 -пышаан 形にする場合、接辞の母音が脱落し、以下の子音交替が起きる。

語幹最後の音+接辞	В-ЫН (В-ИН ...)	Г-ЫН (Г-ИН ...)	Д-ЫН (Д-ИН ...)	З-ЫН (З-ИН ...)
母音脱落形	- ВН	- ГН	- ДН	- ЗН
母音脱落後の子音交替	- ПТ	- КТ	- ТТ	- СТ
例	тавын= (見つかる) › тыптыр тыптып	сагын= (思い出す) › сактыр сактып	одун= (目覚める) › оттур оттуп	казын= (掘る) › кастыр кастып
語幹最後の音+接辞	Ж-ЫН (Ж-ИН ...)	Л-ЫН (Л-ИН ...)		
母音脱落形	- ЖН	- ЛН		
母音脱落後の子音交替	- ШТ	- НН		
例	чажын= (隠れる) › чаштыр чаштып	кылын= (一瞬~する) › кынныр кыннып		

1 4 . 4 . 相 (アスペクト)

動詞の相 (アスペクト) は、行為 (もしくは状態) の長さや短さ、反復、頻度、開始と完成との関係におけるその特徴づけである。

トゥヴァ語では相は、1) 不定相、2) 完了相、3) 不完了相、4) 多回・同時相、5) 瞬間相、6) 律動相、7) 中止相に分けられる。そして、形成方法は、①動詞語幹に相をあらわす接辞をつけた形、②本動詞の副動詞形と助動詞を組み合わせた合成動詞形、③本動詞の形動詞形と助動詞 **тур=** や、**бол=**、**апар=** を組み合わせた形によってあらわされる。

1 4.4.1.不定相

不定相は他の相とは異なり，特別な接辞をもたず，行為が何らかの補足的特徴をもたないことをあらわす。

例) **ажылда**= (働く)，**тут**= (つかむ)，**бижи**= (書く)

1 4.4.2.完了相

完了相は行為の完成・完遂（～してしまう，～し終える）をあらわす。

① 接辞を用いる

完了相を形成する接辞

動詞の最後の音	動詞の最終音節の母音	
	硬音	軟音
無声子音	-ЫВЫТ, -УВУТ	-ИВИТ, -ҮВҮТ
有声子音	-ВЫТ, -ВУТ	-ВИТ, -ВҮТ

例) **салывыт**= (解放してしまう)，**биживит**= (書き終える，書いてしまう)

この接辞は，副動詞 **-п** 形と動詞 **ыт**= (自由の身にしてやる，行かせる) との一体化によってできたものである。

例) **салып + ыт > салывыт**=

この完了相の接辞に，形動詞や希求法，确实過去（1 4.1 0.1.参照）がつくと，接辞中の **-ыт** の部分が脱落し，副動詞 **-п** 形に形動詞や希求法，确实過去の接辞がついた形となることが多い。

例) **биживиткен > бижипкен** (形動詞完了；書いてしまった)

биживиттер > бижиптер (形動詞現在未来；書いてしまう)

биживитти > бижипти (确实過去；書いてしまった)

биживитсе > бижипсе (希求法；書いてしまうなら)

同様に，この完了相接辞に希求＝命令法の二人称複数接辞がつくと，**-выт-**，**-вут** は **-пт-** に，**-вит-**，**-вүт** は **-пт-** となり，命令形は **-птыңар**，**-птиңер** となる。

例) **Манаптыңарам.** (待ってください。) < **манавытыңарам**

Чайлыг болур болза, менче долгаптыңар. < **долгавытыңар**

(もし暇な時間があったら、私に電話してください。)

ただし、完了相接辞がついた動詞の希求＝命令法の二人称単数形は，語幹のままである。

例) **Биживит.** (書きなさい。)

② 完了相はまた、副動詞 **-a** 形あるいは副動詞 **-п** 形といくつかの助動詞との組み合わせによってもつくられる。助動詞によっては行為の開始や着手をあらわす。

動詞の副動詞形	助 動 詞	意 味
副動詞 -a 形	бар=	行為の完了をあらわす
	бер=	行為の開始や着手，完了をあらわす
副動詞 -п 形	кел=	行為が現在まで続いていることをあらわす
	ал=	自分のためにする行為をあらわす
	кир=	行為の開始や着手をあらわす
	үн=	行為の開始や着手をあらわす
	каг=	行為の完了をあらわす
	кал=	行為の完了をあらわす

例) **чоруй бар=** (去る), **чана бер=** (帰る), **тып ал=** (見つける)

③ 本動詞の形動詞形と、助動詞 **тур=** や **бол=**, **апар=** を組み合わせた形によってあらわされる。助動詞 **тур=** や **бол=** は「すでに～だったのだった，どうやら～だったのであった，～するのだった」，助動詞 **апар=** は形動詞現在未来形を要求して「～することになる，～することになった」と訳される。

例) **бижээн турган** (すでに書いたのだった)，
бижээн болган (どうやら書き終わったのだった)，
бижиир апарган (書く羽目になった)，
бижиир апаар (書く羽目になる)，
биживес апаар (書かないことになる，書くのをやめる)

1 4 . 4 . 3 . 不完了相

不完了相は、行為の未完遂（未完成，不完了）をあらわす。

副動詞 **-п** 形と助動詞の形動詞形との組み合わせによってつくられる。したがって、動詞の時制と密接に結びついている。助動詞の形動詞形が現在未来形ならば、現在進行形「～している」を形成し、助動詞の形動詞形が形動詞完了形ならば、過去進行形「～していた」を形成する。詳しくは1 4 . 1 0 . 1 . 直説法（過去・現在・未来時制）を参照。

例) **бижип турган** (書いていた)
бижип чоруур (いつも書いている)

1 4 . 4 . 4 . 多回・同時相

多回・同時相は行為の反復や同じ行為が別々の主体によって同時に行われることをあらわす。

多回・同時相をあらわす接辞

動詞語幹 の最後の音	動 詞 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
無声子音	-кыла	-киле	-кула	-күле
有声子音 母 音	-гыла	-гиле	-гула	-гүле

例) чыткыла= (何度も横になる, [何人かが]同時に横になる),

аткыла= (何度も射る, [何人かが]同時に射る),

келгиле= (何度も来る, [何人かが]同時に来る)

Мен аңнап чоргулаан мен. (私は猟をして暮らしてきた.)

Кызылга чоруп турган үемде албан черинге баргыладым.

(私はクズルに来たときはいつも役所に行った.)

1 4 . 4 . 5 . 瞬間 (をあらわす) 相

瞬間をあらわす相は、擬音・擬態語と助動詞 де=, ди= (～になる, ～な音がなる), кылын= (～になる, ～な音がなる), кыл= (～にさせる, ～な音をたてる) との組み合わせによってつくられる。

例) караш кынныр, караш дээр (ちらっと見える)

караш кылыр (ちらっと見え隠れするようになる)

кызаш кынныр, кызаш дээр (きらきらと光り輝く)

кызаш кылыр (きらきらと光り輝くようにする)

ажыш кынныр, ажыш дээр (つねってちくっとする)

ажыш кылыр (つねってちくっとなるようにする)

дирс кынныр, дирс дээр

(ビリッ, ボキッと割れる, 折れる, ひびがはいる)

дирс кылыр (ボキッと折れるようにする)

чажырт кынныр, чажырт дээр (ドスン, ガチャンと音がなる)

чажырт кылыр (ドスン, ガチャンと音をたてる)

чажырт

агараш дээр (白いものがちらっと見える)

1 4 . 4 . 6 . 律動相 (リズム相)

律動相 (リズム相) は、動作の適度な、頻繁に起きる (頻度の多い) 動作の律動性、すなわち、リズムカルな動きをあらわす。律動相は二種類に分かれる。

1) 適度な律動性 (リズムカルな動き) をあらわす接辞

動詞の最後の音	動詞の最終音節の母音	
	硬音	軟音
子音	-аңна, -ыңна, -уңна	-еңне, -иңне, -үңне
母音	-ңна	-ңне

例) кызаңна= (きらきら輝く), ажыңна= (ちくちくつねる),
элеңне= (ゆらゆら揺れる)

2) 頻繁に起きる動作をあらわす接辞

動詞の最後の音	動詞の最終音節の母音	
	硬音	軟音
子音	-аңайын, -ыңайын, -уңайын	-еңейин, -иңейин, -үңейин
母音	-ңайын	-ңейин

例) кызаңайын= (何度も光り輝く), ажыңайын= (何度もつねる),
элеңейин= (何度も揺れる)

Ыракта дээрде чаңнык кызаңайнып тур.
(空の遠い向こうのほうで稲光が光っている.)
Кудумчуда кижі элеңейнип чоруп олур.
(通りで人が身体を揺らしながら歩いている.)

14.4.7.中止相

中止相は、長期間にわたる動作の中止や停止をあらわし、以下の接辞をともなうてつくられる。

①中止相をあらわす接辞

動詞語幹の 最後の音	語幹の最終音節の母音	
	硬音	軟音
無声子音	-паста	-песте
母音	-васта	-весте
-й, -г, -л, -р	-баста	-бесте
-м, -н, -ң	-маста	-месте

例) ажылдаваста= (働くのをやめる),

келбесте= (来るのをやめる, 来なくなる),

бживесте= (書くのをやめる)

Мээң кады чоруп турган эжим чорбастай берген.

(私といつもいっしょに行っていた友人が行けなくなった.)

Мен чоокта чаа арага ишпестей бердим.

(最近私はお酒を飲まなくなった.)

Кылын хар чаганындан, шуурганның күштелгенинден орук көзүлбестээн.

(大雪が降ったため、また吹雪が強まったために道が見えなくなりました.)

接辞 **-паста** は、形動詞未来形否定接辞 **-пас** と名詞から動詞を形成する接辞 **-та** からつくられている。

②上記 14.5.2.完了相のところでも述べた、形動詞現在未来形の否定形に助動詞 **апар=** とを組み合わせて用いても、中止の意味をあらわすことができる。助動詞 **апар=** の基本的な意味は「～になる」である。

例) бживес апарган (書かないことになった, 書くのをやめた)

☆ 相の形は、態の形と同様、一つの動詞で異なる相を同時に用いることができる。

例) бжигилевит=

(何度も書き終えたものだ, すべてのページに署名する)

ажыткаылавыт= (何回も開ける, すべてのドアを開ける)

ゴシック体: 多回・同時相 イタリアック体: 完了相

また、一つの動詞で態と相を同時に用いることができるが、そのさい接辞の順序は、①態 + ②相 である。

例) **бижиткеле=** (なんども書かせる)

ゴシック体：使役態 イタリック体：多回・同時相

動詞が助動詞とともに使われる場合、相の接辞は本動詞につけてもよい。

例) **Кызылдың херээженнери базаардан помидорлар болгаш улуг ногаан-ала арбузтарны корзинкаларында долдур саткылап алган чанып турлар.**

(クズルの女性たちは市場でトマトや緑色で縞模様のある大きなスイカを籠いっぱい買って、帰っている.)

1 4 . 5 . 形動詞

形動詞は文中において述語および定語（修飾語）となり、定語（修飾語）になるときは修飾する名詞の前に置く。

形動詞は所有接辞がつくと名詞化する（～したこと、～すること）ので格変化接辞をつけることができ、名詞のように用いて主語や目的語などになることができる。そのため後置詞とともに使うこともできる。その際、格変化接辞や人称接辞、後置詞は従属複文においては文中関係におけるシンタグマ的手段となる（1 4 . 1 2 . 動詞の名詞化参照）。

例) **Мен келгенимде, силер бортта турган силер.**

(私が来たとき、あなたはそこにいた.)

кел= : 動詞「来る」の語幹

-ген : 形動詞完了形

-им : 人称接辞

-де : 位格

Мен келгенимнің соонда, силер чоруй барган силер.

(私が来た後で、あなたは去った.)

кел= : 動詞「来る」の語幹

-ген : 形動詞完了形

-им : 人称接辞

-нің : 属格

トゥヴァ語には三つの形動詞形、すなわち1) 形動詞完了、2) 形動詞現在未来、3) 形動詞予期（必然未来）がある。

また、形動詞に対して接続関係にあるのは、「**кы дег**」構文（形動詞可能性）である。

1 4 . 5 . 1 . 形動詞完了

形動詞完了の基本的な意味は、行為もしくは状況が過去に起きたこと、あるいは発話時に過去に属していたことをあらわす。なかでもとくに、発話時点のずっと前に起きたことをあらわす。

例) **тараан тараа** (播種した穀物)

тараан : 定語

Тараа тараан. (穀物を播種した.)

тараан : 述語

ときには現在行われている行為や状況をあらわすこともある。

例) **бо турган инек** (今ここにいるウシ)

それ以外に、形動詞完了は、それが従属文の述語であるときは未来の意味(あるいは条件)で使われる(あるいは条件をあらわす)。ただし、主文の述語が形動詞現在未来であらわされるときに限る。諺などで用いられる。

例) **Көшкенде – тебе херек чок, кешкенде – хеме херек чок.**

(**諺**遊牧の移動が済めばラクダは不必要になる、川を渡れば船は不必要になる.)

形動詞完了が、副動詞や形動詞の前に置かれるとき、この形動詞は、どのような様子あるいは状態で主行為が行われているかを示す。

例) **Кежээликтей кедергей аштаан чанып келдивис.**

(夕方、とてもお腹を空かせて、私たちは家に帰った.)

Лайка деп ыттарны шанактап алган чоруурун көргөн сен бе?

(ライカという犬をそりにつないで、そりを走らせているのを見たことがあるかい?)

形動詞完了の接辞

動 詞 語 幹 の 最 後 の 音	動 詞 の 最 終 音 節 の 母 音	
	硬 音	軟 音
無 声 子 音	-кан	-кен
有 声 子 音 母 音	-ган	-ген

例) **туткан** (つかんだ), **дүшкен** (落ちた), **дужааган** (引き渡した),
барган (去った), **келген** (やって来た)

動詞語幹が短母音で終わっているときに接辞 **-ган** // **-ген** をつけると、接辞の最初の音素 **г** は二つの母音に挟まれることになり脱落する、その結果、二つの短母音は一つの開口長母音となる。とくに否定接辞 (**-па** とそのバリエーショ

ン) をつけるとこの変化が起こる.

例) халаан (ジャンプした) < халы= + -ган → халыган → халыан
→ халаан
бижээн (書いた) < бижи= + -ген → бижиген → бижиен → бижээн
номчаан (読んだ) < номчу= + -ган → номчуган → номчуан
→ номчаан
биживээн (書かなかった) < бижи= + -ве + -ген → биживеген
→ биживеен → биживээн
чуруваан (描かなかった) < чуру= + -ва + -ган → чуруваган
→ чуруваан

しかし、動詞語幹が、**дужаа=** のように二つの母音で終わる場合、語幹に接辞 **-ган // -ген** をつけても音素 **г** は脱落しない。

例) **дужаа= + -ган** → **дужааган** (渡した)

形動詞完了に接辞 **-зыг (-зиг)** をつけて物事の様態 (～のような) をあらわす形容詞を形成することがある (1 1.1.1.名詞や形容詞, 副詞から形容詞を形成する接辞 3) を参照).

例) **Бодаарымга, чаштып ойнап чораанзыг бис.**

(考えてみると、私たちはお互い隠れたり現れたりして遊んでいたようだ.)

1 4.5.2.形動詞現在未来

形動詞現在未来は次のことをあらわす。

- 1) 行為もしくは状況が未来に起こること、未来に属していること。
- 2) 形動詞現在未来形であらわされた行為もしくは状況が日常的なことであること。

例) **суглаар хөл** (いつも水を汲みに行く湖)

суглаар : 定語 ; 日常的行為

Хөлдөн суглаар бис. (私たちは湖に水を汲みに行くつもりです.)

суглаар : 述語 ; 未来の意味

Хөлдөн суглаар. (いつも湖に水を汲みに行っている.)

суглаар : 述語 ; 日常的行為

この意味においてよく物の名称や用語・術語などに用いられる。

例) **соңгуур эрге** (選挙権), **соңгудар эрге** (被選挙権), **чунар бажың** (風呂, サウナ), **кезер эмчи** (外科医)

3) 助動詞 **херек** (～しなければならない; 意味上の主語は与格), **ужурлуг** (～する必要がある, ~しなければいけない; 意味上の主語は主格) とともに使われる.

助動詞 **херек** を用いるときは形動詞に所有接辞をつけることもある.

例) **Сеңээ ажылга келири херек.** (君は仕事に来ないといけない.)

Чечектерни маңаа олуртур ужурлуг мен.

(私はここに花を植えないととといけない.)

4) **билек** (～するやいなや) や **-биле** (～するやいなや) は形動詞現在未来形に所有接辞をつけた形で用いられる.

例) **Даң адып кээри-биле, куштар ырлажы бээр.**

(夜が明けるやいなや鳥たちは鳴き始める.)

« **Ам чорааш, оон черле эеп келбес мен** » - деп шиитпирлээш, шак эдери билек, ол үнүпкен.

(「今出かけたら, ぼくはそこから決して戻って来ない」と決心し, そう言うやいなや彼は出ていった.)

5) 従属文中で形動詞現在未来形が前置格 **-да** (とそのバリエーション) と用いられる場合, 行為の同時性あるいは目的をあらわす (「～するとき, 同時に・・・している」; 「～するために, ...である」).

例) **Чаъс чаарда, хөл кыдыынга чораан бис.**

(雨が降ったとき, 私たちは湖のそばにいた.)

6) 従属文中で形動詞現在未来形が与格 **-га** (とそのバリエーション) と用いられる場合, 従属文中の行為が主文に先行していること, あるいは主文であらわされること条件をあらわす (「～した後, ...だ」; 「～すれば, ...だ」).

例) **Чылыг дүжерже, тарылга эгелээр.**

(暖かくなったら, 播種が始まる.)

Ойнаваска дыка-ла чалгааранчыг. (遊べないととても退屈だ.)

7) 主文の述語が完了の形動詞であらわされているなら, 従属文中の述語となる形動詞現在未来形は過去の出来事もあらわすことができる.

例) **Чаъс чаарда, хөл кыдыынга чораан бис.**

(雨が降ったとき, 私たちは湖のそばにいた.)

чаар : 従属文中の形動詞現在未来形

чораан : 主文中の形動詞完了

8) 形動詞現在未来形は、希求=命令法のように、お願い(～してください)や許可(～してもよい、～することができる)のニュアンスを与えることがある。

例) Мээң дыңнадыымны дамчыдыптар силер бе.

(私のメッセージを伝えてくださいますか?)

Бо дугаар-биле менче долгаптар силер.

(この番号で私に電話してください。この番号で電話をかけることができます。)

形動詞現在未来形は以下の接辞を動詞語幹につけて形成する。

形動詞現在未来の接辞

動詞語幹 の最後の音	動 詞 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
子 音	-ар, -ыр	-ер (-эр), -ир	-ар, -ур	-ер (-эр), -үр
-а, -е (-э)	-ар	-ер (-эр)	-ар	-ер (-эр)
-ы, -и, -у, -ү	-ыр	-ир	-ур	-үр

例) кылыр (する), билир (知っている), чоруур (行く), хуваар (分ける)

形動詞現在未来の否定接辞

動 詞 語 幹 の 最 後 の 音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音	
	硬 音	軟 音
無 声 子 音	-пас	-пес
母 音	-вас	-вес
-й, -г, -л, -р	-бас	-бес
-м, -н, -ң	-мас	-мес

例) ажылдавас (働かない), келбес (来ない), биживес (書かない),
барбас (行かない), чунмас (洗わない)

この形動詞の否定接辞 -пас は、それ自身接辞 -с を含んでいる。この接辞は歴史的には接辞 -[a]p と一致する。

母音 + -т で終わる動詞語幹に、形動詞現在未来形の接辞がつく場合、-т は有声化して д になる。

例) өөрөт= + -ир → өөрөтир → өөрөдир (教える)

кижизит= + -ер → кижизитер → кижизидер (養育、育成する)

-г で終わる動詞語幹は，形動詞現在未来の接辞がつくと，-г は脱落し一つの長母音になる。

例) чаг= + -ар → чагар → чаар (塗る)

эг= + -ер → эгер → эер → ээр (帰る，戻る)

-л と -р で終わる動詞語幹は，形動詞現在未来の接辞がつくと，-л や -р が脱落し，一つの長母音になることがある。それは，語幹が一音節でできている動詞の場合であるが，すべての動詞ではない。

例) бар= + -ар → барар → баар (行く)

бер= + -ер → берер → беер → бээр (与える，渡す)

көр= + -үр → көрүр → көүр → көөр (見る)

ал= + -ыр → алыр → аыр → аар (取る)

бол= + -ур → болур → боур → боор (～である)

кел= + -ир → келир → кеир → кээр (来る)

下線の動詞は両方使うことができる。

脱落しない例)

бөл= + -ер → бөлөр (一ヶ所に集める)

кыл= + -ыр → кылыр (する)

чар= + -ар → чарар (割る)

態や相の接辞がついて多音節になった合成動詞語幹や，多音節語幹に形動詞現在未来形接辞がつくとき，以下の場合に語幹最後の子音 й や狭窄母音 (ы, и, у, ү) は脱落する。態や相の接辞がついている場合は接辞中の狭窄母音のことである。しかも態や相の動詞語幹接辞の母音が脱落した後に子音交替が起きるときがある。詳しくはそれぞれの態や相の項目参照のこと。

1) -н, -р, -л で終わる動詞語幹に狭窄母音で始まる態や相の接辞がついて合成動詞語幹を成しているとき。

例) көрүң= + -үр → көрүнүр → көрнүр (見る，振り返る)

көдүрүл= + -үр → көдүрүлүр → көдүрлүр (上る)

алыс= + -ыр → алысыр → алсыр → алзыр
(～の手に落ちる)

боданыш= + -ыр → боданышыр → боданшыр
→ боданчыр (いっしょに考える)

кылаңайың= + -ыр → кылаңайыныр → кылаңайныр
(ピカピカ輝く)

2) 語幹最後において狭窄母音を **й** と **т** が挟む語幹のとき.

例) айыт= + -ыр → айытыр → айтыр (指す, 示す)

形動詞現在未来形に所有接辞 (3人称を除く) がつくと, 接辞 **-р** が脱落することがある. その際には接辞 **-р** が脱落し, 一つの長母音となる

例) ыглаксаам (私は泣きたい) < ыглаксааым < ыглаксаарым
хөглөксээм (私は楽しみたい) < хөглөксээим < хөглөксээрим

1 4 . 5 . 3 . 形動詞予期 (必然未来)

形動詞予期は, 行為もしくは状況がまだ行われていないが, 発話時においては行われていなければならないこと, 行われることが予期されること, すなわち必然未来をあらわす.

しかし, ニュアンスとしては, 行為もしくは状況が自然現象に関するものであれば, 必ず起こる必然未来をあらわすが, 人の行為に関するものであれば, 必ずしも起きる, その人がするとは限らないようである.

この形動詞の接辞には肯定的および否定的意味が含まれる. 否定接辞 **-па** (とその発音上のバリエーション) をつけることはできない.

例) бышкалак кат

(まだ熟していないが, もうすぐ熟すであろう果実)

Кат бышкалак.

(果実はまだ熟していないが, もうすぐ熟すはずである.)

この形動詞予期形が過去のことを述べている叙述中にある場合, しばしば **арай** (少し, ちょっと), **ам-даа** (まだ, まだ今のところ), **өйүндө** (ちょうどそのとき), **ынчаарда** (そのとき) といっしょに用いられて, 「(まだ) ~していなかった, 行われていなかった」という意味になる. ただし発話時においては実現されているはずである.

形動詞予期形は他の形動詞と同様に格接辞や所有接辞もつくことができる. とくに, **-галакта** は「まだ~していないときに」という従属節をつくる.

形動詞予期は, **Канчалгалак ? Чүнү кылгалак ? Чүү болгалак ?** の疑問形に答える形である.

形動詞予期の接辞

動詞語幹の 最後の音	動詞の最終音節の母音	
	硬音	軟音
無声子音	-калак	-келек
有声子音 母音	-галак	-гелек

例) ушкалак (まだ飛んでいないが、いまにも飛び立ちそうな)

аткалак (まだ射ていないが、いまにも射る)

баргалак (まだ去っていないが、もうすぐ立ち去りそうな)

келгелек (まだ来ていないが、もうすぐ来る)

動詞語幹が母音で終わっているとき接辞 **галак** // **гелек** をつけると、接辞の最初の音素 **г** は二つの母音に挟まれることになり脱落する。その結果、動詞語幹の最後の母音は接辞の母音と一体化して一つの開口長母音になる。つまり、母音のときは **-аалак** (硬音のとき) か **-ээлек** (軟音のとき) になる。

例) халаалак < халы= + -галак → халыгалак → халыалак
→ халаалак

(まだジャンプしていないが、いまにもジャンプしそうな)

бижээлек < бижиге= + -гелек → бижигелек → бижигелек
→ бижээлек

(まだ書いていないが、いまにも書き出しそうな)

いくつかの例文を挙げておこう。

例) Мээн эжим хуралга келгелек.

(私の友人は会議にまだ来ていない[もうすぐ来るはずで私は待っている；でも何か起きてもしかしたら来ないかもしれない].)

Хуусаа четкелекте ажылывысты доостувус.

(私たちは期限内に仕事を終えた[直訳：期限はきていないがいままさに過ぎようとするときに・・・].)

Ажылга чедингелек чор мен.

(仕事が見つかるはずだ [でも、もしかしたら見つからないかもしれない].)

Хүн элээн бедип келгенде, изиг дүшкелекте, Кызыл уундан доозун кестү берди.

(太陽がかなり高く昇り、まさに暑くなろうとしていたときに、クズルの街外れから砂ぼこりが見えてきた.)

1 4 . 5 . 4 . 形動詞現在

上記の形動詞のほかに、トゥヴァ語には以下のような形動詞現在形が存在した。現在では性質をあらわす形容詞、あるいは名詞として用いられている。したがって、形容詞形成接辞あるいは名詞形成接辞とみなすことができるかもしれない。また、形成接辞 1) と 2) は生産的接辞とはいえない。

現代トゥヴァ語では現在形をあらわすにはこの形動詞現在形は用いられずに、「副動詞 -п 形 + 助動詞 **тур (ар), олур (ар), чыдар, чор (уур)**」の形を用いる (1 4 . 1 0 . 1 . 2 . 現在時制を参照)。

1)

動詞語幹の 最後の音	動 詞 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
	-ыган	-иген	-уган	-үген

例) үнүген (植物が早く育っている), өзүген (動物や植物が早く育っている), чаныган (すぐに帰りがる), көрүген (よく見えている, 視力のよい)
この接辞は行為を完成させる志向や能力, 資質をあらわす。

2)

動 詞 語 幹 の 最 後 の 音	動 詞 の 最 終 音 節 の 母 音	
	硬 音	軟 音
	-ачы (-аачы)	-ечи (-ээчи)

例) бижээчи (いつも書いている ; 書記)

この接辞はその人に特有な行為あるいは状態をあらわす。また、その特有の行為を行う人をもあらわす。

3)

動詞語幹の 最後の音	動 詞 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
子 音	-ыкчы	-икчи	-укчу	-үкчү
母 音	-кчы	-кчи	-кчу	-кчү

例) ажылдакчы (働いている ; 労働者), номчукчу (読んでいる ; 読者)

この接辞も接辞 2) と同様にその人に特有な行為あるいは状態をあらわす。また、その特有の行為を行う人をもあらわす (1 0 . 1 . 2 . 動詞から別の名詞を形成する接辞の 2) を参照)。

1 4 . 5 . 5 . 「 -кы дег 」 構文 (形動詞可能性)

「 -кы дег 」 構文は, 行為もしくは状況が, もしかしたら行われるかもしれないことをあらわす.

この構文は形動詞の接辞 **-кы** と後置詞 **дег** とからなっている.

動詞語幹の 最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
無声子音	-кы дег	-ки дег	-ку дег	-кү дег
有声子音 母 音	-гы дег	-ги дег	-гу дег	-гү дег

例) **келги дег** (来るであろう)

билги дег (知っているかもしれない)

Өршээп болгу дег болур. (許すに値する)

Келир үеде болу берип болгу дег эпчок болушкуннары, хай-бачытты баш удур чайладып болурунун аргалары турар бе?

(将来起こるかもしれない不都合な出来事や不幸を前もって防ぎうる方法でありますでしょうか?)

Ыяш хөй-даа болза, кезип апкы дег дыттар белен таварышпас мындыг.

(木はたくさんあるけれど, 伐採できるようなカラマツの木は容易には見つけられないというものさ.)

Мактангы дег чүве-даа кылбаан мен.

(ぼくは誇れるようなことなんかしなかったよ.)

1 4 . 6 . 副動詞

副動詞は形動詞や法と異なり，人称および格変化はしない．すなわち，ふつう副動詞形に他の接辞はつかない．副動詞接辞 **-каш** および **-пышаан** に特有な人称および格変化は古い変化の名残であり，副動詞が形動詞から発生したことを物語っている．

現在，トゥヴァ語には次の副動詞形がある．

- 1) 副動詞 **-а** 形
- 2) 副動詞 **-п** 形
- 3) 副動詞 **-каш** 形
- 4) 副動詞 **-пышаан** 形
- 5) 副動詞 **-кала** 形
- 6) 副動詞 **-пайн** 形

副動詞は各々その副動詞個有の意味を持っているが，副動詞はすべて，主として合成動詞もしくは他の組み合わせ，すなわち通常文中で述語もしくは状況語の役割（行為の様子や時，原因，目的の説明）を果たす組み合わせの一要素である点でお互い似ている．

副動詞は上記のそれぞれに対して，1) **Канчай (беген)?**， 2) **Канчап?**， 3) **Канчалгаш?**， 4) **Канчалбышаан?** ， 5) **Канчалгала? (Канчаала?)** 6) **Канчалбайн?** の疑問形に答える形である．

1 4 . 6 . 1 . 副動詞 **-а** 形

副動詞 **-а** 形は接辞 **-а**（とその発音上のバリエーション）を動詞語幹につけてつくる．

副動詞 **-а** 形の接辞

動詞語幹の最後の音	語幹の最終音節の母音			語幹の最終音節の母音		
	硬音			軟音		
母音	母音 а	出沒母音		母音 е	出沒母音	
子音	-а	-ы	-ы, -у	-е	-и	-и, -ү
-г	-ый, -уй			-ий, -үй		
母音	-й					

例) **кыла** (して), **туда** (つかんで), **боданы** (考えて), **чугаалай** (話して), **чыый** (集まって), **көре** (見て), **билеткей** (準備して), **эгейей** (始めて), **эйи** (引き返して)

母音 + **-т** で終わる動詞語幹に副動詞 **-а** 形の接辞がつく場合，**-т** は有声化

し **д** になる.

例) **тут**= (つかむ) + **-а** → **тута** → **туда**

ырлат= (歌わす) + **-ы** → **ырлаты** → **ырлады**

出没母音が脱落する場合には **-ы**, **-у**, **-и**, **-ү** が用いられる. その結果, 形としては形動詞現在未来形 **-ар** 形の最後の **р** が落ちた形になる.

例) 下線部は出没母音

айыт= (指す, 示す) + **ы** → **айты** (形動詞現在未来形 **айтыр**)

кирииш= (参加する) + **и** → **киржи** (形動詞現在未来形 **киржир**)

ужуул= (脱ぐ) + **у** → **ушту** (形動詞現在未来形 **уштур**)

出没母音脱落の結果, 隣り合うことになった二つの子音は有声化か無声化のどちらかに同化する.

また語幹最後の子音の前に母音 **а** があるときは, 接辞は **-ы** が, 子音の前に母音 **е** があるときは, 接辞は **-и** が用いられる (ただし, 語幹が1音節のみでできている動詞は **-а**, **-е** のまま).

例) **бодан**= (考える) → **боданы**

өөрен= (学ぶ) → **өөрени**

cf. **аттын**= (撃たれる) → **аттына**

бар= (行く) → **бара**

эт= (直す) → **эде**

動詞語幹が **-г** がで終わる場合, 接辞は **-ый**, **-уй**, **-ий**, **-үй** となる. その際, 母音に挟まれることになった **-г** は脱落して隣り合った二つの母音は融合して一つの長母音となる.

例) **чаг**= (塗る) + **-ый** → **чагый** → **чаый** → **чаай**

эг= (帰る, 戻る) + **-ий** → **эгий** → **эий** → **ээй**

уг= (持ち上げる) + **-уй** → **угуй** → **ууй**

副動詞 **-а** 形の用法と意味

1) 主たる行為と同時にされる補足的行為をあらわす.

例) **Номну чыда номчува.** (寝ころんで本を読むな.)

2) 助詞 **-тыр** (とその発音上のバリエーション) と組み合わせて用い, いわゆる直説法の本人のいないところで行われている (言われている) 行為, 遠くのほうで行われている行為をあらわす時制 (叙法ニュアンス) を形成する. また, とくに過去のことについて述べられるとき, 歴史的叙述をあらわす.

例) **Ырлай-дыр.** (だれかが歌っている[のが聞こえる].)

Арыгда уруглар алгыржы-дыр, артывыста машина дагжай-дыр.

(森で子供たちが叫んだ[のが聞こえた], 私たちの後方で車がクラクションを鳴らした[のが聞こえた].)

- 3) 相や時制をあらわす助動詞と組み合わせて用いられる。たとえば、助動詞 **бер=** と組み合わせて行為の開始や完了をあらわす。助動詞 **ал=**(否定形 **алба=**) と組み合わせて行為を行う可能・不可能性、あるいは能力の可否をあらわす(14.13.助動詞の助動詞表参照)。

例) **Ырлажы берген.** (合唱し始めた.)

Бижий берген. (書き始めた.)

Кичээлдей берген. (勉強し始めた.)

Ол үне берген. (彼は出て行った.)

Бис ачавыска акша чорудуп турар бис, чүге дээрге ол ажылдай албас апарган.

(私たちは、父親が働くことができなくなったので、お金を送ってあげている.)

- 4) 同じ動詞の副動詞 **-a** 形を繰り返すことによって、行為が集中して行われ、しかも長期化することをあらわす。この場合、同意語の動詞を並べるバリエーションもある。

例) **хорадай-хорадай** (ずっと怒って)

корга-корга чугаалаар

(ずっと恐れながら話す; 上記1) 主行為の補足的行為の長期化とも解釈できる)

алгыра-кышкыра (長い間, 大きな声で叫んで)

- 5) 先行する副動詞 **-a** 形の語彙的意味を弱化させる機能をもつ助詞 **аарак** (すこしばかり, ちょっと) と組み合わせて用いる。

例) **хүлүмзүрүй аарак** (少し微笑んで)

хорадай аарак (少し怒って)

- 6) 助動詞 **тур=**, **олур=**, **чыт=**, **чор (y)=** の副動詞 **-a** 形は口承文学作品のなかで、著者(語り手)がセリフと地の文とを分けるときに用いることが多い。この場合よく用いられるのは助動詞 **тур=**, **олур=** であるが、この使い分けはそれぞれの場面でセリフを話す登場人物が「立って」言うのか、「座って」言っているのかの違いである。同様に助動詞 **чыт=**, **чор (y)=** はそれぞれ「横になって」言うとき、「歩きながら」言うときである。

例) Ашак кайгап-харап тура :

– Үяш херек – деп харыылаан.

...

Кадайы олура :

– Чүге куруг келдин, чалгаапай!– дээш кончуй-ла берген.

Ирей, кадай биле алдын кушкаш

«Алдын кушкаш. Уругларга тоолдар»

Тываның ном үндүрер чери, Кызыл, 2002, арын 3

(夫は驚いて (立ったまま言った) :

「木材が必要だ。」と答えた.

...

彼の妻は (座ったまま答えた) :

「どうして手ぶらで帰ってきたの, この怠け者!」と言って文句を言い始めた.)

Ирей, кадай, биле алдын кушкаш

«Алдын кушкаш. Уругларга тоолдар ,

Кызыл, 2002, арын 3

1 4 . 6 . 2 . 副動詞 -п 形

副動詞 -п 形は, 接辞 -п (とその発音上のバリエーション) を動詞語幹につけてつくる.

副動詞 -п 形の接辞

動詞語幹の 最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
子 音	-ып	-ип	-уп	-үп
母 音	-п			

例) кылып (して), бөлүп (一か所に集めて), манап (待って),
бижип (書いて)

母音 + -т で終わる動詞語幹に副動詞 -п 形の接辞がつく場合, -т は有声化して д になる.

例) өөрөт= (教える) + -ип → өөрөтип → өөредип
тут= (つかむ) + -уп → тутуп → тудуп

態や相の接辞がついて多音節になった合成動詞語幹や多音節語幹に副動詞 -п 形接辞がつくとき, 以下の場合に語幹最後の 子音 й や狭窄母音 (ы, и, у, ү)

は脱落する。態や相の接辞がついている場合は接辞中の狭窄母音のことである。しかも態や相の動詞語幹接辞の母音が脱落した後に子音交替が起きるときがある。詳しくはそれぞれの態や相の項目参照のこと。

1) -н, -р, -л で終わる動詞語幹に狭窄母音で始まる態や相の接辞がついて合成動詞語幹を成しているとき。

例) көрүң= (見る) + -үп → көрүнүп → көрнүп
 көдүрүл= (上る) + -үп → көдүрүлүп → көдүрлүп
 алыс (～の手に落ちる) + -ып → алысып → алсып
 → алзып
 кириш= (参加する) + -ип → киришип → киршип
 → киржип
 боданыш= (いっしょに考える) + -ып → боданышып
 → боданшып → боданчып
 ужул= (脱ぐ) + -уп → ужулуп → ужлуп → уштуп
 кылаңайың= (ピカピカ輝く) + -ып → кылаңайынып
 → кылаңайнып

2) 語幹最後において狭窄母音を й と т が挟む語幹のとき。

例) айыт= (指す, 示す) + -ып → айытып → айтып

語幹最後が -л, -м, -ң, -г, -к, -п で終わる子音は副動詞 -п 形の接辞がつくとき, 前記の語幹最後の子音は脱落し, その結果隣り合うことになった母音は長母音化する。

例) бол= (起きる) + -уп → болуп → боуп → бооп
 каг= (残す, 去る) + -ып → кагып → каып → каап
 кел= (来る) + -ип → келип → кейп → кээп
 хөм= (掘る) + -үп → хөмүп → хөүп → хөөп

一部の動詞は語幹最後の子音とそのすぐ後ろの副動詞 -п 形の接辞の前半部 -ы-, -у-, -и-, -ү- もいっしょに脱落する。

例) ал= (取る) + -ып → алып → а(лы)п → ап
 төк= (流しだす) + -ып → төкүп → тө(кү)п → төп
 тып= (見つける) + -ып → тывып → ты(вы)п → тып

語幹最後の子音が -р と -л で終わる動詞に副動詞 -п 形の接辞がつくとき, 接辞がすべて脱落して動詞語幹のみ残る場合がある。これは慣用的に使われる

動詞に限定されると考えられる。以下の動詞がそうである。

例) **барып чор** → **бар чор**

келип чыдар → **кел чыдар**

Кел чыдар Чаа чыл-биле!(来たるべく新年おめでとう！;よいお年を！)

副動詞 **-п** 形の意味と使用法

- 1) 助詞 **-тыр** (とその発音上のバリエーション) と組み合わせて用い、以前に起きた出来事あるいは話者の目の前で行われていなかった行為 (～のようだ, どうやら～のようだ), 他の人から聞いた話を, 自分がそれらの出来事の証人であるかのように叙述的に述べていることをあらわす (～だと言う, ~だそうだ)。1 4.1 0.1.1.過去時制の6) 叙述過去を参照すること。

例) **Келип-тир.** (来たようだ.)

Чаагым үжүй берип-тир.

(頬が硬くかじかんできているようだ.)

この用法は叙事詩や民話によく用いられる。

例) **Шыяан ам, эртенгиниң эртезинде, бурунгунуң мурнунда бир черге кырган ашак, кадай чурттап чоруп-тур.**

(さあ, 始めよう, むかしむかしのその昔, あるところにおじいさんとおばあさんが住んでいたそうだ.)

- 2) 助動詞と組み合わせて, 志向や相, 時制の補足的かつ叙法的な特徴をもった行為をあらわす。その際, 語彙的意味を担うのは副動詞 **-п** 形自身である。「～して」と訳すといちばん当てはまる。副動詞 **-п** 形とともに用いる助動詞にどのようなものがあるかは, 1 4.1 1.助動詞の項目を参照すること。

例) **Таакпылап болбас.** (たばこを吸ってはいけない.)

Эккеп бээр мен. (私が持って来てあげよう.)

- 3) 助動詞 **турар, олуар, чыдыр (чыдар), чоруур** と組み合わせて用い, 現在時制をあらわす。恒常的な行為 (いつも～している, いつも～する) をあらわすには, 助動詞は形動詞現在未来形をとる。発話時点に起きる行為 (現在進行形; 今～している) をあらわすときにはこれらの助動詞は形動詞現在未来形の接辞 **-ар** を除いた形で用いられる。また同様に, 過去進行形 (～していた) をあらわす際には, これらの助動詞の語幹に, 過去をあらわす接辞 (形動詞完了, 确实過去[1 4.9.1.直説法参照]) をつけてあらわす。

例) **Бижип турар.** (いつも書きます)

Бижип тур. (いま書いている.)

Бижип турган. ([そのとき]書いていた.)

Бижип турду. (書いていた.)

助動詞 **турар**, **олурар**, **чыдыр** (**чыдар**), **чоруур** が助動詞としてではなく、これらの動詞本来の意味で現在形として用いられる場合、本動詞を副動詞 **-п** 形にする必要はない。すなわち、以下の単純な形をとる。

例) **Олур мен.** (私は座っている.)

Тур мен. (私は立っている.)

Чор бис. (私たちはここにいる.)

Чыдыр[лар]. ([それらは]置いてある.)

同種の述語が現在時制のさまざまな動詞によってあらわされる場合、助動詞は動詞の最後のひとつと組み合わせればよい。述語となる他の動詞は副動詞 **-п** 形だけであらわされる。

例) **Кичээл бүрүзүңге берге үннер адап, чаа сөстөр бижип,
домактар сайгарып турар бис.**

(私たちはすべての授業で難しい音を発音し、新出単語を書き、
文章を分析している.)

4) 文中で状況語の役割 (行為の様子や時, 原因, 目的の説明) を果たす (「～して, ～しながら」).

例) **Чараш Нева хүлүмзүрөп чалгып чыдыр.**

(美しいネヴァ川は微笑みながら流れている.)

5) 同じ動詞の副動詞 **-п** 形を繰り返すことによって、ある一定の時間的間隔のあいだ継続した行為, しかも集中して激しく行われた行為をあらわす。

例) **олуруп-олуруп** (しばらくのあいだ座って)

Бөрү удуп-удуп, оттуп келген.

(オオカミは長い間ぐっすりと寝て、起きてきた.)

6) 動詞 **дээр** (言う) の副動詞形 **деп** は以上の副動詞の意味のほか、以下の機能, 意味をもつ。

① 直接・間接話法中の他人の言った文章や引用文と地の文とをつなぐ (～と, と言って).

例) « **Чараш сен** » - **деп**, ол чугаалаан.

(「君はきれいだ」と彼は言った.)

② 従属文と主文とをつなぐ (～と尋ねる, 思う...)

例) **Японияда чүнү көрдүң деп айтырган мен.**

(君は日本で何を見たの、と私は尋ねた.)

- ③ 合成動詞中で目的をあらわす動詞と主動詞とをつなぐ (～のために行く, 来る...).

例) **Өөренир деп келдим.**

(勉強しようとやって来た.)

- ④ 同格語をつなぐ (～という).

例) **С. Сарыг-оолдуң « ... » деп романы**

(S.サルグ=オールの「...」という小説)

Чүү деп номул?

(何という本なの?)

- ⑤ 所有接辞をともなう **чүве** を対格にして **деп** ととも用いて, 感嘆や驚き, 興奮をあらわす.

例) **Чараш деп чүвезин!**

(なんてきれいなんだろう!)

Ырлаар деп чүвеңни!

(君はほんと上手に歌うなあ!)

1 4 . 6 . 3 . 副動詞 -каш 形

副動詞 **-каш** 形は接辞 **-каш** (とその発音上のバリエーション) を動詞語幹につけてつくる.

副動詞 **-каш** 形の接辞

動 詞 語 幹 の 最 後 の 音	動 詞 の 最 終 音 節 の 母 音	
	硬 音	軟 音
無 声 子 音	-каш	-кеш
有 声 子 音 母 音	-гаш	-геш

例) **соккаш** (叩いた後で), **четкеш** (達してから), **көргеш** (見てから),
манааш (待ってから), **чангаш** (帰ってから)

接辞 **-гаш** // **-геш** を母音で終わる動詞の多音節語幹につけると, 接辞最初の音 **г** は二つの母音に挟まれることになり脱落する. その結果, 二つの短母音は一つの開口長母音になる.

例) **мана=** (待つ) + **-гаш** → **манагаш** → **манааш**

бижи= (書く) + **-геш** → **бижигеш** → **бижиеш** → **бижээш**

чору= (行く) + **-гаш** → **чоругаш** → **чоруаш** → **чорааш**

ただし, 語幹が **дужаа=** のように **а** が二つ並んだ場合, 接辞 **-гаш** // **-геш** をつけても接辞最初の音 **г** は脱落しない.

例) дужаа= (渡す, 提出する) + -гаш → дужаагаш
хүлээ= (受け入れる, 採択する) + -геш → хүлээгеш

副動詞 -каш 形の意味と使用法

1) 後に続く動詞によってあらわされる行為よりも先に起きる行為をあらわし, 主たる行為の補足をする (～した後で).

例) Чангаш, келген. ([彼は]家に帰った後, やって来た.)

Байлакеың эжи-биле дугурушкаш, чорупкан мен.

(バイラクの友人と話をつけた後, 私は出発した.)

2) 主たる行為が発生した原因や理由となる行為をあらわす (～したので).

例) Далашкаш, тонун каапкан.

(急いでいたので, 彼は自分のコートを忘れていった.)

Аъдым читкеш, чадаг калдым.

(私のウマがいなくなったので, 歩くことになった.)

Дамырактар чыылгаш, хем болур ;

Тарамыктар чыылгаш, күш болур.

(**諺**: 小川が集まって川となる, ばらばらの人が集まって力となる.)

Өөреникчи далашкаш, чазыг кылыпкан.

(生徒は急いだあまりに間違いをした.)

その場合, 副動詞 -каш 形の後に名詞属格接辞 -тың (とその発音上のバリエーション) をつけることがよく見られる (10.4.2.名詞属格参照).

例) Башкымның мени утпаанынга амырааштың, ыглаан боор мен.

(私の先生が私を忘れていなかったことがうれしくて, 泣いたのだろうと思う.)

М. Кенин-Лопсан « Читкен уруг » Кызыл, 2000, арын 335

Кидис өгнү ол долу сога бээрге, ынчан корткаштың ыглай берген мен.

(フェルトの天幕をこの霰が打ち始めたとき, その時ぼくは恐ろしさのあまり, 泣き出したのだった.)

М. Кенин-Лопсан « Читкен уруг » Кызыл, 2000, арын 340

3) 合成動詞の意味をなす一部分となることがよくある.

例) алгаш баар (持っていく)

халааш кээр (どこかへ走って来る)

киргеш келир (中に入ってくる)

магнааш келир (走ってどこかへ行った後こっちへやって来る)

cf. магнап келир (走って来る ; 走った状態で)

кеткеш келир (～の服を着て来る)

баргаш кээр (行ってくる)

баргаш эkkээр (行つて持ってくる)

4) ときには主たる行為をあらわすこともある。その場合、ふつう同種の述語となる。

例) Оолчугаш магнап келгеш, бир-ле чүве чугаалааш эжин алгаш барды.

(小さな少年は走つて来て、何かを言い、友達を連れて行った。)

5) 助動詞 тур=, олур=, чыт=, чор(у)= の副動詞 -каш 形は、副動詞 -а 形と同様、口承文学作品のなかで、著者(語り手)がセリフと地の文とを分けるときに用いることが多い。この場合よく用いられるのは助動詞 тур=, олур= であるが、この使い分けはそれぞれの場面でセリフを話す登場人物が「立つて」言うのか、「座つて」言つているのかの違いである。同様に助動詞 чыт=, чор(у)= はそれぞれ「横になつて」言うとき、「歩きながら」言うときである。

例) Кадай олургаш :

– Бо болза Караты-Хаан деп кижиниң кыштаа боор чүве,... – деп мону чугаалаан-дыр эвеспе.

Боралдай ашак

«Алдын кушкеш. Уругларга тоолдар»

Кызыл, 2002, арын 22

(女は(座つたまま) :

「ここはカラトуй=ハーンという人の冬當地です、...」と言つたという。)

6) いくつかの動詞の副動詞 -каш 形は、固定化して前置詞や接続詞のように使われる。いかにいくつかを挙げる。

例) болгаш (～(時間)後に ; ～と) < болур

дээш (～のために, ～に対して) < дээр

эгелээш (～から, ～からはじめて) < эгелээр

～эгелээш ... чедир (～から...まで) として用いられる

7) 副動詞 **-каш** 形は、格変化接辞（主に属格と位格、奪格）、また複数接辞を伴うこともある。属格は「～した後で」の意味でよく用いられるが、その他の格は口承文学のなかでみられるのみである。

例) **баргаштың**

баргаштарның

баргашта

баргаштан

Кызылче баргаштың, чаа институтка ажылдаар мен.

(クズルへ帰った後、私は新しい大学で働きます.)

1 4 . 6 . 4 . 副動詞 **-пышаан** 形

副動詞 **-пышаан** 形は、接辞 **-пышаан**（とその発音上のバリエーション）を動詞の語幹につけてつくる。

この接辞の否定形はない。

副動詞 **-пышаан** 形の接辞

動詞語幹の 最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
無声子音	-пышаан	-пишаан	-пушаан	-пүшаан
母 音	-вышаан	-вишаан	-вушаан	-вүшаан
-л, -р, -й, -г	-бышаан	-бишаан	-бушаан	-бүшаан
-м, -н, -ң	-мышаан	-мишаан	-мушаан	-мүшаан

例) **баспышаан** (踏みながら), **ажылдавышаан** (働きながら),
кадарбышаан (放牧しながら), **тынмышаан** (息をしながら),
кетпишаан (着ながら), **биживишаан** (書きながら),
келбишаан (来るとき), **чунмушаан** (洗いながら),
турбушаан (立ちながら), **көрбүшаан** (見ながら)

この副動詞の接辞中で母音調和の法則に従うのは、接辞の第一音節だけである。第二音節は法則に従わない。これがこの接辞の特徴である。

この接辞の最初の母音 **ы**（とその発音上のバリエーション）にアクセントがある（**-пышаан**）。

副動詞 **-пышаан** 形の用法と意味

1) 後に続く動詞によってあらわされる他の行為と並行して起きている行為をあらわす（～しながら、～と同時に）。

例) **Номчувушаан бижип олурган мен.** (私は読むながら書いていた.)

Ачам солунун номчувушаан, чемненип олурган.

(私のお父さんは新聞を読みながら、ご飯を食べていた.)

Өөреникчи картаже көрүнмүшаан, башкызынга харыылап турган.

(生徒は地図を見ながら、先生に答えていた.)

Бичии уруг ойнавышаан, өөренип чораан.

(小さい子供は遊びながら学んだ.)

- 2) 行為や服装などの状況や様態をあらわす (どのような状況であるかをあらわす)

例) **Оол, чаа негей алгы тонун кеттинмишаан, өг чанынга чедип келген.**

(少年は、新しいヒツジの毛皮外套を着て、天幕のそばにやって来た.)

- 3) さまざまな行為が並立的に、しかも同時に行われていることをあらわす.

例) **Комбайн тарааны кеспишаан, бастырбышаан, арыглавышаан, савалавышаан чоруур.**

(コンバインが同時に穀物を刈り、脱穀し、風選し、袋詰めしている.)

この意味では副動詞 -п 形の用法に似ているが、副動詞 -п 形では同時に並立的に行われている行為をあらわす場合、ふつう副動詞 -п 形のあとに語を強める助詞 -даа がつく. 上記の例文は以下のようなになる.

Комбайн тарааны кезип-даа, бастырып-даа, арыглап-даа, савалап-даа чоруур.

(コンバインが同時に穀物を刈り、脱穀し、風選し、袋詰めしている.)

- 4) 行為の様子や時間をあらわす従属節の述語となる.

例) **Дашкалары ширээзінде шыыңайндыр дагжавышаан, чырык имир дүжүп келген.**

(杯が床机の上でシューシューと騒がしくなったとき、夜が明け始め明るくなってきた.)

- 5) 過去に始まり現在も継続している行為を独立的にあらわす (まだ~し続けている). この用法では人称に従って変化する.

例) **Олар ажылдавышаан[нар].** (彼らはまだ働き続けている.)

Мен өөренимишаан мен. (私はまだ学業を続けている.)

Тудугга 12 машина ажылдап турган. Чүдүртүнген элээн каш машиналар чорупкан, а 5-и ажылдавышаан. Каш машина

чорупканыл?

(建設現場で12台の車が作業していました。荷を積んだ車が数台去り、5台が現場でまだ作業しています。何台の車が去ったでしょう? ; 算数の問題より)

6) 助動詞もしくは叙法をあらわす助詞と組み合わせて用い、過去から現在まで続いている行為、さまざまな叙法的、時制的もしくは相をあらわす意味をもつ行為をあらわす。

たとえば、助動詞 **турар, олулар, чыдыр (чыдар), чоруур** と組み合わせて、長期間継続する行為を意味する合成動詞をつくる。

例) **Ажылдавышаан турган.** (長い間たえず働いていた.)

Чугбушаан тур. (今も洗い続けている.)

Удудушаан чыткан. (長い間眠り続けていた.)

Дааранмышаан олурду. (縫い物をし続けていた.)

Ажылдавышаан-дыр. (どうやら、ずっと働き続けているようだ.)

14.6.5.副動詞 -кала 形

副動詞 **-кала** 形は接辞 **-кала** (とその発音上のバリエーション) を動詞の語幹につけてつくる。

この接辞の否定形はない。

副動詞 **-кала** 形の接辞

動 詞 語 幹 の 最 後 の 音	動 詞 の 最 終 音 節 の 母 音	
	硬 音	軟 音
無 声 子 音	-кала	-келе
有 声 子 音 母 音	-гала	-геле

例) **кешкеле** (渡ってから), **аткала** (撃ってから), **кескеле** (切ってから), **келгеле** (来てから), **баргала** (行ってから), **удаала** (寝てから), **дужаагала** (提出してから)

接辞 **-гала // -геле** を母音で終わる動詞の多音節語幹につけると、接辞最初の音 **г** は二つの母音に挟まれることになり脱落する。その結果、二つの短母音は一つの開口長母音になる。

例) **уду=** (寝る) + **-гала** → **удугала** → **удуала** → **удаала**
дииңне= (リス狩りをする) + **-геле** → **дииңнегеле**
→ **дииңнееле** → **дииңнээле**

ただし、多音節語幹の末尾が長母音（二つの母音で終わる）のときは、接辞最初の音 **г** は脱落しない。

例) **дужаа**=（渡す，提出する） + **-гала** → **дужаагала**

хүлээ=（受け入れる，採択する） + **-геле** → **хүлээгеле**

この接辞の最初の母音 **a**（とその発音上のバリエーション）にアクセントがある（**-кала**）。

副動詞 **-кала** 形の使用法と意味

この副動詞は後に続く動詞によってあらわされる他の行為が始まるその前に終了した行為をあらわす，すなわち「～してから，～するやいなや」と訳される。また，文脈によっては「～した時から，～した日から，～した瞬間から，～するとともに」などの意味になる。

例) **Бичии-Кыс өөренип чоруткала, үш чыл четкен.**

（ビチー・クスが勉強するために去ってから，三年が過ぎた。）

Бис самолёт-биле Өвүрден ушкала, Кызылга ийи шак четпээнде чедип келдивис.

（私たちは，飛行機でオビュルを発ってから，2時間も経たないうちにクズルに着いた。）

А. С. Пушкинниң төрүттүнгеле 200 чыл болганынга таварыштыр хей ном үндүргеннер.

（プーシキン生誕200年に合わせて，たくさんの本が出版された。）

Ындыг чүвени төрүттүнгеле көрбедим.

（このようなものを私は生まれてこの方見たことがない。）

この用法と同じ意味で使われる構文に，「形動詞完了+（所有接辞）+奪格 **бээр**」（～してから）がある。副動詞 **-кала** 形は，後置詞 **бээр** とともに用いない。

例) **Бичии-Кыс өөренип чорутканындан бээр үш чыл четкен.**

（ビチー・クスが勉強するために去ってから，三年が過ぎた。）

Бис бо бажыңга чурттаанывыстан бээр ийи чыл болдувус.

（私たちがこの家に住み始めてから，2年になる。）

Кино үнүп эгелээнинден бээр он хире минута эртти.

（映画の上映が始まってから10分ほど経った。）

また，「～するやいなや」をあらわす構文はほかにも以下の形がある。

形動詞現在未来形 + **3人称所有接辞** + **後置詞 билек[-ле]**

形動詞現在未来形の与格 + **強意の助詞[-ле]**

例) келгеле = келгенден бээр (来てから)
 келгеле = келири билек-ле = келирге-ле (来るやいなや)

場所は与格であらわす.

例) Университетке өөренип киргеле, ийи чыл эрткен.
 (大学に入学してから, 2年が過ぎた.)

1 4 . 7 . 6 . 副動詞 -пайн 形

副動詞 -пайн 形は, 第一に, 副動詞 -а 形と -п 形, -каш 形の否定形であり, 第二に, 独立した否定副動詞であり, その際, 部分的にのみ上記した副動詞三形態の否定の代用である.

副動詞 -пайн 形は, 接辞 -пайн (とその発音上のバリエーション) を動詞の語幹につけてつくる.

この接辞の最初の母音 а (とその発音上のバリエーション) にアクセントがある (-пайн).

副動詞 -пайн 形の接辞

動 詞 語 幹 の 最 後 の 音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音	
	硬 音	軟 音
無 声 子 音	-пайн	-пейн
母 音	-вайн	-вейн
-р, -й, -г, -л	-байн	-бейн
-м, -н, -ң	-майн	-мейн

例) ишпейн (飲まないで), тутпайн (つかまさないで),
 ажылдавайн (働かないで), биживейн (書かないで),
 барбайн (行かないで), келбейн (来ないで), чунмайн (洗わないで),
 доңмайн (凍えないで)

副動詞 -пайн 形の意味と使用法

1) 副動詞 -пайн 形は, 副動詞 -а 形と -п 形, -каш 形の否定の代用である. 行為の様態や時, 原因・理由をあらわす状況語と従属節をなす合成動詞の述語の一部, 並立複文の述語の一部となるが, これも状況語や述語となる副動詞 -а 形と -п 形, -каш 形の否定形である.

例) Алдын-Кыс ырлавайн-дыр. < ырлай-дыр
 (アルドゥン・クスは歌っていないようだ.)
 Чүнү-даа билбейн тур мен. < билип

(私は何も分からない.)

Чогушпайн, кырышпайн, чугаалажып олуруңар. — 状況語

(けんかしないで, 言い合いしないで座っておしゃべりしなさい.)

Аңаа кирбейн, акызы-биле чугаалашпайн, канчап ыңай чоруур деп боор деп бодааш

(中に入らず, 兄と話をせずに, どうして去ることができるだろうと思って...)

ただし, 次の意味においては, 副動詞 **-а** 形や **-п** 形は, 副動詞 **-пайн** 形に置き換えられない.

① 開始をあらわす形: **副動詞 -а 形** + **助動詞 бээр**

例) Хеме эрикке чеде хона берген. (ボートは急速に岸に接岸した.)

② 行為進行の可能性をあらわす形:

副動詞 -а 形 + **助動詞 алыр** + **бе** の形で用いる.

例) Сен номчуй алыр бе? (君は読むことができますか?)

③ 禁止をあらわす形: **副動詞 -п 形** + **助動詞 болбас**

例) Таакпылап болбас. (タバコを吸ってはいけない.)

副動詞 **-пайн** 形は, 副動詞 **-пышаан** 形と **-кала** 形の否定形にはなりえない. それは, 副動詞 **-пышаан** 形が, 概して否定形を持たないこと, 及び, 副動詞 **-кала** 形がみずから否定形をもっているためである.

例) кадарбаала < кадар= (放牧する) + ба + гала

2) 副動詞 **-пайн** 形は, 助動詞 **бар=**, **тур=** などとの組み合わせにおいて, 行為の制約された不完遂の叙法 (何らかの原因でその行為ができなかったこと) をあらわす.

例) Тенек-оол онаалганы күүсетпейн барган.

(Тенек・オールは何らかの理由で課題を遂行できなかった.)

Чайын кааң болур болза, сиден эки үнмейн баар.

(もし夏に早魃が起きたなら, 草はよく育たないだろう.)

1 4 . 7 . 時制のカテゴリー

動詞の時制の文法的カテゴリーは, 過去時制の未来時制への対置や, 過去時制の現在時制への対置, 現在時制の未来時制への対置などによって対置される. そのうえ, この文法的カテゴリーの中心点となるのは, 発話時点である. この関係において, 動詞は三つの主たる時制, すなわち過去と現在, 未来時制をもつ. 具体的には, 1 4 . 1 0 . 1 . 直説法で述べられている.

- 例) ажилдаан (働いた) — 過去
 ажилдап тур (働いている) — 現在
 ажилдап турар (働いている) — 習慣現在
 ажилдаар (働く予定である) — 未来

14.8. 人称と数のカテゴリー

動詞の人称と数のカテゴリーは、人称接辞と人称指標（述語的機能の指標）によってあらわされ、行為もしくは状況の主体に対する相関性をあらわす。また、主体の人称と数をもあらわす。人称指標は歴史的に人称代名詞に起源をもち、人称接辞は所有接辞にさかのぼることができる。

人称接辞表

数	人称	最後の音	最終音節の母音				例 кел= (来る)
			а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү	
単 数	1	子音	-ЫМ	-ИМ	-УМ	-ҮМ	келгеним
		母音	-М				келдим
	2	子音	-ЫҢ	-ИҢ	-УҢ	-ҮҢ	келгениң
		母音	-Ң				келдиң
	3	子音	-Ы	-И	-У	-Ү	келгени
		母音	ゼロ語尾 ϕ				келди
複 数	1	子音	-ЫВЫС	-ИВИС	-УВУС	-ҮВҮС	келгенивис
		母音	-ВЫС	-ВИС	-ВУС	-ВҮС	келдивис
	2	子音	-ЫҢАР	-ИҢЕР	-УҢАР	-ҮҢЕР	келгениңер
		母音	-ҢАР	-ҢЕР	-ҢАР	-ҢЕР	келдиңер
	3	子音	-Ы	-И	-У	-Ү	келгени
		母音	ゼロ語尾 ϕ +[лар]	ゼロ語尾 ϕ +[лер]	ゼロ語尾 ϕ +[лар]	ゼロ語尾 ϕ +[лер]	келди[лер]

人称指標表

数	人称	人称指標	例 кел= (来る)
単	1	мен	Келген мен.
	2	сен	Келген сен.
数	3	ゼロ語尾 ϕ	Келген.
複	1	бис	Келген бис.
	2	силер	Келген силер.
数	3	ゼロ語尾 ϕ + [лар]	Келген[нер].

3人称複数³はゼロ語尾 ϕ + [лар]であらわされるが、接辞 -лар の発音上のバリエーションは名詞の複数形につける方法に準じる。

例) Келген[нер]. ([彼らは]来た.)

Номчуп тур[лар]. ([彼らは]本を読んでいる.)

文末が近過去接辞で終わるときは人称接辞をつける。

例) Мен Японияже келдим. (私は日本へ来た.)

文末が形動詞で終わるときは人称指標をつける。

例) мээң кээримге (私が来る際には)

1 4.9 .法

行為、もしくは状況の理解を表現するために用いられる動詞の述語形は、法と呼ばれている。文中で述語として機能する。法は、動詞の語形変化の中心点、最重点である。そのため、動詞すべての形態（カテゴリー）は、完全に法において表現される。

1 4.9.1.直説法

直説法は、話者の側から行為もしくは状況の事実を最大限に客観的に伝達する。これは基本的な法であり、その形態と意味においてもっとも豊かなものである。

直説法はとくに時制において豊かである。発話時点との関係において直説法は三つの時制、すなわち過去、現在そして未来時制をもつ。これら三つの形態各々は、それ自身もっとも具体的な時制形態に分かれる。

1 4.9.1.1.過去時制

過去時制は次の六つ、1) 不定過去、2) 定過去、3) 確実（絶対）過去、

4) 接辞 **-чык** 過去, 5) 過去=現在, 6) 叙述過去に分かれる。

1) 不定過去

不定過去は、形動詞完了（接辞 **-ган**）によってあらわされる。発話時点との関係において、その行為が過去に（最近であろうが、遠い昔であろうが）起きた、もしくは起きなかった（～した、～しなかった）事実を確認しているにすぎない。確定過去（「確定過去」参照）のように目の前にその情景が浮かぶというような視覚イメージは呼び起こさない。したがって、行為がどのように行われたかよりも、その行為が行われたこと、そしてその結果に話者は聴き手の注意を向けている。

疑問文 **Чүнү кылган?**（何をしたのですか?）、**Канчалган?**（どのように～したのですか?、何をしたのですか?）に答える形である。

肯定形 **кел=**（来る）

人 称	単 数	複 数
1	Келген мен.	Келген бис.
2	Келген сен.	Келген силер.
3	Келген.	Келген[нер].

否定形

人 称	単 数	複 数
1	Келбээн мен.	Келбээн бис.
2	Келбээн сен.	Келбээн силер.
3	Келбээн.	Келбээн[нер].

2) 定過去

定過去は、副動詞 **-п** 形と助動詞 **тур=**, **олур=**, **чыт=**, **чор=** の形動詞完了形とを組み合わせる。そして行為もしくは状況が過去において、ある一定の時間的間隔のあいだに継続して起きた（～していた）ことをあらわす。

疑問文 **Чүнү кылып турган?**（何をしていたのですか?）、**Канчап турган?**（どのように～していたのですか?、何をしていたのですか?）に答える形である。

肯定形 **ажылда=**（働く）

人 称	単 数	複 数
1	Ажылдап турган мен.	Ажылдап турган бис.
2	Ажылдап турган сен.	Ажылдап турган силер.
3	Ажылдап турган.	Ажылдап турган[нар].

否定形

人 称	単 数	複 数
1	Ажылдавайн турган мен.	Ажылдавайн турган бис.
2	Ажылдавайн турган сен.	Ажылдавайн турган силер.
3	Ажылдавайн турган.	Ажылдавайн турган[нар].

否定形では、副動詞 -пайн 形を副動詞 -п 形にして、助動詞 тур=, олур=, чыт=, чор= の形動詞完了形を否定形にする形もある。その場合、意味は一度もその行為をしたことがないことをあらわす。

例) Мен бо номну номчуп турбаан мен.

(私はこの本を読んだことがない.)

Cf. Мен бо номну номчувайн турган мен.

(私は[そのとき]この本を読んでいなかった.)

1) 确实 (絶対) 過去

确实, もしくは絶対過去は, 次のことをあらわす。

- ① 発話時点との関係において, 行為が少し前に行われた, あるいは行われなかったことをあらわす。したがって, 近過去とも言われることもある。その際, 行為が実際に行われた, あるいは行われなかったことを強調している。
- ② 完遂された, 1回きりの行為をあらわす。
- ③ 話者がその行為の当事者であったり, 自分で目撃したり観察した行為, あるいはその行為の目撃者であるかのように話者にとって頭に想像できるような, とても明白な行為をあらわしている。それは, 出来事が遠い過去のことであっても, 今目の前にその情景が鮮明に浮かぶというような思い出を語るときに用いられる。
- ④ ある場合には, 過去の意味ではなくて, 現在の意味で用いられることもある。

例) Мен силерге ажылга улуг чедишкиннерни күзедим.

(私はあなたに仕事での大成功をお祈りします.)

- ⑤ 注意を促すときに用いられる。

例) Ожум-аяар, барып уштуң! (静かにゆっくりと, 転ぶよ!)

この形は話し言葉でよく用いられる。

疑問文 Чүнү кылды? (何をしたのですか?), Канчалды? (どのように~したのですか?, 何をしたのですか?), Чүнү кылып турду? (何をしていたのですか?), Канчап турду? (どのように~していたのですか?, 何をしていたのですか?) に答える形である。

確實(絶対)過去は以下の接辞を動詞語幹につけることによってあらわされる。

動詞語幹の 最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
無声子音	-ты	-ти	-ту	-тү
有声子音 母 音	-ды	-ди	-ду	-дү

例) дузалашты, хынады, күүсетти, үледи, ушту, хонду, үстү, үндү
動詞を過去時制にするときは, この接辞の後に人称接辞をつける (1 4.1 0.
人称と数のカテゴリー参照).

肯定形 чөпшээрe= (同意する)

人 称	単 数	複 数
1	Чөпшээредим.	Чөпшээредивис.
2	Чөпшээредиң.	Чөпшээредиңер.
3	Чөпшээреди.	Чөпшээреди[лер].

否定形

人 称	単 数	複 数
1	Чөпшээреведим.	Чөпшээреведивис.
2	Чөпшээреведиң.	Чөпшээреведиңер.
3	Чөпшээреведи.	Чөпшээреведи[лер].

確實現在形 (1 4.1 0.1.2.現在時制参照) の助動詞 тур=, олур=, чыт=, чор= の語幹にこの接辞をつけることによって「～していた」をあらわす。

したがって接辞の順番は,

動詞語幹 + 確實過去接辞 + 人称接辞

動詞語幹 + 否定接辞 -па + 確實過去接辞 + 人称接辞

副動詞 -п 形 + 助動詞語幹 + 確實過去接辞 + 人称接辞

副動詞 -пайн 形 (否定) + 助動詞語幹 + 確實過去接辞 + 人称接辞

副動詞 -п 形 + 助動詞語幹 + 否定接辞 -па + 確實過去接辞 + 人称接辞

となる。

例) Мен номчудум. (私は読んだ.)

Мен номчувадым. (私は読まなかった.)

Мен номчуп олурдум. (私は読書していた.)

Мен номчувайн олурдум. (私は[そのとき]読んでいなかった.)

Мен номчуп турбадым. (私は一度も読んだことがない.)

否定形では、副動詞 **-пайн** 形を副動詞 **-п** 形にし、否定接辞を助動詞 **тур=**, **олур=**, **чыт=**, **чор=** につけて確実過去接辞をつけてあらわす形もある。その場合、意味は一度もその行為をしたことがないことをあらわす（上記例文参照）。

2) 接辞 **-чык** 過去

接辞 **-чык** 過去はふつう、確認をあらわす助詞 **чоп**（ほんとうに、まったく、たしかに）、もしくは、疑問をあらわす助詞 **бе**（～か？）とともに用いられる。その使用はまた、他の疑問をあらわす語とも結合する。

行為もしくは状況が過去に行われたか、あるいは行われなかったことを話者が確認して言っていることをあらわす（たしかに～したことあるよね、～したことあるかい？ちゃんと～したよね？たしかに～したよ、確実に～した）。

ある場合には、事実を確認する疑問文ではなく、修辞疑問となる（たしかに～したじゃないか）。

例) **Селбер шарыларны көржүк сен бе?**

（毛むくじゃらのヤクを君は見たことがあるかい？）

Мен бо номну номчужук мен чоп.

（ぼくはちゃんとこの本を読んだよ。）

Кажан көржүк сен?

（いったいいつ見たんだい？）

...Ынчалза-даа ийи-чаңгыс билдинмес, бистиң чаңчыкпаанывыс сөстөр дыңналгылаар болчук.

（...でも、1つ2つ私たちが使い慣れていない、知らない単語を聞くことがたしかにあった。）

疑問文 **Чүнү кылчык?**（何をしたのかい？、何をしたことがあるかい？）、**Канчалчык?**（どのように～していたのかい？、何をしたのかい？）に答える形である。

以下の接辞を動詞語幹につけることによってあらわす。

動詞語幹の 最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
無声子音 -л, -м, -н, -ң	-чык	-чик	-чук	-чүк
母 音 -р, -й, -г	-жык	-жик	-жук	-жүк

肯定形 кел= (来る)

人 称	単 数	複 数
1	Келчик мен чоп.	Келчик бис чоп.
2	Келчик сен чоп.	Келчик силер чоп.
3	Келчик чоп.	Келчик[тер] чоп.

否定形

人 称	単 数	複 数
1	Келбежик мен чоп.	Келбежик бис чоп.
2	Келбежик сен чоп.	Келбежик силер чоп.
3	Келбежик чоп.	Келбежик[тер] чоп.

3) 過去=現在

過去=現在時制は、副動詞 **-пышаан** (とその発音上のバリエーション) によってあらわされる。発話時点との関係において、行為が過去に始まり、現在も続いていることをあらわす(今も～し続けている)。文末には人称指標をつける。人称指標の3人称単数はつかないが、3人称複数ときは複数接辞 **-нар** がつくこともある。

直説法過去=現在時制は否定形をもたない。

ажылда= (働く)

人 称	単 数	複 数
1	Ажылдавышаан мен.	Ажылдавышаан бис.
2	Ажылдавышаан сен.	Ажылдавышаан силер.
3	Ажылдавышаан.	Ажылдавышаан[нар] .

例) Мен өөрөнмишаан мен.

(私はまだ学び続けている。)

4) 叙述過去

副動詞 **-п** 形と助詞 **-тыр** (とその発音上のバリエーション) と組み合わせて用いる。以前に起きた出来事や、話者の目の前で行われていなかった行為、他の人から聞いた話を、自分がそれらの出来事の証人であるかのように叙述的に述べていることをあらわす(～だと言う、～だそうだ、～のようだ、どうやら～のようだ)。また、起きた出来事を総括して言う場合にも用いられる(分かったことは～だ、結局～だということだ)。行為が突然起きたこと、その行為が起きたことに注意を喚起していることが特徴である(ほら、～が起きたんだよ、あのね～がいたんだ)。したがって、昔話(出だしや結びなど)によく用いられる。14.6.2.副動詞 **-п** 形も参照のこと。

疑問文 **Чүнү кылып-тыр?** (何をしたのですか?), **Канчап-тыр?** (どのように～したのですか?, 何をしたのですか?) に答える形である。

例) **Оттуп кээп-тир сен.** (どうやら, 起きたようだね.)

Бо аразында диинч-даа ховартай берип-тир.

(分かったことは, こちら辺りにはリスは珍しくなったことだね.)

14.9.1.2. 現在時制

現在時制は, 1) 確実現在, 2) 現在未来時制, 3) 本人のいないところで行われている現在, とに分かれる。

1) 確実現在

確実現在には, 副動詞 **-п** 形と助動詞 **тур=**, **олур=**, **чыт=**, **чор=** の語幹 (これらの助動詞はそれ自身発話時点に起きる行為を意味する), すなわち **тур**, **олур(～ор)**, **чор** とを組み合わせてあらわす。語幹 **чыт=** は **чыдар(～чыдыр)** になる。文末には人称指標をつける。人称指標の3人称単数はつかないが, 3人称複数ときは複数接辞 **-лар** がつくこともある。

否定形は, 副動詞 **-п** 形のかわりに, 副動詞 **-пайн** 形にする

肯定形 **бизи=** (書く)

人 称	単 数	複 数
1	Бижип тур мен.	Бижип тур бис.
2	Бижип тур сен.	Бижип тур силер.
3	Бижип тур.	Бижип тур[лар].

否定形

人 称	単 数	複 数
1	Биживейн тур мен.	Биживейн тур бис.
2	Биживейн тур сен.	Биживейн тур силер.
3	Биживейн тур.	Биживейн тур[лар].

発話時点において, 話者にとって確実に (見ていなくても), あるいは話者の目の前で, 具体的に行為もしくは状況が行われている, あるいは行われていないことをあらわす (～している)。

例) **Мен ам сава чуп тур мен.** (私は今, 食器を洗っています.)

Мээң дунмам удуп чыдыр. (私の弟が横になって寝ている.)

Олар кылын, кургаг күдүрээ кырында дыштанып турлар.

(彼らは深く乾燥した針葉樹下の土壌の上で休んでいる.)

助動詞 **турар**, **олулар**, **чыдыр** (～чыдар), **чоруур** が助動詞としてではな

く、これらの動詞本来の意味で現在形として用いられる場合、ふつう本動詞を副動詞 -п 形にする必要はない。すなわち、以下の単純な形をとる。

例) **Сандайда олур мен.** (私は椅子に座っている.)

Кажаада эзерлиг аът тур. (囲いに鞍のついたウマが立っている.)

Мал ховуда чор. (家畜がステップにいる, 移動している.)

Чыдыр[лар]. ([それらは]置いてある.)

しかし, **туруп тур** (立っている), **олуруп тур** (座っている), **чыдып тур** (横になっている), **чоруп тур** (向かっている, 歩いている), **чоруп чор** (向かっている, 歩いている), **чоруп олур** (向かっている, 歩いている) の形もある。

助動詞の使い分けは基本的にそれぞれの本来の意味に従う。すなわち **тур** (立って~する, ~している), **олур** (座って~する, ~している), **чыдар** (~чыдыр) (横になって~する, ~している), **чор** (移動しながら~する, ~している) である。しかし, 一般的なことや法則, 主語が人や動物ではなくどのようにして行っているか明確にできないとき, あるいは明確にする必要がないときは, **тур** がよく用いられる。助動詞 **чор** は行為が長期間にわたって行っているニュアンスを加える。1 4.1 2.助動詞の項も参照。

また, 主語が3人称のときは, **тур**, **олур**, **чор** はこの形のほかに, 語尾に -y をつけた形 **туру**, **олуру**, **чору** や, あるいは後に **ол** をつけて用いられることがある。語尾に -y をつけた形は, 主に文学作品や詩で, 動詞の後に **ол** をつけた形は話し言葉のなかで使われることが多い。

例) **Дуңмам сандайда олур.** (私の弟が椅子に座っている.)

Дуңмам сандайда олору.

Дуңмам сандайда олур ол.

2) 現在=未来

現在=未来時制は, 副動詞 -п 形と助動詞 **турар**, **олура**, **чыдыр** (~чыдар), **чоруур** の形動詞現在未来形との組み合わせによってあらわす。文末には人称指標をつける。人称指標の3人称単数はつかないが, 3人称複数ときは複数接辞 -лар がつくこともある。

否定形は副動詞 -п 形のかわりに副動詞 -пайн 形にする。

肯定形 **ажылда**= (働く)

人 称	単 数	複 数
1	Ажылдап турар мен.	Ажылдап турар бис.
2	Ажылдап турар сен.	Ажылдап турар силер.
3	Ажылдап турар.	Ажылдап турар[лар].

否定形

人 称	単 数	複 数
1	Ажылдавайн турар мен.	Ажылдавайн турар бис.
2	Ажылдавайн турар сен.	Ажылдавайн турар силер.
3	Ажылдавайн турар.	Ажылдавайн турар[лар].

現在行われている行為が、過去に始まり、未来にも行われることが予想されることをあらわす。日常行っている習慣的行為をあらわすとき、この時制を用いる。「地球は回っている」など一般的、普遍的な事実や法則をあらわすときにもこの形を用いる。

例) **Кара-оол бо школада ажылдап турар.**

(カラ=オールこの学校で働いている.)

Кызыл биле Москва аразында пассажир самолёттары үргүлчү чоруп турар.

(クズルーモスクワ間はたえず飛行機の定期便が飛んでいる.)

Чер Хүннү дескинип турар. (地球は太陽のまわりを回っている.)

Улуг-Хем Соңгу Доштуг океанче кирип чыдар.

(ウルグ=へム川は北氷洋に流れ込んでいる.)

この時制は、文脈もしくは特別な語句を用いてある一定の、一区切りの時間が示される場合には、未来に行われる行為を意味することができる。

例) **Даарта он шакта ажылдап турар мен.**

(明日 10時に私は仕事をしています.)

助動詞の使い分けは、确实現在形と同様、基本的にそれぞれの本来の意味に従う。すなわち **турар** (立って~する, ~している), **олуар** (座って~する, ~している), **чыдыр** (~чыдар) (横になって~する, ~している), **чоруур** (移動しながら~する, ~している) である。しかし、一般的なことや法則、主語が人や動物ではなくどのようにして行っているかが明確にできないとき、あるいは明確にする必要がないときは、**турар** がよく用いられる。助動詞 **чоруур** は、行為が長期間にわたって行っているニュアンスを加える。

3) 本人のいないところで行われている現在

副動詞 **-а** 形と助詞 **-тыр** (とその発音上のバリエーション) と組み合わせて用いる。否定形は副動詞 **-а** 形のかわりに副動詞 **-пайн** 形にする。

肯定形 ажылда= (働く)

人 称	単 数	複 数
1	Ажылдай-дыр мен.	Ажылдай-дыр бис.
2	Ажылдай-дыр сен.	Ажылдай-дыр силер.
3	Ажылдай-дыр.	Ажылдай-дыр[лар].

否定形 ажылда= (働く)

人 称	単 数	複 数
1	Ажылдавайн-дыр мен.	Ажылдавайн-дыр бис.
2	Ажылдавайн-дыр сен.	Ажылдавайн-дыр силер.
3	Ажылдавайн-дыр.	Ажылдавайн-дыр[лар].

本人のいないところで行われている（言われている）行為，遠くのほうで行われている行為が聞こえている，見えていることをあらわす時制（叙法ニュアンス）を形成する。しかし，どちらかといえば，話者は，誰かから聞いた話からよりも，現在行われている（行われた）その行為について自分の個人的経験や感性，知覚に基づいて判断をくだしている，その行われている行為に話者はいてもよいし，自分で行っていてもよい。

例) Ырлай-дыр. (だれかが歌っている[のが聞こえる].)

Аргада элик огура-дыр. (森でノロジカが吠えている[のが聞こえる].)

Дүү ында бир чүве көгереңней-дир.

(あそこのほうで何かが青くちらちらしている[のが見える].)

Солуннар садып алыр дээш эжимден ырадыр базып чорумда, будумга бир-ле чүве тептине-дир.

(新聞を買おうと友人のそばから遠く離れて歩いていると，私の足に何かぶつかった[のを感じた].)

1 人称においては知覚動詞とともに用いられることが多い。

例) Бодай-дыр мен. (私は考えている.)

Күзей-дир мен. (私は望んでいる.)

とくに過去のことについて述べられるとき，歴史的叙述をあらわす。これは自伝的作品によく用いられるスタイルといえる。

例) Бежендей биле Каңгый чадыр иштинче бакылааш, менче алгыржы-дыр-ла : « Ававыс келди. »

С. Тока « Араттың сөзү »

(ベジェンデイとカングイが円錐テントのなかを覗き込んで，私に「お母さんが帰って来た。」と叫んだようだ.)

14.9.1.3.未来時制

未来時制は、1) 予期未来、2) 不定未来とに分けられる。

1) 予期未来

予期未来は形動詞予期 **-калак** (とその発音上のバリエーション) によってあらわす (14.5.3.参照)。

кел= (来る)

人 称	単 数	複 数
1	Келгелек мен.	Келгелек бис.
2	Келгелек сен.	Келгелек силер.
3	Келгелек.	Келгелек[тер].

行為が過去において行われていないが、発話時点において行為の実行が予想されることをあらわす (ほら今にも～する、～するはずである、～しているはずである、～することになっている、必ず～します、まだ～していない)。したがって、二つの時制のアスペクト (相) をもつ形態である。

例) Хүн ашкалак. (太陽が今にも沈んでしまうところだ.)

助詞 **ам-даа** (未だ～ない), **-даа** (～さえ) とともに用いられると、「まだ～していない」と否定形として訳されるのが適当である。

例) Хоорайны картага-даа демдеглээлек.

(町はいまだ地図においてさえ記されていない.)

2) 不定未来

不定未来は形動詞現在未来形接辞 **-ар** (とその発音上のバリエーション) によってあらわす (14.6.2.参照)。

肯定形 кел= (来る)

人 称	単 数	複 数
1	Келир мен.	Келир бис.
2	Келир сен.	Келир силер.
3	Келир.	Келир[лер].

否定形

人 称	単 数	複 数
1	Келбес мен.	Келбес бис.
2	Келбес сен.	Келбес силер.
3	Келбес.	Келбес[тер].

不定未来形は、①なんら具体的でなく、行為もしくは状況が総じて未来に行わ

れる、あるいは行われぬこと（～します、～しません）、②通常行われる行為（いつも～します）をあらわす。②の意味では諺でよく使われている。

2人称指標を形動詞現在未来形につけることによって（すなわち、不定未来2人称形で）、お願いや命令をあらわすことができる。

例) Бөгүн келир сен. (今日来ておくれ.)

また、3人称、すなわち人称指標がつかない形が、命令や指令、説明書などでよく用いられる（～すること）。

もうすでに主な叙法的意味をもつ直説法の動詞の時制は説明されている。しかし、直説法の時制の補足的叙法ニュアンスは、以下に挙げる叙法助詞によってもあらわされる。

-тыр (とその発音上のバリエーション；～のようだ)

ыйнаан (たぶん、～でありうる)

боор (おそらく、～だろう)

иргин (単語や文章を和らげる役割を果たす)

аан (単語の強調)

ийик (条件法のなかで用いる；～だろう、～のに)

-ла (とその発音上のバリエーション；単語の強調)

-даа (～でさえ)

эвеспе (文章の強調)

чадавас (おそらく、きっと)

чадапчок (おそらく、たぶん)

магатчок[магат-ла чок] (たぶん、きっと)

болбазыкпа (～でありうる)

дийик[дижик] (たとえば～としてみよう)

болчук (～だろう)

叙法助詞は、形動詞 **-ган**, **-ар**, **-калак** が時制表現のために用いられる場合に非常によく用いられる。

例) Келген ыйнаан. (おそらく彼は来ただろう.)

Келир боор. (彼は来るだろう.)

Келгелек эвеспе. (彼はまだ来ていないが、ほら今やってくる.)

Келген-дир. (彼は来たようだ.)

Келир дийик. (たとえば彼が来るとしよう.)

Келир-ле. (彼は来るはずだ.)

Келир-даа чадавас. (彼が来るのは考えられる.)

他の動詞形態のためにこれらの叙法助詞が用いられることは限られている。たとえば、上記のうち確実過去に用いられるのは、**ыйнаан**, **-даа**, **эвеспе**, **-ла**のみである。

1 4 . 9 . 2 . 希求 = 命令法

希求 = 命令法は、第一に、2 人称単数のゼロ語尾形であること、第二に、その接辞が語形変化すること、第三に、人称接辞（人称形態）の特殊性、第四に、1 人称において双数が存在することで直説法と異なっている。

希求 = 命令法は以下の表に示される接辞を用いて形成される。

人 称	数	動詞語幹の 最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
			а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
1	単 数	あらゆる音	-айн -ыйн	-ейн -ийн	-уйн	-үйн
	双 数	あらゆる音	-аал[ы] -ыыл[ы]	-ээл[и] -иил[и]	-уул[ы]	-үүл[ү]
2	単		— (動詞語幹のみ)			
3	数	無声子音	-сын	-син	-сун	-сүн
		有声子音 母 音	-зын	-зин	-зун	-зүн
1	複	母 音	-алы[ңар] -ылы[ңар]	-эли[ңер] -или[ңер]	-улу[ңар]	-үлү[ңер]
		子 音	-аалы[ңар] -ыылы[ңар]	-ээли[ңер] -иили[ңер]	-уулу[ңар]	-үүлү[ңер]
2	複	母 音	-ңар	-ңер	-ңар	-ңер
		子 音	-ыңар	-иңер	-уңар	-үңер
3	数	無声子音	-сын[ңар]	-син[ңер]	-сун[ңар]	-сүн[ңер]
		母 音 有声子音	-зын[ңар]	-зин[ңер]	-зун[ңар]	-зүн[ңер]

1 人称単数、双数および 1 人称複数では、形動詞現在未来形 **-ар** の接辞中の母音に合わせてつくる。

- 例) алыр → алайн, алыылы
 баар → барайн, бараалы
 билир → билийн, билиили
 үнер → үнейн, үнээли

肯定形 кыл= (する)

人 称	単 数	双 数	複 数
1	кылыйн	кылыыл[ы]	кылыылы[ңар]
2	кыл		кылыңар
3	кылзын		кылзын[нар]

否定形 кыл- (する)

人 称	単 数	双 数	複 数
1	кылбаайн	кылбаал[ы]	кылбаалы[ңар]
2	кылба		кылбаңар
3	кылбазын		кылбазын[нар]

希求＝命令法は、発話時点との関係において未来に行われる、あるいは行われない行為もしくは状況をあらわす。その際、話者は希望や願望、絶対命令、要請の形で行為との関係をあらわす。

1人称単数形においては、話者は行為を行う、あるいは行わない自分の希望をあらわす(～しよう)。疑問代名詞では **Канчаайн?** (どうしようか?) となる。

例) **Силерге хымыстан ам база кудуп берейн бе?**

(あなたにもう一杯馬乳酒を注いであげようか?)

Өг-бүлемни силерге таныштырайн.

(私の家族をあなたに紹介しましょう。)

1人称双数形は、一人の人に対して自分をも含めて呼びかける際に用い、話者は対話者と一緒に行為を行う、あるいは行わない希望をあらわす(二人で～しよう)。疑問代名詞では **Канчаалы?** (どうしようか?) となる。

例) **Садыгже бараал.** (お店へいっしょに行こうよ。)

Таныжып алыыл. ([2人のあいだで] 友だちになろうよ。)

- **Өңүктөр болур бис бе?**

- **Ийе, өңүктөр болуулу.**

(— ぼくたち友だちになろうか?)

— そうだね, 友だちになろうよ。)

1人称複数形においては、他の人たちと一緒に行為を行う、あるいは行わない希望をあらわす(～しよう)。疑問代名詞では **Канчаалыңар?** (どうしようか?) となる。

例) **Санажып алыылыңар.** ([レストランなどで] 会計しましょうか。)

2人称単数・複数形においては、話者は自分が加わることなく行為を行う、あるいは行わないために対話者に対して絶対命令か指図かの形で自分の希望を

あらわす（～しなさい）.

例) Бээр келиңер. (こっちに来て下さい.)

Эртен мени чеди шакта оттуруп көрүңер.

(明日7時に私を起こしてください.)

3人称単数・複数形において、話者は話題が触れられている誰かれの人が、話者の希望を行うために、かなり絶対的な指図の形で話者の希望をあらわす（～させなさい）.

また、3人称単数形、とくに助動詞 **бол=** の3人称単数形は、「～しますように」という祝詞（のりと）や祈りの言葉でよく使われる。

例) Узун назылыг болзун,

Улуг аас-кежиктиг болзун!

(長生きしますように,

ほんとうに幸せに暮らせますように!)

Бажының дүгү

Агаргыже чурттазын,

Ак салдыг,

Ак баштыг чорзун!

(髪の毛が

白くなるまで長生きしますように,

白いひげをたくわえて

頭が白髪になるまで長生きしますように!)

「～したいのだが」の意味で希求＝命令法後に **дээш** が使われることがある。そのときは希求＝命令法1人称が、また条件法も用いられる。

例) Херээженнер эмчизинге бижидип алыын дээш.

(婦人科の受付をしたいのですが.)

Авамга акша чорудайн дээш.

(母にお金を送りたいのだが.)

Чагаа чорудупса дээш.

(手紙を送りたいのだが.)

また、**дээш** は希求＝命令法3人称単数形とともに用い、「～するために」の意味で用いられることがある。

例) Силерниң оглуңар чүден-даа кортпас үрен, кажан-бир шагда хилинчектиң хилинчээн көрүп чораан мээң допчу-намдарымны дириг арткан кырганнар сагынзын дээш, келир салгал билип алзын дээш, черле бижип шыдаар үреним чүве.

(あなたの息子たちは何も恐れない若者たちであるが、むかしあると

きに大きな苦しみを経験してきた私の経歴を生き残った老人たちが思い出すように、未来の子供たちが知ることができるように、しっかりと書き残すことができる若者たちである.)

М. Кенин-Лопсан « Читкен уруг » Кызыл, 2000, арын 400

Бир көөрге, хараган дөзүндө даянгышсыг чиңге ыяш чыткан.

Шынап-ла даянгыш ышкаш боорга көдүргөш, чөленип чорзун дээш Аңгырмаага тутсуп каан.

(見てみると、灌木の根元に杖に似た細い木が落ちていた。たしかに杖のようなので拾い、寄りかかって行くようにとアングルマーに手渡した.)

Н. Куулар « Танаа-Херелдин чуртунда » Кызыл, 2004, арын 15

動詞が希求＝命令法であらわされるとき、目的語（～を）は対格であらわされるが、対象が具体的でないとき、あるいは行為が物の一部（部分、ある量）にしか及ばないときは奪格になる。

例) Бо шоочаны солуп бериңер. (この鍵を交換してください.)

下線部は対格—具体的な「この」鍵

Таксиден чагыдып бериңер. (タクシーを予約してください.)

下線部は奪格—どのタクシーでもいいから（具体的ではない）

Шайдан кут. (お茶をいれて.)

下線部は奪格—ある量，一部

希求＝命令法において大きな役割を果たしているのは、言葉のイントネーションである。イントネーション（語調）が強ければ強いほど要請や命令、指図の絶対度（度合い）が強くなる。逆にイントネーション（語調）が弱ければ弱いほど要請や命令、指図の絶対度（度合い）も弱くなる。弱いイントネーションは何よりもお願い、あるいはただ希望をあらわす。

完了相接辞がついた動詞に希求＝命令法の二人称複数接辞がつくと、-выт-, -вут は -пт- に、-вит-, -вүт は -пт- となり、命令形は -птыңар, -птиңер となる（14. 5. 2. 完了相参照）。

例) Менче долгаптыңар. (私に電話してください) < долгавытыңар

ただし、完了相接辞がついた動詞の希求＝命令法の二人称単数形は、語幹のままである。

例) Биживит. (書きなさい.)

14.9.3.同意・許可法

同意・許可法は以下の接辞を動詞語幹につけてあらわす。

文末には人称指標をつける。人称指標の3人称単数はつかないが、3人称複数
数のときは複数接辞 **-лар** がつくこともある。

疑問形 **Канчалгай?** に答える形である。

動詞語幹の 最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
無声子音	-кай	-кей	-кай	-кей
母 音 有声子音	-гай	-гей	-гай	-гей

肯定形 **бар=** (行く)

人 称	単 数	複 数
1	Баргай мен аан.	Баргай бис аан.
2	Баргай сен аан.	Баргай силер аан.
3	Баргай аан.	Баргай[лар] аан.

否定形 **бар=** (行く)

人 称	単 数	複 数
1	Барбаай мен аан.	Барбаай бис аан.
2	Барбаай сен аан.	Барбаай силер аан.
3	Барбаай аан.	Барбаай[лар] аан.

同意・許可法の意味と使用法

- 1) 同意・許可法はふつう、**-кай** 形と叙法助詞 **-ла, аан, -даа** の一つと組み合わせられて用いられ、話者の視点から行為もしくは状況を発話時点との関係で未来において行ってもよい、あるいは行ってはいけない、～しなくてもよい（許される、もしくは許されない）ことをあらわす。すなわち、1人称ではその行為を自分が行うことへの同意を（まあいいか、私が～しよう）、2人称では行為が対話者によって行われることへの同意を（いいだろう、君は～してもいいよ）、3人称では第三者がその行為を行うことへの同意（まあよからう、誰々に～させてもよいか）をあらわすことである。

また、願望・希望「～してくれ」や推測・憶測「おそらく～するだろう」という意味でも用いられる。

例) **Ойнаай-ла бис.** (まあ、遊ぼうか。)

Удавас тарылга эгелээй, ынчангаш амдыгааштан тарылгага ыяк

белеткенгей бис.

(まもなく播種が始まるだろうから、今のうちから播種のためにしっかりと準備をしようか.)

Эртен аяс болза, сиген кескей бис ; бир эвес чаъстыг болза, кеспэй бис, а машиналарывыс септеп алгай бис.

(明日天気がよければ我々は干草を刈ってもよい。が、もし雨が降ったなら刈らなくてもよい、機械の修理をするのがよい.)

Ооң соонда таптыг чурттап чораай бис аан.

(その後は、わたしたちはちゃんと暮らしていけるだろう.)

Ам дээррезинде шөлээн чок болгаш-тыр, соонда келгей сен аан але.

(今忙しいので あとで来てもらえないか.)

Хой кадарарыңарда Айдүннү база эдертп ап туруңар, ажилга чаңчыккай.

(あなたがヒツジの放牧に行くときに、アイドゥンを連れて行ってくれないか、彼を仕事に慣れさせたいので [彼が仕事に慣れるだろうから].)

- 2) 助詞 **эртик** とともに用いて、仮定法の主文を形成する (～が許されたであろうに、～が可能であったであろうに ; ～が許されなかつたであろうに、～が可能ではなかつたであろうに ; 1 4.1 0.9.条件=仮定法参照).

例) **Азыраан адам-иёмниң өөн ыйбаландыр өрттетпээн чүве болза, меңээ берген чүве болза, ол өгге чаңгыс бодум чурттап орап хире мен, азыраан иём-биле-даа демнежип чурттаай эртик мен.**

(育ててくれた両親の天幕を燃やして灰としてしまわなかつたならばまた私に与えてくれたものがあるならば、この天幕でまったく一人で住んでいることだろう、育ててくれた母と二人で助け合いながら住んでいくことが許されたであろうに.)

M. Кенин-Лопсан « Читкен уруг » Кызыл, 2000, арын 80

14.9.4.限定法

限定法は歴史的に形成された合成接辞を動詞語幹につけてつくる。

人 称	数	動詞語幹 の 最後の音	語幹の最終音節の母音			
			а, ы	э(е), и	о, у	ө, ү
1	単	無声子音	-кыжемче	-кижемче	-кужемче	-күжемче
		有声子音 母音	-гыжемче	-гижемче	-гужемче	-гүжемче
2	数	無声子音	-кыжеңче	-кижеңче	-кужеңче	-күжеңче
		有声子音 母音	-гыжеңче	-гижеңче	-гужеңче	-гүжеңче
3		無声子音	-кыже	-киже	-куже	-күже
		有声子音 母音	-гыже	-гиже	-гуже	-гүже
1	複	無声子音	-кыжевисче	-кижевисче	-кужевисче	-күжевисче
		有声子音 母音	-гыжевисче	-гижевисче	-гужевисче	-гүжевисче
2	数	無声子音	-кыжеңерже	-кижеңерже	-кужеңерже	-күжеңерже
		有声子音 母音	-гыжеңерже	-гижеңерже	-гужеңерже	-гүжеңерже
3		無声子音	-кыже	-киже	-куже	-күже
		有声子音 母音	-гыже	-гиже	-гуже	-гүже

限定法は、その行為をするまでに他の動詞であらわされる行為が行われていた、あるいは行われていなかったこと、行われている、あるいは行われていないといった区切りをなす行為をあらわす（～するまで）。

限定法の接辞をもつ動詞は、いつも時をあらわす従属文の述語となり、その時制は主文をなす動詞の時制次第である。

この限定法接辞の最初の母音 **ы**（とその発音上のバリエーション）にアクセントがある（**-кыже**）。否定形のアクセントは **-пааже** となる。

限定法は、**Канчалгыже?**、**Канчалбааже?** の疑問形に答える形である。

限定法の接辞は歴史的に形成された合成接辞なので母音調和の法則に則っていない。

肯定形 кел= (来る)

人 称	単 数	複 数
1	келгижемче	келгижевисче
2	келгижеңче	келгижеңерже
3	келгиже	келгиже

例) Сен келгижеңче, мен бо номну дөгере номчуптар мен.

(君が来るまでに私はこの本を全部読んでしまうよ.)

Имир дүшкүже, ажылды ыяавыла доозар херек мен.

(日が暮れるまでに私は必ず仕事を終えなければいけない.)

Самолёт сыннар артынче ажытталы бергиже, үр-ле кайгап турдувус.

(飛行機が山々を越えて見えなくなるまで、私たちは長い間見つめていた.)

否定形 -пааже (< -пагыже) (とその発音上のバリエーション) は限定法の否定アスペクトをあらわさなければならないのだが、現在では単なる否定形ではなく、以下の意味をもつ。

1) 叙法助詞 хоржок (~してはいけない), болбас (~してはいけない) と結びついて必要性の叙法をあらわす。「~しないわけにはいかない」という意味になる。

例) Барбаажемче хоржок.

(私は行かないわけにはいかない.)

Далашпааже хоржок.

(急がないわけにはいかない.)

Черле бир аргазын тып тургаш, кадайланмааже хоржок.

(とにかく1つ方法を考え出して、[その娘を]嫁にしないわけにはいかない.)

«Тыва тоолдар II» Кызыл, 1951, арын 3

2) 条件がつく行為をあらわす (~しないうちは).

例) Келбээжемче чорбас сен.

(私が来ないのなら、君は行かないで.; 私が来ないうちは、君は行かないで.)

Башкының берген онаалгазын күүсетпээжемче, класстан үнмес мен.

(先生が出した問題をやり終えるまではぼくは教室から出ないぞ.)

Хааржакты мен келбээжемче ажыдып болбас.

(私が来ないうちは箱を開けてはいけない.)

1 人称と 2 人称のとき、接辞中の所有接辞を落とすこともある。

例) мен келгиже, сен келгиже, бис келгиже, силер келгиже

限定法のあとに後置詞 **бээр** (～まで), **чедир** (～まで) を組み合わせて用いることもある。その際、動詞の限定法の接辞語尾 **-че** (3 人称を除いて) は前記の後置詞の格支配によって与格 **га** (とその発音上のバリエーション) に変わることが多い。すなわち、

限定法(語尾 -че をとった形) + **га(ге, ка, ке)** + **дээр** または **чедир** となる。

例) 11 классты дооскужемге чедир кайнаар-даа барбайн, чүглө Кунгуртуг суурга чурттап келген мен.

(私は 11 年生を卒業するまでどこへも行かず、ただクングルトウグ村に住んでいました.)

Сүттүң өрөмезинден саржагны ылгап үндүрүп алыр дээр болза, күш чарыгдап тургаш, суу ылгалып үнгүжеге дээр каш-даа катап былгаар.

(乳のクリームからバターを分離して得ようとするならば、力を費やして水分が分離するまで何回も攪拌するのです.)

Г. Монгуш « Онзагай оран Индия » Кызыл, 1999 арын 24

限定法(語尾 -че をとった形) + **га(ге, ка, ке)** の形もある。

例) Огурецти май айда тарааш, ону чай айы үнгүжеге чылыглаан бис.

(私たちはキュウリを5月に植えて、夏がくるまで暖かい温度を保った.)

限定法(-че) + **дээр** または **чедир** のケースももちろんある。

例) Бо хем Каа-Хемче киргиже чедир хөй ужарларлыг болгаш саарыгларлыг.

(この川はカー・ヘム川に合流するまで早瀬や浅瀬がたくさんある.)

Хүн ашкыже чедир, маңаа ажылдаар мен.

(日が沈むまで、私はここで仕事をします.)

14.9.5.必然法

必然法は、形動詞現在未来形 **-ар**（とその発音上のバリエーション）と叙法助詞 **ужурлуг**（～しなければならない）や、助動詞 **апаар**（～する必要がある）を組み合わせてあらわす。

必然法は過去時制と未来時制をもつ。

1) 過去時制

過去時制は、**-ар уjurлуг** のあとに助動詞 **тур=** を形動詞完了形 **турган** にしてつける。

肯定形

人 称	単 数	複 数
1	Келир уjurлуг турган мен.	Келир уjurлуг турган бис.
2	Келир уjurлуг турган сен.	Келир уjurлуг турган силер.
3	Келир уjurлуг турган.	Келир уjurлуг турган[нар].

否定形

人 称	単 数	複 数
1	Келбес уjurлуг турган мен.	Келбес уjurлуг турган бис.
2	Келбес уjurлуг турган сен.	Келбес уjurлуг турган силер.
3	Келбес уjurлуг турган.	Келбес уjurлуг турган[нар].

2) 未来時制

未来時制は、形動詞現在未来形 **-ар** のあとに **ужурлуг** や助動詞 **апаар** をつけてつくる。

肯定形

人 称	単 数	複 数
1	Келир уjurлуг мен.	Келир уjurлуг бис.
2	Келир уjurлуг сен.	Келир уjurлуг силер.
3	Келир уjurлуг.	Келир уjurлуг[лар].

否定形

人 称	単 数	複 数
1	Келбес уjurлуг мен.	Келбес уjurлуг бис.
2	Келбес уjurлуг сен.	Келбес уjurлуг силер.
3	Келбес уjurлуг.	Келбес уjurлуг[лар].

助動詞 **апаар** との組み合わせによって行為実現（遂行，起きること）の必要性や必然性をあらわす。

例) **Келир апаар мен.** (私は行かざるをえない.)

Келир апаар сен. (君は行かざるをえない.)

1 4 . 9 . 6 . 条件法

条件法は，他の動詞のさまざまな形であらわされる他の行為や理由となる行為あるいは状況をあらわす（～ならば，～のときは）。

条件法は歴史的に形成された合成接辞によってあらわされる。

条件法接辞表

人 称	数	動詞語幹の 最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
			а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
1	単	無声子音	-сымза	-симзе	-сумза	-сүмзе
		有声子音 母 音	-зымза	-зимзе	-зумза	-зүмзе
2	單	無声子音	-сыңза	-сиңзе	-суңза	-сүңзе
		有声子音 母 音	-зыңза	-зиңзе	-зуңза	-зүңзе
3	數	無声子音	-са	-се	-са	-се
		有声子音 母 音	-за	-зе	-за	-зе
1	複	無声子音	-сывысса	-сивиссе	-сувусса	-сүвүссе
		有声子音 母 音	-зывысса	-зивиссе	-зувусса	-зүвүссе
2	單	無声子音	-сыңарза	-сиңерзе	-суңарза	-сүңерзе
		有声子音 母 音	-зыңарза	-зиңерзе	-зуңарза	-зүңерзе
3	數	無声子音	-са	-се	-са	-се
		有声子音 母 音	-за	-зе	-за	-зе

肯定形 бар= (行く)

人 称	単 数	複 数
1	барзымза	барзывысса
2	барзыңза	барзыңарза
3	барза	барза

否定形 бар= (行く)

人 称	単 数	複 数
1	барбазымза	барбазывысса
2	барбазыңза	барбазыңарза
3	барбаза	барбаза

条件法の時制は、形動詞と動詞 бол= (～である) の条件法形を組み合わせてつくる。

過去：形動詞 -ган 形 + бол- (条件法形)

形動詞否定 -паан 形 + бол- (条件法形)

未来：形動詞 -ар 形 (現在未来形) + бол- (条件法形)

形動詞否定 -пас 形 + бол- (条件法形)

現在：(今から起こる未来を含めて)：動詞の語幹 + 条件法形

動詞語幹 + 否定接辞 -па + 条件法形

過去の場合は确实 (絶対) 過去形 -ды (とそのバリエーション; 14.10.1. 参照) からはつukらない。

例) ажылдаан болзумза (もし私が働いていたのなら)

көргүспээн болзуңза (もし君が見せなかったのなら)

ажылдаар болзуңза (もし君が働くのなら)

көргүспес болзуңза (もし君が見せないのなら)

билгелек болзуңза (もし君がまだ知らないというのなら)

билген болза (もし彼が知っていたのなら)

көргүспезимзе (もし私が見せないのなら)

Чаъс хөй чагза, тараа эки болур.

(雨がたくさん降れば、穀物はよくなる.)

Силер Туранче чоруур апарзыңарза, меңээ чугаалаар силер.

(あなたがトゥーランへ行くことになったら、私に言ってください.)

Москвага барзымза, хамык музейлерниң шуптузун көөр мен.

(モスクワへ行ったら、ぼくはすべての博物館を見るぞ.)

述語が形容詞のときは形容詞の後に現在形では**болза**, 過去形 **болган болза**, 未来形 **болур болза** にする. 否定形は形容詞の後に **эвес** (～ではない) を入れる.

- 例) **амданныг болза** (もしおいしいのなら)
амданныг болган болза (もしおいしかったのなら)
амданныг болур болза (もしおいしくなるのなら)
амданныг эвес болза (もしおいしくないなら)
амданныг эвес болган болза (もしおいしくなかったなら)
амданныг эвес болур болза (もしおいしくならないのなら)

「もし」という意味の接続詞として, 条件節の文頭に, **бир эвес** をつけて使われることも多い.

- 例) **Бир эвес сен билир болуңза, ...** (もし君が知っているのなら, ...)

同じ動詞を, はじめ条件節にして (条件法で), そしてすぐ主文で繰り返して使うことがあるが, それは実現するであろう状況を強調する場合である.

- 例) **Ачам бо хүн келбезе, даарта келзе-ле келир.**

(私の父が今日来ないのなら, 明日は来るはずだ [来るなら来る].)

条件法の接辞はまた, 希求法 (1 4.9.7.) や譲歩法 (1 4.9.8.), 条件=仮定法 (1 4.9.9.) でも用いられる.

動詞 **бол-**と **ди-(де-)** の条件法形 **болза** と **дизе** が名詞と組み合わせられることがあるが, その際は「～に関して言えば」という意味になる. この形は同じ動詞に与格をつけた形 **болурга** と **дээрге** で言い換えることができる.

- 例) **Өдүрек суг кыдыынга хонар, аңгыр болза хонмас-тыр.**

(カモは水辺で夜を明かすが, ビロードキンクロはそうしない.)

1 4.9.7. 希求法

希求法は文の末尾におかれ, 話者の視点から実行が望ましい, あるいは望ましくない行為もしくは状況をあらわす (もし～ならよいのに).

希求法の肯定・否定形および時制は, 条件法と同じ作り方である. 違いはただ形動詞完了と助動詞 **бол=** の条件法形の組み合わせが, 過去あるいは未来の意味をあらわすことである.

- 例) **Келзимзе.** (私が来るのが望ましいだろう.)
Келзиңерзе. (君たちが来るのが望ましいだろう.)
Келген болзуңза. (君は来たらよかったのに.)
Көргөн болзувусса. (私たちは見たらよかったのに.)

14.9.8.讓歩法

条件法と助詞 **-даа** とを組み合わせることによって、讓歩法の構文をつくる。讓歩法は、予期される結果に反して他の動詞によって他の行為が行われる、あるいは行われない、そのような行為もしくは状況をあらわす（～としても、～だけれども）。

肯定形 **кел=**（来る）

人 称	単 数	複 数
1	келзимзе-даа	келзивиссе-даа
2	келзиңзе-даа	келзиңерзе-даа
3	келзе-даа	келзе-даа

否定形 **бар=**（行く）

人 称	単 数	複 数
1	келбезимзе-даа	келбезивиссе-даа
2	келбезиңзе-даа	келбезиңерзе-даа
3	келбезе-даа	келбезе-даа

讓歩法の時制は、形動詞と助動詞 **бол=** の条件法形そして助詞 **-даа** の組み合わせによってあらわされる。

助詞 **-даа** は形動詞につけても、助動詞 **бол=** の条件法につけてもどちらでもよい。

- 例) келген-даа болзумза（私は来たけれども）
 келген болзумза-даа（私は来たけれども）
 келир-даа болзумза（私が来るとしても）
 келир болзумза-даа（私が来るとしても）

助詞 **-даа** が形動詞や名詞、形容詞についている場合、**бол=** の条件法形は短縮形 **бол** になることもある。

- 例) Даг бедик-даа бол, буургаар;
 Далай терең-даа бол, кургаар.
 （山は高いといえど、粉々になることもある、
 海は深いといえど、乾ききることもある。）

Ам-даа караңгылаваан бол, турисчи лагерьниң турлаанга кончуг таарышкан аянынг, чараш чер боорга, бо аяңга хонуп алып беп шиитпирледивис.

（今はまだ暗くなっていないとはいえ、観光基地の宿泊地はとても気持ちよく、美しい場所なので、この牧草地で寝ようと私たちは決めた。）

1 4 . 9 . 9 . 条件 = 仮定法

条件 = 仮定法は、二つの部分からなる構文である。

前半部（条件節）は条件法からなる（**-зымза, -зыңза, -за** など）。

後半部（主文）は、以下のようにしてつくられる。

- 1) 形動詞現在未来形 **-ар** と叙法助詞 **ийик**（～だろうに、～のに）との組み合わせ。

この組み合わせは、以下の接辞のように用いられることもある。

-арык, -ырык, -урук

-ерик, -ирик, -үрүк

- 2) 許可法（**-кай, -гай** など）と助詞 **эртик**（～だろうに、～のに）との組み合わせ。

条件 = 仮定法の構文は表に示すと以下の形となる。

もし～なら（条件節）	～だろうに、～のに（主文）
条件法	+ -ар ийик(-арык) ... 肯定形
-зымза,	+ -бас ийик(-базык) ... 否定形
(Бир звес) ... -зыңза, ...	+ -кай эртик ... 肯定形
-за,	+ -багай эртик ... 否定形

例) **Келзиңзе, амыраар ийик мен.**

(君が来るのなら、私はうれしいのだが....)

Келзиңзе, амыраай эртик мен.

(君が来るのなら、私はうれしいのだが....)

Келбезиңзе, хорадаар ийик мен.

(君が来ないのなら、私は怒るだろう.)

Бир эвес олар элээр чораан болза, олар кажанда-даа буруулуг чорук кылып чораанын чугаалавастар ийик.

(もし彼らが酔っていなかったなら、犯罪（罪となること）を犯していたことを決して話したりはしなかっただろう.)

M. Кенин-Лопсан « Читкен уруг » Кызыл, 2000, арын 225

構文の後半部（主文）の時制は前半部、つまり条件法形によって決まる。

例) **Келген болзуңза, амыраар ийик мен.**

(あなたが来たのなら、私はうれしかったのだが.... : 過去)

Күзээр болзуңарза, чалаай эртик мен.

(もしあなたが望むなら、私は招待するのに. : 現在未来)

文中、とくに構文において、いきなり三つ以上の法に出会うことがある。

例) **Күзээр болзуңарза, мен келгижемче манаай эртик силер аан.**

(もしあなたが望むなら、私が来るまで待ってもいいよね。)

この複文中には、条件法 **болзуңарза** と限定法 **келгижемче**、許可法 **манаай** が含まれている。

14.10.助動詞

いくつかの動詞は、自らの主要な語彙的意味のほかに、補足的ニュアンスや時制、相、態といった文法カテゴリーを表現するために助動詞として用いられる。

否定接辞や過去形接辞は助動詞につく。

以下に、その助動詞の用法と意味を挙げておく。

助動詞 (動詞語幹)	要求する 本動詞の 形態	意 味
алыр (ал=)	副動詞 -п 形	自分自身 (主語) のために行う行為をあらわす (自分のために～する)
	例	номчуп алыр ([自分のために]読書する) даарап алыр (縫う)
	副動詞 -а 形	①肯定形では行為進行の可能性をあらわす (～できる) ②否定形では行為実現の不可能性、あるいは行為の完成・完遂への不確信さをあらわす (～しないだろうか、～でないかもしれない)
	例	бижий алыр (書ける) бижий албас (書くことができない) даарай алыр ирги бе (縫えるかな)
бээр (бер=)	副動詞 -п 形	第三者 (他人) のために行われる行為をあらわす (～してあげる)
	例	номчуп бээр ([人のために]読んであげる) садып бээр (売ってあげる, 買ってくれる) Ырлап берейн. (歌ってあげよう。) Меңээ адың чугаалап бер. (ぼくに君の名前を教えてください。)

	副動詞 -a 形	① 行為・動作の開始をあらわし，その行為を継続するニュアンスをもつ (～し始める「だけでなく，今も続けている」) ② 行為の完了・完遂をあらわす 「去る」，「消える」，「別の状態への移行(中に入る，帰るなど)」をあらわす動詞とともによく用いられる (～してしまう)
	例	① бижий бээр (書き始める) Хенертен чаьс чаай берген. (突然雨が降り出した.) ② үне бээр (立ち去る，出て行く)
баар (бар=)	副動詞 -a 形 副動詞 -пайн 形 副動詞 -каш 形	行為の形成，完了・完遂をあらわす (～していく，～しないでいく)
	例	чоруй баар (去る，行く)， көзүлбейн баар (見えないようになる)， алгаш баар (持って行く)
келир， кээр (кел=)	副動詞 -п 形	① 長期間にわたって行われ，現在まで継続する行為をあらわす (ずっと～してきている，ずっと～してきた) ② 行為の開始と完成・完了をあらわす
	例	① чурттап келген (ずっと住んできた) ажылдап келген (働いてきた) ② хадып кээр ([風が]吹き出す，吹いてくる)
болур (бол=)	副動詞 -п 形	行為の可能性や許可をあらわす (～することができる，～してもよい)
	例	Чугаалап болур бе? (言ってもいい?) Кирип болур. (入ってもよいです.)
болбас	副動詞 -п 形	行為の禁止をあらわす (～してはいけない)
	例	Шии үезинде угаалажып болбас. (劇を見ているときにおしゃべりしてはいけない.)
дээр (де=ди=)	擬声・擬態語	擬声・擬態語とともに用いて瞬間をあらわす相をつくる

кылыр (кыл=) кынныр (кылын=)	例	кызаш дээр ([稲妻が]ピカッと光る) серт кынныр (ビクッと震える)
каар (каг=)	副動詞 -п 形	行為の終了をあらわす (その行為を終えて, すでに別の行為をしている)
	例	Мен сени бажыңыңга чедир үдеп каан мен. (私は君を家まで送った.) артып каар (残る)
	副動詞 -а 形	迅速に・急激に・突然に・一瞬に行われる行為をあらわす (すばやく～する, 急に～する, 突然～する)
	例	сала кааптар (すばやく置く)
калыр (кал=)	副動詞 -п 形	行為の終了をあらわす (その行為の結果が残っている)
	例	өлүп калыр (死ぬ, 死んでしまう) удуп калган (寝入った「今も寝ている」)
дүжер (дүш=) согар (сок=) тыртар (тырт=) халыыр (халы=) хонар (хон=)	副動詞 -а 形	迅速に・急激に・突然に・一瞬に行われる行為をあらわす (すばやく～する, 急に～する, 突然～する)
	例	тура дүжер (止める) биле соп каар (すぐに知ってしまう, すぐに分かってしまう) үзе тыртар (引き裂く) аргамчыны чеже тыртар (投げ縄をさっとほどいてしまう) үне халыыр (急に出て行く) көстү хонар (突然見えるようになる, 突然きらきら光る)
шавар (шап-)	副動詞 -а 形	エネルギーッシュに行われる行為, 迅速に行われる行為, 行為の終了をあらわす
	例	Бижий шаавыт. (すばやく書き終えなさい.)
көөр (көр=)	副動詞 -п 形	① 命令形で用いて, 丁寧な要請・お願いをあらわす (～してください) ② 行為を試すことをあらわす (～してみる)

	例	① Солундан берип көр. (新聞をとってください.) ② хемге балыктап көөр (川で釣りをしてみる)
кирер (кир=) үнер (үн=)	副動詞 -п 形	ある行為の開始・着手をあらわす
	例	ажылдап кирер (仕事を始める, 仕事に取りかかる) ырлап үнер (歌い始める)
тур, турар (тур=) олур, ор, олураp (олур=) чыдар, чыдыр (чыт=) чор, чоруур (чор=, чору=)	副動詞 -п 形 副動詞-пайн 形	<p>終えていない進行中の行為をあらわす. 過去形や現在形, 未来形 (～している, ～していた, ～します) をあらわす.</p> <ul style="list-style-type: none"> • 使い分けは動詞本来の意味 турар (立って～する), олурар (座って～する), чыдар (横になって～する), чоруур (歩きながら～する, 移動しながら～する) に従う. • олурар は「座って」行う行為だけでなく, 移動・動きのある行為もあらわすこともある. • чыдар は上記の意味のほか, その行為が長期間行われること, 落ち着いた気分で行われること, 動きがスムーズに行われることといったニュアンスを本動詞に加える. また行為がこの瞬間に行われていることをあらわす. • 一般的なことや法則, 事実など「立って, 座って」などどのようにしながらしているか関係がないときは, ふつう турар が用いられる.
	例	Номчуп тур мен. (読書しています.) Чагаа бижип орган мен. (手紙を書いていた.) Уруглар удуп чыдар. (子供たちは寝ています.) Олар чоокшулап олурганнар. (彼らが近づいてきた.)
чор, чоруур (чор=, чору=)	副動詞 -п 形 副動詞-пайн 形	長期間にわたって行っている行為をあらわす (～している, ～してきた)
	例	Ачам бо черлерден аңнап чораан. (私の父はこれらの場所でずっと猟をしてきました.)

туруп бээр (туруп бер=)	副動詞 -п 形	熱心に，一生懸命に，忍耐強く何かにとりかかる，始めること，あるいは取り組んでいることをあらわす
чоруп бээр (чоруп бер=)	例	ажылдап туруп берген (熱心に仕事に取り掛かった) ырлап туруп берген (熱心に歌い始めた) самнап туруп берген (熱中して踊り始めた，熱心に踊った)

場合によっては二つ以上の助動詞の組み合わせが考えられる．そのさいは，副動詞 -а 形を要求する助動詞の組み合わせが先行し，後にそれ以外の副動詞（主として副動詞 -п 形）を要求する助動詞が続く．

例) Мен хадыыр-сарыглар чыый сок алдым.

(私はタンポポをすばやく集めた.)

чыый сок= : すばやく集める сок ал= : 自分のためにする

1 4. 1 1. 合成動詞

合成動詞形において重要な役割を果たしているのが副動詞形と形動詞形の組み合わせである．

合成動詞の語彙的意味をもつ成分は，助動詞（自らの主要な語彙的意味のほかに補足的ニュアンスや時制，相，態といった文法カテゴリーを表現するために用いられる動詞）の前におかれる．

別の言い方をすれば，合成動詞の主な語彙的意味をあらわす主成分は，補足的，文法的もしくは叙法的ニュアンスを，あるいは文法カテゴリーをあらわす成分の前におかれる．

合成動詞は二つ，三つあるいはそれ以上の成分が組み合わさって形成される．

例) Ажылдап турар. ([彼は]働いている.)

Ажылдап эгелей берген. ([彼は]働き始めた.)

Ажылдап туруп берген. ([彼は]しっかりと本腰を入れて働き始めた.)

Ушта бижип туруп берген. ([彼は]しっかりと書き込み始めた.)

Ушта бижип ап туруп берген.

([彼は]いつもしっかりと書き込みをするようになった.)

Ушта бижип ап туруп берген болган.

([彼は]いつもしっかりと書き込みをするようになったのであった.)

また，合成動詞を形成する成分として後置詞や動詞語幹が用いられることがある．そのさい，動詞語幹は次に来る動詞（本動詞）の主たる意味に「どのよ

うに (～する)」というように副詞的な意味を付け加える。あるいは副動詞 **-a** 形のような使い方になると理解してもよいかもしれない。熟語的に使われることが多いと思われる。また、いくつかの動詞の副動詞 **-a** 形も固定化した組み合わせで熟語のように使われることもある。以下にそのように用いられる後置詞と動詞語幹、動詞の副動詞 **-a** 形を挙げる。

後置詞 動詞語幹 (く 本動詞) 副動詞 -a 形 (く 本動詞)	ニュアンス	よく用いられる組み合わせ
ажыр	「～し過ぎる」 「～を越えて」	<ul style="list-style-type: none"> • ажыр чарыгдаар (使いすぎる) • ажыр бүдүрер (過剰生産する) • ажыр күүседир (超過遂行する) • ажыр кудар (注ぎすぎる) • ажыр халыыр (ジャンプして越える, 飛び越す) • ажыр шураар (ジャンプして越える, 飛び越す) • ажыр тудар ([本などを]期限を過ぎても自分の手元においている)
ара	「～し足りない」 (不完全, 不足, 不十分)	<ul style="list-style-type: none"> • ара дүжер ([弾丸などが] 飛び方が不十分で目標手前で落下する) • ара дүшпес (乗り換えしない, 途中で降りない) • ара кылыр (最後までやらない) • ара хонар (目的地にまで行き着かない, どこかに宿泊せずに道すがら夜を明かす) • ара хонмас

		<p>(乗り換えしない, 途中で降りない)</p> <ul style="list-style-type: none"> • ара каар (最後までやり終えない) • ара салыр (家畜が月足らずで出産する) • ара соксаар (中途半端で止める) • ара тыртар (中途半端で止める) чугаа ара тыртар (話を途中で止める) • ара үзер (途中で止める) чугаа ара үзер (話を途中で止める) • ара ээр (途中で引き返す) орук ара ээр (道の途中で引き返す)
арта	<p>「～し過ぎる」 「～を越えて」</p>	<ul style="list-style-type: none"> • арта базар (またぐ) • арта халыыр (ジャンプして越える, 飛び越す) • арта каар (残しておく) • арта аштаар (お腹が空き過ぎる)
арттыр	<p>「～を越えて」 「～を超過して」 「より多く」</p>	<ul style="list-style-type: none"> • арттыр бээр (より多く渡す, 必要以上に渡す) • арттыр күүседир (超過遂行する)
дүжүр ◁ дүжүрер	<p>「取る」, 「下ろす」</p>	<ul style="list-style-type: none"> • дүжүр докпактаар (たたいて落とす) • дүжүр силгиир (はらい落とす) <p>Кызыл кымчызы-биле даштардан харны дүжүр силгип чор. (クズルは鞭で岩々の雪を払い落としてい</p>

		<p>る.)</p> <ul style="list-style-type: none"> • дүжүр ууштаар (手のひらでもんで皮をむく) • дүжүр октаар (とって投げる) Эрес-оол ол пөштүң бажынга чедир үне бергеш, улуг-улуг тооруктарны черже дүжүр октап-ла турган. (エレス=オールはこのセイヨウスギの樹上に登って, とても大きな松かさを地面に取っては投げていた.)
<p>киир ◁ киирер</p>	「中へ」	<ul style="list-style-type: none"> • киир шавар (なかに打ち込む) шаанчакты киир шавар (杭を打ち込む) • киир бижиир (書き込む) паспортче киир бижиир (パスポートに書き込む) • киир бижидер (住民登録する ; 住民登録簿に書き込ませる) бажыңга киир бижидер (そのマンションに住民登録する) • киир октаар (投げ入れる) кажааже киир бижидер (囲いのなかに投げ入れる) • киир каар (投げ入れる) отче будук киир каар (火の中へ薪を入れる) • киир тудар ([何かを]中に入れて持ったまま) отче киир тудар (火の中に[何かを]入れて持ったまま)

		<p>る)</p> <ul style="list-style-type: none"> • киир базар (押し込む, 圧力をかけてなかに入れる, 詰め込む) • киир ойладыр ([家畜を囲いなどの] なかに追いたてる) • сөөгүнге киир доңар (寒さが骨にしみるほど凍える) Уйгужу чалгаа Инек-сокпа мынчага чедир даарталадып соңгаарладып келгеш, уя тудуп чадаан, тургаг-суур чок оран кезип, дүнениң-не сөөгүнге киир доңуп чылбышаан чүве-дир. (寝ぼ助で怠け者のフクロウはこれまで「明日する, 明日する」と先延ばししてきたので, 巣を作ることができず, 定住する場所ももたず放浪することになり, 毎夜骨までしみるほど凍えながら過ごしていることとといいます.) <i>Инек-сокпа</i> «Алдын кушкаш. Уругларга тоолдар» Кызыл, 2002, арын 86 • шаанга киир маңнаар (へとへとに疲れるまで走る, 力尽きるまで走る) • киир агар (流れ込む, 合流する) Бичии кара суг хая-даштар аразындан дааш-шимээнниг шурап баткаш, хөлче киир агып чыткан. (小さな泉は崖のあいだから騒がしい音と泡を立てて流れていき, 湖へと流れ込んでいった.) • сагыжынга киир чугаалаар (心にしみいるように話す) • бажынга киир тайылбырлаар (頭に入るように説明する)
--	--	---

<p>өлүр 〈 өлүрер</p>	<p>「死ぬ」, 「死ぬまで」, 「死ぬほど」</p>	<ul style="list-style-type: none"> • өлүр мунар (ウマなどを死ぬまで乗りつぶす) • өлүр тевер (ウマなどが蹴飛ばして死なせる) Бөрүнү кудун өлүр теп каан. (子ウマがオオカミを蹴飛ばして殺した.) • өлүр херер (ずたずたに引き裂いて殺す) • өлүр херберлээр (ずたずたに引き裂いて殺す) • өлүр чедер (死にそうになる) Ол аштап өлүр четкен. (彼はお腹が空きすぎて死にそうになった.)
<p>тура 〈 чарар</p>	<p>「すばやく立ち上がって、すばやい動作で、さつと」 (敏捷な動作)</p>	<ul style="list-style-type: none"> • тура халыыр (①ある場所からすばやく飛び上がる, とび起きる ②蜂起する, 起ちあがる) • тура согар (たたき落とす) • тура тыртар (引き抜く) • тура шавар (たたき落とす) • тура дүжер (① 止まる ②遅れる, ぐずぐずする) бичии-даа тура дүшпейн (少しも手間取らずに)
<p>удур</p>	<p>「逆に」 「反対に」</p>	<ul style="list-style-type: none"> • удур айтырар (訊き返す)
<p>ушта 〈 уштур</p>	<p>「はずして」 「外へ」</p>	<ul style="list-style-type: none"> • ушта шавар (引き抜く) шаанчакты ушта шавар (杭を引き抜く) • ушта согар (引き抜く, 引っ張り上げる)

<p>үндүр < үндүрер</p>	<p>「外へ（だす）」</p>	<ul style="list-style-type: none"> • үндүр октаар (そとへ投げる) • үндүр ойладыр (追い出す) • үндүр көжер (引越しする) • үндүр сөөглээр (追放する) • үндүр сөөртүр (運び出す) • үндүр тыртар (引き抜く, ひっぱり出す, [魚を] 釣り上げる) • үндүр хөөглээр ([シャマンなどが] 叫び声などをあげて追い出す) <p>Дүңгүр ыыткыр дагжаан санында-ла, хамның хевинде демир кескиндилери каңгыраан, алгы-кештен кылган чылан оворлуг удазын-шидиглери салбараңнашкан тудум-на, аарыг кижиниң мага-бодунга сиңниккен « аарыг ээзи » - аза-четкерни хам үндүр хөөглөп кааптар боор деп аарыг кижиниң төрелдери улам-на кордап турганнар.</p> <p>(シャマンの太鼓の音が響きくにつれて, シャマンの衣装についている鉄製のガラガラがガチャガチャ鳴り, 毛皮から作ったヘビの形状をした布切れがカサカサ揺れるにつれて, 病人に憑いている「病気の主」—悪魔をシャマンが叫び声を上げながら追い出してしまふ, ということを病人の親戚たちはますます期待するのだった.)</p> <p>Ю. Промтов « Азия диптиң төвүндө » Кызыл, 2006, арын 19</p>
--	-----------------	--

<p>хөме</p>		<ul style="list-style-type: none"> • хөме хадыыр (〔風が〕 吹きつける) Соок хат тынышты бергедедир хөме хадып тур. (冷たい風が呼吸できなくするように吹きつけている.) • хөме урар (〔雪などが〕 こぼれ落ちてくる)
<p>чара 〈 чарар</p>	<p>「離して」 (分離) 「～しなおす」(やり直し) 「粉々に、粉碎して、割って」(細分) 「～し潰す」(圧力)</p>	<ul style="list-style-type: none"> • чара базар (押しつぶす) • чара бижиир (書き直す, 書き写す) • чара парлаар (再印刷する, 転載する) • чара кезер (切り分ける) • чара кагар (打ち砕く) • чара тевер (踏みつける, 踏み潰す) • чара шавар (打ち砕く, たたき割る) • чара хонмас (離れて寝ない)
<p>чедир</p>	<p>「～まで」 「最後まで」 (行為の限界)</p>	<ul style="list-style-type: none"> • чедир номчуур (最後まで読む) • чедир кылыр (最後までやる) • чедир билбес (全部知りたがらない, 全部は分からない) Утказын чедир билбээн мен. (意味が全部分からなかった.) • чедир шинчилеттинмес (十分研究されつくしていない) чедир шинчилеттинмээн айтырыглар (まだ十分研究されつくしていない問題)

<p>чуураp < чуура</p>	<p>「粉々に, 粉 碎して」</p>	<ul style="list-style-type: none"> • чуура базар (踏みつけてばらばらにする) • чуура соктаар (叩いて粉々にする, 叩いて細かくする) • чуура кагар (叩いて粉々にする) • чуура шавар (① 粉々にする, 殲滅する, ② 押しつぶす, ずたずたに引き裂く) дашты чуура шавар (石を粉々に砕く) дайзынны чуура шавар (敵を殲滅する) • чуура үстүрер (ぶつけて粉々にする)
<p>чыпшыр < чыпшыраp</p>	<p>「くっつけ て, ~し付け る」(固定, 接合) 「近づけて」 (接近)</p>	<ul style="list-style-type: none"> • чыпшыр идер (近づける, 寄せる) • чыпшыр хырбалаар (貼りつける) • чыпшыр тудар (動かないように持っている, おさえてい る) • чыпшыр даараар (縫いつける) • чыпшыр кадаар (釘などを打ちつける)
<p>эде < эдер</p>	<p>「直して」</p>	<ul style="list-style-type: none"> • эде дыраар (髪を整え直す) • эде суйбаар (髪をなでて整え直す) • эде бижиир (書き直す) • эде чагыыр (注文し直す) • эде салыр (置き直す)

<p>эрттир < эрттиререр</p>	<p>「～し過ぎ る」</p>	<ul style="list-style-type: none"> • эрттир удуур (寝過ぎる) • эрттир чугаалажыр (語り明かす) • эрттир хайындырар (煮過ぎる) • эрттир чылыдыр (暖め過ぎる) • эрттир идер ([チェスで] 相手の駒を取った盤のマス目を越えて進む)
--	----------------------------	---

1 4 . 1 2 . 動詞の名詞化

文中において動詞は以下の方法によって名詞化する。

1) 形動詞形に所有接辞をつける (「～すること, ～したこと」).

例) Эки ажылдаары – бистиң хүлээлгевис.

(よく働くことは我々の義務である.)

2) 形動詞形に複数接辞をつける. この場合, 「～する人々」をあらわす.

例) Үдеп келгеннер чана берген.

(見送りの人々は家に帰った.)

動詞の形動詞形のいくつかは固定し, 独自の語彙的意味をもつ名詞となった場合がある.

例) төрээн (親類), туракургаан (枯れ木)

名詞化された動詞は格変化接辞がつくことによって格変化する. その際, 三人称所有接辞がつく場合は, 名詞と同様に, 格接辞とのあいだに-н-がはいり変化し, 対格は-нをつけるだけでよい.

例) Чайның эрткениң мен эки билбедим.

(夏が過ぎたことをよく知らなかった.)

эрткениң : 対格

Пушкинниң төрүттүнгенинден бээр ийи чүс чыл болганың бүгү чурт, бүгү чон онзазы-биле демдеглек эрттирген.

(プーシキンが生まれてから200年経ったことを全国, 全国民が特別に祝った.)

төрүттүнгенинден : 奪格 болганын : 対格

Тараа тарыырывыстың мурнунда аъттарны дыштандырып турар бис.

(穀物を播種する前に私たちはウマをよく休ませる.)

тарыырывыстың : 属格

動詞に所有接辞をつけて名詞化した動詞（名詞節）の主語はふつう属格形であらわされる。

例) Силернің мында чоокта чаа келгениңерни мен эндевейн-дир мен.

(あなたが最近ここに来たことを，私は気づいているよ.)

1 5.代名詞

代名詞はトゥヴァ語において名詞や形容詞，数詞，副詞，動詞といった自立品詞体系の一般的指標，代用語である。

1 5.1.人称代名詞

人称代名詞は以下のとおりである。

	単 数	複 数
1 人称	мен	бис
2 人称	сен	силер
3 人称	ол	олар

人称代名詞は人物や動物，3 人称では物をも指す。

トゥヴァ語において人称代名詞の主格は以下の役割を担う。

1) 主語となる。

例) Силер бжиңер. (書いてください.)

Ол – колхозчу. (彼は[彼女は]コルホーズ員だ.)

2) 3 人称 **ол**, **олар** を除き，述語の人称指標として用いられる。述語に名詞や形容詞，形動詞，合成動詞を構成する助動詞の形動詞，現在形をあらわす助動詞 **тур**, **олур(ор)**, **чыдар(чыдыр)**, **чор** の後である。そのうえ，文中における人称代名詞が，同時に文末に人称指標として用いられる場合，主語（1 人称，2 人称の人称代名詞）は省略することができる。しかし，人称指標は省略することはできない。

例) Мен студент мен. = Студент мен.

(私は学生です.)

Силер институтта өөренип турар силер бе?

= Институтта өөренип турар силер бе?

(あなたは大学で学んでいますか?)

3) 3 人称 **ол** が稀にはあるが人称指標として用いられることがある。しかし，**ол** はふつうは用いられないが，その代わりに文末に **кижи** ([~な]人だ)，**чүве** ([~な]ものだ，[~という]ことだ) を入れることがある。

例) Кушкаш уязынга үш оглун азырап турган чүве-дир.

(小鳥が巢で3羽の雛を育てていたということだ.)

人称代名詞の格変化表

主 格	мен	сен	ол	бис бис[тер] бис[терлер]	силер силер[лер]	олар олар[лар]
属 格	мээң	сээң	ооң	бистиң	силерниң	оларның
(所有)	мээңии	сээңии	ооңуу	бистии	силернии	оларныы
与 格	меңээ мээ	сеңээ сээ	аңаа аа	биске	силерге	оларга
对 格	мени	сени	ону	бисти	силерни	оларны
位 格	менде	сенде	ында	бисте	силерде	оларда
奪 格	менден	сенден	оон	бистен	силерден	олардан
方向格①	менче	сенче	олче	бисче	силерже	оларже
方向格②	мендиве	сендиве	олдува	бистиве	силердиве	олардыва

人称代名詞の属格は所有をあらわし（「私の」、「あなたの」「彼の」など）、後続する名詞には必ず所有接辞をつけないなければならない。そして所有接辞のついた名詞は格変化する。

例) мээң бажыңым (私の家), мээң бажыңымда (私の家で),
ооң бажыңы (彼の家), ооң бажыңынче (彼の家へ),
бистиң бажыңывыс (私たちの家),
бистиң бажыңывысты (私たちの家を)

人称代名詞属格のもう一つの形（下段：мээңии の列）は、話のなかで前出された「物」をを含んで指している。すなわち「～（誰々）のもの、～（誰々）のそれ」をあらわし、それぞれ мээңии 「私のもの」、сээңии 「君のもの」、ооңуу 「彼のもの、彼女のもの」、бистии 「私たちのもの」、силернии 「あなたのもの、あなたがたのもの」、оларныы 「彼らのもの」という意味になる。

例) мээң бажыңым бичии ; сээңии болза улуг.
(私の家は小さいが、君の[家]は大きい.)
Бо карандаш мээңии.
(この鉛筆は私の[鉛筆]だ.)

15.2. 指示代名詞

ол	その
бо	この
доо	そこの
дөө	あそこの
дуу	あそこの
дүү	あそこの
ук	上記の, この
мүн	上記の, この
демги	まさにこの, 同一の
ыңдыг	そのような; そのように
мындыг	このような; このように
ынча	それほどの; それほどに
мынча	これほどに; これほどに
ол хире	それくらいの
бо хире	これくらいの
ыңдыг-мындыг	さまざまな, いろいろな種類の
ынча-мынча	さまざまな, あれこれの
ынчаардагы	当時の, そのときの
мындаагы	まさにその; 当時の

複数形 **мындаагылар** は敬称として用いられ, ①会話の席に居合わす人々を指す場合に3人称複数「彼ら」の敬称として, あるいは古くは「閣下」などの敬称となる, ②2人称「あなた」を指す敬称として用いられる, 「閣下」「敬愛するあなた様」など.

「これ」、「それ」、「あれ」などの位置関係について
 近い ← — — — — — → 遠い

бо → ол → доо → дуу → дөө → дүү

бо は「これは～（です）」の構文としても使われる。

例) Бо ном-дур. (これは本です.)

ол と бо が文末に置かれて、断定の意味で用いられることがある。

例) Ам чүгле боттарывыс артканывыс ол.

(今では我々だけが残されたのだ.)

Бис Тываның эн-не кыдыккы булуңунда келгенивис бо.

(我々はトゥヴァの最果てに来たんだ.)

бо, ол, дөө の格変化

	単 数	複 数	単 数	複 数	単 数	複 数
主 格	бо	болар	ол	олар	дөө	дөөлер
属 格	мооң	боларның	ооң	оларның	дөөң	дөөлерниң
与 格	маңаа (маа)	боларга	аңаа (аа)	оларга	дүгээ	дөөлерге
対 格	мону	боларны	ону	оларны	дөөнү	дөөлерни
位 格	мында	боларда	ында	оларда	дүгде	дөөлерде
奪 格	моон	болардан	оон	олардан	дөөн	дөөлерден
方向格①	боже	боларже	олче	оларже	дөөже	дөөлерже
方向格②	бодува	болардыва	олдува	олардыва	дөөдүве	дөөлердиве

指示代名詞 бо と мындаагы の複数形 болар, мындаагылар は силер「あなた」の敬意をこめた形、非常に丁寧に言う形として、また歴史的には封建領主や殿様などへの敬称（「閣下」、「殿様」など）として用いられる。

бо, ол の所有接辞がついた形も表にしておく。

		бо	ол
単	1 人称	моом	оом
	2 人称	мооң	ооң
数	3 人称	моозу	оозу
	1 人称	моовус	оовус
複	2 人称	мооңар	ооңар
	3 人称	моозу	оозу

もちろん所有接辞がついた形は格変化する。変化は名詞の格変化と同じである。

15.3. 疑問代名詞

以下に主な疑問代名詞を挙げる.

Кым? Кымнар?	だれ?
Чү? Чүү? Чүлөр?	何?
Кайы? Кайызы?	どの? 彼らのうちのだれ?
Кайыын? Кайыыртан?	どこから?
Кайнаар?	どこへ?
Кайда? Каяа?	どこで?
Кажан?	いつ?
Чүге?	なぜ? どうして?
Кандыг?	どのような?
Кымныы?	だれに属する? だれの (もの) ?
Чүнүү?	何に属する? 何の?
Каш?	いくつ? どれくらい? ; 格変化する
Чеже?	いくつ? どれくらい?
Кашкы?	何番目の?
Чежеги?	何番目の?
Канчаар?	どのように?
Канчаар?	どのようにするか?
Канчалдыр?	どのようにして?

また, 疑問をあらわす動詞 **Канчаар?** (どのようにするか?) にさまざまな態接辞がついた形もある.

例) **Канчалдырар?** どのようにされるか?

疑問代名詞 **Кым?**, **Чү?**, **Чүү?** の格変化

	単 数	複 数	単 数	複 数
主 格	Кым?	Кымнар?	Чү?, Чүү?	Чүлөр?
属 格	Кымның?	Кымнарның?	Чүнүң?	Чүлөрниң?
(所有)	Кымныы?	Кымнарныы?	Чүнүү?	Чүлөрнии?
与 格	Кымга?	Кымнарга?	Чүге?	Чүлөрге?
对 格	Кымны?	Кымнарны?	Чүнү?	Чүлөрни?
位 格	Кымда?	Кымнарда?	Чүде?	Чүлөрдө?
奪 格	Кымдан?	Кымнардан?	Чүден?	Чүлөрдөн?
方向格①	Кымче?	Кымнарже?	Чүже?	Чүлөрже?
方向格②	Кымдыва?	Кымнардыва?	Чүдүве?	Чүлөрдиве?

疑問代名詞 **Кым?**, **Чү?**, **Чүү?** の属格のもう一つの形 (下段: **Кымныы?** の列) は話のなかで前出された「物」を含んで指している. すなわち, **Кымныы?** 「(物が) 誰のもの?」, **Кымнарныы?** 「(物が) 誰らのもの?」, **Чүнүү?** 「(ある物が) 何に属しているか?」, **Чүлернии?** 「(ある複数の物が) 何に属しているか?」 という意味になる.

疑問代名詞 **Чү?**, **Чүү?** に所有接辞がついた変化

	単 数	複 数
1 人称	Чү? , Чүү?	Чүвүс?
2 人称	Чүң?	Чүңер?
3 人称	Ооң чүзү?	Оларның чүзү?

疑問代名詞 **Кым?** には所有接辞はつかない. 疑問代名詞 **Чү?**, **Чүү?** に所有接辞をつけた形で代用する. したがって, たとえば **Чүң?** は①「君の何(物)?」, ②「君の誰?, 君にとって誰にあたる (人との関係)?」をあらわす.

疑問代名詞 **Кандыг?** **Кайы?** に所有接辞がついた格変化は以下のようになる.

	Кандыг?	Кайы?
主 格	Канды<u>ызы</u>?	Кайызы?
属 格	Канды<u>ызы</u>ның?	Кайызының?
与 格	Канды<u>ызы</u>ңга?	Кайызыңга?
对 格	Канды<u>ызы</u>н?	Кайызын?
位 格	Канды<u>ызы</u>нда?	Кайызында?
奪 格	Канды<u>ызы</u>ндан?	Кайызындан?
方向格	Канды<u>ызы</u>ңче?	Кайызыңче?

疑問代名詞をともなう疑問文中では, 疑問接辞 **-ыл**, **-ул**, **-ил**, **-үл** をつけることができるが, もちろん疑問代名詞が述語になったときも同様である. この接辞は, 歴史的にはおそらく代名詞 **ол** から生じたと考えられる. 16.4.8. 疑問接辞 **-[ы]л** を参照のこと.

例) **Бо кымыл?** (こちらはだれですか?) < **кым ол**

Бо чүл? (これは何ですか?) < **чү ол**

Кадыңар кандыгыл? (あなたの健康状態はどうですか?)

< **кандыг ол**

疑問代名詞を用いて感嘆文・反語表現をあらわすことができる。以下のような文の構造がある。感嘆文に関しては、10.4.4.名詞の対格も参照のこと。

Кандыг + 名詞 + чок дээр боор!

(いかなる～もないといえようか!，なんでもある，どんな～でもある)

文章・名詞対格 + канчап + 動詞否定形 + боор!

(～[である]ことをどうして～しないだろうか!)

名詞(+所有接辞)・動詞の名詞化形+対格 + чүү (さまざまな格) дээр!

(～はなんという～なことだろうか!)

名詞(+所有接辞)・動詞の名詞化形+対格+ чүү (さまざまな格) дээр ону!

(～はなんという～なことだろうか!)

名詞の対格・形容詞の名詞化形+対格+канчаар!

(～といたらどれほどだろう!なんて～なんだろう!)

例) **Хөй хемнер, хөлдөрнийң суунда кадыргылар, мезилдер, шортаннар болгаш белдер дээш кандыг балык чок дээр боор!**

(多くの河川や湖にカワヒメマスやカワメンタイ，カワカマス，イトウといった魚，どんな魚が住んでいないといえよう，どんな魚もいる!)

Тожуда кандыг аңнар чок дээр боор!

(トージュにいかなる獣がいないといえようか!)

Тывада танцыларның күүседикчизи Ажыкмааны канчап магадавас боор!

(トゥヴァの踊り子アジュクマーをどうして驚嘆しない人がいようか!)

Ногаа шөлүнге чеде бээримге, кижиниң хөйүн чүү дээр!

(野菜畑に出てみると，人の多さといったら何たる多さなんだろう!)

Шуут болдунмас деп чүве чок, ыяап-ла кандыг-бир аргазы турар журлуг. Кижичү нү бодавас дээр!

(まったく不可能なことはない，かならず何か方法があるはずである。人が考え出せないものなんてあるだろうか!)

Кортканымны чүү дээр ону!

(恐ろしかったといったらなんて表現したらよいだろう!)

Кээргенчиин канчаар!

(なんてかわいそうなんだろう!)

1 5 . 4 . 定代名詞

төдү	みんな, すべて : ふつう所有接辞とともに用いられない. 例) Орлан, бо чемни төдү чиир сен. (オルラン, この食事をすべて君が食べなさい.)
бүгү	みんな, すべて : 定語として用いる. ふつう所有接辞とともに用いられない. また「全...」という意味のなす語を形成する. 例) Бүгү чон чаңгыс демниг ажылдап кирипкен. (全国民が1つになって働き始めた.) бүгү талазы-биле (全面的に), бүгү-ниити (全般的な)
бүгүде	みんな, すべて : ふつう定語として用いる. 主として所有接辞とともに格変化接辞をともなう. 例) Бүгүде, экии! (みなさん, こんにちは!)
шупту	みんな, すべて (の人々, のもの) : 定語として, あるいは所有接辞とともに用いる. 例) Шупту аалдар чайлагдан чедип келген. (すべての来客が夏営地から到着した.)
бүрүн	みんな, すべて, 完全な, まるごとの : 定語として用いる. 複数の意味をもたず, 1つのまとまり, 物の全体という意味で用いられる. ふつう所有接辞とともに用いられないが, бүрүнү-биле「完全に」という形ではよく使われる. 例) Шупту аалдар чайлагдан чедип келген. (すべての来客が夏営地から到着した.)
хамык	みんな, すべて : 定語として, あるいは名詞のように格変化をして用いる. ふつう所有接辞とともに用いられない. 例) хамык кыстар (すべての女の子たち)
дооза	みんな, すべて (の人々, のもの) : ふつう所有接辞とともに用い, 主語や補語になることが多い.

дөгере	<p>例) Уруглар дооза келген. (子供たちはみんな来た.) みんな, すべて (の人々, のもの), 完全な : ふつう所有接辞とともに用い, 主語や補語になることが多い.</p>
сувура	<p>例) Уруглар дөгере чедип келген. (すべての子供たちがやって来た.) みんな, すべて (の人々, のもの) : 所有接辞とともに用い, 主語や補語になることが多い.</p> <p>例) Суурдан үнген уруг-дарыг сувуразы дагда келген. (村からでてきた子供たちはみんな山にやって来た.)</p>

上記の定代名詞は, **бүрүн** を除いて数えられる複数的な意味で用いられる. したがって複数形もあるのだが, 本来複数の意味が含まれているので, 単数形で用いればよい.

上記いくつかの定代名詞は,
名詞, 代名詞 (の属格) + 定代名詞 + 所有接辞 (+ 格接辞)
 の形で用いる. 「(誰々) のすべての人たち (は, の, を, から...)」の意味となる.

例) Башкывыс бистиң шуптувуска ынак.
 (私たちの先生は私たちみんなのことが好きです.)

бүрү	<p>各々の, 各~, あらゆる : 名詞の後ろから修飾する. したがって, ふつう 所有接辞がともなう. 格接辞もついてよい. 例) Кижі бүрүзү өөренир эргелиг. (すべての人間は学ぶ権利がある.)</p>
болган-на	<p>あらゆる, 毎~, 各々の, 各~ : 名詞の後ろから修飾する. 所有接辞, 格接辞もつ いてよい. 例) Кижі болган-на университетче кирип шыдавас. (人は誰でも大学に入れるわけではない.)</p>
янзү-бүрү	<p>いろいろな : 定語として用いる. 例) Чысымаа янзү-бүрү карандаштар-биле чуруттунуп олур.</p>

(チユスマーはいろいろな鉛筆で絵を描いている.)

「 疑問代名詞 + **-даа** 」形
「～でさえも, ～でも」の意味となる.

кым-даа	誰も 例) Бажыңга бөгүн кым-даа келбээн. (今日家に誰も来なかった.)
чүү-даа	何さえも、何も 例) Мен тайгаже чүү-даа чок чор. (私は何も持たずにタイガに向かっている.)
кайда-даа	いたるところも、どこでも 例) Осакада кайда-даа кижилер эңдерик. (大阪はどこに行っても人が多い.)
кандыг-даа	どんな～でも、何でも、すべての 例) Садыгда кандыг-даа бараан садып турар. (お店には商品が何でも売っている.)
кайнаар-даа	どこへでも 例) Кайнаар-даа көөрүмге, арга-ла арыг. (どこを見ても、森ばかりだ.)
кажан-даа	いつも、いつでも 例) Кижича кажан-даа угун утпас болза, эки. (人はどんなときでも自分の先祖のことを忘れないでいるなら、いいことだ.)
кайыын-даа	どこからでも 例) Тывага кайыын-даа чаъс келир. (トゥヴァでは[西からであろうが東からであろうが]どの方角からでも雨は降る.)

上記中の疑問代名詞 **кым** と **чүү** は数に応じて変化し、格変化もする.

1 5 . 5 . 不定代名詞

бир ある, なんらかの : よく **бир-ле** の形で用いる.
例) **бир-ле** кизи 「誰か」, **бир-ле** чүве 「何か」,
бир-ле черде 「ある場所で」,
бир-ле шагда 「あるとき, いつか」

-бир は疑問代名詞につき, 不定代名詞を形成する.

кым-бир だれか
例) **кым-бир** кизи 「誰か」

чүү-бир 何か
例) **чүү-бир** чүве 「何か」

кайы-бир なんらかの, 任意の
例) **кайы-бир** кизи 「誰でもいいから誰か」
кайы-бир шагда 「あるとき, いつか」

кандыг-бир どれかの
例) **кандыг-бир** чүве 「何でもいいから何か」

кайнаар-бир どこかへ
例) **кайнаар-бир** черже 「どこかへ」

кажан-бир いつかの
例) **кажан-бир** шагда 「いつか, あるとき」

「 疑問代名詞 + **-даа** + **болза(бол)** 」形

「～であっても」をあらわす.

кым-даа болза 誰か, それが誰であっても, 誰でも
чүү-даа болза 何か, それが何であっても, 何でも
кажан-даа болза いつか, それがいつであっても
канчап-даа болза 何らかの方法で

чамдык いくつかの ; 所有接辞や格接辞がつくこともある.
чамдык-бир いくつかの
бир-чамдык いくつかの
каш いくつかの

15.6.否定代名詞

「疑問代名詞+**-даа**」形と「疑問代名詞+**-даа+болза(бол)**」形は否定形とともに用いられると、すなわち動詞否定形 **-па(-пайн, -пас, -паан など)**とその発音上のバリエーションや否定形をあらわす **чок** や **эвес** とともに用いられると、否定代名詞の意味になる。

例) **Мен чүү -даа билбес мен.** (私は何も知らない.)

Ында кым-даа чок. (そこに誰もいない.)

Мен дүүн кайнаар-даа барбаан мен.

(私は昨日どこへも行かなかった.)

Мен кайыын-даа чагаа албадым.

(私はどこからも手紙を受け取らなかった.)

15.7.代名詞 бот

代名詞 **бот** は「自分自身」という意味である。所有接辞をともなって用いる。したがって所有接辞がついた形は以下のようなになる。

単 数		複 数	
бодум	私自身で	бодувус боттарывыс	私たち自身で
бодуң	君自身で	бодуңар	あなた自身で, あなたがた自身で
		боттарыңар	あなたがた自身で
боду	彼・彼女・ それ自身で	боттары	彼ら・それら自身で

代名詞 **бот** も格変化する。格変化表は以下のようなになる。属格で用いる場合「自分自身の」の「自分」は主語と同じ人であり、主語にあわせた形で用いる。

代名詞 **бот** の格変化表

	1 人 称	2 人 称	3 人 称
	単		数
主 格	бодум	бодуң	боду
属 格	бодумнуң	бодуңнуң	бодунуң
与 格	бодумга	бодуңга	бодунга
对 格	бодумну	бодуңну	бодун
位 格	бодумда	бодуңда	бодунда
奪 格	бодумдан	бодуңдан	бодундан
方 向 格①	бодумче	бодуңче	бодунче
方 向 格②	бодумдува	бодуңдува	бодундува
物主代名詞の形	бодумнуу	бодуңнуу	бодунуу
	複		数
主 格	бодувус боттарывыс	бодуңар боттарыңар	боттары
属 格	бодувустуң боттарывыстың	бодуңарның боттарыңарның	боттарының
与 格	бодувуска боттарывыска	бодуңарга боттарыңарга	боттарынга
对 格	бодувусту боттарывысты	бодуңарны боттарыңарны	боттарын
位 格	бодувуста боттарывыста	бодуңарда боттарыңарда	боттарында
奪 格	бодувантан боттарывыстан	бодуңардан боттарыңардан	боттарындан
方 向 格①	бодувусче боттарывысче	бодуңарже боттарыңарже	боттарынге
方 向 格②	бодувустува боттарывыстыва	бодуңардыва боттарыңардыва	боттарындыва
物主代名詞の形	бодувустуу	бодуңарныы	боттарныы

代名詞 **бот** が所有接辞がつかずに用いられる場合があるが、そのときは「自己に向けられる動作；自分の、個人の」や「自然に、自動的に行われる動作；自然と行われる」という意味の形容詞のように用いられるときである。

例) **бот чурук** (肖像画), **бот өөредилге** (独習),
бот агышкын (自然流動)

15.8. 物主代名詞

単 数		複 数	
мээңи	私に属する (もの), 私の (もの)	бисти	私たちに属する (もの), 私たちの (もの)
сээңи	君に属する (もの), 君の (もの)	силерни	あなたがたに属する (もの), あなたがたの (もの)
ооңуу	彼・彼女・それに属する (もの), 彼・彼女・ その (もの)	оларны	彼ら・それらに属する (もの), 彼ら・それらの (もの)

物主代名詞も格変化する。また、代名詞 **бот** にも物主代名詞があるが、15.7. 代名詞 **бот** の格変化表に載せておく。

物主代名詞を形成する接辞 **-ны** (とその発音上のバリエーション) は、一般的に名詞の物主形を形成する接辞である (10.5. 名詞の物主形参照)。

この物主代名詞はふつう述語として用いられる。

例) **Карандаш мээңи.**

(鉛筆は私のものです.)

Ти лелге бисти.

(勝利は我らのものだ.)

Силерни чеп-түр.

(あなたの言っていることは正しい.)

格接辞をつけるときは **-н-** が入る。ただし、対格接辞は **-н** のみである。

例) **Мээң демир-үжүүм силерниңден аар өртектиг.**

(私のペン是你のより値段が高い.)

Силерниң алыр мен.

(私はあなたを持っていきます.)

15.9. 数詞的代名詞

ынча

それほどの数量の：格変化する

例) **ынчага дээр** (それほどにまで長い間)

мынча

それほどの数量の、これほどの：格変化する

例) **Мынча хэй кижы кайыын келди?**

(これほど多い人々はどこから来たの?)

15.10. 副詞的代名詞

ынчан	その時, 当時 例) Ынчан чугааладым. (そのとき私は話した.)
мынчан	この時, その時 例) Кат ынчан быжар. (ベリーはこの時期に熟す.)
мындаа	そのとき, 当時 例) Мындаа келген. (そのとき[彼は]来た.)
ынчаарда	その時, 当時 例) Ынчаарда турган. (そのとき[彼は]そこにいた.)
мынчага	これまでに, その時まで 例) Мынчага чедип келген. (そのときまでに[彼は]やって来た.)
ында	あそこに 例) Ында сандай турар. (あそこに椅子がある.)
мында	ここで 例) Мында кижилер хөй. (ここは人が多い.)
дөө ында	ほら, あそこに 例) Дөө ында бызаа этти. (ほら, あそこで子ウシが鳴いた.)
аңаа	そこへ, そこに, あそこに 例) Аңаа салыр мен. (そこへ置きます.)
маңаа / маа	ここへ, ここに 例) Маңаа чурттаар мен. (ここに住みます.)
дүгээ	ほら, あそこに 例) Дүгээ турар мен. (私はあそこにいます.)
ынаар	あっちへ, あそこへ

	例) ынаар баар мен. (私があっちに行きます.)
мынаар	こっちへ, ここへ 例) Мынаар салыр мен. (私はここに置きます.)
оон	あそこから 例) Оон мынаар салыр мен. (あそこから移動してこっちに置きます.)
моон	ここから 例) Моон ынаар салыр мен. (こっちら移動してあっちへ置きます.)
дөөн	ほら, あそこから 例) Дөөн келир. (ほら, あそこから[彼が]やって来る.)
оортан	あそこから 例) Оортан үнүп кээр. (あそこから[彼が]出てきた.)
борта	ここに, ここへ 例) Борта чедип кээр. (ここへ到着する.)
орта	あそこに; そのとき 例) Орта турар мен. (あそこにいます.)
ында-мында	あちこちに 例) ында-мында машиналар маңнашкан. (いたるところで車が走っている.)
ында-хаая	ときどき, まれに 例) ында-хаая келгилээр. ([彼は]ときどきやって来ます.)
ынаар-мынаар	あちこちへ, あっちへこっちへ, いろいろな場所へ 例) ынаар-мынаар маңнажыр. ([彼は]あちこち走りまわっている.)

1 5 . 1 1 . 動詞的代名詞

ынчаар	そのようにする, そのように行動する
ынча=	: 副詞としても使われる, 「そのように」 例) ынчап чугаалаар (そのように話す)
мынчаар	このようにする, このように行動する
мынча=	: 副詞としても使われる, 「そのように」 例) мынчап кылыр (このようにする)
болаар / молаар	この道に沿って行く (動詞)
бола= / мола=	例) болап кылаштаар (この道に沿って歩く)
дөөлээр	あの道に沿って行く (動詞)
дөөле=	例) дөөлеп чоруур (あの道に沿っていく)
ынчаар-мынчаар	ああやったりこうやったりする (動詞)
ынча=-мынча=	例) ынчап-мынчап чугаалаар (ああ言ったりこう言ったりする)

1 5 . 1 2 . 関係代名詞

疑問代名詞は関係代名詞・関係副詞のように用いられる。先行詞 ол (その人, それ; 格変化する), ынаар (そこへ), ындыг (そのように), ынчаар (そのように…する) は後にくる。

主な関係代名詞を挙げる。

КЫМ

КЫМ ..., ол ...

КЫМ ..., ону ...

例) Кым ажилдавас болдур, ол чем чивес. (働かざる者食うべからず.)

Кым үр чылда чурттап чорааныл, ол кижиге хөй чүве көргөн болур.

(長い間生きてきた人は多くのことを見ている.)

ЧҮҮ

ЧҮНҮ ..., ону ...

例) Чүну чиксеп тур сен, ону ап ал. (君が食べたいものを取りなさい.)

кайда

кайда ..., ында ...

кайда ..., ынаар ...

例) Кайда хөй мөөгү барыл, ынаар бараалыңар.

(たくさんのきのこがあるところへ行こう.)

Кайда ажил барыл, ынаар улус хөй көжер.

(仕事があるところ、そこに人々がたくさん移ってくる.)

Кайда чаъс хөй чагганыл, ында кат хөй.

(雨がたくさん降るところ、ベリーが多い.)

кайнаар

кайнаар ..., ынаар ...

Кайнаар айтыр сен, ынаар баар мен.

(君が示したところに私は行くよ.)

кайыын

кайыын ..., оон ...

Кайыын хат келненил, оон чаъс чаар.

(風が吹ってきた方向から雨が降るだろう.)

кандыг

кандыг ..., ындыг ...

Кандыг өөренип турган сен, ындыг ажилдакчы сен.

(君が勉強したこと、その専門で働くだろう.)

канчаар

канчаар ..., ынчаар ...

例) Номда канчаар бижээн-дир, ынчаар билип ал.

(本に書いてあったそのように覚えておきなさい.)

Канчаар көргүскен мен, ынчаар кылыңар.

(私がやってみせたようにしてください.)

чеже

чеже ..., ынча ...

例) Силерде чеже ном барыл, менде ынча бар.

(あなたが持っているほどの量の本を、私も持っている.)

Чеже кижы барыл, ынча чаң бар.

(人がいるだけ、それだけ性格もある (十人十色).)

1 5 . 1 3 . 疑 問 接 辞 -[ы]л

法の意味の（述語となる）形動詞と副動詞 **-пышаан** 形（1 4 . 7 . 4 . 参 照）を接辞にとる動詞，また動詞 **бар** は，疑問代名詞をともなう疑問文中で疑問接辞 **-ыл**，**-ул**，**-ил**，**-үл** をつけることが多い．この接辞は，歴史的にはおそらく，代名詞 **ол** から生じたと考えられる．

形動詞予期の接辞 **галак // гелек** に疑問接辞 **-ыл** をつけると，形動詞最後の音素 **к** は **г** に替わり，二つの母音に挟まれることになるが，この場合 **г** は脱落しない．

例) **Кым келирил?**（だれが来るの? ; 形動詞現在未来）

Кажан келгенил?（いつ来たの? ; 形動詞完了）

Кым келгелегил?（だれがまだ来ていないの? ; 形動詞予期）

Каш домак барыл?（いくつ文章がありますか? ; 動詞 **бар**）

疑問接辞 **-ыл**（とその発音上のバリエーション）は，疑問文の述語をなす他の品詞（たとえば名詞や形容詞）にもつけることができる．また，別の疑問代名詞や副詞にもつけることができる．

例) **Кымыл?**（だれ? ; 疑問代名詞），**Кажаныл?**（いつ? ; 疑問代名詞），

Бо амытанның чүзү үнелигил?

（この動物の何に価値があるのですか?）

また，**чок**（～がありません，いません）にこの接辞をつける **чогул** の形もある．

1 6 . 補助詞

1 6 . 1 . 接続詞

接続詞とは文中および文全体を、とくに複文においてつなげる語である。
文法的意味において、接続詞は3つのグループ、1) 結合接続詞、2) 選択(分離) 接続詞、3) 反意接続詞に分類される。

1 6 . 1 . 1 . 結合接続詞

болгаш	…と… : 同種の語句の並列をあらわす 例) Менде словарь болгаш номнар бар. (私は辞書と本を持っている.)
база	① …と… 例) Менде словарь база 2 ном бар. (私は辞書と本2冊を持っている.)
биле	② さらに、…もまた : 同種の語句や文章をつなぐ …と… : 同種の語句の並列をあらわす 例) мен биле сен (私と君) дээр биле чер (空と大地)

1 6 . 1 . 2 . 選択接続詞

азы	① …あるいは… ② すなわち、つまり、別の言葉で言うと 例) Борта бөрү азы дилги чораан-дыр. (そこにオオカミかキツネがいたようだ.)
ийикпе	…もしくは… 例) Меңээ чадаг-терге ийикпе мотоцикл херек. (私には自転車かオートバイが必要だ.)
ийикпе азы	…もしくは… 例) Меңээ чадаг-терге ийикпе азы мотоцикл херек. (私には自転車かオートバイが必要だ.)

чок болза	…もしくは… 例) Чок болза кинога чок болза театрга баар херек. (映画か劇に行かないといけない.)
бирде ... , бирде ...	ときには…, ときには… あるときは…, またあるときは… 例) Бирде чаъс-даа чаар, бирде хар-даа чаап кээр. (ときには雨が降り, またときには雪さえ降る.)

1 6 . 1 . 3 .反意接続詞

а	しかし, 一方で 例) Хүн үнүп келген, а өөрүм ам-даа келбээн. (日は昇った. でも友人はまだ来ない.)
харын	①しかし ②逆に ③分からない, 知らない 例) Харын дүрген авам келген болза. (とはいえ, 母がはやく来てくれたのなら.)
ынчалза-даа	しかし 例) Соок апарган, ынчалза-даа хар чагбаан. (寒くなったが, 雪は降らなかった.)
болза	…とはいえ
болза-даа	…とはいえ
ыңдыг-даа	そうとはいえ
ыңдыг болза-даа	そうとはいえ
ыңдыг-даа болза	そうとはいえ 例) Ындыг-даа болза дүрген доозар херек. (そうとはいえ, 急いで終わらせる必要がある.)
ынчанмыже	それにもかかわらず 例) Соок турган, ынчанмыже эштип турган бис. (寒かった. しかし私たちは泳いだ.)
ынчалзажок	しかしながら
ынчалза чок	しかしながら

16.2. 接続語

接続詞に対し、連接の関係にあるのは接続語である。接続語は接続詞と同じ機能を果たすが、接続語が文の成分になりうること、二語一組で用いられうる、もしくは語結合を形成しうる点で接続詞と異なる。

- КЫМ ... , ол ...** …する人は…
例) **Кым хөй ажылдааныл, ол хөй алыр.**
(たくさん働く人は多く給料をもらう.)
- кажан ... , ынчан ...** …するときは…, …すると…
例) **Кажан келчик, ынчан сенээ чугаалаан бис.**
(来たときにぼくたちは言ったよ.)
- чүге дизе ...** なぜなら…
чүге дээрге ... なぜかというのと…, なぜなら…
例) **Хүн батканын билбээн бис, чүге дээрге ажыл солун болган.**
(私たちは日が沈んだことに気づけなかった、なぜなら仕事が楽しかったからだ.)
- бир эвес ... (болза),** もし…ならば
例) **Бир эвес келген болузуңза, эки болур ийик.**
(もし君が来てくれるならいいのになあ.)

例文から明らかなように、接続語は一般に従属文中に用いられ、その文中の統語関係において銜(かすがい)をなすものである。

16.3. 後置詞および補助詞

後置詞とは、格の接辞と同じ文法的機能を果たす補助詞である。後置詞はそれに関係する名詞の前でなく後に置かれ、変化しない。

それに対し、補助詞は歴史的に語彙において意味をもつ単語(名詞)から派生して生じ、所有接辞がついて、それに与格や位格、奪格、方向格がついて固定してできた実詞である。補助詞は、もとの単語の意味に応じて、一定の組み合わせにおいて用いられる。

- 例) **арыг иштинде** (森の中で)
кажаа кыдыында (家畜小屋のそばで)
мээң соомда (私の後ろに)

стол адаандан (机の下から)

сээң чаныңда (君の近くに)

したがって、使用法において後置詞とみなすことができるかもしれない。ただ、同じ意味で同じ補助詞が用いられるとしても、修飾する名詞や代名詞に応じて異なる所有接辞がつくことによって形が異なってくるだけである。

例) чоогу- (…のそばに) ;

мээң чоогумда	私のそばに
бистиң чоогувуста	私たちのそばに
сээң чоогунда	君のそばに
силерниң чоогуңарда	あなたがたのそばに
ооң чоогунда	彼のそばに
оларның чоогунда	彼らのそばに
столдуң чоогунда	机のそばに
столдарның чоогунда	机 (複数) のそばに

もっともよく使われる補助詞形成の語幹は、次のものである。

адаа-	…の下	〈 адак (下)
үстү-	…の上	〈 үстү (上, 上方)
дашты-	…の外	〈 дашты (外)
ишти-	…のなか	〈 ижин (内部)
кыры-	…の上	〈 кыр (上, 表面)
мурну-	…の前	〈 мурну (前, 前部)
соо-	…の後ろ	〈 соң (後ろ, 後部)
чоогу-	…の近く	〈 чоок (近い, 近くの)
кыдыы-	…の近く	〈 кыдыг (端)
дугайы-	…について	
ыңды-	…のむこう	〈 ыңды (向こう側)
бети-	…のこちらの近く	〈 бети (こちら側)
дужу-	…の反対側, 向かい側	
		〈 душ (機会, 偶然; 時, 場所)
аразы-	…のあいだ	〈 ара (距離)
хажыы-	…の側面	〈 хажыы (側面)
ортузу-	…の真ん中	〈 орту (真ん中)

後置詞あるいは補助詞は、それぞれどれかの格を支配する。また、後置詞あるいは補助詞は、単語だけでなく、従属文と主文とを結びつける。

格支配のおもな例を挙げて説明しておく。くわしくは巻末に後置詞・補助詞一覧表を掲載しておくので参照のこと。

- 1) 補助詞は、属格あるいは不完全な属格（名詞に属格接辞をつけない、変化しないままの形）を支配する。

例) оларның дугайында. (彼らについて)

- 2) 後置詞 дээш (～のために), ёзугаар (～にそって, ～にしたがって) は、対格あるいは不完全な対格（名詞に対格接辞をつけない、変化しないままの形）を支配する。

例) план ёзугаар ажылдаар (計画にそって作業する)

бедик дүжүт дээш демиседир (高い収穫のためにたたかう)

- 3) 後置詞 - биле (～といっしょに; ~で, ~によって) は、主格もしくは属格とともに用いられる。

例) балды-биле кезер (斧で切る)

олар-биле баар (彼といっしょに行く)

- 4) 後置詞 ышкаш (～のように), дег (～のように) は主格とともに用いられる。

例) хараган дег (マメ科ムレスズメ属の花のように)

кижи ышкаш (人間のよう)

- 5) 後置詞 ужун (～の理由で, ~のために) は属格を支配する。

例) ооң ужун (そのため)

- 6) 後置詞 соңгаар (～の後に), башка (～を除いて) は奪格を支配する。

例) бештен соңгаар (5日より後に)

моон соңгаар (今後)

менден башка (私を除いて)

- 7) 後置詞 удур (～に対して) は与格を支配する。

例) дайзынга удур (敵に対して)

кааңга удур (旱魃に対して)

1 6 . 4 . 助詞および叙法詞

助詞と叙法詞は、実詞（自立語）に補足的ニュアンスおよび叙法的意味（強弱や限定など）を付与する補助詞である。そして助詞や叙法詞によって話者は文の内容に関する自らの関係（疑いや確信のないこと、強調など）をあらわす。

助詞および叙法詞は以下に分けられる。

1 6 . 4 . 1 . 疑問助詞

- ... **бе?** ~か? : 文末につけて疑問文をつくる。
- ... **ирги бе?** ~か? そうなの? : 文末につけて疑問文をつくる。
- ... **ийик?** ~だろう : 疑問代名詞があるとき疑問文となり、推量「~だろう」のニュアンスが加わる。
例) **Кым келген ийик?** (誰が来たのだろうか?)
疑問代名詞がないとき疑問文とはならず、条件法を形成する一部となる (1 4 . 1 0 . 9 . 条件 = 假定法参照)。
- ... **ийик бе?** ~か? : 「疑い、半信半疑」のニュアンスが加わる。
例) **Ак-кыс келген ийик бе?**
(アク=クスは来たのかなあ?)
- ... **ийикпе?** そうなの? 本当にそうなの? ~か?
例) **Ол келген ийикпе?**
(彼はほんとうに来たの?)
- ... **ала/але/эле?** 本当に~なの? だって~ではないか?
- таан ... бе?** ほんとうに~なの? : 疑問助詞 **бе** とともに用いる
- кай[ы]?** ほんとうに~なの?
- аа?** ええ? 何て?
- 例) **Бо сээң номуң бе?** (これは君の本かい?)
Эжим келир ирги бе? (私の友人は来るのかなあ?)
Дүүн келген ийикпе? (昨日来た?)
Сен баар сен бе? (本当に行くの?)
Аа, чүү дидиң? (ええ、何て言ったの?)

16.4.2.強勢助詞

моң	~のようだ : сен に対する間柄の人に対して用いる 例) Элдеп кижидир моң. (変わった人のようだ.) Дүүн хар чагжык бе моң? (きのう雪が降ったか、教えてくれないか.)
моңар	~のようだ : силер に対する間柄の人に対して用いる 例) Кайнаар чордуңар моңар? (あなたはどこへ行っていったんだい?)
оң[ар]	どうやら~のようだ, だって~じゃないか : 助詞 -тыр (とそのバリエーション) とともに用いられる 例) Солун чүведир оң. (それはおもしろいことのように.)
эвеспе	だって~ではないのか, たしかに, まったく 例) Бөгүн хурал болур эвеспе. (今日会議がありますよ.)
безин	~さえ 例) Ону мен безин билир мен. (そのことは私でさえ知っている.)
оода	せめて 例) Оода карандаш болза. (せめて鉛筆があればいいのに.)
чаа	しかるべく~
харын	まったく
чогум	まったく
мугур	ちょうど, きっかり 例) мугур үш шакта (ちょうど3時に)
шак	まったく 例) Шак мынчаар кыл. (まったくその通りにしなさい.)
черле	まったく
ынчаш	いったい: 疑問文を強める
дуу/дүү/доо/дөө	ほら~ : 語を強める 例) дөө ында (ほら, あそこに)
бо	ほら~ : 語を強める 例) бо мында (ほら, ここに)
че	さあ: 促しをあらわす

16.4.3. 限定助詞

чүгле	～だけ, ただ～
-ла (-ле, -на, -не)	① ただ～ : 語を限定する ② まったく～ : 語を強める ③ まったく～のように : 比較する, 類似
	例) Чүгле чаңгыс кас өлүрдүм. (たった1匹のカモを殺しただけだ.) Дээрниң аязы кылаң шил-ле. (空が青いこと, それは透き通ったガラスのよう だ.) Мону Кара-оол-ла билир. (そのことはカラ=オールだけが知っている.)

16.4.4. 肯定の助詞

ийе	はい
ийет-ийет	はい, はい
ы[ъ]к	はい
де	ええ, うん, そうだろ
-даа	～も, ～さえも
-тыр (-тур, -тир, -түр, -дыр, -дур, -дир, -дүр)	動詞 тур- から形成された助詞である。 ① ～である : 名詞連辞文のなかで述語をなす。 例) Мен малчын-дыр мен. (私は牧民です.) Бо киш-тир. (これはクロテンです.) ② すでに, もう 例) Ол чедип келген-дир. (彼はすでに来ている.) ③ どうやら～のようである : 話者の目の前で行われる行為をあらわす, 過去の文章や物語のなかでの叙述, ナレーション, 地の文をあらわす。
аан	語を強調する 例) Ийе, бис база чоруур бис. (はい, 私たちも行きます.) Бо болза сээң херээң-дир. (それというのは君の仕事だ.) Хар чаапкан-дыр. (雪が降ったようだ.) Бо арыгда дыт-даа, пөш-даа, хады-даа, шиви-даа бар.

(この森にはカラマツもエゾマツもマツもモミの木もある.)

Ону бис кылгай бис аан.

(いいでしょう, それは私たちがします.)

1 6 . 4 . 5 . 否定の助詞

- чок** いいえ ; ~がない
 例) Хат чок. (風はない.)
 Амдан чок. (おいしくない. 味がない.)
- чокка** ~なしで
 例) улус чокка чемненир (人のいないところで食事をとる)
 чөптүг чылдагаан чокка (しかるべき原因なく)
- та** さあ, 知らない (挿入語として)
 та の後はコンマを打つ. ただし, 質問の答えとしてではなく, 自問自答「さあ, 分からないが...」として用いる場合, **та** の後にコンマを打たない.
 例) Та, мен ону билбээн мен.
 ([質問に対し] さあ, そのことは私は知りません.)
- эвес** ~でない (名詞, 形容詞, 副詞を否定する)
 例) кызыл эвес (赤くない)
 чараш эвес (美しくない)
 Бо тоорук эвес-тир. (これは松かさではないようだ.)
 助詞 **эвес** は動詞の否定形といっしょに用いるとその動詞があらわす行為が行われたことを確認している.
 例) Ондар артпаан эвес.
 (オンダルは残らなかったのではない.)

1 6 . 4 . 6 . 弱化の助詞

- арай** 少し~, ~っぽい
 例) арай улуг (少し大きい)
- чадавас** おそらく~, ~はありうる
 例) Чаъс чаар чадавас. (雨が降るだろう.)
- магатчок** おそらく~, たぶん~
(магат-ла чок) 例) Ол чедип келген магатчок.
 (彼はおそらく着いただろう.)

ыйнаан	おそらく～らしい 例) Таяны таныыр сен ыйнаан. (君はターニャを知っているようだね)
боор	たぶん～, ～だろう 例) Оолдар походтан чанып келген боор. (子供たちがピクニックから帰ってきたようだ.)

1 6 . 4 . 7 . 意味を和らげる助詞

ирги	疑問文中で用い, 語調を和らげるほか, 丁寧さをあらわす 例) Тас-оол кайда ажилдап турар ирги? (タス=オールはどこで働いているの?)
ийин	語調を和らげる 例) Көдээден келдим ийин. (私は村からやって来ました.) Кончуг солун ном-дур ийин моң. (とってもおもしろい本だね.)
аар	語調を和らげる 例) Чөгенчин аар моң. (なんておまえは頼りにならないんだ.)
иргин	語調を和らげる 例)... ашак, кадай чурттап чораан чүвең иргин. (... おじいさんとおばあさんが住んでいたそうだ.)
ыңар/аңар	丁寧さをあらわす
ышкажыгай	～だけれども 例) Мынчаар бижиир ышкажыгай. (そのように書くんだよ.)
эртик	[仮定法で] ～だろう, ～だろうに 例) Билген болза, келгей эртик. (知っていたのなら, 彼は来てもよかったのに)
ийик	[仮定法で] ～だろう

☆ 二つの助詞を組み合わせて用いることもある。

例) Харын аан, келген болзуңарза, эки чүве.
(まったくそうだろうが, あなたが来てくれば, よいのだが.)
Кинога баар сен ыйнаан але?

(君は映画に行くだろうか、ほんとに行く?)

Хей чугаа-дыр оң.

(どうやらくだらない話のようだね.)

16.4.8.動詞の命令形につける助詞

希求=命令法において、言葉のイントネーションが大きな役割を果たしているが、弱いイントネーションのほかに、意味を和らげる、お願いのニュアンスを加える接辞 **-ам**, **-ем**, **-м** がある。

動詞語幹の 最後の音	語 幹 の 最 終 音 節 の 母 音			
	а, ы	э (е), и	о, у	ө, ү
子 音	-ам	-ем	-ам	-ем
母 音	-м			

例) Көрөм! (見てごらん!), Бээр келем. (こっちに来て.),

Санам. (数えて.) Садыгже бараалам. (お店へ行きましょう.)

Аьттарывысты орнажыылам. (お互いのウマを交換しましょう.)

丁寧な場合、2人称単数接辞のかわりに2人称複数接辞が用いられる。

例) Кириңер. ([一人に対して]なかに入ってください.)

丁寧な場合、副動詞 **-п** 形 + 動詞 **көр-** (この場合助動詞のように用いる) の希求=命令法形 **көр**, **көрөм**, **көрүңер** (～してください) が用いられる。

例) Ол номну меңээ ап берип көрүңер. (その本を私にとってください.)

この例において動詞 **көр-** は呼びかけに対する丁寧さをあらわすだけである (動詞本来の意味「見る」をもたない)。

また、**көрүңер** に意味を和らげる接辞 **-ем** をつけて **көрүңерем** (～してくださいませ) とする使い方もある。

1 6 . 5 . 間投詞

間投詞はさまざまな感情や感じ，たとえば喜び，残念，驚きなどをあらわす単語や叫び声からなる。

間投詞は主として会話体に特徴的である。

間投詞は意味によって以下の二つのグループに分かれる。

1 6 . 5 . 1 . さまざまな感情や感じをあらわす間投詞

Уё!	痛みをあらわす
Эве !	火傷による痛みをあらわす
Эчигей !	寒さをあらわす
Ий!	恐怖をあらわす
Дадайым !	恐怖や戦慄，驚愕，危惧をあらわす
Халак !	愚痴や残念さ，警告，注意をあらわす
Пак ! Пок !	忌々しさや悔しさ，残念な気持ちをあらわす
Ак !	忌々しさや悔しさ，残念な気持ちをあらわす
Ой ! Ойт!	意外なこと，突然なこと，警告をあらわす
Аа !	驚きをあらわす
О !	感嘆や驚きをあらわす
Ээ !	驚きや疑念，意外をあらわす
Ай ! Ай-ай-ай !	非難をあらわす
Пээ!	感嘆や驚きをあらわす
Уёо !	非難や驚きをあらわす
Эх !	残念な気持ちや不安をあらわす
Уваа !	極度の驚きをあらわす
Ох !	疲労感をあらわす
Хаа !	感嘆や驚きをあらわす
Пиш !	軽蔑をあらわす
Хош !	軽蔑をあらわし，「だまれ！」の意味で使う
Сени аар !	遺憾や非難をあらわす。「やい，おまえ！」
Кырым сынар !	驚き，不満をあらわす。 「ええい！」，「ほんとうのことなんだぞ！」
Өршээңер !	不賛成，抗議をあらわし，「とんでもない！」，「失礼ですが」
Аа богда !	驚きや感嘆をあらわす。「おや，まあ！」

Сүлде бо !	「間違っていない，誓ってもいい」
Бурган-на бо !	「神かけて」，「誓って」
Хайыракан өршээзин !	「神様，ご慈悲を！」

1 6 . 5 . 2 . 人を呼び寄せる，人を急き立てる，動物を元気づける間投詞

Курууг-курууг !	ウマを呼び寄せる叫び声
Хөөг-хөөг !	雌ウシを呼び寄せる叫び声
Чу-чу !	去勢ウシ，またはウマを急き立てる叫び声
Кууг !	だれか（ふつう競馬ウマ）を元気づける叫び声
Сөк-сөк !	遠くにいる人を呼ぶときの叫び声
үңөөй-үңөөй !	ラクダを座らせる叫び声
Шө!, Шөгө !	遠くから犬を呼び寄せる叫び声
Тоотпа-тоотпа !	搾乳時にヤギをじっと動かないようにさせる叫び声
Чи-чи !	ヒツジを呼び寄せる叫び声
Сок !	ヤギを呼び寄せる叫び声
Чип-чип !	犬を追い払う叫び声
Холба-холба !	ニワトリを呼び寄せる叫び声
Ээй !	ヒツジをじっと動かないようにさせる叫び声
Оош !	森の中などで人を呼ぶ，あるいはお互い呼び合う ときに出す叫び声「おーい！」
	昔話の語り部や歌手，音楽家を励ましたり，促したり，賛美したりするときの叫び声

1 6 . 5 . 3 . 擬音・擬態語

擬音・擬態語は，助動詞 дээр : де-, ди-（～になる，～な音になる），кынныр : кылын-, кынн-（～になる，～な音になる），使役の意味では助動詞 кылыр : кыл-（～させる，～な音をたてる）と組み合わせて用いることが多い。また，律動相の動詞を形成する語幹ともなる。1 4 . 5 . 5 . 瞬間（をあらわす）相と1 4 . 5 . 6 . 律動相（リズム相）を参照。

以下に，主な擬音・擬態語を挙げる。

1) 擬音語

擬音語では，語中に狭窄母音（ ы, и, у, ү ）が入る音のほうが，開口母音（ а, э[e], о, ө ）が入る擬音語よりも不明瞭で弱い音である。

擬音語は同じ語を繰り返して用いたり（**маа-маа** など）、語を並べて用いるが、後続の語は母音を変えて用いることがよくある（**тог-туг** など）。そのさい、1語のみのときは一言のみ、同じ語を二つ並べるときは同じ音が繰り返されること、語を並べるが後続語の母音を変えると同時に同種の音、似た音がいくつか鳴ったことをあらわしている。たとえば、射撃音などでは、銃の種類によって銃声の音が異なっていることをあらわしている、などである。

хи-хи, ха-ха	笑い声「ヒヒヒ」, 「ハハハ」
маа, мөө	ウシの鳴き声「モー」
карт-кирт	ブタの鳴き声「ブー, ブー」
	カラスの鳴き声「カーカー」
каргыт	カラスの鳴き声「カーカー」
ыр-р	イヌの唸り声「ウー」
сыг	イヌやオオカミの金切り声「キャンキャン」
	弾の飛ぶ音「ヒュー」
сойт	鋭く短い連続音「ダダダ」, 「パチパチ」
	虫などの断続的な鳴き声
мойт	水が泡立つ音「ゴボゴボ」
пет, пөт	物が一瞬に音を立てて落ちる音「ズドン」, 「バタン」
педирт	物が激しい音を立てて落ちる音「ズドーン」, 「ドーン」
дырс, дирс	枝や氷, ガラスが割れる音「ポキッ」, 「パリーン」
дарс	割れる, はぜる音「パキッ」, 「ビリッ」
	銃声「パーン」
шаа, хаа	滝の水の落ちる音「ゴー」, こだまの響く音
хоо	風の音「ヒュー」
кыңгырт	金属やガラスの触れ合う音, 鈴の音「ジンジン」, 「チリンチリン」
чыжырт, чажырт	雷鳴「ゴロゴロ」, 「ドカーン」
тог, төг	銃声「パン」
тың	撥弦楽器の弦の音
хир-хир	モーター音
куйт	ニワトリの鳴き声「コッコッ」
ыг	泣き声
ыы	赤ん坊のすすり泣き
шалыр-шалыр	かさかさ, ごそごそする音
хиг-хиг	急に飛び立つときの音

2) 擬態語

擬態語は名詞や動詞の語幹に接辞 **-ш** がつけられて形成されることが多い。

擬態語でも、擬音語同様に、同じ語を繰り返して用いたり、同じ語を並べるが後続語中の母音を変えて用いることがよくある。そのさい1語のみのときは短い間の、一瞬の出来事の様子、同じ語の繰り返しではそのような様態が繰り返し何度も行われている様態、同じ語を並べるが後続語中の母音を変えて用いるときは同時に同じ物がいくつか動く様子、あるいは同種のいくつかの物の様態、さまざまな動きをあらわしている。

ажыш	傷が痛む様子
бурт	射撃のさいに上がる埃や煙の様子
караш	黒っぽいものがちらちらする様子
кызаш	赤いものがちらちらする、きらきらする様子
калбаш	平らで幅の広いものが揺れる様子
чиндиш	物が不安定に揺れている様子
чамдыш	人などがよろよろしている、ぐらつく様子
сарбаш	物などがだらっと広がる、伸びる様子

16.6.呼びかけ

具体的な名前による呼びかけのほかに呼びかけは以下のような形がある。

1) 「お父さん!」、「お母さん!」、「お兄さん」、「おじさん!」などのように名前ではなく、家族や親族の名称で呼びかける場合、母音で終わる親族をあらわす名詞には **й** をつける。使われるのは以下の語である。

例) ачай! (お父さん!), авай! (お母さん!), акый! (お兄さん!),
угбай! (お姉さん!), честей! (お義兄さん!)

自分の息子や娘に呼びかけるときは1人称所有接辞がつき、以下のようになる。

Оглум! ([我が] 息子よ!), Уруум! ([我が] 娘よ!)

2) 家族や親族名称で呼びかける場合、子音で終わる親族をあらわす名詞には **й** をつけない。妻にたいして **кадай!** (妻よ!)、夫やに対して **ашак!** (夫よ!) と呼びかけることもあるようだが、昔話などで用いられる形で、ふつうの会話では粗雑に聞こえるようである。

例) Ашак тургаш :

– Тенээңни, кадай, ам-даа херек чүве хөй, сен кадын, мен хаан

болуйн,

чагырар-дужаар хөй албаты херек – деп барган.

Кадай :

– Ынчап-ла тенип, бажың эьттени бербе, ашак – деп турбуже, ашак-даа балдызын туткаш, арыгдыва чоруп каап-тыр эвеспе.

(夫は、「馬鹿なことをいうなよ、お前、まだまだ必要なものはたくさんあるよ、

君はお后になって、わしは王様になろう、召使いたちもたくさん必要だ。」と

言った。

妻は、「そんなふうには理性を失って、わがままにならないでくれ、お前さん、」

と言ったのにもかかわらず、夫は斧を手に取ると森へと向かったのだった。）」

« Алдын кушкаш » Кызыл, 2002, арын 6

Чүү хелегил, ашак? (何が必要なの, おじさん?)

Ол кым-дыр, уруглар? (子供たち, こちらは誰でしょう?)

3) 自分より年上の対する呼びかけは以下の通りである。知らない人にも用いられる。その際、所有接辞 1 人称がつくこともある。

男性に対して : Акый!, Акыларым! (複数の人に対して),
名前 + акый

女性に対して : Угбай!, Угбаларым! (複数の人に対して),
名前 + угбай

例) Надя угбай! (ナージャ姉さん!)

おじいさん : Кырган-ачай!

おばあさん : Кырган-авай!

自分より年下の対する呼びかけは以下の通りである。

男性, 女性に対して : Дуңмай!, Дуңмам!,
Дуңмаларым! (複数の人に対して)

女性に対して : Кызым!, Кыстарым!

男の子 (たち) : Дуңмай!, Оолдарым!,

女の子 (たち) : Дуңмай!, Уругларым!

子供たち : Уругларым!,

ほかにも次のものがある。

国民への呼びかけ : эргим чон! (親愛なる国民のみなさん!)

複数形を繰り返すことによって尊敬の意味をあらわす.

例) **Силерлер!** (皆様!)

ただし, 場合によっては嘲笑の意味になることもある.

- 4) 家族間では, トゥヴァ南部, トージュ地方では, **силер** で, トゥヴァ中央部では, **сен** を用いる.

後置詞・補助詞一覧表

後置詞および補助詞表

表の使用にあたっての注意点は以下の通りである。

- 1) 主に後置詞は位置や時間関係をあらわす名詞に所有接辞の3人称形がつき、さらに格変化接辞（位格や与格，奪格，方向格）がついて形成されている。所有接辞3人称形がついた名詞に格変化接辞がつくとき、あいだに **н** がはいる（10.4.9.参照）。

この表では、名詞から形成されている後置詞は3人称所有接辞をつけたものを挙げています。つまり、普通の名詞（単数形でも複数形でも）が前にくる場合（「～の」）、後置詞は表に載っている形をそのまま使用すればよい。

例) **адак** (下) → **адак** + 所有接辞 **ы** → **адаа**
→ **адаа** + **н** (所有接辞3人称形がついた名詞に格変化接辞がついたとき、あいだに **н** を入れる)
→ + 格変化接辞 **да** → **адаанда**
адаанда (位格) ; **ыяштың адаанда** (木の下に)
адаанга (与格) ; **ыяштың адаанга** (木の下に)
адаандан (奪格) ; **ыяштың адаандан** (木の下から)
адаанче, адаандыва (方向格) ; **ыяштың адаанда** (木の下へ)

- 2) 前につく名詞が人称代名詞の場合も **мээң** (私の) や **сээң** (君の), **бистиң** (私たちの), **силерниң** (あなたがたの) のように属格になるが、当然に所有接辞はそれぞれの人称にしたがう形となり、格変化接辞がつづく。その際、所有接辞1人称と2人称形と格変化接辞のあいだには **н** は入らない。しかも、格変化接辞も所有接辞の語尾によって発音上のバリエーションで異なることになる。この種の後置詞で人称代名詞の所有接辞がつく可能性のあるものには (名) の印をつけておく。

例) **мээң адаамда** (私の下に)
сээң кырында (君の上に)
бистиң соовустан (私たちの後から)
силерниң ачыңарда (あなたがたのおかげで)
Сээң ужуруң-биле соора бижиптим.
(君のせいで間違って書いてしまった.)

- 3) 後置詞もしくは補助詞の前につく名詞の格支配は属格が多いが、その場合、属格は属格接辞をつけない不完全な形、すなわち主格を同じ形が使われるこ

とが多い。

例) **ыяш адаанда** (木の下で)

4) 前に入るのが名詞ではなく文章がはいる場合, ①動詞が名詞化し, さらに後置詞の名詞格支配にあわせて格変化させて入れる, ②動詞は形動詞形で入れる, の2通りある. それぞれの後置詞で異なる.

例) **Улуг чаъс болганының уламындан хем дажий берген.**

(大雨の結果, 川が増水した.)

соок болган ужурунда (寒かったために)

5) この表には便宜上接続詞, 接続句をも含んでいる.

後置詞および補助詞	前に置く 名詞の 格支配	意 味
аайы-биле (名)	属 格	① ~に沿って (空間), ~に向かって Катсыг чыт салгын аайы-биле кээп турган. (ベリーの匂いが微風に乗って漂ってきた.) ② ~ごとに, ~に従って (根拠) алфавит аайы-биле アルファベット順に ~のおかげで сээң авыралыңда 君のおかげで
авыралында (名)	属 格	~のおかげで
авыралы-биле (名)	属 格	~のおかげで
адаанга, адаанда (名)	属 格	сээң авыралың-биле 君のおかげで ① ~の下で, ~の下に (場所) ыяш адаанда (木の下で) ② ~の影響下に, ~のもとに (影響, 支配) Ооң командазының адаанда (彼の指揮下に)
адаандан (名)	属 格	~の下から
адаа-биле (名)	属 格	стол адаандан (机の下から) ~の下に, ~の下に沿って Спортчулар Тываның тугунуң адаа-биле бир дески эртип турган. (スポーツ選手たちはトゥヴァの旗のもとにひとつ力を合わせて戦った.)

адаанче, адаандыва (名)	属 格	～の下へ ыяш адаанче (木の下へ)
ажыр	对 格	～を越えて арт ажыр (峠を越えて)
ажылдыр	对 格	～を越えて, ～の上を даг ажилдыр (山を越えて)
алдынга, алдында (名)	属 格	～の下に (位置), ～の下へ (方向) Машина сери алдында турган. (車は庇の下に止めてあった.)
алдындан (名)	属 格	～の下から хая алдындан (崖の下から)
алдынче (名)	属 格	～の下へ дош алдынче (氷の下へ)
алды-биле (名)	属 格	～の下に, ～のなかに хая алды-биле (崖の中で)
аңгы	奪 格	① ～とは別々に ада-иезинден аңгы чурттаар (両親と離れて住む) ② ～のほか, ～以外に ооң аңгы (それ以外に)
аңгыда	奪 格	～のほか, ～以外に тыва дылдан аңгыда (トゥヴァ語以外に)
аразынга, аразында (名)	属 格	① ～のあいだに (空間) ыяш аразында (木々の間に) ② ～の間に, ～しているときに (時間) чаашкын аразында (雨が降っている時に)
аразында (名)	形動詞現在 未来形	～しているときに (時間) ол маңнап турар аразында (彼が走っているときに)
аразындан (名)	属 格	～のあいだから булуттар аразындан (雲間から)
аразынче (名)	属 格	～のあいだへ Хептер аразынче киис кире берген. (服と服のあいだへ猫が入った.)
артынга, артында (名)	属 格	～の向こう側で даг артында (山の向こう側で)

артындан (名)	属 格	~の向こう側から даг артындан (山の向こう側から)
артынче (名)	属 格	~の向こう側へ ыяш артынче (木の向こう側へ)
ачызында (名)	属 格	~のおかげで Адамның ачызында мен төөгүнү эки билир турган мен. (父のおかげで私は歴史をよく知ることになった.)
ачызы-биле (名)	属 格	~のおかげで акым дузаламчының ачызы-биле (兄の援助のおかげで)
баарында, баарынга (名)	属 格	~の前に, ~の前から (位置), (山) の麓に мээң баарымда (私の前に), даг баарында (山の麓に)
баарындан (名)	属 格	~の前から (位置) мээң баарымдан (私がいる目の前から)
бажынга, бажында (名)	属 格	~の前に, ~の先頭に Баштыңчы улустуң бажында чоруп олур. (リーダーが人々の先頭を歩いている.)
бажындан (名)	属 格	① ~の前から, ~の始めから, ~の最初から Баштыңчы улустуң бажындан дедир ээпкен. (リーダーは人々の先頭に立っていたが元いた場所に戻った.) ② ~の初めに, ~の最初に頃に эртен сыгыр даң бажындан (朝早くから)
барымдаалааш	对 格	~に基づいて, ~に従って (барымдаалаар の形動詞 -гаш 形) шиитпирни барымдаалааш (決定に従って)
башка	奪 格	~のほかに, ~以外に сенден башка (君以外に)
бетинге, бетинде (名)	属 格	① ~の側に, ~の近くに, ~ (話者) の近くに школа бетинде (学校の近くで)

бетинден (名)	属 格	② ~の前に, ~以前に (時間, 期日) ажылды хуусаа бетинде күүседир (仕事を期日前にやり終える) ① ~の側から, ~のこちら側から дагның бетинден (山のこちら側から) ② ~の途中から, ~まで行かずに Хоорайның бетинден ээп келдим. (町まで行かずに私は帰ってきた.)
- биле	属 格 (格語尾をつけない) 形動詞形+ 三人称所有 接辞	① ~といっしょに, ~とともに бичии уруг-биле (小さな子供と) ② ~の助けを借りて, ~を用いて карандаш-биле бижиир (鉛筆で書く) ③ ~に沿って арыгда орук-биле (森の中を道に沿って) ④ ~に従って ада-иезиниң чөпшээрели-биле (両親の同意のもとに) ⑤ ~の手段で, ~によって (通信手段) телефон-биле медээлээр (電話で知らせる) ⑥ ~のために (目的) Биске дузалаары-биле келгеннер. (私たちが援助するために彼らはやって来た.)
билек (接)	形動詞現在 未来形の三 人称所有接 辞	~するやいなや Ачам өөнге кирип келири билек... (父が天幕に入るやいなや...)
болгаш	属 格	~後に (時間) бир шак болгаш (1時間後に)
боорга	形動詞完了 бар・чок	~なので чай чок боорга (時間がないので)
бурунгаар	属 格	~前に (時間) Бис ийи ай бурунгаар чедип келген бис. (私たちは2ヵ月前にやって来た.)
бүдүүзүнде	属 格	~の直前に, ~の前日に, ~の前夜に (時間) байырлалдың бүдүүзүнде (祭日の前日に)

бээр	奪 格	～して以来, ～した時から эртенден бээр (朝から)
дайлымында (名) дайлымындан (名) дайлымы-биле (名) この3つの語は, 現在話し言葉では用いられず, 文学作品などで使われるだけになった.	属 格	～のおかげで, ～の結果, ～のため Башкының дайлымында эки билиг чедип алдым. (先生のおかげで知識がよく身についた.) ～のおかげで, ～の結果, ～のため Дайынның дайлымындан дыка хөй кижилер бажың чок арткан. (戦争のために非常に多くの人々が家をなくした.)
дамчыштыр	対 格	～を通して, ～の助けて, ～を用いて өңнүүн дамчыштыр чагаа чорудар (友人を通して手紙を送る)
дашкаар	奪 格	～以上に, ～の外に хоорайдан дашкаар (町の外に, 郊外に)
даштынга, даштында (名)	属 格	～の近くに, ～のそばに, ～の外(そと)に, ～のとなりに бажыңның даштында (家の外で)
даштындан (名)	属 格	～の外から, ～の外側から хоорай дашктындан (郊外から)
даштынче (名)	属 格	～の外(そと)へ, ～の向こうへ бажыңның даштынче үнер (家の外に出る)
дег	主 格	①～のように, ～に似た(比喩, たとえ) хар дег ак (雪のように白い) ②～とほぼ同じぐらいの(比較の基準) мен дег дурттуг (私と同じぐらいの身長)
деңнештир	与 格 - биле	～まで, ～の水準まで, ～と同じ水準で Орлан, мээң-биле деңнештир маңнаар сен. (オルラン, ぼくと同じ速さで走ってよ.)
дескиндир	対 格	～のそばに, ～のまわりに бажыңны дескиндир (家のまわりに)
дизе	対 格 形動詞	～のために Кадык болур дизе, күш-культура кылыр херек.

долгандыр	対 格	(健康になるためにスポーツをしなければいけない.) ～の周囲に, ～を囲んで, ～を囲む Суурну долгандыр кара эзимнер бар. (村を囲むように森がある.)
доорзунга, доорзунда (名)	属 格	～の下に дыт доорзунда (カラマツの下で)
доорзундан (名)	属 格	～の下から шала доорзундан довурак үндүрер (床の下から土を運び出す)
доорзунче (名)	属 格	～の下へ Сандай доорзунче Чысымаа частына берген. (椅子の下にチェスマーが隠れた.)
дораан (接)	形動詞完了形	～するやいなや Чанып кедген дораан, чуна берген мен. (帰るやいなや, お風呂に入った.)
дөмей	与 格 - биле	～に似た, ～に似て Чинчи авазы-биле дыка дөмей апарган. (チンチはお母さんに非常によく似てきた.)
дугайын (他動詞の対格として)	属 格	～について, ～に関して Мен чаа ном дугайын сенден дыңнаан мен. (私は新しい本について君から聞いた.)
дугайында (名)	属 格	～について, ～に関して хачы дугайында тывызык (はさみに関するなぞなぞ)
дужунга, дужунда (名)	属 格	① ～の反対側に, ～の向かい側に бажыңның дужунда сад (家の向かい側にある庭) ② ～の最中に, ～の時に шөлээм дужунда сад (私の休暇の時に)
дузазы-биле (名)	属 格	～の助けを借りて, ～を用いて Хендирниң дузазы-биле аът тергезин малгаштан үндүр сөөртүвүс. (ロープを用いてウマに繋いでいた牽引車を)

дузаламчызы-биле (名)	属 格	泥地から引っ張り出した.) ～の助けて
дургаар	对 格	ачамның дузаламчызы-биле (父の助けて) ～に沿って (空間)
дургузунда	属 格	эрикти дургаар (岸に沿って) ～の間 (時間, 期間)
дүүштүр	与 格	5 ай дургузунда (5ヶ月間) ～に従って (根拠)
дээр	与 格	үениң негелдезинге дүүштүр (時代の要求に従って) ～まで (時間)
дээш	对 格 形動詞現在 未来形 希求法 (③)	кежээге дээр (夕方まで) ① ～のために (行動の目的, 利益の擁護) Силерниң-биле сүмележир дээш келдим. (あなたと相談するために来ました.) ② ～のために (根拠, 原因, 理由) хензиг чүве дээш (些細なことで) ③ ～するように (願望)
ёзугаар	对 格	Делегейге тайбың дээш! (世界平和のために!) ～に従って, ～にもとづいて (根拠)
ёзу-биле(ёзузу-биле)	属 格	дүрүмны ёзугаар (規則に従って) ～どうりに, ～風に
ийинге, ийинде (名)	属 格	эртем ёзузу-биле (学問的に, 科学的に) ～のわきに, ～の近くに, ～のそばに
ийинден (名)	属 格	Дагның ийинде өшкүлер оьттап чор. (山の近くで子ヤギが草を食んでいる.) ～から
ийинче (名)	属 格	Бажың ийинден машина чоруй барган. (家の脇から車が出て行った.) ～のわきへ
иштинге, иштинде (名)	属 格	Арганың ийинче катчылар чорупкан. (森のわきのほうへベリ一摘みの人たちは向かった.) ① ～の中に, ～の内部に, ～の中へ (空間) бажың иштинде (家の中で)

иштинден (名)	属 格	② ~のあいだに (時間, 期間) ийи ай иштинде (2ヶ月間で) ① ~の中から арыг иштинден (森の中から) ② ~のうちから (全体の中から) беш өөреникчи иштинден бирэзи (5人の生徒のうちの1人)
иштинче, иштиндиге (名)	属 格	~の中へ, ~の内部へ куй иштинче (洞窟の中へ)
карыштыр	与 格	~に反して, ~にかかわらず, ~の反対方向から Мээң карыштыр Долаана чоруп олур. (私が歩いている反対方向からドラーナが向歩いてくる.)
кежир	对 格	~を越えて, ~を横切って
кежилдир	对 格	хемни кежил (川を横切って) ~を越えて, ~を横切って
көшкүдүүрде (動詞+位格)	与 格	хемни кежилдир көвүрүг (川を渡す橋) ~に比べると
кыдыынга, кыдыында (名)	属 格	биске көшкүдүүрде (私たちに比べると) ~の近くに, ~のそばに, ~のはずれに Ол суурның кыдыында бичии бажыңында. (彼は村はずれの小さな家にいる.)
кыдыындан (名)	属 格	~から, ~のはずれから Бажыңның кыдыындан инек кылаштап келген. (家のわきからウシが歩いてきた.)
кыдыынче (名)	属 格	~ (の端) へ, ~のわきへ Номну сандайның кыдыынче салып каг. (本を椅子の座席の端に置きなさい.)
кыйыынга, кыйыында (名)	属 格	~のわきに, ~のそばに, ~の近くに Хаяның кыйыында турба. (崖の端に立つな.)
кыйыындан (名)	属 格	~から, ~の端から Стол кыйыындан аяк барып дүшкен. (机の端から食器が落ちた.)

кыйыынче (名)	属 格	~のもとへ, ~へ Орун кыйыынче чытпа. (ベッドの端に寝転ぶな.)
кырынга, кырында (名)	属 格	① ~の上に балкон кырынче үнер (バルコニーに) ② ~の上方に Даглар кырында туман тур. (山々の上方に霧がかかっている.) ③ ~語で тыва дыл кырында ном (トゥヴァ語で書かれた本)
кырындан (名)	属 格	~の上から, ~の上方から Сын кырындан сыынны көрүп кагдым. (山々の頂上からマラルジカを見た.)
кырынче, кырындыва (名)	属 格	~の上へ балкон кырынче үнер (バルコニーに出る)
кыры-биле (名)	属 格	① ~の表面に沿って Кыжын машиналар дош кыры-биле маңажыр. (冬には車が氷の上を走る.) ② ~の上方に Хоорай кыры-биле үргүрчү самолёттар ужуп турар. (町の上空をたえず飛行機が飛んでいる.)
мурнунга, мурнунда (名)	属 格 形動詞	① ~の前に, ~の前方に, ~の前へ (場所) бажыңының мурнунда (家の前に) ② ~前に, ~より以前に (時間) кежээки чем мурнунда (夕食前に) ③ ~に対して, ~の前で (対人・対物関係) Төрээн чурттуң мурнунда хүлээлге (祖国に対する義務)
мурнундан (名)	属 格	① ~の前から, ~の前方から (場所) Кылаштап келиримге, суурнуң мурнундан хем көстүп келген. (歩いていると, 村の前方に川が見えてきた.)

мурнунче (名)	属 格	② ～から (出所) Оларга бистиң мурнувустан байыр чедирип көрүңер. (彼らに私たちからよろしく伝えてください.) ～の前へ, ～の前方へ
мурнуу чарыында	属 格 形動詞	Бажыңының мурнунче бокту салвп каар (家の前にごみをだす) ① ～する前に, ～の前日に, ～の近くに (時間) Чоруй баар мурнуу чарыымда, херек чүвени садып алган мен. (出発する前に, 必要なものは買った.)
нүүрүнде	属 格	② ～の向こう側に (空間) тайганың мурнуу чарыында хүн (タイガの向こう側にある太陽) ～の間に, ～の期間に
олчаан	形動詞完了形 奪 格(②)	бо чылдың нүүрүнде (今年のあいだに) ① ～するやいなや Акым дайындан чанып келген олчаан, эмчиге чыткан. (兄が戦争から帰ってくるやいなや, 入院した.) ② ～して以来 (主文は否定形を使う) Акым дайында олчаан, ээп келбээн. (兄は戦争に行つて以来, 戻つて来なかつた.)
орнунга, орнунда (名)	属 格	～の代わりに Мээң орнунга өске кижиге ажылдаар. (私の代わりに他の人が働きます.)
орта (接)	形動詞現在 未来形	～するやいなや Самолёт кээр орта, улус олурупкан. (飛行機が到着するや, 人々は搭乗した.)
ортузунга, ортузунда (名)	属 格	① ～の真ん中に, ～の中央部に (場所) столдуң ортузунда (机の真ん中に) ② ～の時間の中間に (時間) дүн ортузунда (真夜中に)

ортузундан (名)	属 格	～の真中から, ～の中央部から, ～の中から улустуң ортузундан (人々の中から) ～の真ん中へ, ～の中央部へ, ～の中へ
ортузунче (名)	属 格	Дилги суг ортузунче шурай берди. (キツネが水の中へ飛び込んだ.) ～して以来
ояар (接)	形動詞完了形	Экзамен дужааган ояар, Мерен ам-даа келди. (試験を受けてから,メルゲンはまだに来ていない.) ～のほかに, ～以外に
өске	奪 格	менден өске (私以外に), оон өске (そのほかに) ① ～を通して
өттүр	对 格	соңганы өттүр көөр (窓越しに見る) ② ～の期間を通して, ～中 чайны өттүр (夏を通して, まるまる夏の間)
санында(санда-ла)	属 格 形動詞	毎~, ~ごとに, 各~, ~する (した) たびに хүн санында (毎日)
соңгаар	奪 格	～して以来, ～した後に, ～の後に кичээлден соңгаар (授業後)
соонга, соонда (名)	属 格 形動詞未来形・完了形	① ～のうしろに, ～の後方に (場所) Ховунуң соонда тараа шөлү эгелээн. (ステップの後方に穀物畑が始まった.) ② ～の後に, ～した後に (行為の終了後) кичээл соонда (授業後に)
соондан (名)	属 格	～のうしろから, ～の後方から, ～の後について Ыт ээзиниң соондан маңнап бар чор. (犬が主人の後ろから走って来る.) ～の後を追って
соонче (名)	属 格 形動詞完了形	Кырган-авам анайларының соонче дүргени кончуг кылаштап бар чыдыр. (私のおばあちゃんが子ヤギの後を追って早足で歩いてくる.)

соон дарый (接)	形動詞	～して以来 Тарааны ажаап алган соон дарый, Шагаага белеткел эгелээр. (刈入れが終わるや, 旧正月の準備が始まる.)
сөөлзүредир	対 格	～の終わりごろに майны сөөлзүредир (5月の終わりに)
сөөлүнге, сөөлүнде (名)	属 格 形動詞(③)	① ～の後に (属格格語尾がある場合) оочулнуң сөөлүнге турар (行列の最後尾に立つ) ② ～の終わり頃に (属格格語尾がない場合) Кичээл сөөлүнде хыналга эгелээр. (授業の終わりに確認テストが始まる.) ③ ～したすぐその後で Хөй ажилдаан сөөлүнге, дыштаныр бис. (たくさん働いた後で, 私たちは休息をとります.)
таарыштыр	与 格	～に従って (根拠) дурт-сынга таарыштыр хепти даараар (身体の大きさに合わせて服を縫う)
таварыштыр	対 格	①～の時期 (まで) に, ～の頃までに Үш шакты таварыштыр үнүптер мен. (3時頃までに私は家を出ます.) ② ～に関連して, ～の結果 Чаа чыл таварыштыр аьш-чем садып алдым. (新年に合わせて食料を買った.)
талазы-биле (名)	属 格 形動詞完了形	～に関して, ～の面で, ～との関係において шынар талазы-биле (性格に関して)
тудум (接)	主 格 形動詞	～するにつれて Үе келген тудум далажырым кончуг. (時間が押し迫るにつれて, とてもあわてている.)
төлээде, төлээзинде (名)	主 格 属 格	① ～なので, ～である以上 Ажыл төнгөн төлээде шупту тарап чанар

	形動詞	апаар. (仕事が終わったので、みんなそれぞれに帰っていく.) ② ~のために (目的)
удур	与 格	кичээлден озалдавас төлээде (授業に遅れないために) ① ~に反対して дайзынга удур демиседир (敵と戦う) ② ~に対して, ~に向かって хатка удур чоруур (風が吹く方向へ行く)
ужун / үжүн	属 格	~の理由で, ~のために, ~の結果 чаашкын ужун (雨のために)
ужунда	属 格	~の理由で, ~にもとづいて, ~なので аарыг ужунда (病気のせいで)
ужундан	属 格 形動詞	~の理由で, ~のために Номну төндүр номчаан ужундан чаа ном алыр мен. (本を最後まで読み終わったので、新しい本を借ります.)
ужурунда (名)	属 格 形動詞	~が原因で, ~のために, ~にもとづいて аараан ужурунда (病気になったために)
ужурундан (名)	属 格 形動詞	~が原因で, ~のために Силерниң ужуруңардан озалдап келдивис. (あなたのせいで我々は遅刻した.)
уламындан	属 格	~の結果, ~のために, ~が原因で чаъс болганының уламындан (大雨のために)
уламы-биле	属 格	~の結果, ~のために Караңгының уламы-биле оожум кылаштап чор бис. (私たちは外が暗いのでゆっくり歩いていきます.)
уржуунда (名)	属 格	~の理由で Автобустуң уржуунда ажылывысче озалдадывыс. (バスのせいで仕事に遅れた.)

уржуу-биле (名)	属 格	～の理由で, ～のせいで, ～のおかげで Чаъс уржуу-биле хем суу улгаткан. (雨のせいで川の水量が増えた.)
уткуштур	与 格	① (こちらから) ～に向かって агымга уткуштур эжиндирер (流れに反して航行する) ② ～を祝して улустуң байырлалынга уткуштур (国民の祝日を祝して)
үстүнге, үстүнде (名)	属 格	～の上方に, ～の上流の方に, ～の向こう側に Хемниң үстүнде кат эки үнген. (川の上流のほうはベリ一類がよく育った.)
үстүнден (名)	属 格	～の上方から, ～の上流から, ～の向こう側から Инектер суур үстүнден барып келгеннер. (ウシの群れが村のはずれからやってきた.)
үстүнче (名)	属 格	～の上方へ, ～の上流部へ, ～の向こうへ Кажааның үстүнче өдекти дажаан бис. (家畜の囲い場の向こう側へ糞を運んだ.)
хажызынга, хажызында (名)	属 格	～のわきに Дагның хажызынга хойлар оъттап хүнзээннер. (山のわきでヒツジが草を食んでいる.)
хажызындан (名)	属 格	～のわきから Арганың хажызындан аъттыг кижиге кел чыткан. (森のわきからウマに乗った人がやって来た.)
хажызынче (名)	属 格	～のわきへ Аңчыгаш кокпа хажызынче маңнапты. (小さい獣が小道のわきへ走り去った.)
хамаарыштыр	与 格	～に関連して, ～に関して, ～に従って Меңээ хамаарыштыр башкы чүнү-даа чугаалаваан. (先生は私に関して何も言わなかった.)

хараазындан (名)	属 格	～の結果, ～が原因で, ～のおかげで Эжимниң хараазындан эки номчуп албадым. (友だちのせいでちゃんと本が読めなかった.)
хараазы-биле (名)	属 格	～の結果, ～が原因で, ～のおかげで Багай боонуң хараазы-биле аң атпадывыс. (ひどい銃のために獣が獲れなかった.)
хире	主 格	～なぐらい, だいたい, およそ (近似) ийи чүс хире өөреникчи (およそ200人の生徒)
холбаштыр	对 格	～に関して, ～に関連して Шагаа байырлалын холбаштыр силерге улуг байыр чедирер мен. (旧正月の祝日に関しあなたにお祝い申し上げます.)
чандыр	对 格	～ (的) に当たらずに, ～をそれて Караны чандыр аттым. (撃った弾は的に当たらなかった.)
чанынга, чанында (名)	属 格	～の近くに, ～のそばに, ～のほうに, ～に 付属して, ～ (人) のところで суур чанында (村の近くで)
чанындан (名)	属 格	～のそばから, ～の近くから бажың чанындан (家の近くから)
чанынче, чанындыва (名)	属 格	～へ, ～のほうへ, ～近くへ Чойгананың чанынче чоруй бар. (チョイガーナの近くへ行きなさい.)
чаны-биле (名)	属 格	～近くへ, ～のそばを Азас хөлдүң чаны-биле эрттивис. (私たちはアザス湖のそばを通りすぎた.)
чарыынга, чарыында (名)	属 格	～の側に бистиң үстүү чарыывыста (私たちからみて登っていく側に)
чедир	与 格	① ～まで (ある地点までの距離) хоорайга чедир (町まで) ② ～まで (ある時間まで) эртенге чедир (朝まで)

чокка	主 格	～なしに далаш чокка (急がずに)
чоогунга, чоогунда (名)	属 格	～のそばに, ～の近くに суур чоогунда (村の近くで)
чоогундан (名)	属 格	～の近くから Аңның чоогундан аттывыс. (獣の近くから銃を撃った.)
чоогунче (名)	属 格	～の近くへ Хемниң чоогунче чедип келдивис. (私たちは川に近くにやって来た.)
шиглей	方向格	～の方向へ, ～へ Солдат шилди туткаш, ажык соңгаже шиглей шывадапкан. (兵士はガラスをつかむと開いた窓に向かって投げた.)
шиглиг	方向格	～の方向へ, ～へ садыгже шиглиг (お店の方へ)
ындынга, ындында (名)	属 格	～の向こう側に, ～の向こう側遠いところに Хову ындында эзимнерлиг сын көгерип чыдар. (ステップの向こう側に山脈が緑を讃えている.)
ындындан (名)	属 格	～の向こう側から эжик ындындан көөр (ドア越しに見る)
ындынче (名)	属 格	～の向こう側へ, ～の向こう側遠いところに Хүн даг ындынче ажа берген. (太陽が山の向こうに沈んだ.)
ыңай	奪 格	～以外に, ～のほかに оон ыңай (それ以外に)
ышкаш	主 格	～のように, ～に似た (比喩, たとえ, 様態) кижи ышкаш (まるで人間のように)
эгезинде (名)	属 格	～の初めに бо айның эгезинде (今月の初めに)
эгезинден (名)	属 格	～の初めから Сес айның эгезинден (8月の初めから)

参考文献

Биче-оол М.Д., Исхаков Ф.Г., *Тыва дылдың грамматиказы. Бирги кезээ. Фонетика болгаш Морфология. Чеди чылдың болгаш ортумак школаның 5-6 класстарының өөредилге ному*, РСФСР-ниң Чырыдыышкын Министерствозунуң өөредилге ному үндүрер күрпарларга чери, Москва, 1949

Исхаков Ф.Г., Пальмбаха А.А., *Грамматика Тувинского языка. Фонетика и Морфология*, Издательство восточной литературы, Москва, 1961

Сат Ш.Ч., *Тувинский язык* «Языки народов СССР» т. 2, Наука, Москва, 1966, стр. 387-402

Сат Ш.Ч., *Тувинский язык (краткий очерк)* «Тувинско-русский словарь(под редакцией Пальмбаха А.А.)», Государственное издательство иностранных и национальных словарей, Москва, 1955

Сат Ш.Ч., Салзынмаа Е.Б., *Амгы Тыва литературлуг дыл. Лексикология болгаш семасиология, фразеология, фонетика, морфология*, Тываның ном үндүрер чери, Кызыл, 1980

Сат Ш.Ч., *Амгы Тыва литературлуг дыл. Синтакс. Кызылдың пединститудуның филология факультединиң студентилеринге өөредилге ному*, Тываның ном үндүрер чери, Кызыл, 1983

Салзынмаа Е.Б., *Учебник тувинского языка. для студентов русской группы филологического факультета Кызылского государственного педагогического института*, Тувинское книжное издательство, Кызыл, 1980

Летягина Н.И. *Слово « Бир » в тувинском языке*, «Учёные записки» XVI, 1973 Кызыл, стр.156-162

Шамина Л.А., *Структурные типы полипредикативных конструкций тувинского языка*, «Исследования по тувинской филологии», Тувинский научно-исследовательский институт языка, литературы и истории, Кызыл, 1986, арын 16-25

Монгуш Д.А., *Предложения с главным членом(сказуемым) в винительном падеже в тувинском языке*, «Исследования по тувинской филологии», Тувинский научно-исследовательский институт языка, литературы и истории, Кызыл, 1986, арын 26-32

Куулар К.Б., *Возвратный залог в тувинском языке*, «Исследования по тувинской филологии», Тувинский научно-исследовательский институт языка, литературы и истории, Кызыл, 1986, арын 33-52

Биче-оол М.Д., Бичелдей К.А. *Тыва дыл 5*, Кызыл, Тываның ном үндүрер чери, 1995

Монгуш Д.А., Куулар К.Б. *Тыва дыл 6-7*, Кызыл, Тываның үндүрер чери, 1995

Биче-оол М.Д., Монгуш М.В., Бавуу-Сюрюн М.В., Ойдан-оол А.К. *Тыва дыл 8-9*, Кызыл, Тываның ном үндүрер чери, 2001

Kruger John R. *Tuvan manual. Area Handbook, Grammer, Reader, Glossary, Bibliography*, Indiana University, Bloomington, 1977

庄垣内正弘 トウヴァ語 「言語学大辞典(亀井孝, 河野六郎, 千葉栄一編)」, 三省堂, 1988年

等々力政彦 トウバ語で歌おう! 喉歌歌手のためのーちょっと不親切なトウバ語文法ノート(トウバ語の歌詞付き), 私家版, 2000年

